事業活動（平成 28 年 1 月 1 日～12 月 31 日）

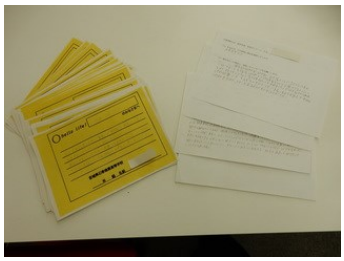
1 月	
1 月 4 日	**釜石事務所より新年のご挨拶** 今年は、震災から 5 年の節目を迎える。復興へ力強く立ち向かう被さい地の皆さまと共に、日本リザルツスタッフは、今年も微力ながらお手伝いさせて頂きたいと思った。昨年の 3 月には、釜石とパレスチナ自治区ガザの子どもたちが、合同応援凧揚げを行った。同時に、釜石とガザをスカイプでつなぎ、子どもたちが顔を見て対話することで、お互いを近くに感じ絆を深めた。11 月には、ガザから 3 人の子どもたちを釜石に招待し、釜石でガザと被さい地の子どもたちが一緒になって凧を揚げた。紛争が続くガザから参加したガイダさん（13 歳）は、「生まれて初めて、恐怖を感じることなく、子どもらしく思い切り遊ぶことが出来た」と言っていたことが印象的だった。今年の 3 月には、釜石とガザはもちろん、より多くの国と地域が参加して、子どもたちの平和な未来を願う凧揚げを行う。世界中から、一人でも多くの方々の参加を期待したい。年末年始は全国的に暖かく過ごしやすかったが、明日からまた冬が戻ってくるようだ。
1 月 6 日	**【ネパール・カトマンズ報告】病院での防寒対策として塗料サーモブロックの効果をテスト** 昨年 4 月に発生したネパール地震の被災者の越冬対策が大きな課題になっているということで、サーモブロックジャパン社と一緒に、同社の塗料の防寒効果テストをするためにカトマンズを 1 月 2 日より 6 日まで訪問した。カトマンズ市内では夜では 10 度以下、山間部では氷点下に冷え込むことから、ネパール政府も被災者の越冬対策として 1 万 5 千ルピー（約 17,000 円程度）を被災した各世帯（約 60 万世帯）に支給予定たが、まだ半分も支給できていない状況である。市の中心部に位置する民間の病院、カトマンズ神経センターの病室を 1 部屋提供してもらい、非常に高い断熱・保温効果のある塗料サーモブロックを塗布した。結果としては、現時点で塗布しない部屋の状態より約 5 度暖かいという結果を得ることができた。ネパールでは被災した住宅の再建が大きな課題だったが、深刻なエネルギー不足に加え、政治的な問題からインド国境からの物資・燃料が流通してこない現状もあり、解決にはまだかなりの時間を要すると思われる。カトマンズ市内ではテントで生活する被災者も多く見かけたので、テントにサーモブロックを塗ることによってある程度寒さをしのげるのではないかとの印象も得た。日本大使館、JICA、ネパールの企業関係者とも面会をしてきた。
1 月 7 日	**新しいインターンの浜川です** 今月よりインターンとして日本リザルツで働くことになった。都内の大学にて異文化コミュニケーションを専攻し、去年の 12 月までアメリカのワシントン DC に留学していた。アメリカの首都ということもあり、ワシントン DC での人々の活発な政治活動を目の当たりにしたことから、アドボカシー活動について徐々に興味を持ち始めた。日本に帰国してからもアドボカシー活動について勉強して携わりたいと考えていたので、今回日本リザルツでインターンする機会が得られて大変うれしく思う。インターンを始めて最初のお仕事は翻訳だった。医療関係の専門用語について触れる機会が多く、今まで知らなかった用語や表現を目の前にして、とてもやりがいを感じる。

1 月 7 日	**日本リザルツ、インターンとして** 日本リザルツで、たくさんの方々とお会いし様々な面で学ばせていただいている。その一方で現在は一大学生として、国際関係やメディアを中心に学んでいる。両立はなかなか難しいものだ。そして、大学を 1 年間休学し今年の 4 月から 1 年間、ボランティアをしながら地球一周を目指す Curious Journey というプロジェクトを立ち上げてプロジェクトの実行や質の向上のため日々奮闘している。今回日本リザルツでインターンシップとして関わることが出来、大変うれしく思う。
1 月 7 日	**本日の仕事内容** 本日は、日本リザルツが主催する「Ｇ７サミットとグローバル・ヘルスの課題」というイベントの広告作りの手伝いをした。小さなミスも紙で印刷すると目立ってしまい何度も書き直した。いつかこのような事にも素早く的確に適応できるようになりたい。
1 月 7 日	**新年の抱負** 私が日本リザルツで働き始めてから、早いものでもう半年以上が経った。ここでの仕事は、イベントの企画・集客やアドボカシーペーパーの作成・配布、メディアワークに翻訳・通訳、など非常に多岐に渡る。はじめの頃は仕事の量とペースについていけず、毎日辛くて不安で仕方なかった。一方で、NGO に身を置いていると、周りに優秀な人々が多くて毎日とても良い刺激をもらう。英語でそつなくコミュニケーションを取れる方、非常に繊細で心に響く文章を書く方、チラシを作るデザインセンスがずば抜けて高い方、数字の処理がめちゃくちゃ早くて正確な方…。会計から企画、広報までオールマイティに何でもこなせる方が多いのも、NGO の特徴ではないだろうか。今年はこうした方々の良いところを貪欲に見習い、吸収しながら、代表の白須がいつも口にしている「心の偏差値」も少しずつ上げていく「成長の年」にしたい。
1 月 11 日	**ネーミング考** ネーミングは大事だ。爆発的に売れたヒット商品には、だいたい印象的な名前がついているし、それまでは、鳴かず飛ばずだった商品が、名前を変更した途端売れるようになったというのも、よく耳にする話だ。私のお気に入りネーミング商品のひとつに、「いちごにかけんねん」という 1 回分ずつ小分けになった練乳がある。もう何年も前に見つけて、売り場でくすっと笑い、迷わず購入したが、ここ数年は見かけなくなってしまった。「ネーミング大全～ヒット商品名の秘密を探る」（木村　和久　監修、実務教育出版）という本の中で、よいネーミングの基本的条件として、下記の項目があげられている。 ①読みやすく　②聞きやすく　③書きやすく　④いいやすく　⑤覚えやすく、 上記の 5 つの"やすく"に、次のような要素がプラスされてよいネーミングが完成するそうだ。 Ａ　独自性があること　Ｂ　美しいこと　Ｃ　親しみやすいこと　Ｄ　イメージがあること Ｅ　おもしろいこと　Ｆ　サウンド的にすぐれていること　Ｇ　商品情報が凝縮されていること Ｈ　味があること　Ｉ　商品が使われる環境にマッチしていること 「いちごにかけんねん」は上記に照らしてみても、完璧なネーミングだったが…さて、「らぽーる」はどうだろうか…

1 月 11 日	**ガザ事業報告①：念願のガザ入り** 2014 年夏にパレスチナ・ガザ地区で起きた大規模な戦闘によって傷ついた人々が、適切なリハビリを受けられるようにと進めてきた本事業。 多くの困難があったが、遂に実施まで辿り着くことができた。 先月まで UNRWA のエルサレム倉庫で待機していたリハビリ器具と運動器具が、無事、UNRWA のガザ倉庫に届けられた。業者からエルサレムへ、エルサレムからガザへ。長い道のりだった。 荷物を確認し、届け先の診療所毎に分けて配送用トラックを手配した。明日、ガザ中心部サブラとガザ北部ジャバリアの診療所に器具を設置し、職員へのユーザートレーニングを実施する。翌日は、ガザ南部のタル・スルタン及びラファの診療所に器具を届ける。（本事業は、ジャパンプラットフォームの助成により実施している）
1 月 12 日	**ガザ事業報告②：ガザ中央部・北部の診療所へ** 写真の国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）ガザ事務所内にある倉庫から、無事にリハビリ器具と運動器具を運び出した。まず、1 カ所目のガザ中心部にあるサブラの UNRWA 診療所で、日本の国旗を見つけた。 サブラ診療所には、低周波治療器、低周波治療用ベッド、助木、頸部牽引器を届けた。業者から派遣されてきたエンジニアが器具の設置を行った。その後、診療所スタッフへのユーザートレーニングを行った。 待ち望んでいた器具の到着に、診療所スタッフはもちろん、患者さんもとても喜んでくれた。ガザは保守的な人の割合が高いためか、写真を断る人が多いように感じる。少人数での記念撮影となった。 サブラは古くからある街で、病院周辺はマーケットになっていた。（どこの診療所も人がたくさん集まるため、自然とお店が集まるようだった）。本日 2 か所目は、ガザ北部のジャバリアにある診療所だ。日本の支援で 2011 年に再建された建物内には、あらゆるところに日本の国旗があった。2011 年は、東日本大震災が起きた年。それでも変わらず支援をしてくれた日本と日本の皆さんに感謝すると言ってくれた人がいた。日本の支援によって再建されたことを示すサインが、診療所の入口や診療所所長室の机や棚にもあった。ジャバリア診療所には、干渉波治療器・吸引器と電動式診察台を届けた。気が付けば、リザルツスタッフが渡したジャパンプラットフォームとリザルツのポスターを壁に貼ってくれていた。気に入ってくれたようだった。明日は、ガザ南部に行く。事務所に戻る道中、冬のビーチで遊ぶ子どもたちを見た。夏は多くの人で賑わうそうだ。（本事業は、ジャパンプラットフォームの助成により実施している）
01 月 13 日	**【開催案内】2 月 5 日（金）国際ラウンドテーブル「GGG+フォーラム 2016： G7 サミットとグローバル・ヘルスの課題」** 本年 5 月 26-27 日、伊勢・志摩において G7 サミットが開催されるため、GGG+フォーラムの案内を送った。日本政府が従来より尽力している感染症対策においては、世界エイズ・結核・マラリア対策基金

	（グローバル・ファンド）、Gavi ワクチンアライアンス、グローバル・ヘルス技術振興基金（GHIT ファンド）、世界ポリオ根絶計画(GPEI)や WHO の役割がますます重要となっており、これら国際機関等が G7 サミットで打ち出される政策・イニシアティブにどのように貢献できるのか、また日本との連携を強化できるのかが問われている中、日本リザルツの開催する国際ラウンドテーブルでは、上記の機関の幹部、政界、官邸、外務省、厚生労働省、JICA、ビル・メリンダ・ゲイツ財団等からグローバル・ヘルス・リーダーをお招きし、G7 サミットに向けたグローバル・ヘルスの課題と各機関の果たすべき役割・パートナーシップの在り方について、日本の民間企業や感染症患者・関係者、CSO 等の皆さまとともに、オープンに討論いただく。これらの議論を通じて、日本が「健康の外交」をリードしていくようにつなげる。 G7 サミットに向けて大変貴重な機会になるものと考えている。 ■日時：2016 年 2 月 5 日（金）12:00-14:00（開場：11:30） ■会場：ホテルルポール麹町　2 階ロイヤルクリスタル ■【スピーカー/ディスカッサント】（調整中のため変更の可能性あり） アレックス・ロス　WHO 神戸センター長　（前半・共同モデレーター） 渋谷健司　東京大学大学院 医学系研究科国際保健政策学教室 教授、（一社）JIGH 代表理事（前半・共同モデレーター） イボンヌ・チャカチャカ　プリンセス・オブ・アフリカ財団、国連アフリカ親善大使 アイダ・クルトヴィッチ　世界エイズ・結核・マラリア対策基金（グローバルファンド）副理事長 ンゴジ・オコンジョ・イウェアラ　Gavi ワクチンアライアンス理事長 黒川　清　グローバル・ヘルス技術振興基金（GHIT ファンド）代表理事・会長 岸田文雄　外務大臣 塩崎恭久　厚生労働大臣 武見敬三　自民党参議院議員、ワクチン予防議員連盟副会長 和泉洋人　内閣総理大臣補佐官 竹若敬三　外務省国際協力局審議官 北岡伸一　独立行政法人国際協力機構（JICA）理事長 小寺清　　独立行政法人国際協力機構（JICA）顧問　（後半モデレーター） ジョアン・カーター　リザルツ、リザルツ教育基金 事務局長 感染症患者代表、内閣官房、厚生労働省、経済産業省、学術界、民間企業、CSO 等
1 月 14 日	**インターンのお仕事** 昨日今日は、2 月 5 日に行われる「国際ラウンドテーブルセミナー　GGG+フォーラム 2016」開催に向けた準備に励んだ二日間となった。インターンの私は関係者の方々に案内のメールを送ったり、議員の方々に案内の FAX を送って、当日より多くの参加者がいらっしゃるように頑張った。一つのイベントが成功するためにはこのような地道な作業や丁寧な気配りが必要なんだと学べた。また、今日はオフィスにいるスタッフの皆さんでお話をしながら晩御飯をいただいた。議員さんの方々がお仕事とトレーニングを両立しているという話を聞いて、私も議員さんを見習ってランニングを始めようと思った。
1 月 15 日	**GGG＋フォーラムスピーカー：ンゴジ・オコンジョ・イウェアラ氏** 2 月 5 日（金）開催の国際ラウンドテーブル「GGG+フォーラム 2016： G7 サミットとグローバル・ヘルスの課題」について、今回はスピーカーの一人、ンゴジ・オコンジョ・イウェアラ（Ngozi Okonjo-Iweala）氏を紹介する。 ンゴジ・オコンジョ氏は、1954 年ナイジェリア南部のオグワシ＝ウクに生まれた。ナイジェリア最古の大学、イバダン大学インターナショナル・スクールを卒業後は、アメリカ合衆国に留学し、ハーバード大学で修士号を、マサチューセッツ工科大学で博士号を取得している。その後、21 年間世界銀行に勤め、組織改

	革・戦略担当局長、東アジア地域局地域担当業務担当局長、域内国担当局長などを歴任し、2003 年に母国ナイジェリアで財務大臣に就任。ナイジェリア初の女性財務大臣として、オコンジョ氏は対外債務削減で手腕を発揮した。主要債権国会議との交渉で、同国の公的債務三百億ドルを「帳消し」にしてみせ、2005 年に世界有数の国際金融専門誌『ユーロマネー』で「世界最高の財務大臣」の座に輝いた。民主化を推進した、当時のオバサンジョ大統領の下で、金融安定化と汚職撲滅のために財政の透明化を図り、その業績は国際的にも認められている。2006 年には外務大臣に転任して同国の外交を統括した後、2007 年に世界銀行の副総裁に就任した。世銀副総裁を 4 年間務めた後には、2011 年にグッドラック・ジョナサン大統領によって財務大臣に再任されている。彼女は優れた開発経済学者・政治家であると同時に、アフリカ諸国における外国投資と雇用創出の有益性を説くなど、アフリカへの世界的な偏見や、イメージを一掃するために活躍している。また、男尊女卑が根強く残るアフリカで女子教育の重要性を訴え、財務大臣時代に母親が誘拐された(その後解放)ことから、ボコハラムによる少女誘拐に関して積極的に発言を行っていることでも知られている。そのため「アフリカ人女性の希望の星」と言われ、米誌『フォーブス』が毎年発表する「世界で最も影響力のある女性 100 人」に、5 年連続で選ばれた。2015 年 9 月 21 日には、Gavi ワクチンアライアンスの新理事長に選出され、2016 年 1 月より就任。オコンジョ氏は理事長就任にあたり、33 年間の公的機関における金融・開発の経験を活かして、Gavi が支援している国の政府が、自国の財源で保健システムを強化できるよう、自立を促すための働きかけを行っていきたいと話している。以上のような経歴から、オコンジョ氏は指導者としての評価も高く、2014 年に米誌『タイム』の「世界で最も影響力のある 100 人」、2015 年には米経済誌『フォーチュン』の「世界のもっとも偉大なリーダー50 名」に選出されている。TED にも出演しており、彼女は素晴らしいプレゼンテーションを披露している。
1 月 15 日	**ガザ事業報告③：ガザ南部の診療所へ** 1 月 13 日には、ガザ南部に器具を届けに行った。ガザ・シティから抜ける海岸沿いの道はまだ新しく、高い建物も多い。本日 1 カ所目は、タル・スルタンの診療所だ。 南部の都市ラファの人口増加に伴い、サウジアラビアの支援で作られた新興住宅街だ。 住居、モスク、病院、学校、道路など、全てが真新しく、エジプトとの国境から目と鼻の先に位置している。電気治療器を届け、器具の設置、ユーザートレーニングを終えた。ガザ南部は、ガザ中央部以上に保守的な人が多い印象を受けた。 本日 2 カ所目は、タル・スルタンから程近いラファの診療所だ。 リハビリ器具（干渉波治療器・吸引器 2 台と頸部牽引器 1 台）と運動器具（ジョギングマシーン 5 台、エアロバイク 1 台、バイクマシン 1 台、マルチジム 1 台）を届けた。設置する器具が多いため、昨日よりエンジニアが増えていた。一時の停電にひやりとしたが、無事に器具の設置とユーザートレーニングを終えた。 新しい運動器具に皆さん興味津々。特に、ガザでは文化的な制約から女性が外に出て運動することはほぼないため、プライバシーが守られた空間で運動が出来るようになることは、リハビリで回復した運動能力を維持し、健康的な生活を送るためにとても大切である。 これで、無事全ての器具を届けることができた。来週、再度モニタリングでそれぞれの診療所に伺う。 （本事業は、ジャパンプラットフォームの助成により実施している）

1 月 15 日	**hello life! 被さい地復興プロジェクト**  先日、hello life! 被さい地復興プロジェクト【2014―2015 年】実施結果として、石巻商業高校と石巻専修大学の桝井ゼミの生徒さんからのご寄付とメッセージカードを頂いた。このプロジェクトは株式会社アソボット様が行っているもので、"寄付する機会"をギフトする新しいモデルの NPO サポートプログラムというユニークなものだ。寄付文化の裾野を広げることを目的としているそうだが、実にユニークで意義のあるプロジェクトだと思った。写真は石巻商業高校と石巻専修大学の桝井ゼミの生徒さんからのメッセージカード。弊団体からは「お礼のメッセージカード」を送る。
1 月 15 日	**『らぽーる』千葉県松戸市へ行く** 12 月に『らぽーる』相談室の存在とサービス内容を、千葉県柏市に知って頂き、リーフレットを置かせて頂くことになったのは、以前のブログにも書いたが、今回は柏市のお隣の市、千葉県松戸市子ども家庭支援課にもリーフレットを置かせて頂くことになった。今現在東京２３区でリーフレット設置にご協力を頂けている区は 15 箇所ある。神奈川県では小田原市。少し離れて、西は大阪府、兵庫県企画県民部で、『らぽーる』相談室の存在とサービス内容を知って頂くことになった。来週には東京２３区内で、まだリーフレットを置いてもらっていない区役所を訪問し、リーフレット設置をお願いしに行く。こうして一つずつ『らぽーる』の輪が東京近郊中心に広まっている。これからも地に足の着いた活動と、困っておられる相談者に寄り添って、一つひとつ、確実な仕事をしていく。
1 月 15 日	**栄養アドボカシー** １月 14 日(水)、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、ワールド・ビジョン・ジャパン、日本リザルツの栄養三銃士３名で、内閣官房幹部とお会いした。今年開催の G7 伊勢志摩サミットと TICAD VI に向けた意見交換を行い、大変充実した会合となった。本年はリオ・オリンピック、サミット、TICAD VI と大きなイベントが続き、栄養の年になりそうだ。

1 月 20 日	**3 月の凧揚げ実現に向け、クラウドファンディング開始！** 岩手県釜石市とパレスチナ自治区・ガザ。 遠く離れたふたつの地域だったが、これまで、凧揚げによって「絆」を深めてきた。 今年 3 月 13 日（日）、釜石とガザをつなぐ「夢と希望の凧揚げ交流会」開催のため、クラウドファンディングを始めた。 昨年 3 月、ガザと釜石が凧揚げを通じて繋がった。 東日本大震災以来、毎年 3 月に日本で被さいした人たちを想い、ガザの子どもたちが、凧を揚げ続けてくれた。 2014 年夏にガザで大規模な戦闘が起こった。その際は、釜石の子どもたちがガザを想い、凧を揚げてくれた。 インターネット電話（Skype）を使って、ガザと釜石の子どもたちが素晴らしい対話を行った。 そして、昨年 11 月には、ガザから 3 人の子どもたちを日本に招待し、釜石で、地元の子どもたちと一緒に凧を揚げることができた。
1 月 20 日	**ガザ事業報告④：モニタリングその 1** 1 月 18 日、設置したリハビリ器具や運動器具の使用状況を確認するため、再びガザにやってきた。本日 1 カ所目は、ガザ南部の街タル・スルタンだ。天候に恵まれた先週に比べ、強風が吹いて気温が下がり、雨になりそうな空模様だった。写真は、タル・スルタン UNRWA 診療所のアイマッド・アファナ所長。 日本への信頼は厚く、戦争から立ち直り経済大国になったこと、幾度も天災に見舞われながらも復興する姿はお手本であり、メディアなどから、日本人の勤勉で真面目に仕事に取り組む姿勢や、時間を守り人を尊重する国民性などを知り、尊敬しているとおっしゃっていた。また、自分の父親が体調を崩した時に病院に行ったら X-ray が故障していて使えなかったので私立病院で診てもらったが、誰もが出来ることではなく、ガザでメンテナンスをすることは通常よりも難しいため、長く確実に使うことが出来る器具が必要であり、日本の器具も取り入れたいとのこと。提供した電気治療器を使って治療を受けていた男性は本日 10 回目のセッションで、電気治療器を使うのは 2 回目。すでに痛みが緩和しており、とても満足しているとおっしゃっていた。効果を実感することが、リハビリを続ける励みになっていると感じた。2 か所目は、同じくガザ南部に位置するラファだ。提供した干渉波治療器を使って治療を受けた男性は痛みが軽減され、嬉しいとおっしゃっていた。頸部牽引器での治療を受けた女性は首から肩にかけてとても楽になり、感謝していると言っていた。診療所スタッフも、新しい器具が入ったことで、より多くの患者を受け入れることが出来る（同時に複数の患者を診ることができる）ようになり、患者さんを待たせる時間が減ったため、とても満足していると言っ

<table>
<tr><td></td><td>ていた。また、スタッフの負担も軽減されたそうだ。運動器具が設置された場所では、多くの人が運動に励んでいた。リハビリを行いながら、高血圧を抱えている男性には診療所長が、自ら指導を行っていた。設置場所はいくつかの部屋に分かれ、また、カーテンで仕切れるようになっているため、プライバシーを守りながら利用できる。お互いを励ましながらジョギングマシーンを利用する夫婦の姿もあった。みんな、楽しそうに運動に励んでいるのが印象的だった。（本事業は、ジャパンプラットフォームの助成により実施している）</td></tr>
<tr><td>1 月 20 日</td><td>ガザ事業報告⑤：モニタリング　その 2

1 月 19 日は、ガザ中部（サブラ）と北部（ジャバリア）にある診療所に行ってきた。1 件目はサブラの診療所だった。理学療法室に入った途端に一人の女性（50 代）が近づいてきて、「ありがとう！」と言われた。頸部牽引器で治療を受け、ずっと悩まされていた首の痛みがすごく楽になり、是非お礼を言いたかったそうだった。2 件目は、ガザ北部のジャバリアだった。肩に痛みがあり、腕が上がらなかった男性は提供した干渉波治療器で治療を受け、徐々に腕が動かせるようになってきたと言っていた。器具は使いやすく設定によって様々なケースに対応できるのでとても重宝していると、スタッフからの満足度も高かった。UNRWA ガザ事務所保健部長の Dr.Ghada さん（写真中央）と。ガザの状況は未だ厳しいが、リハビリは人々に希望を与えることができるため、とても意義のある事業であるとおっしゃっていた。2014 年の戦闘で傷つき、未だ適切なリハビリを受けられないために障がいが残ってしまった人たちが大勢いる。戦闘に巻き込まれ大きな絶望にさいなまれる中、リハビリを受け運動機能に少しでも改善がみられることで、人々は明日を考えることができる。日本リザルツは、これからもガザの人々を支援していく。（本事業は、ジャパンプラットフォームの助成により実施している）

 </td></tr>
<tr><td>1 月 21 日</td><td>結核会合を開催

WHO でエイズ、結核、マラリアの三大感染症すべての部長を務められた古知先生を中心に、結核に関する会合を開催した。国内外で結核の研究や診断機器の製造、薬の開発に携わる企業や団体、研究機関、関連省庁の方々が一堂に会し、多剤耐性結核に関する技術的課題、戦略的課題について話し合った。
WHO が推奨しているレジメン（投薬計画）に関する問題や、オールジャパンで取り組む重要性、メディア戦略など、各団体がそれぞれの立場から意見を交換した。会合の後には新年会も行い、美味しいお食事とグルジアワインを皆様に召し上がっていただいた。</td></tr>
</table>

1 月 21 日	**日本リザルツ＆クラウドファンディング終盤戦** 夕方から、結核に関する会合が開催された。インターンである私も隅で参加した。その後、会合に参加してくださった方々とグルジアワインを囲んでの新年会。結核の研究を行う方々や製薬会社の方々、関係省庁の方々が集まり、議論されていた。そんな中で「リザルツって他の NGO と違い、いろんな人と関われるから面白いよなぁ」と考えていた。つい 1 年前まで高校生で、つい最近まで単なる大学生だった私がこんな場所にいていいのか？とも考える。私がボランティアしながら地球一周したい！と馬鹿げた夢を本気で応援してくださる白須さん、そしてリザルツの方々に感謝してもしきれない。そんな私の個人的なプロジェクトのクラウドファンディングが終盤戦を迎えた。正直、全く達成できそうもない。しかし、まだ実現可能だと信じて突っ走る予定だ。
1 月 22 日	**栄養&SDGs 会合** 1 月 18 日(月)、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、ワールド・ビジョン・ジャパン、日本リザルツというお馴染みの栄養 NGO3 団体で、財務省国際局に伺った。ところがこの日は朝から雪が降り、東京の交通網は大混乱。電車の遅延や見合わせで、遅れたり来られない人もいたが、何とか会合を実施することができた。会合では「国際栄養に関する NGO からの提言書」を中心に説明を行い、財務省の方々からは G7、リオ、TICAD に向けた戦略について、話があった。その後はセーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、ワールド・ビジョン・ジャパンの皆さんと共に日本リザルツ事務所に戻り、さらに他のユース団体や政府関係者も合流して、SDGs に関する会合を行った。SDGs とは 2015 年末に期限を迎えた「ミレニアム開発目標」（MDGs）に代わり、今年 1 月から施行される新たな国際目標「持続可能な開発目標」（SDGs）のことで、貧困や環境、ジェンダー、教育など 17 の目標と 169 項目の具体的な達成基準が盛り込まれている。日本も国際社会の一員としてその達成に貢献するためには、オールジャパンで SDGs の動きを盛り上げていく必要がある。この事業についてはリザルツのインターンの方が大活躍してくれているので、ブログでも随時報告があるかと思う。
1 月 23 日	**Gavi がエボラ出血熱に備えメルク社のワクチン開発に 500 万ドルをコミット** 1 月 21 日（現地時間 1 月 20 日）、ダボスでの世界経済フォーラムにおいて、Gavi ワクチンアライアンスが「エボラ出血熱の再流行に備え、Gavi はエボラワクチンの開発を加速化するため 500 万ドルをコミットする」と発表した。概要は以下の通りである。 ■Gavi が、米メルク社が開発中のエボラワクチンに対し、500 万ドルの事前購入コミットメントを表明 ■コミットメントにより、WHO による事前資格審査（prequalification）と承認の加速が期待される ■承認されれば、同社のエボラワクチン「rVSV―ZEBOV（EBOV）」が、ライセンス付与された初のエボラワクチンになる見込み ■Gavi もエボラ熱の再流行に備え、大量のワクチンを備蓄することが可能になる。
1 月 25 日	**らぽーる 第七回事例勉強会** 第七回事例勉強会を開催した。今回は、ADR で合意に至り、公正証書作成まで完了したケースから、報告、相談したり、課題を解決したり、協議して新たな決め事を定めたり、今回も充実した内容だった。冒頭では、たまたま来所された（公正証書作成まで完了したケースの）利用者にお声掛けしたところ、「喜んで」と、快く参加くださり、感想などお話しくださった。NHK さんと毎日新聞さんは「利用者のお話しが聞けてよかった」とおっしゃっていた。その他、ニュージーランドの面会交流監督士をされていた方から、ご自身の体験やニュージーランドの制度についてお話しいただいた。印象としては、アメリカの SVN のシステムとよく似ている。それにしても、いろいろな国のシステムについて学ぶにつけて、「日本だけがどうしてこんなに遅れているの？」という疑問が膨らむ。

	「親権鎖国」だ・・・さすれば、私たちの試みは"黒船"？知ればみんなきっと好きになる"黒船"だろうか。
1 月 28 日	**栄養議連国家戦略タスクフォース　第一回協議会** 日本リザルツ事務所にて「国際母子栄養改善議員連盟　国家戦略タスクフォース　第一回協議会」が開催された。今回は UNICEF、WFP などの国連機関や、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、ワールド・ビジョン・ジャパン、日本リザルツの栄養 NGO 三銃士に加え、カンボジア等で歯科医院を経営する株式会社デンリッシュの太田取締役、分科会「食料・栄養」の議長を務めていただくことになった櫻井東京大学農学生命科学研究科農業・資源経済学教授にもご参加いただいた。両分科会での審議内容や参加者、日本政府の動きについて確認していき、どのような内容を盛り込み、どのタイミングで出せば、ベストな形で国家戦略として提言することが出来るかを議論した。タスクフォースについては、昨年から準備を進めてきたので、ようやく青写真が見えてきて感慨もひとしおだった。これからさらに多くの方を巻き込み、世界の栄養改善のため「チーム・ジャパン」で頑張っていきたい。
1 月 29 日	**3 月 13 日（日）世界凧揚げ交流会 in 釜石に向けて** 釜石、ガザ、フィリピン、ネパール、ジョージア、イースター島で世界凧揚げ交流会を開催する。準備はとっても大変だが、プロジェクトに共感する仲間が増えていくとわくわくする。1 月 24 日には、志摩市で「第 3 回伊勢志摩凧揚げまつり」が開かれたそうだ。（2016 年 1 月 25 日付、読売新聞）近頃、リザルツの知らないところでも凧が揚がって、各地で凧揚げブームが起きている。去年 3 月の釜石凧揚げは、今にも雨が降りそうな寒い日だったが、子どもたちが元気に走り回っていたのが印象的だった。私は、背中にホッカイロを貼って、リザルツのベンチコートを着て挑んだのを覚えている。対照的に、釜石と同時に凧を揚げたガザでは、青空が広がっていた。
1 月 30 日	**セミナー準備** 今週は 2 月 5 日に開催される「GGG＋フォーラム 2016：G7 サミットとグローバル・ヘルスの課題」の開催準備に大わらわの一週間だった。一つのセミナーを開催するための準備として、様々なものがあるが、セミナー内容や招聘する方々、規模等、会場予約等が決まってからは全員が協力して、参加者のリスト、名札、配布物、座席表、看板等々の作成をする。本日は土曜日だが、職員やお手伝いして頂ける方達は出勤して上記の作業に当たっている。
1 月 30 日	**インターンの仕事** 本日は、来週 2 月 5 日に開催される国際ラウンドテーブルセミナーにいらっしゃる方々のネームプレートを作成した。少しでも役に立てればうれしい。ネームプレートを作るのは、とても地道な作業で、たくさんの方々の名前や役柄をミスのないように記入しなければならない。気を緩めずに頑張りたい。2 月 5 日のセミナーでは、タイムキーパーという難役を一人でこなさないといけない。

2月	
2月4日	**インターンのお仕事** 期末試験が終了し、学校が春休みに突入したため、久々に本日の仕事内容をお伝えする。とうとう明日２月５日に、国際ラウンドテーブル「GGG+フォーラム 2016：G7 サミットとグローバル・ヘルスの課題」を開催する。最終確認を今日インターンの他のメンバーと共に協力して行った。まずは三角ネームプレートの間違い直し、追加、並び順などを最終的に整理した。見直しは既にしていたものの細かくチェックすればするほど多々ミスが見つかり反省した。参加される方々の名前や役職のミスは許されないため、徹底的に見直すことの重要さを改めて感じた。最終版を印刷し、明日には万全な状態で臨む事ができそうだ。この経験を活かし注意深く確認を何度もすることに気を付けたい。
2月5日	**面会交流の記事** 2015 年 10 月の開業以来、「らぽーる」の ADR や親教育プログラムの取り組みを紹介する記事は、10 月 3 日の「毎日新聞」夕刊 1 面、12 月 3 日の「朝日新聞」に掲載され、その後相談件数が増えるなどの大きな反響があった。次は、2 月 2 日「静岡新聞」夕刊 1 面に掲載された。「わが子に会いたい 離婚と面会交流」という連載の第 5 回最終回だ。 この 5 回の連載を書かれた大須賀伸江さんという記者さんは、第 2 回親教育プログラムに取材に来てくださったり、何度も何度も電話で確認をされたり…、深く理解できるまで質問を変えたり視点を変えたりして取材して下さった。電話の向こうから「ん～」という声が聞こえると、それを「なるほど！」という声に変えたくて、私も一生懸命対応した。このやり取りで、なんだか大切な友だちになれたような気がする。今後も、こちらから情報を送り、興味を持っていただき、続けて書いていただけるようにコミュニケーションを図っていきたい。
2月5日	**【開催報告】国際ラウンドテーブル「GGG+フォーラム 2016：G7 サミットとグローバル・ヘルスの課題」** ２月５日（金）12-14 時、ルポール麹町にて国際ラウンドテーブル「GGG+フォーラム 2016：G7 サミットとグローバル・ヘルスの課題」を開催致した（主催：日本リザルツ、平和と健康の会）。当日は平日昼にもかかわらず、日本政府、国会議員、医療関係者や感染症患者さん、各国大使館、国際機関、民間企業、CSO、大学関係者や学生など、様々な機関・立場より 300 人の参加を得て、日本が G7 に向けて議長国として果たすべき役割について意見を表明する機会となった。GGG とは、世界エイズ・結核・マラリア対策基金（Global Fund）、Gavi ワクチンアライアンス、グローバル・ヘルス技術振興基金（GHIT Fund）の３機関を指しますが、GGG は日本の感染症対策イニシアチブにとって重要なパートナーであり、５月の伊勢志摩サミットに向けてどのような貢献が期待され、日本との協力を更に進められるかを議論する機会を作りたいとの趣旨から、”GGG”としてお集まりいただいた。今回は、アイダ・クルトヴィッチ GF 理事会副議長、ンゴジ・オコンジョ・イウェアラ Gavi 理事長、黒川清 GHIT Fund 会長の参加を得た。また、WHO よりロス神戸センター長や、JIGH 渋谷健司先生などポリオ対策に取り組む方々のご意見も頂くことができた。

2 時間という限られた時間だったが、日本の国内外からグローバル・ヘルス分野に関わる多くの方々より、エイズ・結核・マラリアの三大感染症、ワクチン予防接種、民間の創薬へのさらなる支援、ポリオ根絶、薬剤耐性、そして公衆衛生危機対応などに関し、元感染症患者・遺族のメッセージも交えながら、日本の「健康の外交」を期待する大変力強く示唆に富むご発言を多数頂くことができた。

＜発言者一覧＞

■開会・来賓挨拶

伊藤雅治　（一社）平和と健康の会理事長

濵地雅一外務大臣政務官

塩崎恭久厚生労働大臣（代読：鈴木康裕技術総括審議官）

古屋範子公明党副代表 衆議院議員

牧島かれん内閣府政務官（自民党衆議院議員）

逢沢一郎自民党衆議院議員

和泉洋人内閣総理大臣補佐官

イボンヌ・チャカチャカ（代読：白須紀子）

フランソワ・ウビダ駐日ブルキナファソ大使（アフリカ外交団 TICAD 委員長）

■Ｇ７サミットに向けたグローバル・ヘルスの課題（モデレーター：渋谷健司 JIGH 理事長、東京大学大学院教授）

武見敬三自民党参議院議員

北岡伸一（独）国際協力機構（JICA）理事長

アイダ・クルトヴィッチ Global Fund 理事会副議長

ンゴジ・オコンジョ・イウェアラ Gavi 理事長

黒川清 GHIT Fund 会長

アレックス・ロス WHO 神戸センター長

長谷川閑史武田薬品工業取締役会長

■日本の国際保健政策と GGG+の役割、パートナーシップ（モデレーター：小寺清 JICA 顧問）

相星孝一外務省地球規模課題審議官

鈴木康裕厚生労働省技術総括審議官

平林史子 DNDi 日本代表

佐々木小夜子エーザイ執行役（コーポレートアフェアーズ担当）

山口栄一塩野義製薬渉外部担当部長

貫和敏博結核予防会常務理事

小林宏明国際ロータリー日本事務局長

阿部恒世（元ポリオ患者）

熊代孝子（マラリア患者ご遺族）

増田利明ニプロ常務理事

林達雄　アフリカ日本協議会特別顧問
清田明宏 UNRWA 保健局長
千賀邦夫セーブザチルドレンジャパン事務局長
平林国彦 UNICEF 駐日代表
佐崎淳子 UNFPA 東京事務所長
学生代表
ジョアン・カーター　リザルツ事務局長
田中徹二　日本リザルツ理事

GGG+フォーラム 2016：G7 サミットとグローバル・ヘルスの課題【裏話】

300 名のお客様をお迎えするにはスタッフだけではとても足りないため、ボランティアの方々にも 10 名ほど来てもらえて大変助かった。ルポール麹町のスタッフの方達にもお手伝いいただいて大変ありがたかった。大勢のお客様がいらしたので、少しお待ちいただく場面があったり、座席の場所をご案内するのに手間取ったりしてご迷惑をおかけしたが、何とか無事に皆さんの受付も終了した。会議そのものは皆さんに好評をいただいたようで、主催者側の人間として、大変嬉しく思っている。参加者の中に、岡山からお越しくださった、熊代孝子さんという女性がいらっしゃった。熊代さんのお嬢様は、3 年前アフリカでマラリアが原因で亡くなった。途上国と先進国の格差をなくしたい一心で活動されていたお嬢様のご遺志を継いで、熊代さんは今回のフォーラムの会場でも、いろいろな方とお話をされたり、質問をされたりして、本当に 1 秒も無駄になさらず、情報収集や問題提起をされていた。そのお姿を拝見していると、まるでお嬢様がすぐ横にいるように感じた。熊代さんが会場に到着されてから、ご案内役をさせていただくようにと、白須から言われていたので、ずっとお側にいさせていただいた。スピーチも時間的な制約があるため、お話しになりたいことはたくさんおありだったが、短くお話しいただかなくてはならなかった。でもその約 3 分を活かされて、あの場で、大変立派に素晴らしいスピーチをされて、熊代さんのお話しに参加者全員が心打たれたと思った。事実、「感動した」とか、「お話が素晴らしかった」という感想を参加者から言われておられた。お母様の頑張りを見守っていらっしゃるお嬢様も、改めてお母さまのことを誇りに思われたことと思った。熊代さんには、これからも、マラリアという病気、マラリアを取り巻く様々な問題を訴えていって欲しい。熊代さんでなければできないことだと思った。

オコンジョ氏インタビュー

2 月 5 日(金)、午前 10 時 30 分。リザルツスタッフやボランティアの方々が「GGG＋フォーラム　2016」の会場設営で大忙しの中、会場すぐ横の応接室にて、オコンジョ氏のインタビューが行われた。以前の記事でも紹介した通り、オコンジョ氏は非常に多彩な経歴を持つ方だった。Gavi の新理事長に就任されてから初来日ということで、このような貴重な機会をマスコミが放っておくはずがありません。この日はラジオ 1 社、雑誌 2 社、新聞 2 社の計 5 社からのインタビューをこなさなければならず、オコンジョ氏にとって大忙しの日となった。午前中に 2 社の取材が終わったら「GGG＋2016 フォーラム」本番だった。ヘルスシステムの強化やワクチン開発など、グローバル・ヘルスの課題についてお話しされた。午後 2 時過ぎにフォーラムが終了した後は、息つく暇もなく、さらに 3 社のインタビューが行われた。「オコンジョ氏の金融分野の経験をどのように保健分野に活かしていくか」という質問から、「オコンジョ氏のように日本の女性たちがリーダーシップを取っていくにはどうすればよいか」という質問まで、記者の方によってインタビューの方向

	性が異なり、とても興味深かっただった。非常にタイトなスケジュールだったため、インタビュー後半はさすがにお疲れの様子だったが、それでもひとつひとつの質問に丁寧に答えられており、終始和やかな雰囲気だった。
2 月 7 日	**【インターンのお仕事】国際ラウンドテーブルセミナーを終えて** 先日 2 月 5 日（金）に開催された国際ラウンドテーブルセミナーにおいて、インターンがどのように活動していたのかを紹介する。参加者 300 人の大規模なセミナーを十数人のスタッフで準備するため、スタッフのみなさんは 9 時ごろに会場に集合し、席の配置や資料の分配などの用意をした。スタッフ全員が We Love Japan やワクチンの日の T シャツを身に付けながら準備していると、開催時間が迫るにつれて緊張感も高まった。私は、政府関係者や大使館関係者の受付を担当した。名前を確認してから名刺をいただき、時には英語でセミナーの流れを案内したりと、直接参加者の皆様とお話しする機会をいただけてとてもうれしく感じた。セミナー終了後も追加資料を配布し、参加していただいた皆様にあいさつをすることができた。今回のセミナーは、私が日本リザルツでインターンとして働き初めて最初に参加したイベントだった。どのように工夫したらより印象的で、スムーズに進行できるセミナーにすることができるかを考えていたスタッフのみなさんの様子を見ていたので、当日が問題なく終了したことを大変うれしく思う。
2 月 10 日	**ハイチから 1 カ月、東日本まで 1 カ月** 2010 年 1 月 12 日、カリブに浮かぶ小さな島国ハイチ共和国で、マグニチュード 7.0 の地震が発生した。首都ポルトープランスを直撃した大地震で 30 万人以上の人々が犠牲となり、未だ行方が分からない人、身元が分からない人が大勢おり、正確な犠牲者の数もわからないままだ。震災から 6 年経った今でも、テント生活を強いられている人たちが 6 万人いると言われている。新大統領が決まらないまま新年を迎え、政治的混乱が続く中、2 月 7 日には、マーテリー前大統領が任期満了にて退任し、ついに大統領不在という事態になっている。2011 年 3 月 11 日、太平洋の端っこに浮かぶ小さな島国日本で、マグニチュード 9.0 の地震が発生した。あれからもうすぐ 5 年。当初、入居期間 2 年と言われていた仮設住宅には、未だ多くの人々が暮らしている他、事業の再建に苦慮している人も大勢いる。いつまでも忘れないこと。ただ、自分ができることに取り組むこと。それが大切なんだと思う。
2 月 10 日	**「コンビニ夢物語」出版記念と映画完成の集い** 2/9（火）渋谷の東京メインダイニングにて「コンビニ夢物語」出版記念と映画完成を祝してパーティーが開催された。日本リザルツの理事も務める姫井由美子氏がコンビニエンスストア開業を巡り繰り広げられる家族の物語を描く「コンビニ夢物語」を出版・映画完成されたということで、我々日本リザルツ一同も参加させて頂いた。姫井さんは参議院議員時代から、フランチャイズを考える議員連盟を始め、コンビニ業界に対して尽力されていた。個人的に姫井さんの著書「コンビニ改造論」を読んだことがあり、コンビニが今日では社会的インフラとして、日本人に無くてはならない存在になりつつあると同時にコンビニ加盟店主は過酷な労働環境を強いられているという実態を知ることが出来た。今日の日本にはフランチャイザー、コンビニ加盟店主の保護に関する法律がありません。この本が当時高校生の私に、コンビニについて考え直す機会を与えてくれたことを覚えている。兵庫県香美町香住で代々受け継がれ、地元で愛される酒店をコンビニに改装する中で、本当に大切なものは何だろう？支えてくれたものは何だろう？とコンビニの現状を見つめ直すと共に、幸せの本質について深く見つめ直してみませんか。

2 月 12 日	**父親の役割・母親の役割** 父親の役割・母親の役割について、女性（母親の）立場である、私自身の経験から思うことがある。今はイクメンなんて言葉が主流になった。核家族になってしまった今、父親が子育てに関わることは、本当に助かる。しかし母親が求めているのは、家事や子育てを形だけ手伝ってもらうことではない。形だけで手伝ってもらって、俺は手伝っているだろ！という態度を取られたら、手伝ってもらっていることすら嫌になる。では、母親は父親に何を求めているのかというと、母親が子育てをしやすいように、大きな部分でサポートをして欲しいのではないだろうか。母親の寄りどころでいて欲しいのだ。子の評価が母親の評価にダイレクトにつながる現在、子育ては全てが親の責任という風潮が大きく浸透してしまった今、子育て(育児)は孤独になりがちだ。成長の過程は人それぞれなのに、少し周りの子と発達が違うだけで、「こんなことも出来ないの。」「粗悪よね。」「産めばいいというものでないでしょ。」「育て方が悪いんじゃないの。」等と相手を傷つけ、自分を優位に立たせることが今の子育てママの中には渦巻いている。もちろん、このように人の子ばかり中傷する親には、それなりの劣等感があったり、配偶者と上手く行っていない場合が多いのは事実だが、周りから中傷されなくても、母親自身が自分一人で気にしてしまう場合もある。このように中傷されたことを父親に相談し、「そんなの一々気にするな！」という言葉はさらに母親を傷つけ孤独にし、私のことを理解してもらえなかった、と思いがちだ。そして、その孤独は相手（夫）から受けたと思ってしまうのだ。「辛かったな。大丈夫だよ。ママと子どもは僕が守るから。」そんなふうに気持ちを受け入れて欲しいのだ。女性は特に共感して聴いて欲しいのである。小田切紀子先生の著書（離婚～前を向いて歩きつづけるために）にもあるが、父親が子どもと交流し夫婦間のコミュニケーションがあると、母親の孤立感・閉塞感が軽くなる傾向が認められる。また父親が子どもと交流し母親の孤立感と閉塞感が低いと、子どもの社会性（身辺自立・意思交換・集団参加・自己統制）が高いことも分かったとある。つまり、父親が母親の子育ての悩みを聴いたり、子どもに積極的に関わり、母親が子育てしやすい環境になるようにサポートすると、母親の精神的ストレスは軽くなり子どもの社会性も促されるということだ。二男を、生後一か月で手術が必要な子に生んでしまった自分を責めている私に対して、「そんなふうになるなら子どもなんて産むな！」との言葉は心の傷となり夫婦感の溝になった最初の言動だったが、今思えば「肝っ玉母ちゃん」みたいに、母としてどっしりと構えて欲しかったのかも？と最近になってようやく思えるようになった。しかし「辛かったな。大丈夫だよ。ママと子どもたちは僕が守るから。」や、せめて「よく頑張ったな！」そんな言葉を一度でも言ってもらえたら、今とは違った生活だったかもしれない。
2 月 12 日	**次のステップへ** 2 月 5 日(金)に開催された国際ラウンドテーブルセミナーが無事終わり、今週はそのフォローアップとしての仕事が中心だった。まず、セミナーで撮影した写真を整理して、希望される方に送付した。セミナーを終えた今でも多くの方々が関心を持ってくださり、事前準備だけではなくこのような細かいフォローアップも必要不可欠であることがわかった。また、ただいま企画中である第 11 回サンキュー・セミナーの準備に取り掛かった。専門知識がまだ少ない私だが、様々な資料を参考にセミナーのテーマ決めや内容の打ち合わせを重ね、重要なプロジェクトを任されたことを実感している。
2 月 16 日	**インターンのお仕事** 本日は、リザルツが関わっているトピックを新聞記事の中からピックアップし、それを切り取って保存した。新聞が少したまっていたので、一面一面しっかりと探していると時間がかかるがためになる。また、G7 保健専門家会合（2016 年 2 月 18-19 日）のスピーカーの話の内容を、英語から日本語に訳す仕事も久々に行った。専門用語や言い回しが見慣れていないため、今回の翻訳はとても新鮮で役に立った。英語が得意とはいえ、なかなか言いたい事を理解できなかったり、うまく日本語で伝えられなかったりなど困難が多々あったが、上司の助けのもと、とても良い和訳になったので良かった。

2 月 18 日	**つなみ募金** 先週 2 月 12 日(金)に毎月恒例の街頭募金を行った。2 月にしてはあまり寒くなかったので、街頭募金日和（？）だった。らぽーる事業のＴシャツは黄緑色だ。今回は、代表の白須を初め総勢 9 名で、らぽーる事業のクリアファイルにパンフレット、新聞記事のコピーをいれたものを受け取っていただいた。離婚後の養育トラブル解決支援のためのらぽーる事業のことを一人でも多くの方々に知って頂ければ幸いだ。
2 月 19 日	**G7 保健専門家会合** 2 月 18 日(木)と 19 日(金)、G7 保健専門家会合が開催され、初日のアウトリーチ会合にオブザーバーとして参加した。国際保健は今年 5 月に開かれる G7 伊勢志摩サミットの主要課題の一つである。グローバル・ヘルスに取り組む多くの国際機関が高齢化や母子保健をテーマにプレゼンテーションを行う中、NGO からも発表が行われ、市民社会の視点からトップダウンとボトムアップの連携の重要性等をアピールした。英語のプレゼンは内容についていくのが大変であったが、リザルツに入ってから関わりを持つようになった国際機関職員の方々と久し振りにお話する機会もあり、非常に良い経験になった。
2 月 19 日	**世界凧揚げ交流会 FB ページ完成** 来月行われる「世界凧揚げ交流会」に向けて、世界中で情報が共有できるよう、Facebook ページを立ち上げた。昨年から凧揚げを通じて絆を深めてきた釜石とパレスチナ自治区ガザだったが、今年もお互いにエールを送る凧揚げを開催する。そして、このイベントに賛同してくださった世界中の国と地域が凧を揚げる予定である。これまでに、釜石とガザに加え、フィリピン（レイテ）、ハイチ（ポルトープランス）、ネパール（シンドゥパルチョーク）、ケニア（ナイロビ）、韓国（ソウル）、台湾（台北）、カンボジア（プノンペン）、ジョージア（トリビシ）、カナダ（ケベック）、そしてチリ（イースター島）の 12 の国と地域が凧揚げを行ったいと、準備を進めている。
2 月 19 日	**サンキューセミナーに向けて** 私が中心となって準備を進めている 3 月開催のサンキューセミナーは、講義内容などの詳細が決まり、ようやく企画案が完成した。企画案を作成すると同時に、宣伝用のチラシの製作も進めた。テーマ決めから始まり、文面上での言葉遣いやチラシ全体のデザインなど細かいところまで全てを考えるという責任はとても大きなものだ。このチラシがセミナー全体の印象を決めるので、少しでもいいものになるように丹念に作成した。これからはスピーカーの方や関係者の方々に企画案を確認していただき、順調に行けば公開してセミナーの申し込みを始められると思う。
2 月 20 日	**世界凧揚げ交流会 2016！** 来月に行われる世界凧揚げ交流会開催に向け着々と準備を進めている。昨年 3 月、日本リザルツと UNRWA(国際連合パレスチナ難民救済事業機関)は、パレスチナ・ガザ地区と釜石の合同凧揚げ大会を行った。今年は、釜石とガザに加え、世界各地（フィリピン、ハイチ、ネパール、イースター島、他多数）で開催される。私も、凧揚げお兄さんとして、世界中で凧揚げを行う身として、この世界凧揚げ交流会はなんとしても大成功を収めたいと思っている。皆さまからの応援の言葉で、より一層「頑張らなくては！」と身が引き締まる。私個人のクラウドファンディングが成立してから、「Curious Journey」について聞きたいと多くの方から、ご連絡を頂戴しできるだけ直接お会いしていると、ほぼ全ての方から「なんで凧揚げなの？」と聞かれる。世界共通の大空を舞台に、凧が舞う。それこそ１億（→７３億）総活躍である。

2 月 21 日	**これは注目！朝日社説「世界の貧困と不平等 『分配』を共有できるか」（2 月 21 日）** 本日の朝日新聞社説「世界の貧困と不平等 『分配』を共有できるか」は大変共感を呼ぶ内容だ。 ＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝ １）拡大する格差・不平等そして貧困、これらに歯止めをかけるべく国際社会は SDGs（持続可能な開発目標）を定めた。２）が、難題は解決のための資金であり、ODA 等ではとても足りない、航空券連帯税等の革新的資金調達や金融取引税に注目すべきだ。３）格差・不平等の改善なくして経済成長もおぼつかなく、「分配」が課題となっている。米国でのサンダース氏の支持拡大や安倍総理の分配発言等。４）今や多国籍企業にも変化の兆しがあり、CSR というレベルを超え「自然資本会計」という試み等が行われている。５）結論：「５月には日本でサミットがある。テロや難民、中東や朝鮮半島の不安定化など課題は山積しているが、共通する要因が貧困だ。世界を主導する国々の首脳が議論すべき課題である」 ＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝ ●SDGs 達成のための資金は 10 兆ドル（約 1200 兆円）以上という試算が出されているが（持続可能な開発のための資金に関する政府間専門家委員会）、グローバル連帯税推進協議会（第 2 次寺島委員会）では貧困（食料）・教育・保健というベーシック・ヒューマン・ニーズにつき「一人も取り残さない」ようにするための費用としては 2810 億ドルが必要と試算している。また、気候変動関係では緩和と適応のために 8000 億ドルが必要と試算した。 ●話は変わりますが、サンダース候補の税制政策を WSJ は次のように説明している。「同氏は多くの増税策を提案しており、その中には高額所得者を対象にした大幅な税率の引き上げが含まれる。具体的な数字には言及していないが、レーガン政権以前（70%）や、ニューディール政策当時（94%）の税率をしばしば愛おしげに引き合いに出していた」。つまり、かつては富裕層への超累進的課税は当たり前だったのだ（第二次大戦の戦費問題もあり）。この「当たり前」感を今日のグローバル化時代にあってどのように一般化していくか、が課題である。【WSJ・社説】サンダース候補を真剣に受け止めるべき時。ピケティになると、累進所得税に加えて累進資産（資本）税をも提案している（『21 世紀の資本』第 14 章と 15 章）。いずれにせよサンダース候補は米国内の格差・不平等を対象としているが、ピケティ教授はグローバルな格差・不平等を対象としていることが分かる（途上国の統計資料不足のため分析が十分でないということを本人が言及）。あと企業への内部留保税に関する論文としては、以下の諸富徹京都大学教授の論稿が参考となる。■政策課税としての法人課税－ニューディール期「留保利潤税」の思想と現実を中心に－
2 月 22 日	**インターンのお仕事** 3 月 13 日、日曜日に岩手県釜石市で行う凧揚げイベントの詳細を日本語から英語に訳す作業を先週から任されている。SNS の一つ facebook(フェイスブック)の凧揚げイベントのページに投稿されている、今回の凧揚げ交流会に携わって下さる方々の紹介やこのイベントの詳細などを全て英訳し、イベントのチラシ案を英訳するのである。訳す作業は日本語・英語に関わらずとても時間のかかるもので、辞書やネットなどでより適切な言葉を調べて、文法やスペルなどが間違っていないかなどの確認も必要だ。この機会を活かして翻訳を上達させたいと思っている。凧揚げ大会の内容としては、子どもたちの平和な未来を願いながら「平和の凧」を揚げて世界中で一つに繋がるというコンセプトだ。今回はガザと釜石だけでなく各国で凧を揚げる。
2 月 26 日	**らぽーるボールペン** らぽーるの名前とフリーダイヤルの番号が入ったボールペンが届いた。破格の値段で購入でき、らぽーる関係者皆様にお届けしている。そしてＡＤＲの申し込みや合意書へのサインの時にも使用予定だ。これから何人の方々にこのボールペンでサインを頂くのかと思うと、感慨深い思いである。

2 月 26 日	**栄養ワークショップ開催** 2 月 25 日(木)、衆議院第一議員会館にて栄養ワークショップを開催した。国際母子栄養改善議員連盟として宣言する「国際母子栄養改善戦略」の骨子草案をチーム・ジャパンで作成するのが目的である。一週間前にお声がけしたにもかかわらず、関連省庁（内閣府、外務省、農水省）、JICA、企業、健康・栄養研究所、国連機関（UNICEF、WFP、FAO）、NGO 等から多くの方にご参加いただくことが出来た。まず保健セクター議長の渋谷健司先生が、ワークショップ実施にあたり課題設定の重要性等についてお話され、その後、農業・食糧セクター議長の櫻井武司先生が、なんとガーナからスカイプで農業生産性と微量栄養素等について発表された。さらに栄養不良対策行動ネットワークの渡辺氏が母子栄養改善の国際潮流についてプレゼンを行った。一通り講義が終わると、いよいよ本会合のメインであるワークショップ。栄養直接支援、栄養間接支援、支援環境の 3 グループに分かれ、日本による母子栄養支援の強みについて話し合った。これだけ栄養の専門家が集まると、今までにないアイデアがどんどん生まれる。準備は大変だったが、ユニセフ平林代表の秀逸なファシリテーションもあり、とても良いワークショップになった。これから一度事務局(NGO 栄養四銃士)に持ち帰って議事録を作成し、政策提言書の取りまとめに向けて進んでいく。
2 月 26 日	**平成 27 年度決算** 事務局は、凧揚げの準備と 3 月 31 日のサンキューセミナーへの参加のお誘いやらなにやらで忙しい。そんな中、3 月 22 日の理事会・総会で報告するため、平成 27 年の財務諸表を会計士さんと作成しており、同時に事業報告書も作成中。リザルツの活動を正確な財務諸表と事業報告書で記録として残す。大事な業務である。
2 月 26 日	**サンキューセミナーの参加申し込みの締切り迫る** 今週はいよいよ参加申込みの受付を進め、来週の月曜日にはもう締め切り日を迎える。今回のサンキューセミナーのテーマは「G7 サミット・TICAD VI に向けた開発協力ファイナンスの展望とグローバル連帯税の可能性」である。講師として、横浜市立大学国際総合科学群教授の上村雄彦氏と、財務省主計局外務・経済協力第一係主査の山本庸介氏をお迎えする。また、昨年お亡くなりになった、元財務省主計局主計官・OECD 租税委員会日本代表の志賀櫻先生の追悼会も合わせて開催する。少しでも多くの方にお越しいただけるよう、席を調整している。ODA 予算の作り方やグローバル連帯税についての知識が一気に得られる貴重な機会となるよう力を尽くす。
2 月 28 日	**世界凧揚げ交流会 2016 準備！** 私が担当している世界凧揚げ交流会 2016 は、世界中で着々と準備が進んでいる。最近、面白いことに気がついたのだが、私が住んでいる埼玉、春日部が大凧の町だった。大変な田舎街で、クレヨンしんちゃんしか有名なものがないと勝手に思っていたのだが、こんな素晴らしい文化があったとは！なんとなく運命を感じた。

2 月 29 日	**若松謙維復興副大臣との面会** 若松謙維復興副大臣にお会いするため、復興庁を訪れた。日本リザルツの事務所から徒歩１０分以内の場所にある復興庁。若松副大臣に、弊団体が進める岩手県釜石市での事業などをご紹介した。大変お忙しい副大臣との面談のため、つい写真をお撮りするのを忘れてしまった。東日本大震災からもうすぐ５年。被さい地の復興、そして更なる発展を目指し、日本リザルツでは 3 月 13 日（日）に、世界凧揚げ 2016 を開催する予定である。
3 月	
3 月 1 日	**インターンの仕事** 数日前にリザルツに来た際に任された GGG+フォーラム 2016 の議事録を英語に訳すという作業を今も行っている。正直、当日の GGG+フォーラムでは担当していた受付やタイムキーピングの仕事で忙しく慌ただしい状態で、じっくりとスピーチを聞く機会があまり無かった。今回の英訳の仕事をすることによって、改めて何度も何度もスピーチを聞くことができ、また、それを英語に書くことによってさらに理解を深めることができる。英語に訳す事で、病気の専門用語を英語で覚える機会や日本語では少々複雑な言い回しも英語にしたらわかりやすくなったりした。また、凧揚げ大会の準備として凧に穴を開ける作業もし、一通り全て終えたので少し安心した。凧揚げ大会がうまくいきますように。
3 月 1 日	**第 125 回 GII/IDI 懇談会に参加** 2 月 25 日(木)、第 125 回 GII/IDI に関する外務省/NGO 懇談会が開催され、外務省国際協力局とアフリカ部、厚生労働省国際協力室、JICA 人間開発部、そして NGO の方々など約 30 名が参加した。今回は、今年 5 月の G7 と 8 月の TICAD に向けて、日本政府と NGO 双方から情報共有が行われた。G7 に関しては、先月初めにローマ市民社会戦略会議が開催されたり、先日 G7 保健専門家会合が開催されたりと、日本主導のサミットという貴重な場でより良い議論を実現させるべく、各方面で準備が進められている。TICAD VI もようやく 8 月 27 日～28 日に日程が決まり、私からは、先月 5 日に開催した「GGG+フォーラム 2016」の報告を行った。
3 月 1 日	**第 3 回親教育プログラムを実施** 2 月 27 日(土)第 3 回親教育プログラムを実施した。今回のテーマは「円滑なコミュニケーションのために」。参加者は約 30 名。男女の違い、男女のコミュニケーションの違いを洗い出し、比較することで、今まで目くじらを立てていたパートナーの不可解な行動が、腑に落ちたり腹が立たなくなったりする。また、「うちはコミュニケーションがうまくいっている」というご夫婦では、夫は聴き上手なことが多く、聴き方として、価値観や考えが詰まった自分の器から、一旦それらを取り出し空にして相手の価値観や考えを受けとめるような聴き方ができていたりする。そうすると、相手は「聴いてもらえた」と充足感で満たされる。これは、親子でも仕事上でも使える技法であり、教訓でもある。日本では夫婦関係調整セラピーなどが一般的でないため、皆さん珍しく感じられたのか、お帰りの際は口々に「ためになった」「おもしろかった」「他では教えてもらえないことだ」「もっと早く知りたかった」などとおっしゃっていた。第 1 回、第 2 回の補講希望も 5～6 件承って、ますます忙しい「らぽーる」だ。
3 月 2 日	**インターン最終日** 1 月 5 日にはじめて事務所を訪ねた日からほぼ 2 ヶ月が過ぎたが、2 ヶ月とは思えないほど中身の濃いインターン生活だった。最初は翻訳やメール送信などといった（やや単調な）お仕事だったが、徐々に電話がけや書類作成、ついにはサンキューセミナーの開催の準備まで任されるようになった。代表の白須さんがよく口にする、単調で簡単そうな作業こそが大事だという言葉の意味が身に染みてわかるようになった。虎ノ門の近くでチラシを配ったり、電話でイベントのご案内をする作業は、最初はうまくいかずにやる気が起きな

	いときもあったのだが、このような作業をこなせてやっと半人前になれるのではないか、学校ではできないような社会勉強とは、まさにこういう事だと思った。短い期間でたいしてお役に立てたとは言えないが、充実したインターン生活を過ごせてよかったと思った。
３月３日	**水野様のご本** 認定特定非営利活動法人 Malaria No More Japan 専務理事の水野達男様が英治出版さんからご本を出された。書名は「人生の折り返し地点で、僕は少しだけ世界を変えたいと思った。第２の人生マラリアに挑む」だった。水野様は、2 月 5 日に弊団体と平和と健康の会が共催した国際ラウンドテーブル「GGG+フォーラム 2016：G7 サミットとグローバル・ヘルスの課題」で患者・遺族の代表のお一人として感動的なスピーチをなさった熊代様をご紹介くださった方である。熊代様は、途上国と先進国の格差をなくしたい一心で活動されていたお嬢様を３年前にマラリアで亡くされ、その意志を継いで活動されている。リザルツでも早速購入し、全職員で回し読みをした。
３月４日	**第８回事例勉強会** 2 月 29 日（月）に第８回事例勉強会を行った。実はらぽーるスタッフ全員、先週から風邪ひきで、マスクをしての事例勉強会だった。事例勉強会の内容も、回を重ねるたびにさらに充実した内容になっている。これは、らぽーるが一つの事業として軌道に乗ってきた証拠だと感じている。
３月６日	**インターンのお仕事** 3 月 4 日の夕方から新橋にて、日本リザルツ理事の姫井由美子氏の映画「コンビニ夢物語」の試写会に参加した。コンビニについて長く研究されている姫井先生だからこそ演出できる、"コンビニ"を感じることができた。コンビニを中心に展開される人間味が溢れでるストーリーにユーモアを散りばめた、まさに笑いあり涙ありの映画だった。私も終盤には涙が少し…個人的にも最近「家族の大切さ」を感じる場面が多い。地球一周をする自分勝手なバカ息子の背中を無言で押してくれる両親なんて中々いないのではないだろうか。
３月７日	**【世界凧揚げ交流会 2016】イースター島で凧揚げ開催** 世界凧揚げ交流会の輪が広がっている。今週末 13 日には釜石・パレスチナ・ガザ地区との交流会が行われるが、それに合わせ、世界中で「希望の凧」がたくさん揚がっている。11 日フィリピン、レイテ島ではこのような凧が揚がる。また、今月 3 日には、ピースボートがイースター島で凧揚げを行ってくださった。
３月８日	**【世界凧揚げ交流会 2016】ハイチで凧揚げ開催** 3 月 6 日（日）、カリブ海に浮かぶハイチ共和国で、凧揚げが行なわれた。いつもは眩しいくらいの日差しが降り注ぐハイチだが、この日はあいにくの空模様。それでも、子どもたちは元気に凧を揚げた。元々、イースター（復活祭）前に凧を揚げる習慣があるハイチなので、大人も懐かしそうに凧揚げに参加した。大人たちが凧作りを手伝い、子どもたちがメッセージを書いた。ハイチの凧は、六角形。ハイチは、2010 年 1 月 12 日にマグニチュード 7.0 の大地震に見舞われ、首都ポルトープランスを含む都市部で大変な被害を受けた。あれから 6 年以上が経ったが、未だに簡素なテントでの生活を余儀なくされている人々も大勢いる。ハイチでもこうして凧が揚がり、子どもたちが笑顔になることが未来に向かう何よりの希望だ。

3 月 10 日	**「日本復興の光大賞 16」表彰式に参加** 3 月 3 日(木)、第二回「エルトゥールル号からの恩返し　日本復興の光大賞 16」表彰式に、弊団体職員の鈴木と共に参加してきた。この賞は、東日本大震災復興のため尽力している民間団体に送られるもので、人知れず地道に活動を続けている団体の想いを世に広め、日本・トルコの友好関係を発展させることを目的として、昨年創設された。審査委員長はジャーナリスト・池上彰氏。鈴木は 2014 年に UNRWA のピエール・クレヘンビュール事務局長が来日した際、インタビュー設定のため池上氏とお会いしたことがあり、久々の再会となった。最優秀賞には、一般社団法人　大槌メディアセンターの菊池由貴子さんが選ばれた。菊池さんは、震災後に町内の情報不足を補うために「大槌新聞」を自ら立ち上げ、町内全世帯へ無料配布を行ってきた。全国紙では伝えきれない町の復興情報や、住宅再建、これからの町づくりに関する記事を、町民目線で町民がわかる言葉と大きな文字で伝え続けている。「大槌は絶対いい町になる」をキャッチコピーに地域ジャーナリズムを発信し続ける菊池さんの姿勢に学ぶことは多く、考えさせられた。表彰式の後には、日本の小学校とインターナショナル・スクールの小学生たちによるミニ・コンサートも行われた。手を取りあって一生懸命歌う日本とトルコの子ども達の姿に、会場全体が癒しの空気に包まれた。
3 月 10 日	**本日のお仕事（インターン）** 今日は相変らず GGG＋フォーラムの議事録を英訳し、凧の作成などを進めた。議事録の英訳の方は、今週はなかなか自宅でもあまり進めることができなかったので、短時間で出来る限り必死に訳した。やっと３分の 2 くらいまで進みたが、やはり間違えのないように何度も聞き直したり、スピーカーの文法を直したりなど、いずれ私の訳が一冊の紙となって外国人の手に渡り読まれる事を考えるとミスは許されないので時間がかかる。自宅では英語教師の母や父などにも一緒に聞いてもらい分からないところや単語を教えてくれるので自分の環境に感謝している。今月末にはなんとか仕上げて良い状態で皆様に届けたい。期待を裏切らないように努力したい。
3 月 11 日	**親子の問題** 3 月 10 日の参議院の法務委員会で、真山勇一議員が親子の問題について質問された。今回のテーマは、離婚や別居後に子どもに会わせてもらえない例や、子どもの連れ去り問題、裁判所が出される間接面会の問題点など。真山先生の「連れ去りや住所非開示によって調停が進まないことや、面会交流が出来ないことが、子どもの為になるのか？子どもが離婚の犠牲になっていないか？」との質問に対して、法務大臣が「連れ去りは子どもにとって好ましくない。対処を考えなくてはいけない」とお答された。そして、真山先生は、今の現実の話しをあきらめずに説明していただき、それに対して、法務大臣は、「離婚後も子どもにとっては親であること。離婚後も両親が適切な形で子に関わることは、子の利益の観点から重要なものである。」ともおしゃった。しかしながら、最後の方の法務大臣のお言葉からは、養育費の強制徴収に聞こえて仕方がない部分があった。果たして養育費をもらうだけで、子の健全な成長につながるのか？両親そろっている子に、お金だけ渡しておけば、子は健全に育つのか？の問には、皆ＮＯと答えるだろう。だったら、離婚家庭の子どもも同じだ。監護親の立場から養育費の強制徴収だけでは、子の健全な成長にはつながらないお伝えしたい。

3 月 11 日	**つなみ募金** 5 年前の今日、あの東日本大震災が起きた。皆さんはあの大きな揺れを今でも覚えていらっしゃるだろうか。本日、毎月恒例のつなみ募金を経済産業省の前で行った。若干雨粒を感じる空模様で寒い日だったが、あの震災を思えばなんでもない。We love T シャツの 5 名とらぽーるの黄緑 T シャツ 2 名の総勢 7 名が参加した。配布物はクリヤーファイル(第 9 回ラグビーワルドカップ 2019)に 3 月 13 日午後 1 時から午後 5 時まで釜石 PIT で開催される世界凧揚げ交流会のチラシと「地球の泉」のチラシを入れたもの。5 年前のあの日の大きな揺れを私は幸か不幸か知らない。理由は全身麻酔で開腹手術を受けていたためである。翌日麻酔が醒めてテレビをつけた時に初めて何が起こったのかを知った。執刀してくださった医師の方も「お腹の傷が大きくてゴメンね。無影燈が落ちてきそうであわてて縫ったからね」とおっしゃっていた。私は東京にいたから傷が大きいことや術後病室に戻るのに時間がかかったことぐらいで済んだが、つなみの被害にあったところの病院でも私と同じように手術を受けていた方達も大勢いらしたはずだ。その方達の心中を察するといかばかりであったかと、そんなことを思いながら当時のことを感慨深く思い出した。事務所と経済産業省の行き来の途中の金融庁には弔旗が掲げられていた。
3 月 11 日	**東日本大震災から早 5 年** 東日本大震災から 5 回目の 3 月 11 日を迎えた。5 年前のその日、私は中学 2 年生だった。絶対に忘れられない。何故なら、理科の授業中で地震について学んでいるまさにその時だったからで、今でも鮮明に覚えている。現在でも全国に 15 万人以上の方が避難生活を、4 万人以上の方が、仮設住宅で生活している。考えるべきは、将来・未来だと感じる。一歩踏み出す勇気、地道に努力を続けるコトが東北創生、日本創生の大きな一歩になる。ずっと忘れないこと、何かの記事で被さいした方が仰っていた一言が忘れられない。「忘れられることが一番怖い」。東日本大震災で「絆」の大切さを全日本国民が知った。私は明日から「世界凧揚げ交流会 2016」の為、釜石を訪れる。
3 月 11 日	**3.11 の記憶** 今日は東日本大震災の日からちょうど 5 年目になる。2011 年 3 月 11 日の地震発生当時、リザルツスタッフは「日本リザルツレター」作成の真っ只中で、しかもその内容が「特集　大震災一周年目のハイチ」だったそうだ。大きく建物が揺れ、東京も外はパニック状態だったと聞いた。私はその時、大学の交換留学でフランスにいた。友達から「日本が大変なことになっているけど大丈夫か？」とメールが来たので急いでテレビをつけると、津波の映像と福島原発爆発の映像が繰り返し流れ、ものすごく不安な気持ちになったのを覚えている。というのも、私の実家は福島にあった。家族に電話をしたが全く繋がらず、メールを打って数日後に返信が来るまでは、気が気でなかった。幸い私の家族が住む地域は被害が非常に小さく、亡くなった方もほとんどいなかった。それでもその後の風評被害は甚大で、私の地元は原発から 100km 以上離れており、放射線量も東京とほとんど変わらなかったのだが、「福島のもの」というだけで野菜もお米も全く売れなかったそうだ。5 年目という節目の今日、津波で家族を亡くされた方、家を失った方、家に帰れず会社に泊まった方、日本に住むほとんどの人々が、震災の日の記憶を振り返ったのではないだろうか。当時の記憶は決して風化させることなく、でも一人ひとりが少しでも前に進めるよう願っている。
3 月 11 日	**5 年** 今年は、東日本大震災が起きた 2011 年と同じ曜日廻り。5 年前の今日も、金曜日だった。金曜日の午後 2 時 46 分。授業を終えて、仕事を終えて、週末が近づく 1 週間の中でも特にワクワクする時間である。そんな気持ちを、強い揺れとそれに続く大きな津波が一瞬にして変えてしまった。本日、釜石市では、

	地震が発生した時刻にサイレンが鳴り響き、黙祷を捧げた。失ったものを元通りにすることはできないけれど、忘れずにいることで未来に活かしていけると信じている。
3 月 11 日	**第 2 回親教育プログラム（補講）** 今日、19 時から「第２回親教育プログラム」を行い、参加者は７名だった。一通りの説明が終わってから、質問やコメントは？とお聞きしたら、そこから、そもそもなぜ親子が断絶することになるのかについてや、法整備などのお話まで、議論は尽きなくなってしまった。19 時からの前に、1 時間ほどで、「第 3 回親教育プログラム」補講を希望された方が 3 名いらしたが、皆さん大変熱心で、私自身も勉強になることがいっぱいあった。それほどまでにお子さんへの愛情にあふれたパパやママのこと、お子さんはいつか理解することだろう。その日が、一日でも一分でも早く訪れますようにと心から願っている。
3 月 15 日	**「らぽーる」の年度末** 厚生労働省の「親子の面会交流の円滑な実施に関する調査研究」事業として、平成２７年１０月１日に開業した「離婚と親子の相談室らぽーる」も、年度末を迎え、実施してきた調査研究活動の振り返り、まとめ、報告書作成の作業に入っている。７か月ほどの短い期間で、様々な取り組みを進めてきた。徐々に浸透、定着してきた、裁判外紛争手続き（ADR）や、親教育プログラムだったが、そのどちらも先駆的で挑戦的な取り組みだ。世間一般に、どこまで受け容れてもらえるだろうという不安もはじめはあったが、そんな不安も、進めていくうちに、雲が消えて青空になるように払拭されていった。ADR は、事例勉強会に毎月集まってくださる、弁護士、臨床心理士、研究者、有識者の皆さまの熱心で手厚く、そしてやさしい支えがあって、周囲からは「すごくいいもの」「別居・離婚する全夫婦が受けるべき」という評価を受けるに至っている。ADR 仲裁人を務めてくださった三人の弁護士の先生方の素晴らしい采配によって、利用者から「一生忘れない恩ができた」と言われるほどのランディングをなし得ている。親教育プログラムも、３回、３種類のプログラムを終えたところだが、補講のリクエストが相次ぎ、すでに４回の補講を行った。活動の一つひとつを振り返るにつけ、方向性や企画に誤りもブレもなかったことを確認できている。もう少し、長いスパンで調査研究させていただくために、今、企画書も作成中である。
3 月 15 日	**世界凧揚げ交流会 2016 開催** 3 月 13 日(日)、釜石にて世界凧揚げ交流会 2016 を開催した。第一部の「夢を語ろう、叶えよう」では、ファシリテーターにラグビージャーナリストの村上晃一さん、ゲストに野田武則釜石市長、UNRWA の清田明宏保健局長、釜石シーウェイブス RFC の松原裕司選手と北川勇次選手をお招きし、対談を行った。野田市長の子どもの頃の夢はなんと「自分達の住んでいる町の良さ、歴史を調べ、多くの人に伝えること」だったそうである。また、松原選手は子どもの頃、親にラグビーを反対されていたため、家族には内緒でユニフォームも買わず、こっそり練習を続けていたとのこと。ばれてしまったときはひどく怒られたそうだが、その後も必死でラグビーに取り組み、2007 年には見事ワールドカップ日本代表に選出された。この対談には多くの親子連れが来てくださったのだが、最後に野田市長から参加者に対して「震災が起こった後、子どもに好きな事をさせてやれば良かったと話す親御さんが多い。人生は一度きりなので、好きな事、やりたいことがあったら先伸ばしにせず、今やるべきだ」というメッセージを投げ掛けたのが印象的だった。残念ながら、私は第三部の準備のため第二部の凧揚げには参加出来なかったが、多くの子ども達が参加し、大盛り上がりだったそうだ。最後の「第三部：ガザと交流」ではスカイプを通してガザの子ども達と日本の参加者との交流が行われた。昨年 11 月に来日したモハメド君、ラワンさん、ガイダさんも一緒だった。ガザの子ども達は元気いっぱいで「東京タワーに行ったことある？」「日本

	の学校の制服ってどんなの？」など矢次早に質問が飛んできた。丁度学生服で参加された中学生の方がいたので、「こんなのだよ」と見せてあげると「おぉ～」と歓声があがった。ガザの子ども達も、白と赤という日の丸を連想させる服を着ていたので、デザインの意味を尋ねると、なんと今回ガザで行う凧揚げの為に、特別に作ってくれたとのこと。最後は「こんにちは」「アッサラームアライクム」とお互いの国の言葉で挨拶をし、貴重な交流の機会となった。余談だが、その日の夜モハメド君から Facebook で「今日スカイプで会えたね。日本のことはすごく恋しいけど、みんなと話せてとっても嬉しかった！」というメッセージが送られてきて、一日の疲れも吹き飛んだ。
3 月 15 日	**Asian National Stop TB Partnership Forum2016** 釜石から高速バスに乗り込み、早朝に東京に着き、リザルツ事務所から素晴らしいお土産を持って国連大学で行なわれている"Asian National Stop TB Partnership Forum2016"に出席してきた。その場で、私が作った出席者の名前と国旗などが書かれた凧を配らせていただいた。みなさんに喜んでいただけたようだ。「帰ったら早速あげるわ。」と嬉しいお言葉をたくさんいただき、作ってよかったと思った。日本リザルツが毎月 11 日に行うつなみ募金や、このような（凧を作って配るなど）地道な努力が大きな力になると身をもって実感した。
3 月 16 日	**日本リザルツの理事会・総会を開催** 日本リザルツの理事会・総会を来る 3 月 22 日(火)午後 6 時から会議室にて開催する。今期事業計画の審議及び前期決算報告を行う。理事会・総会終了後には懇親会も予定している。
3 月 18 日	**本日のお仕事（インターン）** 先日、凧揚げ大会が無事行われた。子供、両親、関係者含め約２００人の方々に参加していただき、大変うれしく思った。沢山のメディアからも取り上げられ「鎮魂のたこ　被災地の空に　岩手、ガザで復興願う」という見出しと共にニュースとして拡散された。このようにメディアを通してたくさんの人に子どもたちの素直な声が届く事は素晴らしいことだ。産経新聞社には、「復興がもっと早く進んでほしい。（２０１９年の）ラグビーワールドカップが今から楽しみ」という声が紹介されており、悲惨な震災が 5 年前にあったにも関わらず、希望に溢れている声が増えているような気がする。そして、このような希望にあふれる声を文字として全国に伝えられるメディアの存在にとても感謝している。
3 月 21 日	**3 月 18 日　参議院予算委員会での一幕** 3 月 18 日金曜日の参院予算委員会で、公明党の谷合正明議員が、ガザの凧揚げ、そして中東(特にガザ)からの留学生受け入れ強化について言及してくださった。昨年 11 月、ガザの子どもたちを日本に招き、釜石で一緒に凧を揚げ、そして、総理にお会いした。そこで子どもたちは、「釜石で凧を揚げて、生まれて初めて何も心配することなく、恐怖を感じることなく、子どもらしく遊ぶことができた」と言っていた。13 歳、14 歳でありながら、これまでに 3 度もの戦争を経験している彼らの置かれている状況を強く物語っている言葉だった。総理表敬にもご同席いただいた谷合先生は、その時のこともお話ししてくださっている。昨年、日本を訪れたガザの子どもたちが、近い将来日本で学び、中東和平を担う人材となって行く希望が見えた瞬間だった。
3 月 23 日	**理事会・総会準備－事業報告書** 日本リザルツの理事会・総会で昨年度の事業報告を行うために事業報告書を作成した。弊団体の事業報告書は 1 年間のブログを元に事業についてのみ時系列に作成している。普段から定期的に作成しておけばそれほど大変な作業にはらないが、今回は 1 年分を短期間で作成したので、かなりの作業量となってしまった。完成したのは理事会・総会の前日、文章のチェックも含め 3 人がかりで最後の仕上げを行った。
3 月 24 日	**理事会・総会準備～司会編** 3 月 22 日(火)に平成 27 年度日本リザルツ通常理事会・総会が開催されたが、今年は私が司会を務め、来年度の事業計画についても発表させていただいた。前日は祝日だったが、職員総出で事業報告書

	をまとめたり、司会原稿を作成したりと大忙し。平日は他の業務で忙殺されていたため、直前にバタバタしてしまったが、何とか全ての準備を終え、理事会・総会を無事迎えることが出来た。来年度の事業計画を話すことは、私自身、普段の業務内容が全体の中でどのような位置づけにあるのか、頭の整理になったし、改めてリザルツの活動の幅広さに驚かされた。
３月 24 日	**リザルツ新聞第４号･5 号を作成 世界凧揚げ交流会２０１６** 今年３月から、世界で開催されている「世界凧揚げ交流会２０１６」。前回の「リザルツ新聞第４号～世界凧揚げ交流会２０１６～」に続き、「リザルツ新聞第５号～世界凧揚げ交流会２０１６報道特集号～」が完成した。昨年の「ガザ・釜石合同凧揚げ交流会」以上に多くのメディアでご紹介いただいた。
３月 24 日	**国会議員の先生方に、リザルツ新聞第４号、第５号をお届け** 日本リザルツ東京事務所が理事会及び総会の準備で大わらわの中、3 月 13 日に行った「世界凧揚げ交流会２０１６」の報告書として作成したリザルツ新聞第 4 号と第 5 号を全ての国会議員（総勢 722 名）に届けるため、プリンターをフル稼働で用意した。理事会出席のため事務所に来ていた監事にもお手伝いいただき、なんとか理事会開始の 18 時前に配布を終えることが出来た。多くの先生方の目にとまることを願っている。
３月 25 日	**第７回サンキューセミナー「G7 サミット･TICAD VI に向けた開発協力ファイナンスの展望とグローバル連帯税の可能性」の告知** 3 月 31 日にリザルツ事務所にて、第 7 回サンキューセミナー「G7 サミット･TICAD VI に向けた開発協力ファイナンスの展望とグローバル連帯税の可能性」が開催された。今回は講師として、横浜市立大学国際総合科学郡教授の上村雄彦氏(第一部)と、財務省主計局外務･経済協力第一係主査の山本庸介氏(第二部)をお迎えする。また、昨年お亡くなりになった、元財務省主計局主計官･OECD 租税委員会日本代表の志賀櫻先生の追悼会(第三部)も合わせて開催予定。また、志賀櫻先生をしのぶ会だが、こちらには民間税制調査会の共同代表である三木義一青山学院大学学長や、元大蔵省で志賀先生の上司でもあった元世銀副総裁日下部元雄さんも参加される。 第 7 回 NGO サンキューセミナー 「G7 サミット･TICAD VI に向けた国際協力ファイナンスの展望とグローバル連帯税の可能性」 ■日時：2016 年 3 月 31 日（木） 17：00～18：00 第一部 グローバル連帯税が切り拓く未来 (講師：上村雄彦氏) 18：00～19：00 第二部 ODA 予算の作り方(講師：山本庸介氏) 19：00～21：00 第三部 志賀櫻先生をしのぶ会 ■会場：日本リザルツ事務所（千代田区霞が関 3-6-14 三久ビル 5F）

3 月 25 日	**平成 27 年度理事会・総会での一幕** 理事会・総会には、日本リザルツの理事も務めていらっしゃる姫井由美子先生にもご出席いただいた。姫井先生は先日公開された「コンビニ夢物語」の原作者の顔もお持ちだ。私は高校生の時に姫井先生の著書「コンビニ改造論」を読み、コンビニが今日では社会的インフラとして、日本人に無くてはならない存在になりつつあると同時にコンビニ加盟店主は過酷な労働環境を強いられているという実態を知ることが出来た。今日の日本にはフランチャイザー、コンビニ加盟店主の保護に関する法律がない。この本が当時高校生ながら、コンビニについて考え直す機会を与えてくれたことを覚えている。そして数年後、たまたま日本リザルツでインターンをさせていただき、姫井先生と直接お会いすることができた。「コンビニ夢物語」は池袋シネルーブにて公開中だ。■あらすじ：兵庫県・香住。8 年前に妻に先立たれた坂上幸造は、地元に愛される酒店を切り盛りしていた。ある日、幸造は持病の心臓の発作に襲われてしまい、息子の幸一が駆けつけてくる。東京に出て行ったきり長い間故郷に戻ってきていなかった幸一は、突然、父の酒屋をコンビニに改装したいという驚きの提案をする。幸一の言葉に半信半疑だった周囲の人も、次第に彼の熱意に気持ちが動かされ――。コンビニの実態を知り尽くした著者が描き出した、田舎町に起こった奇跡の物語。綺麗な景色とコンビニ中心で展開される人間味が溢れでるストーリーにユーモアを散りばめた、まさに笑いあり涙ありの映画だった。原作にもなったご本も発売中である。
3 月 25 日	**ソーシャルインパクトボンド（SIB）についての有識者による勉強会開催** 3 月 22 日（火）、世界で少しずつ広まりを見せているソーシャルインパクトボンド（SIB）について、有識者の方々をお招きし、説明＆意見交換を交えた勉強会を開催した。SIB とは、埋まっている民間の良質なサービスを掘り起こす仕組みの一つで、あらかじめ設定したプロジェクトの目標達成時のみ、報酬を政府行政が民間資金提供者に支払う、「民間資金を活用した官民連携による社会課題解決の仕組み」である。いわゆる社会的投資の手法の一つとしてヨーロッパを中心に広がりを見せている。現在の世界における SIB の実施分野は、若者就労者支援、生活困窮者支援、子供・家庭支援、児童養護施設支援、刑務所の受刑者の再犯率を低めるプログラムなどだ。日本では、2014 年に日本財団が推進事業を開始、2015 年には経済産業省の委託事業として、介護予防にかかるパイロット事業がスタートするなど、徐々に広がりを見せ始めている。リザルツでは、今後もこのような勉強会を実施していく。また、夕方からは衆参両議員会館にて、リザルツ新聞の配布も行った。
3 月 25 日	**理事会・総会に参加して** 3 月 22 日(火)に平成 27 年度日本リザルツ通常理事会が開催された。 ◆第一号議案ではスタッフの門井から平成 27 年度決算報告を行った。 ◆第二号議案では大崎から、平成 28 年度事業計画及び予算計画について説明があった。 ◆第三号議案では平成 28 年度役員承認の件で話し合いが行われた。 最後に、今年度の活動について、鈴木、吉田、大崎から報告があった。今回は少人数ながら和やかに進行し、引き続き総会も開催され、こちらも無事終了することができた。皆さま貫禄があり、圧倒されっぱなしの理事会・総会だった。

3 月 30 日	**刊行！『世界の富を再分配する 30 の方法』（合同出版）** グローバル連帯税の入門書である『世界の富を再分配する 30 の方法―グローバル・タックスで世界を変える』がいよいよ合同出版より刊行された。«4 月 4 日発売！　A5 変型判 144 頁定価 1,400 円＋税»「深刻化を増す世界の貧困・環境破壊・紛争」の裏には、グローバルな格差・不平等という問題が存在する。さらにその根底には経済（金融）のグローバル化という構造が横たわっている。本書では、その変革のためにグローバル・タックスという手法で地球上の富の再分配を行い、公正で持続可能な社会創造に向けた具体的な政策を、たいへん「分かりやすく」提示している。 ＜執筆者＞ 上村雄彦（横浜市立大学教授）＜編集＞ 金子文夫（横浜市立大学名誉教授）、佐藤克彦（前・PSI 加盟組合日本協議会（PSI-JC）事務局長）、田中徹二（グローバル連帯税フォーラム代表理事）、津田久美子（北海道大学法学研究科博士課程）、望月爾（立命館大学法学部教授） ＜内容紹介＞ 貧困や格差、環境破壊など世界が抱えている深刻な問題、同じ世界で、たった１％のお金持ちに富が集中する現状、その２つを同時に解決できる革新的な税のしくみ、それがグローバル・タックスだ。グローバル・タックスは、地球上の富を再分配し、世界を変える可能性を秘めているのだ。 ＜目次＞ 第１章　世界が抱える深刻な問題 １　地球を悩ます貧困・環境破壊・紛争 ２　一瞬にして世界に不幸をまき散らす金融危機 ３　富める人は富み、貧しい人はどんどん貧しくなる世界 ４　ODA では地球の問題は解決できない ５　CSR、BOP の手法では世界の貧しさは解決できない コラム①　トマ・ピケティの『21 世紀の資本』と「グローバル資本税」 第２章　世界のお金が１％に集中するしくみ ６　世界経済が資本主義的市場原理で一体化すると…… ７　地球上のおカネと資源を貪る多国籍企業 ８　実体経済の数十倍にも膨れ上がったお金の売り買い ９　１％の大金持ちに富が集中する世界のしくみ 10　マネーゲーマーたちの天国　タックス・ヘイブンのしくみ 11　地球問題を解決するのにいくらかかるのか コラム②　ドーア氏の名著『金融が乗っ取る世界経済―21 世紀の憂鬱』 第３章　地球規模で税金を集め、分配するしくみ 12　グローバル・タックス（国際連帯税）はこうして生まれた 13　グローバル・タックスってどんなしくみ？ 14　トービン税がグローバル通貨取引税へ進化した 15　国際社会で税金を集めるルールはどのようなものか？ 16　炭素に税をかけて、温暖化を解決する方法

	17　武器の売買に税をかければ、武器取引も抑制される 18　飛行機に乗ることで、三大感染症の対策に貢献できる 19　グリーン気候基金で温暖化対策の資金を調達する 20　グローバル・タックスで運営される国際機関が出現すると… コラム③　プチ・グローバル累進的資産課税の提案 第４章　金融取引税のとりくみ 21　金融は、経済の血液 22　EU 金融取引税の実施で、310 億ユーロの資金が見込まれている 23　世界ではじめて EU10 カ国が金融取引税の実施に合意した コラム④　誤解されがちな金融取引税 第５章　いま、私たちが抱える問題は武力や資源の争奪では解決しない 24　世界の問題を解決する資金源革新的開発資金を創り出すために 25　集めた税金を活用する最適な機関をつくる 26　99%のための国際連帯税キャンペーン 27　なぜ、世界の労働組合は国際連帯税を求めるのか 28　国際連帯税を導入するためのルールづくり 29　日本でグローバル・タックスが実現・導入される道筋 30　世界の問題を私たちの手で解決するために コラム⑤　「格差と貧困」は世界のキーワード
３月 31 日	**結核レクチャー：結核の恐怖…結核についてどのくらい知っていますか？** ●結核ってどんな病気？ 結核(TB)は世界三大感染症の一つで、生涯発病の危険性がある慢性感染症だ。結核は結核菌によって主に肺に炎症を起こす病気で、タンに結核菌がいる患者が咳をすると空気中に飛び散り、それを周りの人が直接吸い込むと空気感染する。貧困の病気として現在でも毎年 900 万人が罹患し、150 万人が命を落としている。HIV/AIDS との二重感染も深刻で、HIV 感染者の死因第一位が結核である。多剤耐性結核患者、超多剤耐性結核患者の発生も後を絶たない。アジアでは特に深刻な問題であり、日本もいまだ結核中蔓延国。結核は過去の病気ではない。 ●日本の結核の蔓延状況 結核は、明治時代から昭和 20 年代までの長い間、「国民病」「亡国病」と恐れられていた。50 年前までは、年間死亡者数も十数万人に及び、死亡原因の第一位だった。医療や生活水準の向上により、薬を飲めば完治できる時代になったが、今でも 1 日に 56 人の新しい患者が発生し、6 人が命を落としている重大な感染症である。 日本は先進諸国の中でも大変罹患者数が多く、年間、約 2 万人が結核で苦しんでおり、日本は人口 10 万人当たりの患者数が 16.1 人(25 年)と高く、中蔓延国に認定されている。G7 の中でも中蔓延国なのは、日本だけであり、2020 年のオリンピックを前にして危機的な状況となっている。今夏にオリンピック開催を控えるブラジルでジカ熱が流行し、一部渡航制限の措置が取られているが、東京オリンピックの際に結核の感染拡大によって、同じような事態にならないよう最善の取り組みが必要だ。 以下の情報は結核予防学会パンフレット＆厚生労働省のサイトより抜粋した情報である。 ○進む結核患者の高齢化 新たに結核と診断される方のうち 60 歳以上の方が 70%を占めている。人口の高齢化よりもっと早く、結核患者の高齢化が進んでいる。

	○若年層では外国生まれの割合が増加！ 一方で20～30代の患者さんのうち、外国生まれの割合がどんどん増加している。20代では40%以上を占めている。外国から来た子供が予防接種を受けておらず、親などの近親者から感染するなど、国際化の進展により、この傾向もさらに進むと予測されている。 ○受診の遅れ・患者発見の遅れによる集団感染の発生！ 残念ながら結核は「過去の病気」との認識が、一般の方のみならず、医療関係者にもあり、それによる受診・診断の遅れから、集団感染がたびたび発生している。 ○地域の中で大きな格差が！ 特に人口が多く外国人が集まる大都市部は、地方と比較すると結核患者数が多い。都市部にはホームレス、外国人など支援や対策が届きにくい社会的な弱者が多く、日本の中でも大きな格差が生まれていて、各地域の状況に応じた対策が必要だ。 ●世界の結核の蔓延状況 繰り返しになるが、世界的には約 900 万人が毎年罹患し、死亡者は 150 万人と報告されている。 ●現在の結核治療対策の状況 現在の結核薬は、医療従事者の観察下のもとで半年以上に渡って薬を服用することが求められるため、患者にとっては大きな負担となっている。 結核の完全制圧には、治療期間が短く、より副作用の少ない薬やワクチンの開発が必要とされ、研究開発が行われている。
3 月 31 日	**4 月国際会合情報の告知** 4 月には大きな国際会合がたくさん控えている。 ①ポリオ国際ラウンドテーブル 2016　ポリオ根絶への道 ポリオ国際ラウンドテーブル 2016 ■日時：2016 年 4 月 12 日（火）18:00～19:30 ■会場：ホテルルポール麹町　2 階　サファイア ■共催：UNICEF 東京事務所　代表　平林国彦、（特活）日本リザルツ　代表　白須紀子 認定 NPO 法人世界の子どもにワクチンを日本委員会　事務局長　伊藤光子、国際ロータリー、 （一社）ジェイ・アイ・ジー・エイチ　代表理事　渋谷健司 ②第 3 回日経アジア感染症会議 2016 ■日時：2016 年 4 月 22 日（金）9:00-19:10（開場 8:30）、23 日（土）8:15-12:30（開場 7:50） ■会場：六本木アカデミーヒルズ ■主催：日本経済新聞社、日経 BP 社 ③2015 世界栄養報告セミナー ■日時：2016 年 4 月 25 日（月）セミナー18:00～20:00、レセプション 20:00～21:30 ■場所：ホテルルポール麹町会議室「エメラルド」、レセプション「サファイア」 ■共催：（公社）セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、（特活）日本リザルツ、 （特活）ワールド・ビジョン・ジャパン、（特活）栄養不良対策行動ネットワーク ④2016 年 G7 伊勢志摩サミットに向けた世界人口開発議員会議 ■日時：2016 年 4 月 26 日（火）8:00～18:40、27 日（水）9:00～12:00 ■場所：ホテルニューオータニ ■主催：国際人口問題議員懇談会(JPFP)谷垣禎一会長 人口と開発に関するアジア議員フォーラム(AFPPD)武見敬三議長

	⑤Ｇ７サミット、質の高い新たなグリーンインフラ投資と「世界公園(地球の泉)」共創宣言 ■日時：2016 年 4 月 28 日（木）17：00～20:00 ■場所：ホテルルポール麹町 3 階マーブル ■主催：みんなの地球公園(地球の泉)会議、WorldUrbanParks、一般社団法人レジリエンスジャパン推進協議会(グリーンレジリエンス WG、パークレジリエンス SubWG(仮称))、一般社団法人平和と健康の会、特定非営利法人日本リザルツ、パークマネジメントと次世代公園研究会（みんなの地球公園会議）
3 月 31 日	**第 7 回サンキューセミナー開催** 100 名を超える方々にご参加いただいた第 7 回サンキューセミナー。第 1 部では、横浜市立大学国際総合科学群の上村雄彦教授を講師にお迎えして、「グローバル連帯税が切り拓く未来」についてお話いただいた。私達が暮らす地球では現在、「一秒間にサッカーコート一枚分の森林が消えている」「飢餓貧困によって 6 秒に 1 人亡くなっている」「年収 720 億円以上の 0.14%の金持ちが、世界の金融資産の 81.3%を所持している」などなどグローバルな課題が山積みであることを指摘された上で、その理由として以下 3 点を挙げられていた。1.世界の経済規模が変わってきた。実体経済とは別にギャンブル経済が膨張している(10 京 2100 兆円)。2.一部の金持ち、強国が経済を握っている。3.SDGs 目標達成するためには合計 130 兆円必要だが、全くお金が足りない状況。これらの問題を解決するための鍵が、グローバル連帯税だそうです。グローバル連帯税には、炭素排出税、武器取引税、金融取引税など様々な種類があるが、これらの課税によって、理論上 292 兆円もの額が集められる。これだけあれば、SDGs も楽々達成である。「そんな夢のような税収が実現可能なのか」という声が聞こえてきそうですが、国際連帯税のひとつである、「航空券連帯税」はすでにフランスや韓国など一部の国で導入されている。飛行機に乗れる「豊かな」人たちから徴税し、エイズ、マラリア、結核という三大感染症治療のために使われるというこの連帯税、「アメリカがやっていないから・・・」という理由で、残念ながら日本では導入されていない。また、金融取引を行う度に課税される「金融取引税」もグローバル連帯税の一つである。もし導入が実現すれば、コンピュータで一秒間に 1000 回以上の売買が行われるアルゴリズム取引を阻止し、ギャンブル経済を抑えることも出来る。これについては 2015 年、EU の 10 か国財務相で金融取引税の導入が大筋合意され、2017 年にも実現する可能性があるものの、金融業界の反撃で弱気になっている国もあり、まだはっきりとは分からないということだった。日本の動きはどうか。2009 年に国際連帯税推進協議会が創設され、2010 年には日本でリーディング・グループ総会が開催された。そして当時の前原外務大臣からは「ぜひ政治決着を」という話が出たが、国民の理解が得られないという理由で見送りになってしまったそうだ。2020 年は東京オリンピックで多くの外国人が来日することもあり、航空券連帯税導入のチャンスだが、全体の気運としては最近後退ぎみで、グローバル連帯税賛成派の議員を増やすなど地道な呼びかけの大切さを力説された。続いて第二部では、財務省主計局の山本庸介外務・経済協力第一係主査に「ODA 予算の作り方」について語っていただいた。以下、講演の概要である。

	世界における日本経済の状況 ・日本の一人当たりの名目GDPは2014年時点で、世界で27位。日本は豊かな国と言われているが、実はそうではない。・歳出が平成2年から28年にかけて30兆円増加。社会保障費20兆円、国債費9 兆円増加。それと比較して税収はほとんど増えていない。・15 年分の税収を使わないと国債が返せない。社会保障費支出は増加しているが、それ以外の支出は最低の水準。 日本の課題 ・少子高齢化。2016年現在は65歳以上1人を若者2人が支える形だが、2050年は1人が1人を支える肩車型に。高齢者が長く働ける環境を作ることで、支え手を増やす努力が必要。・親の介護と仕事の両立が困難、障害があり仕事が見つからない、子育てと仕事の両立が大変、一人親で子どもに教育を受けさせられない、給食費が払えない、など国民生活において多くの課題がある。・そうした問題に対して最近「一億総活躍社会」という言葉が誕生した。実現させるためには、1.強い経済 2.子育て支援 3.社会保障という3つの矢が必要。経済が強くないと生活は成り立たないし、生活が上手く回らないと経済も潤わない。 ODAについて ・ODA は二国間援助と国際機関に対する拠出の二つに分かれる。さらに二国間援助は有償資金協力(円借款：低利長期の貸付)、無償資金協力、技術協力に分かれる。・2015年のODA全体額は約2兆円。日本の所得に占める割合は0.19%で、DAC加盟国のうち18位。・日本のODAの特徴は、質の高いインフラ投資と東アジア＆南・中央アジアを重視した支援。・もう一つの特徴は円借款。アフリカへの円借款も増えている。しかし途上国の借金を増やすということで「お金を貸す」という手法に反対する国もあり、米国は有償資金協力を行っていない。・支援分野も国によって異なり、米国、英国は社会インフラ、日本は経済インフラを重視している。・OOFは国際協力銀行を通じた融資だが、ODA＋OOFでみると、日本の途上国向け政府資金は米国に次ぐ2位。・日本では政府の社会保障費以外の支出は減っているが、ODA支出は増えている。他の国は、社会保障費以外の支出増加に伴ってODAも増加。・日本は厳しい中でなんとか世界のために貢献。ASEAN10 の GDP 平均は豊かになっている。民間資金の活用が今後の課題。 まとめ ・これまでの30年間は、高度成長の中でアジアを支援してきた。これからの30年間は、少子高齢化の中で国内問題にも立ち向かっていかなければならない中、世界の問題にどのように貢献していけるかを考えていく必要がある。・年齢、性別に関係なく、地域、NGO、企業、自治体、国がバランスよく協調していく必要がある。・誰かが極端に損や得をしている状態では長続きしない。・理想や善意だけでは世の中は回らないので、利潤追求などの考えと、うまく調和していくことが大切。 セミナーの後は、19 時から、第 3 部「志賀櫻先生をしのぶ会」が開催された。最初に、青山学院大学学長・民間税調共同代表の三木義一氏と元世界銀行副総裁、現オープン・シティー研究所共同代表日下部元雄氏からご挨拶をいただいた。そのご挨拶の一部を抜粋してお届けする。 【青山学院大学学長・民間税調共同代表の三木義一氏からのご挨拶】 『志賀さんは、大変優れた正義感の強い方でした。志賀さんが民間税調を引っ張ってくださり、今日があります。おかしいと思ったことには徹底して挑む方で、有名なエピソードには、某県の県警本部長時代には駅前の歓楽街全体が一週間営業停止になるような、そんな大変な話もありました。ご存命中は常に厳しく、褒められた言葉をかけていただいた記憶がないのですが、昨年の 10 月頃、民間税調の答申を様々な意見が飛び交う中、私の見解でまとめたものについて提出したところ、初めてメールで「三木さん、見た。かっこいい」とお言葉をいただけました。これが最後のメッセージになりました。今日はぜひ、志賀さんのこれまでの活動を皆さんで偲んでいただきたいなと思います。』

	【元世界銀行副総裁、現オープン・シティー研究所共同代表日下部元雄氏からのご挨拶】 『私が志賀さんと一緒に仕事をしたのは、1985 年のプラザ合意の 2 年後のルーブル合意の頃です。彼は官房の調査企画官、私は財務省で通貨外交の担当をしていました。この時に二人で合作をし、日本経済の危機を乗り越える為にはどうしたらいいのか、一年間親密に協力をして取り組んだことがあります。当時は、宮澤喜一大蔵大臣時代でした。志賀さんとは諸外国の圧力に屈することなく、円高ストップのための政策（日銀の低金利等）を画策し、尽力しました。それが志賀さんとの最初で最後の共同作業になりました。今日は色々と志賀さんのお話を聞かせていただけるのを楽しみにしております。』 その後、山本庸介氏と日下部氏による献杯、偲ぶ会がスタートし、おいしいグルジアワインとお料理を味わいながら、閉会時間ぎりぎりまで和やかなムードで楽しい会が続いた。天国から、志賀様も遊びにいらしていたような気がする良い会になった。
3 月 31 日	**インターンのお仕事** 先週、しばらくの間やらせていただいていた GGG＋フォーラムの議事録の英訳を終えた。自分で訳した後に、いつもお世話になっている東大を卒業された方に再確認などをしていただき、指摘していただいた点を自分で直し完成した。やはり自分の目だけでなく他人の目によってチェックしてもらわないと気がつかないミスは絶対に存在するので、このような形で優秀な方に私の英訳を見てもらったのはとても良い経験だった。また、今回の英訳で、普段は全く使わないような医学的単語や略語などを学び、それらを使用しないといけない状況にいたのでとても良い経験になった。単語力はもちろん、内容も英語できちんと理解する力もついたような気がする。普段は英文科に所属しているため、英語に触れる機会は多いものの、全く違う分野の英語になってしまうととても難しく簡単には理解できなかったので、このような刺激的な機会を通して少し成長できたような気がする。
4 月	
4 月 1 日	**親権判断に関する画期的な判決** 今週はひとつの喜ばしいニュースと、同じ日に、ひとつの憂いがあった。3 月 29 日に、親権判断に関する画期的な判決が出たのだ。記事に登場する「父親」も、弁護士の上野晃先生も、らぽーるにいつもお力をお貸しくださる方なので、このニュースは我がことのようにうれしく、また、日本では奇跡的なことなので、夢を見ているように思えてならない。この判断を参考にした判決が、これからどんどん出てくるかもしれない…そう思うと、今、私たちは「時代の転換期」にいるのかもしれない。 5 年 10 か月ぶりに会う父と娘は、何と言って再会を喜び合うのだろう…言葉にはならないかもしれない。過ぎてしまった時間は取り戻せないけれど、その分も、これからの人生を仲良く楽しく、慈しみ合いながら生きていただきたいと心から願う。「一憂」の方は、「憂」でもあり、悔しい思いや情けない思いをした出来事だった。私の力が及ばず、周りの大勢の方々にご心配、ご迷惑をおかけしてしまった。期待を寄せてくださる方もたくさんいらして、私一人ではとてもできないが、ありがたいことに私はいつもお力をお借りできる強力な協力者に囲まれていて、期待に応えられる環境だったのに…そのチャンスを、私は逃してしまった。この悔しさも悲しさも自分に対する不甲斐なさも、ずっと忘れないでいようと思う。そして、順調な時には気付かない、今しか見えない景色をしっかりと目に焼き付けて立ち上がり、今までより強くなって歩んでいく。
4 月 9 日	**判決がもたらす波及効果** 先日、千葉家庭裁判所松戸支部で画期的な判決が出たが、今日は、その波及効果を示す一つの記事をご紹介したいと思う。はじめは、芸能人のご夫婦の離婚の話題だと思いながらも、今までの記事とは視点が違うので興味深く読み進んでいくと、後半に、前述の判決が紹介されていて、「子の最大の利益は、両親が争うことではなく、子を信頼し、子のため心を合わせて協力することだ」とまとめられている。記事全体は

	強い論調で、文末は断言される形で締められていることが多いこの記事の中で、この一文があるだけで、ライターの方の人となりや、この問題の本質を捉えておられることがうかがい知れる。私は、「心を合わせて協力する」という言葉がとても好きです。ADR の時などに使わせていただく。
4 月 12 日	**つなみ募金** 昨日４月 11 日に毎月恒例のつなみ募金を経済産業省の前で行った。風が強く 少し肌寒い日だったが、経済産業省前はよく日が当たっていたので、寒さをあまり感じずに済んだ。We loveＴシャツの 2 名とらぽーるの黄緑Ｔシャツ１名と結核のＴシャツ１名の総勢４名で行った。配布物はらぽーるのクリヤーファイルにリザルツのリーフレットとらぽーるの案内を入れたもの。午後 1 時から予定があったため、午後 12 時から 35 分間ほどしか活動できなかったが、用意した部数はほぼ配り終えた。
4 月 12 日	**ポリオアドボカシー大前進** ４月４(月)～８日(金)、超党派の「世界の子どもたちのためにポリオ根絶を目指す議員連盟」のあべ俊子議員が、インドのデリー、アリーガル、アグラを訪問し、JIGH の金森サヤ子氏と弊団体代表の白須も同行した。インドは、2011 年１月に報告された野生株ポリオ症例を最後に、３年間ポリオフリーを達成し、2014 年３月に東南アジア地域におけるポリオ根絶宣言をするに至った経緯を持っている。 本視察では、イギリス、アメリカ、カナダ、アフガニスタン、パキスタンなど国会議員を含む各国代表団と共に、同国におけるポリオ根絶達成からの学びを、残り２つのポリオ常在国であるアフガニスタン、パキスタンにどう生かし得るかを焦点に議論が行われた。滞在中は、ジェンキンス英国会議員やシドゥ加国会議員をはじめとする各国代表団に加え、WHO、UNICEF、アリーガル・ムスリム大学関係者等と意見交換を行った。また、アリーガル・ムスリム大学に附属するＪＮメディカル・カレッジ病院や、アリーガル、アグラに於けるワクチン接種サイトの視察も行った。これらの視察を踏まえ、４月７日にデリーで開催されたポリオ議員サミットでは、インド議員を含む各国国会議員はポリオ根絶に対する意気込みを発表、意見交換を行い、デリー宣言「OneLastPushtoEndPolio-DelhiDeclaration」に合意・署名が行われた。インドにおけるポリオ根絶活動視察は、ポリオ根絶をはじめとするグローバル・ヘルス課題対策に対して強いリーダーシップを発揮してきた各国代表団が交流し、ポリオ根絶に向けた最後の一押しを引き続き尽力していくことで合意した、非常に有意義なものとなった。日本に帰国後の４月１１日（月）は、ポリオ根絶を目指す議員連盟の小坂憲次会長や、あべ俊子議員、来日中の UNICEF ニューヨーク本部ポリオ・チームディレクター レザ・ホッサイニ氏、WHO 世界ポリオ根絶推進活動担当 ローランド・サッター氏、GPEI 事務局シニア・ストラテジスト アンドレ・ドーレン氏に加えて、UNICEF 東京事務所の平林国彦代表、UNICEF ニューヨーク本部の山口郁子氏、国際ロータリーの小林宏明事務局長、JIGH の渋谷健司代表理事、弊団体の白須が集結し、「G7 サミットに向けたポリオ根絶に係る要望書」を世耕内閣官房副長官と塩崎厚生労働大臣に手交した。この要望書は、Ｇ７伊勢志摩サミット首脳宣言におけるポリオ根絶と支援の重要性の明記や、ポリオ根絶に対する日本政府の拠出誓約を求めるものだ。手交は終始和やかな雰囲気で行われ、Ｇ７伊勢志摩サミットに向けて、ポリオ根絶に対して日本のリーダーシップがいかに大切か、理解を得ることが出来た。翌日の 12 日には「ポリオ国際ラウンドテーブル 2016」が開催されたのだが、それについては次のブログでご紹介する。インド視察、要望書手交、ラウンドテーブルの開催と、4 月前半はポリオアドボカシー大前進の２週間となった。

4 月 12 日	**ポリオ国際ラウンドテーブル 2016　ポリオ根絶への道** ルポール麹町にてポリオ国際ラウンドテーブル 2016「ポリオ根絶への道」を開催致しました（共催：UNICEF 東京事務所、（特活）日本リザルツ、認定 NPO 法人世界の子どもにワクチンを日本委員会、国際ロータリー、（一社）ジェイ・アイ・ジー・エイチ）。日本政府、国会議員、医療関係者やポリオ患者代表、パキスタン大使、ナイジェリア領事官、国際機関、研究機関、CSO など 100 名以上の参加を得て、日本がポリオ根絶に向けて一致団結して邁進するべく、それぞれの立場で意思表明をする機会となった。 1980 年代末には、ポリオによって麻痺を発症する子どもの数は 35 万人以上だったが、1988 年にポリオ根絶という目標の下、世界ポリオ根絶推進活動が発足し、世界中にワクチンを届けウィルスと闘ってきた。日本政府、本日の参加者を含めた活動の結果、15 万人が麻痺の影響を受けなかったと言われている。開会の挨拶として、あべ俊子衆議院議員はインドでのポリオ根絶活動の視察報告と共に、これまでの経験を今後に生かすべく期待を述べられた。レザ・ホッサイニ UNICEF ニューヨーク本部ポリオ・チームディレクターからは、日本政府からの支援への感謝と共に、世界でポリオ根絶まであと一歩であることが伝えられた。ローランド・サッターWHO 世界ポリオ根絶推進活担当からは、1988 年には 125 か国がポリオ常在国（野生型ポリオの発症が続いている国）だったが、2015 年にはナイジェリアが除外され、現在はパキスタンとアフガニスタンの 2 か国のみになったという報告の他、日本政府や国際ロータリー、そして次世代ポリオワクチンの開発も含めた技術支援への感謝も述べられた。アンドレ・ドーレン GPEI（世界ポリオ根絶推進活動）事務局シニア・ストラテジストからは、感謝の辞、そしてポリオ根絶の最終段階である今、一層一致団結していく必要が述べられた。パキスタン大使館ファルク・アーミル大使からは、パキスタンはポリオ根絶を国家の緊急課題としており、3 月には 22 万人のヘルスワーカー等が 3,700 人の子どもたちにポリオワクチンの接種を実施した事例の紹介があった。在ナイジェリア大使館アブドゥラー・マドビ領事官も感謝と共に、様々な活動の成果として 2015 年 9 月に正式にポリオ常在国から除外されたことが報告された。 小坂憲次参議院議員からは、国際ロータリー、ビル＆メリンダ・ゲイツ財団への感謝や議員連盟の働きの紹介と決意が示された。外務省日下英司国際協力局国際保健政策室長からも、日本政府はポリオの重要性を理解しており、伊勢志摩 G7 サミットのコミュニケについても検討しているとのご発言があった。田中秀治外務省国際協力局国別開発協力第二課長からは技術供与・専門家派遣による取り組みの他、UNICEF への支援、ビル＆メリンダ・ゲイツ財団との連携による円借款等、ポリオ根絶のための仕組みについての説明があった。国際ロータリーの小沢一彦インターナショナル・ポリオプラス委員からも、官民が一体となって根絶に向けて力を合わせてゆくことが呼び掛けられた。須永新平財務省主計局経済協力第二係主査は、日本は厳しい債務状況だが、伊勢志摩サミット等がある今年、外交予算は増やしており、ポリオについては説明責任を果たすように要望があった。渡部昇三 JICA 人間開発部保健第二グループ次長兼グループ長は、国際社会のニーズに応じてポリオ根絶に貢献してきたこと、今後も保健システムの強化

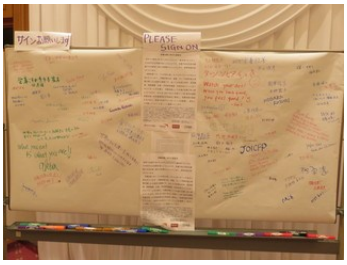
	全般に向けて協力していく旨の説明があった。明石秀親国立国際医療研究センター国際医療協力局連携協力部長は、ポリオ根絶には、技術提供を実施した経験と今後も根絶に向けて力を注いでいく方向性が示された。角屋佳子サノフィ株式会社ワクチン対策渉外部長は、確実な不活性化ポリオワクチンを世界で供給できるように、開発を進めていきたいとの意気込みを述べられた。日本ビーシージー製造株式会社の金子洋氏は毎年 150 万人が亡くなる結核対策に、今日まで来たポリオ根絶への経験を生かしたいとの意欲を示された。川崎市健康安全研究所岡部信彦所長は、活動を見守り続けることと、またこれからが大切であると慎重な姿勢を示された。阿部恒世ポリオ患者代表は、ご自身の体験を元にしてポリオ根絶の重要性を語られ、会場は熱心に聞き入った。その他、15 年も医療分野を担当されている共同通信社編集局科学部の池内孝夫記者からも、今度こそ根絶が待望されるという旨のご発言があった。その他、参加していたロータリークラブの会員から、会議が開催されている東京麹町のクラブ会員であった故山田彝（ツネ）氏と故峰英二氏がポリオ根絶に取り組み、彼らや各国の会員の活動がきっかけとなり、ロータリーが正式に 1985 年にポリオプラス・プログラムを開始するに至ったという逸話が語られた。最後に総合司会の平林国彦 UNICEF 東京事務所代表が、これまでの感謝と共にこれからも一致団結してポリオ根絶に向かって進むべく掛け声をかけ、全員で一本締めをした。同じ思いが会場一杯に広がり、和やかな閉会となった。
4 月 16 日	**「人道の国・日本を目指して」** 参議院議員谷合正明先生がこのたび本を出版された。谷合先生は、国際ボランティア団体職員として、人道支援の最前線を歩いてこられたという異色の経歴をお持ちだ。「難民を助けることはできても、難民をなくすことはできない。難民、貧困、戦争の根本原因をなくす仕事がしたい」とお考えになり、政治の道を志されたということで、本当に日頃よりリザルツの活動にも深いご理解と多大なご協力をいただいている。本の中には、UNRWA の清田明宏先生もご登場され、先日のガザの校長先生と子どもたちの来日のエピソードも話題に取り上げられている。そして、「日本リザルツ」が注釈で紹介されていて、代表の白須も登場する。
4 月 18 日	**インターンのお仕事** 新学期の授業にも慣れ始め、予定も固まってきたためリザルツに久しぶりにお手伝いしに来た。溜まっていた新聞の切り抜きなどを行った。新聞の記事を読んでいて、やはり１４日に起きた熊本での地震が大きなトピックになっていた。私自身も熊本には住んでいたことがあり、知り合いは無事だったが、４０人以上もの方が亡くなりとても残念に思う。被害を受けた方に対する義援金や生活用品などがたくさん寄付されているが、一刻も早くそれらを必要とされる方へ配給されることを願っている。
4 月 18 日	**らぽーる事例勉強会第 9 回報告** 離婚と親子の相談室「らぽーる」の事例勉強会が開催された。4 月の ADR の実施状況（成立有り）、上野晃弁護士からの 3 月 31 日の判決（別居の夫に親権認める判決）についての詳しい説明などを共有し、活発な議論がなされた。裁判はまだ続くが、お母さんとお父さんとお子さんの三方が、より幸せな方向へ向かう結果になったらいいなと思う。勉強会で飛び交う専門用語のおさらいをした。 ●面会交流とは：面会交流とは、離婚後又は別居中に子どもを養育・監護していない方の親が子どもと面会等を行うこと。親権のない親は「月に一度」の面会交流が主流となってしまう。年間たったの 12 回。果たしてこの頻度が親子の絆を保つために十分な時間と言えるのだろうか。ちなみに国際的な基準としては、年間 100 日以上とされている。 ●虚偽 DV とは：「ねつ造 DV」「でっち上げ DV」とも言われ、DV の事実がないにも関わらず、DV があったと主張して作り上げられる DV のこと。これが今、一部で大変な問題になっている。親権、財産分与や慰謝料等の交渉を有利に進めるために DV をでっち上げる人々がいるからだ。改正 DV 防止法では、身体的な暴力だけではなく、精神的な暴力も DV として認められるようになり、被害者が DV と感じたと主張す

	ると DV として扱われるようになった。このことも影響している。DV を主張する配偶者（多くは妻）が、警察に保護を求めた際には、警察は妻の言い分だけを聞き、夫婦双方から事情を聞かない。すなわち被害者の申請・証言のみで立証されて、加害者には反論する機会も与えられないのだ。こうして、たとえ冤罪であっても訴えられた多くの人は、DV 加害者に仕立て上げられ、相手に多額の慰謝料を取られた上に子供と引き離されてしまう。 ●養育費未払いの現状：離婚したら養育費の支払いがなされるが、驚くことに最後まで養育費を払い続ける人の割合は、全国的に見て、なんと【20%】にも満たない。シングルマザーの子どもの貧困が問題になっているが、こんなに低い支払い割合ではこういった問題が起こってもおかしくない。次回の勉強会の開催は 5 月 16 日である。
4 月 21 日	**大崎、熊本へ行ってきます** 日本リザルツの大崎が、いつもお世話になっている Gavi の職員さん（熊本出身）と一緒に被さい地、熊本へ向かうことになった。たくさんの食料と床でも寝られるように寝袋を持って行く。避難所はまだ少し寒いようなので、防寒もばっちりである。移動のための中古オートバイも手配中。今回の秘密兵器は水がなくても歯が磨けるジェル。海外ボランティアの際も重宝するものだ。大崎本人に意気込みを聞いてみた。 「持ち前の明るさでお役に立てるようにと思う！！！！」 大崎は、これから汚れてもいい動きやすい服装に着替えるそうだ。東京居残り組も、義援金集め活動を継続していく。
4 月 21 日	**平成 28 年熊本地震の募金箱設置** 平成 28 年熊本地震の義援金依頼のメールは既に関係各位に送らせていただいたが、事務所内に募金箱を設置した。職員を始め、事務所を訪問される方にも義援金をお願いし、少しでも今回の地震により被さいされた方達のお力になりたいと職員一同願っている。
4 月 22 日	**第 11 回ポリオアドボカシー・ミーティング** 4 月 21 日(木)、一般社団法人ジェイ・アイ・ジー・エイチ事務所にて、第 11 回ポリオアドボカシー・ミーティングが開催された。参加者メンバーは JIGH、UNICEF 東京事務所、国際ロータリー日本事務局、日本リザルツ。国際ロータリー日本事務局からは、ポリオ撲滅推進功労賞をナイジェリアのムハンマド・ブハリ大統領が授与したというお話があった。ポリオ撲滅推進功労賞は、ポリオ根絶活動において多大なる貢献を果たした国家元首や保健機関のリーダーを称えるため、ロータリーが 1995 年に設立したものだ。日本人では、2003 年に橋本龍太郎首相、2006 年に小泉純一郎首相、昨年には安倍晋三首相と、過去に三人が受賞している。それもそのはず、1988 年以来、日本政府は世界ポリオ撲滅推進活動（GPEI）が中心となって進めるポリオ撲滅活動に対して多額の寄付を行っており、その額は世界第 3 位を誇っているのだ。こうした日本の貢献もあり、世界からポリオを根絶するまであと一歩のところまで来ているのだが、今朝ニュースを見ていると、衝撃的な記事を発見した。『パキスタンでまたポリオ接種阻止の攻撃、警官 7 人殺害』パキスタンで子どもへのポリオワクチンの接種作業に当たっていた医療従事者を警護する警官が、武装勢力に銃撃され、7 人殺害されたそうだ。犯行を行ったのは反政府勢力パキスタン・タリバーン運動の分派組織で、今年 1 月にも、ワクチン接種作業の警護をしていた警官を狙った自爆テロが発生している。世界中の様々な課題、栄養不良も、感染症問題も、テロも戦争も全ては繋がっており、どれか一つだけ改善するだけでは意味がなく、全体を良い方向に変えていかないと駄目なのだと実感したニュースだった。

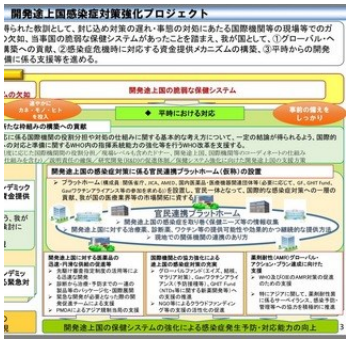
4 月 22 日	**法律ができるまで** ２年前に発足した「親子断絶防止議員連盟」の超党派の国会議員の先生方は、「親子断絶防止法（仮）」の早期成立を目指して活動してくださっている。この「親子断絶防止法（仮）」は議員立法での成立を目指しているわけだが、「唯一の立法機関」である国会において、法律の作り方は２種類ある。「議員立法」と「閣法」だ。まずはその違いを明らかにする。《閣法》内閣が提出する法律案の原案は各省庁で作成される。それらは閣議にかけられる前に、すべて内閣法制局によって審査が行われる。内閣法制局のチェックは、憲法や他の法律との整合性、立法内容の妥当性など法律的な観点や、立案の意図が正確に表現されているか、のような技術的な観点などから幅広く行われる。審査を経た法律案は閣議決定され、内閣総理大臣から国会に提出される。《議員立法》国会議員が法律案を作成する場合は、衆参それぞれの法制局がアドバイスやチェックを行う。衆議院議員が立案する際は衆議院法制局、参議院議員の場合は参議院法制局がサポートする。審査が終わると、議員がそれぞれが所属する議院に法律案を提出する。では次に、審議の流れについて。法律案が衆議院に提出された場合、まず衆議院議長が、法律案の内容を踏まえて審議するのにふさわしい委員会（例：法務委員会や厚生労働委員会など）を選ぶ。委員会では、本会議での審議に先立ち、法律案の詳細な審査を行う。手順としては、内閣提出であれば担当大臣が提案理由説明を行い、法律案の内容や意義を説明する。審査は主に質疑応答形式で行われ、法案提出者に対して法律案の課題や問題点をただし、明らかにしていく。重要法案の審査では、参考人を呼んで意見を聞いたり、公聴会を開いて、利害関係者から意見を聞いたりすることもある。十分に審査が尽くされたと判断されると、法律案は採決にかけられる。委員会としての結論が出されたら、次は本会議で審議されることになる。委員会での審査の結果、必要があれば修正案が作成され、また可決された後、政府が法律を執行する際の注意点などを示す「付帯決議」が付けられることもある。本会議では、委員会での審査結果を踏まえて審議される。そして採決が行われ、ここで衆議院としての最終的な結論を出す。本会議で可決されると、法律案は参議院に送付される。新聞やテレビのニュースで「法案が衆議院を通過しました」と報じられる段階だ。参議院でも、衆議院と同じように、委員会から審査が行われ、本会議で審議された後、採決される。参議院の本会議でも可決されれば、晴れて法律として成立となるわけである。衆参で意見が割れることもしばしばあり、そんなときに次の二つの方法がある。ひとつは「両院協議会」を開いて、衆参両院の代表が意見の一致を図る方法。話し合いの結果、成案が得られた場合は、それぞれの議院で可決されると成立する。もう一つは「衆議院の再可決」。衆議院で出席議員の 3 分の 2 以上の多数で再び可決された場合は、法律となる。今国会会期中にも、多くの法案が提出されている。私たちの生活に関係する法案も意外と多かったりする。国会でどのような法律が作られようとしているのか、審議の行方をしっかりチェックする習慣をつけなければならない。
4 月 24 日	**「日経アジア感染症会議 2016」(4/22-23)** 「日経アジア感染症会議 2016」は、グローバル経済の発展に伴う感染症リスクへの対策に関連する、行政機関、団体、学会、企業など産官学、全てのステークホルダーが一堂に会し、2 日間に渡ってオープンな議論を行う会議だ。舛添要一東京都知事の挨拶の後、内閣総理大臣補佐官和泉氏の基調講演が始まり、日本の国際的な健康医療の戦略についてお話しされていた。日本は国際感染症対策のリーダーとなるべく、これまでは縦割りだった体制を横にも縦にも一気通貫し、情報共有・産官学一丸となって協力していかねばならないと力強く述べられた。また、従来は外務省のみだった国際保健への対応を、各省皆が協力して取り組んでいく体制はとても重要な戦略だと強調されていた。緊急時の危機対応を含め、国際保健政策の推進のため、WHO、世銀、グローバルファンド、Gavi、GHIT についても協力・支援を引き続き続けたい、そして特に発展途上国支援のために JICA、ODA を通じて世界の平和と

	健康に貢献していきたいと話された。Gavi キャンペーン事務局のリザルツにとって、大変心に響く講話であった。続いて、外務副大臣の木原誠二氏の基調講演。感染症と日本の貢献、外交という観点から見て重要性が増す国際感染症対策について、また、これまでの取り組みと、伊勢志摩サミット、TICAD VI 開催に向けての本会合の重要性と期待について語られた。感染症との戦いは今、この瞬間にも起こっている日々の戦いであること、また、子供や社会的に弱い立場にある人々に被害が及びやすいという問題点について言及されていた。さらに、経済的な負のインパクトが大きいということにも触れられていた。試算されたエボラの経済的損失は、なんと 8 億ドルだそうだ。最も大事なのは人間の安全保障。人材育成も含め、国際保健における一貫した取り組みができるように…ということで締められた。そして、地域医療機能推進機構の尾身茂理事長から、今回の日経アジア感染症対策会議の目的の説明があり、報告会に移った。企業による開発に、大学が負けている…という言葉が心に残った。産官学の横の連携の重要性が、実例からも伝わった。報告終了後は、パネルディスカッションに移った。討議終了後はいくつかの会場に分かれ、分科会が行われた。
4 月 25 日	**熊本出張報告①** 23 日から熊本出身の Gavi 職員の方に同行して、現地入りしている。 職員の方の実家に着くと、ご家族の方が現状を話してくれた。水は出るが、地震直後はサビで真っ赤だった。今は透明になってきたが、まだ飲めないので、自衛隊のいる近所の給水所で水をもらって来ている。スーパーなどは開いているが、ガスはまだ止まっており、飲食店はほとんどやっていない。屋根が壊れ、地震直後は雨漏りがあった。昼間は家の片付けをするが、夜は怖いので避難所や車内で寝ている人が多い。特に 2 回目の地震が夜中に起こったため、それがトラウマになっているとのこと。私達も寝る時間になると、各自寝袋や毛布を持参して近所のコミュニティセンターに移動した。入口には誰でも自由にもらえる食品や衛生用品があった。地震直後はぎゅうぎゅう詰めで寝るスペースも狭く大変だったようですが、徐々に人数が少なくなり、今は三分の一くらいになったそうだ。マットレスも最近支給されるようになったとのこと。翌朝近所を歩いたところ、大きく破損している家はなかったが、屋根の瓦が落ちてしまったのか、ブルーシートをかけている家が数件あった。代表の白須が買って来た 25kg の大量の食料もとても喜んでいただけた。
4 月 25 日	**シリーズ Gavi を知る①** 日経アジア感染症会議に触発され、今日から何回かに分けて、「シリーズ Gavi を知る」をお届けする。Gavi について、「もっとよく知りたい！」という方が最近多い中、Gavi の HP を見ると英語＆ボリュミー⇒挫折…というわけで、大事な点をかいつまんでお伝えしていく。 ●Gavi という名称について：「G…Global、A…Alliance、V…Vaccines、I…Immunization」の頭文字を取ったもの。日本語訳は、「ワクチンと予防接種のための世界同盟」。日本語の正式名は、「Gavi ワクチンアライアンス」。 ●Gavi の目標：最終的な目標は、世界中の全ての子ども、一人ももらさず、公平に基礎的なワクチン接種が継続的にできる状態にすること。そのために、適切かつ品質の高いワクチンを手頃で持続可能な価格で供給することを目指している。 ●何故、Gavi が必要なのか：世界中で途上国の 1900 万人近い子供たちが、基礎的なワクチン接種ができていない状況にある。（これによって病気が蔓延したり、障害が残ったり、死亡する子どもも…）しかし、途上国用のワクチン開発は儲からない・ワクチン開発は博打のようなものという理由から、ワクチン開発よりも治療薬の R＆D の方に力が注がれやすい。他にも様々な理由はあるが、主に以上の理由から、ワクチン開発に対して製薬会社が引き気味になってしまう…故にワクチン開発に対する「何らかのインセンティブ」を提供するメカニズムが必要なのである。

4 月 25 日	**熊本出張報告②** 本日は、Gavi 職員の方の実家がある、菊陽町のボランティアセンターに行って活動してきた。といっても、ご実家は菊陽町と熊本市のちょうど境辺りにあり、ボランティアセンターのある役場までは電車で揺られ、とことこ歩き、1 時間ほどで到着した。この辺りに来ると、屋根がブルーシートで覆われた家が一気に多くなる。菊陽町の中心部は 2 回目の地震の震源地に近かったようで、家の中がめちゃくちゃになってしまった方がたくさんいる。役場に着くと、外にボランティアセンターの看板があり、集まっている人々のほとんどが高校生だった。ボランティア保険に加入して簡単なオリエンテーションを済ますと、次はニーズのマッチング。通常、被さい者からの依頼内容の説明を聞き、参加したい活動に手をあげて決めていく。私がテントに入っていくと、「高校生？大学生？」とすかさずスタッフの方に聞かれたので「社会人です」と正直に伝えたところ、「大人の男が必要だったんだよ～」と大変喜ばれ、有無を言わさず力仕事班に回された。そこから車で依頼のあったお家まで送ってもらい、男 4 人でごみの撤収作業を開始した。そのお宅は高齢者一人暮らしなのだが、地震で家電や家具がほとんど倒れてしまったそうだ。ただ、同じ敷地内の隣のお家に従弟ご夫婦が住んでいるので、今はそちらに避難されているとのこと。庭に出された大量のゴミを燃えるごみ、燃えないゴミ、鉄、割れ物などに分別しながらトラックの荷台に乗せていく。もちろん一回では終わらないので、家とゴミ集積所をトラックで何度も往復した。瓦も庭のあらゆる場所に落ちており、ひとつひとつ拾っていった。途中で雨も降ってきて泥々になりながらの作業となったが、6 回目のトラックがゴミ集積所に向かったところでようやく終了した。ボランティアセンターに戻った後は、スタッフの方にいろいろと話を聞くことが出来た。本日菊陽町のボランティアに参加した方の数は 126 名で、活動件数は 41 件。ボランティア人数と依頼件数のバランスは、いまのところちょうど良いそうだ。それに対して隣町の熊本市や益城町はボランティアの数に人の仕分けが追いつかず、先週末は、集まっても何もすることがない人が多く出たそうだ。益城町は依頼の数が 50 数件なのに対し、500 人以上の方が県内外から集まっている。被害が大きいのでニーズはたくさんあるそうだが、まだまだ余震もあり、被災した建物に立ち入ることができるか否かの判断基準となる応急危険度判定の調査が行われている最中のため、民家の片付けは現在難しい状況にある。そのため瓦礫やごみの撤去作業はまだ行うことが出来ず、現在益城町と熊本市のボランティアは、ポスティングや避難所の清掃等が主な作業となるようだ。雨が降って地面が崩れやすくなったり、感染症が発生したり、ボランティアが過剰状態になったり、でも本当に必要な所にはまだ支援が入れていなかったり、現地にいると日々変化する被さい地の状況が伝わってくる。常にアンテナを張り、その時々のニーズを見極めながら、人々に寄り添ったお手伝いをしていきたい。写真にある代表の白須が買って来た 25kg の大量の食料もとても喜んでいただけた。

4 月 25 日	**「2015 年世界栄養報告」セミナー報告**  ルポール麹町にて「2015 年世界栄養報告セミナー　栄養と持続可能な開発のために～必要な行動とアカウンタビリティ～」を開催した。（共催：公益財団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、特定非営利活動法人の日本リザルツ、ワールド・ビジョン・ジャパン、栄養不良対策行動ネットワーク）。これは昨年 9 月に発表された 2015 Global Nutrition Report の日本語版発刊に寄せて、報告書内容や世界の栄養の潮流について、3 人の海外からのゲストスピーカーからの貴重な報告を伺い、日本発の栄養改善への取り組みが更に広がることを目指すものである。政府、国会議員、国際機関、研究機関、企業、NGO などから 180 名以上のご参加があり、最新の情報を理解し、それぞれの立場そして協力の下、栄養改善に取り組む思いを深める機会となった。逢沢一郎衆議院議員の開会挨拶の後、ローレンス・ハダッド国際食糧政策研究所（IFPRI）シニア・リサーチ・フェローから「2015 年世界栄養報告」の発表があった。1 ドルの栄養改善への投入や 16 倍のリターンがあることから、各国が必要な行動を取り、成果を示していくことを説明された。続けて、フローレンス・ラスベンヌ Scaling Up Nutrition(SUN)事務局長から、世界の栄養の潮流と SUN の役割について報告があり、SUN の世界的な仕組みや協力していく必要性について具体的な話があった。ディオニシア・ナガハマ国立アマゾン研究所研究員からはリオ・オリンピック・パラリンピックにおける栄養サミット開催について、具体的なイベント計画が示された。続けて共催者 4 団体を代表して、渡辺鋼一郎栄養不良対策行動ネットワーク代表理事より栄養のアカウンタビリティの世界の潮流について報告があった。内容は 4 団体からの 4 つの提言（日本政府の国際栄養改善への支援、栄養改善の説明責任の強化、リオ・オリンピック・パラリンピックにおける栄養サミットへの積極的な参加、日本発の栄養改善ネットワーク体制の強化）を説明された。この提言に基づき、白須紀子日本リザルツ代表が栄養改善に向けた宣言文を読み上げ、大きな拍手の中、協力して取り組んでいく一体感が会場に流れた。宣言文は掲示され賛同者からのサインで一杯になった。そして、総合司会である、あべ俊子衆議院議員・国際母子栄養改善議員連盟事務局長から国際母子栄養改善議員連盟の報告があった。その後、日本政府からもご発言をいただいた。松本純衆議院議員より電報、山東昭子参議院議員・国際母子栄養改善議員連盟会長からもお手紙を頂いた。20 時から 22 時まで開催されたレセプションにも 100 名以上の方が参加され盛況の内に終了することができた。
4 月 26 日	**熊本出張報告③** 昨日に引き続き、今日も菊陽町のボランティアセンターに登録して活動してきた。 今日は良い天気だったので、ママチャリをお借りして、ゆっくり町の風景を眺めながらの出陣。受付が開始される９時前には到着したが、すでに多くの方々が集まっており、地元の人達の助け合い精神の高さが伺える。(菊陽町では人が集まりすぎるのを防ぐため、現在ボランティアを町民限定としている)昨日の力仕事とはうって変わり、本日は地元のグループホームで傾聴ボランティアを行うことにした。

	そこは認知症の方々が 18 名入居されているホームで、一年半前に設立されたばかりということもあって、とっても綺麗で明るい施設だ。地震で建物への直接的な被がいはなかったのだが、スタッフの方が被さいされてしまい、人手が足りないという事でお手伝いに伺った。3 人で行き、そのうち一人は看護師と心理士の資格を持つ強力な助っ人。簡単に自己紹介を終えると、風船投げやジェスチャーゲームなどのレクリエーションを行った。ジェスチャーする側は、もちろんボランティアの 3 人。クジを引いて「ゴリラ」が出た時は、すぐに正解してもらえたが、「浅田真央」が出た時は「スケート」以外の答えが出てこず、みんなの輪の中をひたすら滑りつづけた。そしてトリプルアクセルを決めたところで、ようやく「浅田真央かの～？」の声が。本当にありがとう、おじいちゃん！その後はスタッフの方と昼食作り。今日のメニューは中華丼、たまごスープ、バナナヨーグルト、さつまいもとリンゴのデザート。スタッフを含め、約 20 名の料理を一度に作るのは至難の業で、フライパンを二つ使って調理していった。少し薄味だが、皆さん「おいしい、おいしい」と大好評だった。その後はまったりとくつろぎながら、多くの人達とお話しました。学生の頃のこと、勤めていた会社のこと、ご家族のこと、恋愛のことなどなど、「初対面なのにそこまで話しちゃっていいの！？」とこちらが心配してしまうようなプライベート話もたくさん飛び出していた。その他にも熊本の方言を教えてもらったり、私も心から楽しむことが出来た(何度も同じ話が繰り返されるのはご愛敬ということで)。地震については「とにかく長く揺れるので、気持ち悪かった。でもラジオで外には出るなと言われていたので、揺れている間は柱にしがみついていた」と話してくれた方がいた。入居者の皆さんが怖い思いをしたのはもちろんだが、当時の夜、2 人だけで対応したスタッフの方々の心労は想像に難くない。地震が起こり、直接の人的被がいはなくても、専門職の方が身動きの取れない状態になることで、その裨益者となる人達がこれまでと同じケアを受けられない状況がたくさん出てくる。学校、保育所、幼稚園、そして今回のようなグループホームなど、その形は様々だが、子どもやお年寄りなど、社会的弱者にしわ寄せが来るという点では同じ。メディアで取り上げられる以外にも、本当に地震の被がいは多岐に渡るのだなと、考えながら活動した。
4 月 27 日	**2016 年 G7 伊勢志摩サミットに向けた世界人口開発議員会議** 2016 年 4 月 26～27 日、東京で「2016 年 G7 伊勢志摩サミットに向けた世界人口開発議員会議」が開催された。この会議は「国際人口問題議員懇談会（JPFP）」と「人口と開発に関するアジア議員フォーラム（AFPPD）」が、世界の地域議連などと協力して行われた。この会議には、世界各地域の国会議長を含む議連の代表議員約 120 名（約 70 か国）と国際機関等の代表約 50 名が参加し、昨年 9 月の国連総会で採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の下、人口と開発に関する課題への早急な対応のため、G7 サミットに参加する各国首脳に提言を行い、国会議員が政治的行動を約束することを目指している。武見敬三参議院議員の歓迎挨拶、谷垣禎一衆議院議員、福田康夫元総理大臣、そして安倍晋三総理大臣の基調演説があり、日本からリーダシップを発揮していく強い決意が語られた。全体セッションの後、次の 5 つのセッションが 2 日間に亘り繰り広げられた。 セッション 1：リプロダクティブ・ヘルス、UHC、女性のエンパワメント、ジェンダーの平等 セッション 2 ：若者への投資、健康、教育、雇用と人口問題 セッション 3：経済的に活力のある高齢化 セッション 4：人口の安全保障と感染症危機管理体制の確立 分科会 1：医療者も巻き込まれる感染症ケア 分科会 2：市民社会と国会議員の対話～G7、TICAD を経て SDGs 達成へ～ セッション 5：SDGs 期におけるグローバル・パートナシップに向けた国会議員と議員ネットワークの役割 各国の議員、研究者、国際機関、NGO などから、保健・若者・感染症・議員の役割についてそれぞれの国の状況報告と共に、世界的な連帯を持ち課題に取り組むように議論が進められた。最後に、世界の議

	員が協力して、G7 伊勢志摩サミットに向けて活動していくことを宣言文として採択し、閉会となった。サミットの前に世界の議員がこのような準備をしていることがわかり勉強になった。
4 月 27 日	**熊本出張報告④** 本日は、今回の地震で最も被害の大きかった益城町を訪問した。10km 以上あったが、雨の中、自転車で行ってきた。雨で川が増水していた。土砂災害も心配だ。町に近づくと、自衛隊の災害派遣部隊の車が増えてきていた。スーパーや八百屋、薬局などは営業していた。中に入ると、筆舌に尽くしがたい光景が広がっていた。隣同士でも、半壊した家と無事だった家があり、それぞれの家には、壊れた程度によって「調査済」「要注意」「危険」の 3 種類の張り紙が貼られていた。町中から少し外れると綺麗な田園風景が広がっており、地震が起こる前までは平和な田舎町だったことが想像できた。
4 月 28 日	**感染症対策の強化…内閣官房のアクションプランの共有**  内閣官房が発表している分厚いアクションプラン、「国際的に脅威となる感染症対策の強化に対する基本計画」を読んだ。官民連携のプラットフォーム(構成員:関係省庁、JICA、AMED、国内医薬品・医療機器関連団体等(必要に応じて、GF、GHIT Fund、Gavi ワクチンアライアンス等の参加を求める)を設置し、官民一体となって、国際的な感染症対策への一層の貢献、我が国の医療業界等の市場開拓に資すると書いてあった。素晴らしい。そして、気になる一文を発見した。「NGO 等によるクラウドファンディング等の支援の活性化の促進」NGO の感染症関連のクラウドファンディングを支援している。ただ今、企画進行中のリザルツ発信のクラウドファンディングの噂を聞きつけたのだろうか。内閣官房が味方についてくれたら、怖いものはない。詳細はまだ明かせないが、世界の保健を変える企画で、みんなが平和に安心して毎日を過ごせるようにするための企画だ。
4 月 28 日	**熊本出張報告⑤** 本日は、益城町、南阿蘇村に次いで被害が大きかったと言われる熊本市に自転車で行ってきた。路面電車も走り、一見平和な町のようだが、ところどころに震災の爪跡が見られる。市役所前には配給のための列が出来ていた。益城町と同様、ごみの問題も深刻だ。日本赤十字社発祥の地とされる洋館で県重要文化財の「熊本洋学校教師ジェーンズ邸」も全壊して、ブルーシートが掛けられていた。崩壊前はとても立派な建物だったそうだ。文化財と言えば、熊本城も壊滅的な被害を受けた。いまは立入禁止になっているが、外からでも石垣が崩れているのが分かる。日本リザルツは東日本大震災が発生した後、岩手県釜石市に事務所を設置した。以来、現地で継続的な被さい地支援を行っている。熊本にも同様の拠点を作るため菊陽町、益城町と動き回ってきたが、この度、熊本市の「日本財団災害復興支援センター」にオフィスを構えることが決まった。日本財団では、熊本支援を行う NPO に対して、無料で事務所を貸し出している。今はまだ何もない部屋であるが、徐々にデスクや椅子等のオフィス用品が揃っていくそうだ。まだ設立されたばかりで、新聞で情報を見るなり飛び込んだので、弊団体が一番乗りだった。日本リザルツは、これからこの事務所を拠点に熊本支援を行っていく。

4 月 30 日	**G7 に関する外務省・NGO 意見交換会への参加** 4 月 28 日、霧雨と強風の中、「G7 に関する外務省・NGO 意見交換会」に参加した。参加団体は日本リザルツを含め計 15 団体。交換会の時間はピッタリ 1 時間しかないため、早口で自己紹介の後、それぞれの団体が提言・要望・質問を行い、それに対して、サブシェルパの宇山智哉経済局参事官からお言葉をいただくという流れでサクサク進んだ。要望のテーマは団体ごとに違うのだが、「保健、女性と開発、紛争・難民問題、ビジネスと人権、飢餓と栄養改善、気候変動・エネルギー、サミットと政府・市民対話の持ち方」等、幅広かった。日本リザルツからは、ワクチンと栄養についての要望をした。もちろん、Gavi を強調した。サブシェルパの目を見て要望を言えたのでよかったが、思いは伝わったであろうか。写真撮影がないので、会の様子が伝えられず残念だが、皆さん、それぞれの思いをテキパキ発表していた。市民団体がこうしてサブシェルパとの対話の時間を持てるのは凄いことだ。G7 に向けて、準備が着々と進んでいるのを肌で感じた。
4 月 30 日	**パナマ文書問題：戦々恐々とする海外資産 5,000 万円以上保持する富裕者** このところ、「パナマ文書」問題で上村雄彦先生とテレビ出演のコンビを組んでいる（？）森信茂樹教授のパナマ文書関連の所論が、ダイアモンド・オンラインに連続して掲載されているので紹介したい。専門家だけあって、タックスヘイブン問題に関する実務について語られているので、必読だ。例えば、「今後日本人（日本居住者）や日本企業の情報がパナマ文書の中から見つかった場合には、どうなるか」など。その中で面白かったのは、日本居住者の海外財産の捕捉のための国外財産調書であるが（5,000 万円以上の財産）、「未提出が相当数いると言われている」とのこと。故意の不提出には罰則（1 年以下の懲役）が科せられるので、パナマ文書の問題には戦々恐々としているのではないか、と。これらのことは、本日（4 月 30 日）の日経新聞にも載っています。「…パナマ文書発覚以降、氏名公表を心配した富裕層からの（法律事務所への）問い合わせがやまない」と。あと大企業のタックスヘイブンへの子会社（現地法人）の実態をどう把握するかだ。まずは徹底した情報開示と各国の自動情報交換制度構築が課題となる（パナマはこれに入ろうとしていなかったが、今回の事件もあり入ることに）。日本の大企業がタックスヘイブンにどのくらいの現地法人を持っているかというと、資本金 1 億円以上の日本の大企業 1,700 社（大企業総数は 2 万 9,672 社）が 9,000 社を持っているとのこと。これは 4 月 26 日の参議院財政金融委員会で大塚耕平議員の質問（民進）に対して国税庁が答えたものだが、やはりすごい数だ。しかし、問題はその自動交換制度の実効性だ。交換制度の条約を結んだのはよいが、タックスヘイブン諸国からまったく情報が上がってこない、という実質的サボタージュが考えられる。実は、何十万社というペーパーカンパニーがあるケイマン諸島の政府機関は 5 階建てのビルひとつに入るくらいの規模だそうで、このような陣容で果たして政府当局が供与すべき情報を把握できるのか（志賀櫻「タックス・オブザーバー」エヌピー新書）、ということであり、情報を把握する能力も意思もなく、結果的に何ら有用な情報が出ないということも考えられる。次に、4 月のＧ２０財務相会合の声明も挙げておく。ちなみに、「Ｇ２０では、ドイツが租税回避地への制裁も含めた強硬策を求めたが、新興国側は「事務量が増える」と慎重姿勢で、「防御的措置（対抗措置）」というあいまいな表現にとどまった」と毎日新聞にあった。

5月	
5月3日	**熊本出張報告⑥** 昨日、一昨日の暑さから一転し、今日は雨が降っている。 日本財団の 3 部屋の事務所の内、贅沢にもまるまる一室を占領して活動している。仕事も事務所、寝るのも事務所ということで、すでにマイホームと化している。さて、最近の活動だが、日中はここでデスクワークを行ったり外に人に会いに行ったりし、夜は火の国会議に参加する、というのが日課になっている。火の国会議(正式名称:熊本地震・支援団体火の国会議)とは、NPO のネットワークである「全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(JVOAD)」の呼びかけで、役所の職員や県内外のNPO団体代表者が毎晩集まり、情報共有を行うことを目的とした会合だ。下記の 12 のテーマに沿って各団体がその日の活動を報告し、避難所で今どんなニーズがあるかなどを話し合う場になっている。1.炊出し・食事の提供、2.避難所の生活環境の改善、3.瓦礫撤去や家屋の清掃、4.物資配布・輸送、5.医療、レスキュー、6.障がい者や高齢者などの要援護者支援、7.子どもや子育て世代への支援、8.外国人等のマイノリティ支援、9.ボランティア派遣　ボランティアセンター支援、10.団体間のコーディネート、11.資金助成、12.調査・アセスメント 日本リザルツでは、「避難所の方々、特に高齢者への口腔ケア」と「被さいした女性と子どもの精神的ケア」の二本立てで事業を行うべく、調査と他団体との連携を進めているところだ。ところで昨日、熊本市が現在約 180 ヶ所に及ぶ避難所を、連休明けにも 18 ヶ所の「拠点避難所」に集約する方針を示した。小中学校などの再開に向けて一部の避難所を閉めていく必要があるのは仕方ないが、移動が肉体的にも精神的にも負担になると声を上げている方々も多くおり心配だ。私も10日前に熊本に来た時は、これほど長期戦になると思っていなかったので少々疲弊しているが、頑張りたい。
5月5日	**熊本出張報告⑦** 昨日は日本リザルツ代表の白須が新幹線で熊本へやってきた。 ゴールデンウィーク中も岡山、北海道、熊本と全国を駆け回っており、大忙しだ。まずは市電に乗って、日本財団のオフィスへ。開設直後からリザルツに事務所を貸してくれ、さらに寝泊りまでさせてくれている日本財団の皆様にご挨拶。お土産のカステラをとても喜んでくれた。その後は菊陽町や熊本市内、地震で最も大きな影響を受けた益城町などを視察。益城町では避難所になっている広安小学校も訪問した。私が一週間前に訪れた時は人で溢れかえっていたが、今は高齢者や子どもがほとんどで、教室も綺麗に片付けられていた。授業が 5 月 9 日に始まるため、ほとんどの方が自宅に帰られたか、別の場所に移られたそうだ。学校の玄関口で小学校2年生の子ども達5、6人が集まっていたので、仲間に入れてもらい少しだけ一緒に遊んだ。あっち向いてホイ、変な顔ゲーム、年齢あてっこなど、遊び道具がなくても出来ることはいっぱい。みんなとても元気だった。 益城町でも特に被害の大きかった地域を視察。私が以前雨宿りした安永神社も見てきた。気付けばもう5時近くになり、代表は大急ぎで新幹線に乗って東京へ。短い時間だったが、様々な場所を訪れて充実した一日となった。
5月5日	**【神奈川新聞】注目される国際連帯税 「航空券」導入　議連も強調** 本日の神奈川新聞に「注目される国際連帯税 『航空券』導入　議連も強調」というタイトルで、先の 4 月20日に開催された院内学習会『グローバル連帯税が切り拓く未来』について、くわしくレポートしている。当日はグローバル(国際)連帯税に関する議論のほかに、「パナマ文書」問題、つまりタックスヘイブン・オフショア問題も議論となった。また、グローバル連帯税の入門書である『世界の富を再分配する 30 の方法―グローバル・タックスで世界を変える』(合同出版)も紹介している。

5月5日	**熊本出張報告⑧** 熊本市は、電車、バス、路面電車と公共交通機関が充実しているが、市内を自由に走り回るには、やはり自転車が便利だ。ということで、リザルツ自転車を買いに行った。しかし、近所の自転車屋さんは地震の影響で休業中。そこから 30 分ほど歩いて、ようやく営業中の自転車屋さんを発見した。市内は坂が多いため、変速機付きで最もお手頃価格の物をチョイス。その割にはなかなか素敵なデザインだ。新聞を買って事務所に戻り、事務作業に励む。夕方からは二泊だけ温泉宿に泊まる許可がでたので、買ったばかりの自転車に乗り、ルンルン気分で宿へと向かった。熊本城近くの「城の湯」。何と一泊 3600 円。大浴場で体を休め、サウナで汗を流し、少し体が軽くなった。お風呂に入るのは三日ぶり、ベッドで寝るのは約二週間ぶりだ。今までの日常生活で当たり前に使っていたものが、いかに便利で有り難いものだったかを実感する。被さいされ、家が全壊し、今も避難所で暮らす人たちの苦労に思いを馳せずにはいられない。少しでも早く人々が以前の暮らしに戻るサポートができるよう、エネルギーをチャージして、また頑張る。
5月5日	**こどもの日に思うこと** 今日はこどもの日だ。そして、熊本地震から今日で 3 週間になる。毎日新聞の調査で、熊本県内の少なくとも 22 の認可保育施設が、損壊するなどして休園していることが分かったそうだ。園児約 2,150 人が普段通っている保育施設に通園できないでいることになり、再開した施設でも、県下 8 市町村で約 9,600 人が欠席しているそうだ。欠席の理由は「県外に避難している」「避難所生活で送迎が困難」「余震が続き、子どもを手元から離したくない」「子どもの情緒が不安定」など。子どもは、地震のメカニズムも理解できず、いまだ頻発する余震に怯え、小さな胸を痛めていることだろう…下記は、あるテレビ番組で紹介されていた、子どもへの対応についてのポイントだ。・子どもの感情を受け容れる。・あなたが悪かったのではないと伝える。・抱きしめるなどのスキンシップをはかる。このポイント、親の離婚を経験する子どもへの対応ポイントと同じだ。4 月 23 日から熊本に入り、GW も返上して活動している大崎が、日本リザルツが取り組むべき課題として「被さいした女性と子どもの精神的ケア」を挙げているが、東京の「らぽーる」、釜石も協力できて、リザルツならではの温かい支援活動ができるかもしれない・・・そんな風に思う。「恩送り」という言葉がある。受けた恩を返すことは「恩返し」だが、受けた恩を次に必要とする人に送ることで世の中をよくしていくことを「恩送り」というそうだ。今できることに思いを巡らせたいこどもの日だ。
5月6日	**熊本出張報告⑨** 今日は一日、熊本城温泉「城の湯」にて仕事をしている。熊本で行う二つの事業の申請書作成や、海外事業の書類準備など、やることはたくさん。せっかく宿に泊まっているのだから何度も温泉に入ってやろうと意気込んでいたが、一日二回が限界だった。お風呂って結構体力使う。夕食に、施設内の休憩所で海鮮ちゃんぽんをいただいた。エビ、タコ、野菜、お肉など具だくさん。別の日には、菊陽町で濃厚豚骨ラーメンも食べた。さすが本場は違う。個人的に今まで食べたラーメンの中でトップ 3 にランクインした。そういえば、熊本市の事務所の近くで食べたにゅうめん(温かいそうめん)も美味しかった。何だか麺類ばかりだが、他にも馬刺し、いきなり団子など熊本には美味しいものがたくさんある。市内の飲食店は営業再開した店も多い。ぜひ、一度熊本に足を運んでほしい。うまかもん食べて熊本を応援しよう!
5月8日	**インターンの白石君が熊本にやって来た** 本日の夕方、広い事務所で一人ぽつんと作業していると、大量の凧を片手にインターンの白石君がひょっこり現れた。リザルツの凧揚げ大使は、熊本でも凧を揚げてくれるそうだ。私の名刺やリザルツのパンフレットなど、お願いしていたものも持って来てくれて、とても助かった。初めての九州という事で、夜は一緒に熊本ラーメンを食べに行った。これで熊本事務所のスタッフの数が一気に 2 倍になった。フレッシュな若者の登場に、こちらも元気をもらえた。

5 月 8 日	**熊本出張報告①白石 ver** 本日から熊本入りをしている。今日の昼前に東京を出発し、午後 4 時ごろ熊本に無事到着した。今回は大学やその他の用事そっちのけ、熊本での支援の現状などを知りたい・見たい!という一心で熊本まで来てしまった。と言いつつ、新幹線内で大学の課題に追われていたが。到着しすぐに立派なオフィスに向かい、先に熊本入りしていたスタッフの方と合流し簡単に熊本の状況を聞き、全く熊本に土地勘など無いので、ここがどの辺りで、避難所はどこにあるのかなど、熊本を支援する上で基本になる情報を調べ上げた。大きなオフィスを独り占め。その後 19 時から熊本県青年会館で開催されている「火の国会議」に出席してきた。熊本県内外から多くの支援団体が集まり、活動内容の報告と、情報交換をしていた。熱い方々だ。その後は、男 2 人美味しく熊本ラーメンを頂いた!明日は、自転車に乗り、益城町を中心にぐるぐると見て回る。
5 月 9 日	**朝日新聞(5/9 朝刊)にイボンヌ・チャカチャカさんのメッセージ掲載される** 今朝(5 月 9 日)の朝日新聞朝刊に、イボンヌ・チャカチャカさんの寄稿文が掲載された。「2030-未来を作る-」の特集内。ビル&メリンダ・ゲイツ財団の特集だ。TICAD 開催日がどんどん近付いて来ている感じがする。
5 月 9 日	**熊本出張報告⑩** 本日、日本リザルツが熊本で行いたいと考えている事業の一つ「熊本地震で被さいした母親と子どものメンタルサポート及び生活再建支援事業」の活動申請書類を提出した。活動の柱となるのは①心理カウンセラー等による母子のメンタルサポート②ママ向け防災ハンドブックの作成・配布③専門家による無料相談会の 3 本だ。特に③の出張形式相談会は、リザルツが東日本大震災後に釜石で何度も行い、参加された方々から大変喜んでいただくことが出来た。①のメンタルサポートでは「離婚と親子の相談室　らぽーる」のノウハウも生かした活動にしていきたいと考えている。少しでも熊本の方々の力になれるよう、本事業承認のために一生懸命取り組む。
5 月 10 日	**熊本出張報告②白石 ver** 今日は、自転車に乗り熊本市内と益城町を中心に避難所を見て回った。益城町保健福祉センターでは音楽などの娯楽で被さい者の心を癒していた。益城町総合体育館裏ではごみの処理が追いついておらず、甚大な被害を痛感した。益城町総合体育館で、子どもたちの仲間に入れてもらい全力でサッカーをしてきた。久しぶりに汗を流して運動をした気がする。子どもたちは「早く学校に行って、友達に会いたい。」と話してくれた。益城町では 11 日から町内小中学校で授業再開だそう。そのあとは事務所に戻り、銭湯でゆっくりしてすぐ寝てしまった。
5 月 10 日	**熊本出張報告③白石 ver** 私が熊本入りをしてから、3 日連続で悪天候だ。そんな今日 1 日は、自分には何ができるのか深く考えてみることにした。先日訪問した益城町保健福祉センターには、陽気な歌を歌う方々がいらっしゃった。話を伺うと地元のミュージシャンの方で、「少しでも元気になってもらおうと避難所をまわり歌と笑顔を届けている」と満面の笑みで語っていた。そんな彼らのまわりには子どもたちのはしゃぎ声が響いていた。また、益城町総合体育館で出会った子どもたちは、小雨が降る中元気いっぱいサッカーボールを追いかけていた。彼らの笑顔を写真に収めることができなくて残念だ。そんな彼らも「早く学校に行ってみんなと会いたい」と語ってい

	た。さらに、本日(5 月 10 日)付の熊本日日新聞、どーん!と一面には学校再開を喜ぶ子どもたちの笑顔が輝いていた。笑顔は広がると実感した。無邪気な子どもたちの笑顔が熊本を明るくする。私にできることは、まずは自分が笑顔になること、次に誰かを笑顔にすること、だと思った。サッカーでもじゃんけんでも、凧揚げでも何でも。そう感じた。
5 月 10 日	**熊本出張報告⑪** 明日一度東京に戻ることになり、今日は午後から自転車でいろいろな所を回って来ようと決めていた。ところが朝からまさかのどしゃぶり。事務所でおとなしく仕事しようかとも思ったが、雨なんかに負けんばい、とカッパを着込んで出動した。自転車で長距離移動する日は、なぜか毎回大雨だ。まずは東に 10km、菊陽町にある Gavi 職員の方のお家へ。代表が先日熊本に来た時に持って来たお菓子やふりかけなどの食料を届けてきた。ずぶぬれの様子に驚かれたのか、温かい紅茶をいれていただき、すっかり話し込んでしまった。その後は一度、熊本市の事務所に戻り、今度は北に 5km、中央区の拠点避難所へ。 「男女共同参画センターはあもにい」と「サンライフ熊本」を訪問した。というのも、熊本市では一昨日から、180 近くある避難所を 20 カ所の拠点避難所へ集約するため、人々が移動を始めている。これを機に、避難所で暮らす人々の数や環境が大きく変わることもあり、これから事業を行うにあたって、現状を把握しておく必要がある。「はあもにい」では、以前別の場所でお会いした「熊本子ども・女性支援ネットワーク」の藤井館長と再会し、お話した。子育て中の世帯は、学校が始まってから自宅に戻ったご家族が多く、上記二カ所の避難所にはほとんどいなくなったとのこと。ただ、自宅に戻っても不安やストレスを抱えている女性やお子さんはたくさんいるので、そのような方々に、避難所の場所以外でどのようにアプローチするかが課題になる。
5 月 11 日	**親子断絶防止議員連盟総会** 「離婚と親子の相談室らぽーる」で日々ご相談を承っていても、ADR のお呼出状をお送りしていても、いつも思っていたことは「別居・離婚後、離れて暮らす親と子の面会交流を担保する法的な枠組みがあれば、もう一歩踏み込んだ対応もできるし、ADR も利用価値が高まるのに…」ということだ。それが、昨日、このようなニュースが日本を駆け巡った。「離婚時、親子の面会交流取り決め　超党派議連が法案骨子」真っ暗だったトンネルも、遠くに小さな、でも眩いばかりの強い光が見えて出口を示し始めた、そんな感じだろうか。議員連盟の先生方と、ご理解、ご協力くださいました皆さまに心より感謝したい。以下にこの判決についての当事者である父親の寄稿を記載する。『今回の判決のように、民法 766 条の改正趣旨に従い適切な判決が下されるだけで、多くの親子が救われる。また、これから起こりうる子どもの連れ去りや引き離しも未然に防げる。将来にわたり多くの命を救うことにもなる。ぜひ、そのように裁判所の運用が一刻も早く変わることを願いたい。同時に、社会の「常識」も変わっていってほしいと思う。夫婦の別れが親子の別れになってはいけない。離婚は仕方がない場合でも、できる限り、そのしわ寄せを子どもにいかせない努力が必要なのだと思う。ぜひ、この判決を「子の利益」とは何なのかを考える契機にしていただければと思う。』自身の人生を左右するほどの裁判だが、この父親はご自分だけでなく、両親の離婚に直面するすべての子どもと、ご自分と同じような境遇の親たちが救われることを考えておられるところを、心から尊敬する。
5 月 11 日	**つなみ募金** 本日、毎月恒例のつなみ募金を経産業省の前でいつもより少ない 3 名で行った。配布物は、5 月 22 日(日)13:00 から 15:00 に東京臨海広域防災公園で開催される凧揚げのパンフレット、リザルツと UNRWA のパンフレットの 3 種だ。

5 月 11 日	**熊本出張報告④白石 ver** 今日から熊本で 1 人だ。どんどん動いていこうと思う。そこで、朝一で熊本市内の災害ボランティアセンターの運営に飛び入りで参加してきた。快く受け入れてくださり、受付の仕事を与えていただいた。災害ボランティアセンターの受付は 9 時~11 時で、受付後、注意事項などのオリエンテーションを受けグループ分けを行い、ニーズと本人が希望するジャンルを照らし合わせて、実際に派遣という形になる。センター長の中川さんは「GW が終わり、がくっとボランティアの数が減った。今までは地元九州の学生を中心に全国から多くの方が来てくれていたが、今では一般の方が中心。」また、一緒に受付の業務をしていたボランティアセンター運営の方に聞くと、「運営に携わってくれる人も減ってしまった。今でも、全国各地の企業から派遣されてきた方が中心でやってくれているが、全く人手は足りていない。」ボランティアセンターで仲良くなった方々に、くまモン凧揚げ用紙にメッセージを書いていただいた。また、事務所に戻り凧揚げ準備をしていると続々と熊本の方が日本財団を訪れた。その後、事務所を訪れた、民間ボランティア団体、熊本有志の会の田中さまと出会い意気投合し、明日、熊本市内の避難所にて凧揚げをする。
5 月 12 日	**【結核ニュース】入院患者や看護師 16 人が結核集団感染茨城・古河** 茨城県古河市の病院で、16 人の集団感染が発生した。以下、NHK ニュースからの引用である。入院患者 3 人が結核を発症していたほか、同じ病棟の入院患者と看護師合わせて 13 人が感染していることが分かった。結核の集団感染が確認されたのは、古河市にある「小柳病院」。病院によると、去年 12 月、入院していた 70 代の男性が肺炎の疑いで別の病院で治療を受けたところ、結核を発症していることが分った。さらに、今年 2 月までには結核を発症した男性と同じ病棟に入院していた 60 代と 70 代の男性 2 人も結核を発症していると診断された。このため病院では、3 人と接触が疑われる入院患者と看護師など合わせて 47 人の検査を行った結果、30 代から 80 代の入院患者と看護師合わせて 13 人が、結核に感染していたそうだ。結核を発症した 3 人の男性は、いずれも回復に向かっているほか、感染した 13 人の発症は確認されていない。病院では、去年 12 月から発症が確認された病棟での入院患者の受け入れを中止するなど、感染の拡大防止に取り組んでいる。
5 月 12 日	**G7 サブシェルパ対話(栄養改善)** 日本リザルツでは開発途上国の栄養改善に向けて様々な活動を行っている。既に報告した 4 月 25 日の世界栄養報告 2015 セミナーに続き、4 月 28 日には伊勢志摩 G7 サミットに向けて「G7 に関する外務省と NGO との対話」の中で他団体と協力して、栄養改善に向けての提言活動を行った。外務省からは宇山智哉 経済局参事官(サブシェルパ)が出席され、提言を聞き、次のようなコメントを返してくださった。栄養は重要な課題として認識し、真剣に取り組む方向であることが示された。そして、G7 として各国が食料の安全保障や農業、栄養などへの取り組みに関する資金報告のフレームワークの構築の作業を年内に終わらせる予定であることが示された。日本として知見のある栄養改善に向けて、益々リーダーシップがとられる事が期待される。日本リザルツではこれからも子どもの命を奪う栄養不良をなくすための活動を続けていきたい。世界栄養報告 2015 セミナーで発表した提言を提出した。提言は 4 団体(特定非営利活動法人日本リザルツ、公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、特定非営利活動法人ワールド・ビジョ

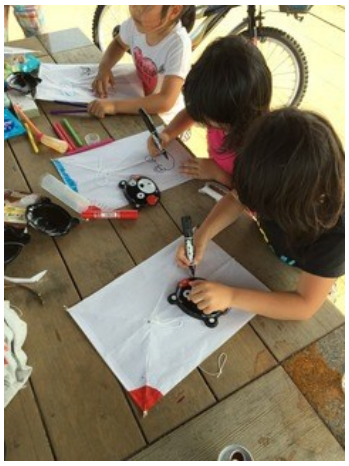
	ン・ジャパン、特定非営利活動法人　栄養不良対策ネットワーク)で行った。
5 月 12 日	**熊本出張報告⑤白石 ver** 本日は早朝、昨日から日本財団の熊本支援センター本部で出会い夜通し語り合った、熊本有志の会の方(熊本市在住)と熊本市内、益城、南阿蘇のニーズ調査しようと事務所を出ようとしていたところ、日本財団の現地調査をしに、早朝着の飛行機で東京から飛んできた方に「ご一緒してよろしいですか?」と引きとめられ、民間ボランィア団体・日本財団・日本リザルツの 3 名体制で、さまざまな避難所を回ってきた。写真は最も被がいが大きかった益城町木山地区だ。 もし、自分が…と考えると涙が出る。
5 月 13 日	**白須代表のネパール訪問** 5 月 7 日から 11 日まで代表の白須がネパールの現地調査に行ってきた。カトマンズから悪路を四輪駆動車で 6 時間走って到着したのはシンドゥパルチョーク郡のポテナムラング村。この村では昨年 4 月の地震で 311 人が亡くなり、ほぼ全ての学校が崩壊しましたが、アクセスが悪いせいもありこれまでほとんど支援が入っておらず、外国人が来ること自体とても珍しいことのようだった。訪問した学校では子どもたちがトタン屋根と竹でつくった校舎で勉強していた。基本的な学用品も不足しており、今回 600 人の小中学生にカトマンズで調達したノート、鉛筆、クレヨンを配布したところとても喜んでもらったそうだ。今はまだしも、気温が下がる冬にこのような校舎で子どもたちはどうやって勉強していくのだろうか…日本リザルツではどのような支援ができるのか、引き続き考えていく。
5 月 13 日	**熊本出張報告⑥白石 ver** 本日は、事務所から自転車で数分の市電通り沿い「水前寺公園」で、凧揚げをした。凧揚げできるような場所を求めて、自転車に乗って回っていたところ、素晴らしい景色の「水前寺成趣園」を発見。管理されている方に話を伺うと、「熊本城ほどではないが、被がいが深刻。正式な開園は 16 日から。これからは、熊本城に次ぐ、熊本の観光名所として頑張っていきたい。」と力強く語ってくださった。心洗われる素晴らしい景色なので、是非いらしてほしい!水前寺成趣園の大ファンで毎日来ているという、素敵なおばあちゃんとぐるーっとお話を伺いながら歩き、ボランティアで子どもたちを笑顔にしたい!と素直に話してみると「わざわざ東京から来てくれてありがとうねー」と言われ、本気で来てよかったと思った。その後、先ほどのおばあちゃんと水前寺成趣園の裏手にある「水前寺公園」で凧揚げをしてみた。私も釜石などで凧揚げをしてきたが、流石おばあちゃん、敵わなかった。そんなことをしていると、通学路ということもあり砂取小の 5 年生がどんどん集まり、総勢 25～30 名の大凧揚げ大会になっていた。私はなぜか「先生」と呼ばれ、一生懸命凧づくりのお手伝いをしていた。元気な子どもたちに圧倒されてしまいそうになったが、私も走り回り、凧揚げだけではなくサッカーも野球もしていた。明日朝は、筋肉痛に襲われそうだ。子どもたちに「明日も来るー?来てー!」と言われ、「明日も一緒に遊ぼう!」と約束した!
5 月 14 日	**朝日新聞「私の視点」(5/14 朝刊)に成瀬匡則さんの寄稿文掲載** 朝日新聞朝刊内の「私の視点」に、日本リザルツの白須が代表理事を務めるストップ結核パートナーシップ日本理事の成瀬匡則さんの寄稿文が掲載された。「結核のない世界へ　G7 で日本が対策主導を　成瀬匡則」結核は、誰にでも起こりうる病気であることが実体験に基づいて書かれている。後半では、いよいよ来週に迫った G7 についても触れられている。日本がグローバル・ヘルスのリーダーシップを発揮できるよう、

	G7 を成功させたい。
5 月 14 日	**熊本出張報告⑦白石 ver** 筋肉痛だけではなく日焼けもひどいことになりそうだ。今日も約束通り、10 時に水前寺公園に集合して凧揚げをしてきた。今日は熊本有志の会の方も一緒だった。今日の熊本は半袖でも暑いような気候だ。そんな熊本の野外で夕方 5 時までいたので腕時計がくっきり見えるような日焼けをしてしまった。土曜日なだけあってか、昨日のメンバーに加えて、お母さんお父さんと一緒に来た子どもたちがどんどん集まってきた。さらに、「ママ友から聞いたのです。凧揚げさせてください。」とママ友会が来てくださり、昨日よりも大盛況。子どもたちがワイワイはしゃいでいる中で、ママ友会のみなさんともお話ができた。「熊本地震は、子どもたちにとって一生心に残る出来事だと思います。」「外で遊ぶ機会は震災後かなり減った。やっぱり心配です。」という声が多くあった。今日は「ありがとう。」とたくさん言われ、心がカーッと熱くなった。さらには、冷たい飲み物やお菓子など差し入れも頂き、さらにカーッと熱く…がんばれ熊本、がんばれおれのふるさとだ。強いお言葉…暑くて、最終的には…子どもたちとも打ち解け、ママ友会の皆様ともお知り合いになれたのに、明日帰らなければいけない…また絶対に戻ってくる!明日は別の場所で凧揚げを試み、東京へ戻る。ラスト 1 日、突っ走る。
5 月 15 日	**再び熊本入り** 本日は、水に濡れて壊れてしまった電話の修理が完了したということで、開店と同時に修理センターへ取りに行った。なんでも中を開けたら水滴びっちょりでサビついていたのことだ。雨の中で使うのは絶対止めよう。電話を回収したら、そのまま新幹線に乗って熊本へ。熊本に着いたらまず不動産屋に寄って、アパートの契約を行った。部屋は日本財団の事務所から徒歩 10 分と好立地だ。インターネット込みの契約なのに LAN ケーブルを差し込む穴がない、電球が切れてつかないなど、入居早々いろいろとトラブルがあったが、寝具など必要最低限のものを徐々に揃えながら、ここを拠点に頑張りたい。
5 月 16 日	**日経新聞(5/15 朝刊)に「日経アジア感染症会議」のまとめ記事掲載** 日経新聞(5/15 朝刊)に、先月 4 月 22 日、23 日に開催された「第 3 回日経アジア感染症会議」のまとめ記事が出ていた。今回の声明のポイントを抜粋する。【多剤耐性結核】・診断薬、診断装置、治療薬をまとめて海外に提供する・より多くの国の政府と協議し、技術を普及させる・開発途上国向けに、製品のコスト削減努力を行う。【エボラ出血熱】・治療薬のさらなる臨床研究、データ収集が必要・診断装置の配備や診断薬、治療薬の備蓄が重要・強い毒性を持ったウィルスに対する国の研究体制の見直し。【官民協力で取り組む課題】・日本で症例の少ない感染症の臨床研究センターをアジアに設置・物流や情報産業など新たな産業の、感染症対策への参画・次回以降の会議で、日本の技術の普及に向けた提案を進める。エボラ対策と言えば、リザルツもキャンペーン事務局を務める Gavi。その Gavi のセス・バークレー事務局長の言葉も掲載されていたので、こちらに紹介させていただく。「感染症対策の官民協力プロジェクトを進める資金を集めるには、特定の基金に依存するのではなく、『資金調達を多様化する必要がある』と指摘。途上国には治療薬やワクチンを保存できないところも多く、『製品の維持・管理コストも含めて開発を進める必要がある』と述べた」コールドチェーンの問題もある…解決に向かいますように…また、GHIT の B・T・スリングスビー専務理事の「官民協力プロジェクトには基金から資金が供給されているが、ほんの一部にすぎない。製品開発の 8 割は政府からきている。日本は持続可能な環境を作り、グローバルに製品を作り出していく必要がある」という言葉も…政府と民間、大学などの研究所、全てのパートナーが一番いい形で力を発揮できる体制強化ができるように。

5 月 16 日	**熊本から** 熊本で被さいした母親と子どものメンタルサポート事業を行うには、行政、NPO など様々な団体との連携が不可欠になる。そこで本日は、熊本市役所の子ども支援課、保育幼稚園課、熊本県庁の健康福祉政策課、医療政策課、熊本市児童福祉相談所、日本赤十字社熊本支部など関連セクターの方々と連絡を取り、カウンセリングの巡回受け入れや、専門家の派遣についてご協力をお願いした。まだまだどの部署も慌ただしい様子だが、事業計画の中身についてお話をすると親身に耳を傾けて対応してくださり、「その情報が欲しいならここにも連絡してみたら?」などと、どんどん別の部署や団体をご紹介いただけた。地震後の子どもの変調が最近メディアで取りあげられることが多くなったが、子どもと向き合うお母さんのストレスも心配だ。
5 月 17 日	**青森の東奥日報(5/10 朝刊)に Gavi 理事長のオコンジョさんインタビューが掲載** 青森の東奥日報(5/10 朝刊)に、ンゴジ・オコンジョ-イウェアラ Gavi ワクチンアライアンス理事長のインタビューが掲載された。設立からこれまで、700 万人の命を救ってきた Gavi は、2020 年までにさらに 3 億人にワクチンを届ける計画だ。国際協力の視点からも、日本政府がどれほどの支援をしていくのか、世界中から期待が寄せられている。
5 月 17 日	**熊本から** 震災後、熊本県内で被災された方の精神ケア事業をメインで行っている団体は 2 つある。一つは日本赤十字社熊本県支部の心のケアチーム、もう一つは災害派遣精神医療チーム(DPAT)だ。本日はその両団体の代表の方とお会いし、活動現場に重なりがないかといった確認や、連携の仕方などについて話し合ってきた。日本赤十字社の心のケアチームは、益城町などの避難所を回ってカウンセリングを行なっている。熊本市内の子育て支援センターで事業を行うことをお話すると、学校にはカウンセラーを派遣する予定があるが、就学前の子どものケアについてはカバー出来ていない。特に母子が一緒にケアを受けることはとても大切なのでぜひやって欲しい、と力強い言葉をいただいた。他にも、アートセラピーとうたって無理やり子どもに絵を描かせ、逆にストレスを与えてしまったケースもあるなど、カウンセリングの際の注意点などについても話し合うことが出来た。その場で DPAT の方にも電話、紹介していただき、日本赤十字社の近くにある熊本県精神保健福祉センターへと向かった。DPAT は東日本大震災を機に発足したグループで、日本全国の精神科の医師たちが被さい地に駆けつけ、数日ごとに交代しながら心のケア事業を行っている。ただ、それぞれの医師は自分の病院での仕事もあるため、長期スパンでのケアは難しく、そこをリザルツの事業でカバーしてほしい。また、カウンセリングを行った際に本格的な診察が必要となった場合は、DPAT の医師に繋げてもらって構わない、等といったフォローアップに関する連携の仕方について話すことが出来た。両団体からは本事業に強く賛同していただいた上、それぞれの団体が得意とする分野で協力しながら事業を行っていくことが決まり、心強い応援団が出来た。
5 月 18 日	**柴山補佐官訪問** 5 月 16 日午後、内閣総理大臣補佐官　柴山昌彦　衆議院議員に栄養 3 銃士で面会した。今回は、伊勢志摩サミットを前に、栄養改善の取り組み促進について 2 つの報告をした。一つ目は、栄養に関する国家戦略の策定についてだ。「国際母子栄養改善議員連盟」のもとにつくられた、行政、国連機関、研究機関、NGO など栄養に関する専門家による「国際母子栄養改善国家戦略タスクフォース」が作成した、「国際栄養課題に関する国家戦略(案)」を説明した。日本政府として栄養改善に向けた、具体的な方針作成を促すものだ。二つ目は、4 月 25 日に開催した世界栄養報告書 2015 セミナーの報告。同セミナーでは栄養関係の 200 名近い参加があったこと、栄養改善取り組みへの機運が高まっていること等を報告した。柴山補佐官からは、栄養に関する国家戦略案に基づく具体的なアクションについて、全容を把握すべく、積極的な質問をいただいた。私たちが提出した資料をもとに検討していくというコメントをいただけた。また、G7 サミットにおいては保健も主要課題となるため、その中でも栄養についても入れていくように努

	めたいとコメントされた。サミットではSDGsについてもしっかり取り組みたいとのご意向が示された。来週には伊勢志摩 G7 サミットが開催される。日本政府の取り組みを期待したい。
5 月 18 日	**口腔ケアと感染症について** 熊本の地震から、1 か月が経った。そんな中、先週、熊本で活動中の大崎さんが東京に一瞬戻り、また熊本にトンボ帰りした。現地の皆さんが困っていること、今後の支援体制について、あーでもない・こーでもないと意見交換をしていたところ、「これは…」という現地情報があった。口腔ケアの怠りが原因で起こる感染症や肺炎の蔓延だ。 【口腔ケアの怠りが感染症や肺炎につながるメカニズム】 水不足などの事情で歯磨きがしにくく、衛生状況が悪化 ↓ 口の中が汚れ、細菌が増殖する ↓ 口の中の汚れ・細菌が唾液などと一緒に気管に入る ↓ 「誤嚥(ごえん)性肺炎」や感染症等を発症する 予防のためには、とにかく口の中の細菌を増やさないことが大事とのことだ。歯ブラシなど口腔(こうくう)ケア用品がない場合、ぬれたティッシュやガーゼを指に巻いて歯や入れ歯を磨くのも一つの手だ。断水している場合は、ウエットティッシュがあるといい。のどあめで口を適度に運動させるのも効果的だそうだ。震災で抵抗力が落ちている中で、口腔ケアが不十分になれば、震災関連死につながる恐れがある。口腔ケアもしっかりできるように何か働きかけができたらいいなと思う。
5 月 18 日	**熊本から** 今日は熊本市子ども支援課の協力のもと、被さいされた母子の精神ケア事業を実施予定の「熊本市総合子育て支援センター」を訪れ、乃美所長と打合せを行ってきた。子育て支援センターは、「親と子がほっと過ごせるための居場所」をコンセプトに、プレイルームなどお子さんを安心して遊ばせられる環境が整っている。熊本市内には 20 ヶ所の子育て支援センターがあるが、中央区にあるこのセンターは規模が一番大きく、他の区からも多くの親子、多い時には一日 50 組ほどの方々が来られるとのこと。みんな就学前の 0~5 歳の乳幼児だが、震災直後はいつもより異常に怖がったり、泣いたりする子が多かったそうだ。親御さんの方も、余震も少なくなってきて日常は戻ってきているが、まだ気持ちの整理がついておらず、一人で悩みを抱えている母親は多いのではないか、このタイミングで心のケアを行うのはとても大切だとおっしゃっていた。また、職員の方も益城で被さいされた方がおられるそうで、親御さんだけではなく、子どもと関わるスタッフのケアも同時に必要だと感じた。プライバシーを守るため、お子さんやお母さんたちはほとんど写していないが、このときも 10 組ほどの親子がいた。所長さんと話し合う中でいくつか課題も見えてきたので、柔軟に対応しながら、より充実したサポート事業になるよう進めていく。
5 月 19 日	**熊本から** 本日、精神保健福祉士の入江様とお会いし、子育て支援センターにおける母子の精神ケア事業について打ち合わせを行った。入江様は特定非営利活動法人くまもとスローワーク・スクールの代表を務めているほか、福岡市の療養所でも心理士としてご活躍されている。すでに益城町で母子のカウンセリング等を行われていることで、熊本市内で行う本事業にもご協力いただけることになった。学校が始まり今は少し落ち着いているが、母子の精神状態については、夏休みに入ってからを一番危惧されていた。子育て支援センターに来られる方には、乳幼児のお子さんだけではなく小学生の兄弟がいる方も多くいらっしゃる。学校が休

	みの間、家族全体のケアを担うお母さんの負担が一気に増え、子どもも家でストレスを発散することになり、家庭内でぶつかり合うことが増えるのではないかとおっしゃっていた。そのほかにも、普段子ども達と関わっているスタッフの方と定期的にミーティングを持ち、まずは職員としっかりした信頼関係を築いたうえで、密接に連携していくことの重要性など、事業を成功させるためのアドバイスをたくさんいただいた。連日、新聞には「子どものケア」に関する記事が載っている。ただ、子どもだけではなく、子どもと接する先生や親のケアがこれからとても重要だ。
5 月 20 日	**「女性=健康」プロジェクト　第 3 回シンポジウム「女性のための予防医療」** 「女性=健康」プロジェクト　第 3 回シンポジウム「女性のための予防医療」が 5 月 18 日にザ・プリンス　パークタワー東京にて開催されたので参加した。第 43 代アメリカ合衆国大統領のジョージ・W・ブッシュ氏が基調講演者だったので、不謹慎ですが、本人のお顔を拝見したいという不純な動機もあった。とても警備が厳重だったので少々驚いた。内容は端的にいうと子宮頸がんワクチンの普及促進を目的としたものだった。講演者はお二人で、コーネル大学医学部長で、次期ダナ・ファーバーがん研究所所長・ハーバード大学医学大学院教授のローリーH・グリムシャーさんの「Women's Health : Preventing Cervical Cancer」と、慶應義塾大学名誉教授、内閣官房参与の吉村泰典氏の「女性の健康の包括的支援」だった。その後のパネルディスカッションでは、子宮頸がんの体験者の方も登壇された。日本では子宮頸がんワクチンはまだ普及しているとは言えないが、世界各国ではかなり普及しているとの説明があった。
5 月 21 日	**熊本から** 今日の夜、熊本市内の保育園にて、こころつなぐ「よか隊ネット」全体会議に参加した。よか隊ネットは、「最も小さくされた人々に偏った支援を行う」ことを理念に熊本県内外の団体で組織された民間ネットワークだ。よか隊ネットでは震災後、車中泊をしている人に対して弁護士や医師、カウンセラー等による相談会を実施してきた。主に子育て世帯を対象にしたリザルツの専門家相談会とも共通する部分が多いということで、昨日入江様に紹介していただき、参加する運びとなった。よか隊ネットでは今も車中泊している人々に対して夜回りや声かけを行っている。家に帰るのは怖い、でもテントで寝るのも性犯罪の可能性を考えると怖い、ということで大きなストレスを抱えながらも、仕方なく車で寝泊まりしている女性が多いそうだ。会議には 40 名以上の方々が参加していたが、その中には「寺子屋カフェ」を運営している方、心理カウンセラーとしてこどものメンタルサポートを行っている方など母子の支援に特化している方も多くいらした。リザルツの事業についてお話すると共感いただき、事業実施に向けて、また連携の輪が広がった。
5 月 22 日	**G7 サミットに向け、官邸へ「国際連帯税実現」を申し入れる＞国際連帯税議連** 19 日午前 11 時、国際連帯税創設を求める議員連盟は総理官邸におもむき「G7 伊勢志摩サミットにおいて、安倍総理より、我が国として航空券連帯・貢献税の導入を実施することを宣言せよ」と申し入れた。議連側は以下の通り、超党派で参加した。衛藤征士郎会長(衆、自民)、藤田幸久会長代行(参、民進)、斉藤鉄夫会長代理(衆、公明)、逢沢一郎副会長(衆、自民)、大門実紀史副会長(参、共産)、鈴木克昌副会長(衆、民進)、谷合正明常任幹事(参、公明)、小熊慎司事務局次長(衆、改革)　官邸側は、菅官房長官が対応した。申し入れは、冒頭衛藤会長から、「安倍総理にも別の機会に国際連帯税の話をしたら関心をお持ちだった」との説明があった。また、藤田会長代行からは、(参議院)ODA 特別委員会の決議に国際連帯税の文言が入ったことを説明した。これに対し、菅長官は「タイムリーな内容で(申し入れがあったことは)承知した」との答えを寄せた。

5 月 22 日	**世界凧揚げ交流会 in 熊本**  東京の有明で世界凧揚げ交流会が行われていた頃・・・熊本の益城町でも凧揚げを行っていた。会場は、今も多くの方が避難されている益城町総合公園。最初は公園にはほとんど人がいなかったが、一人寂しく凧を揚げていると、どんどん子ども達が集まってきた。くまモンはやはり人気だ。くまもんのお面を二つ付けて、さらにくまモンの絵をお願いされたので描いてあげた。こちらは凧にタコの絵も。最初は風が吹かず、なかなか上手く揚がらなかった。途中から風が吹いてきて、あちこちで凧が揚がり始める。この男の子はものすごーく高く揚げていた。上手。女の子グループは、なぜかみんな滑り台の上で凧を揚げたがる。そして案の定、何度も糸が絡まっていた。一緒に遊んでいると、ある男の子が「おおまさちゃん」という時代劇に出てきそうなニックネームをつけてくれた。子ども達は入れ替わり立ち替わり途切れることなくやって来て、総勢 40 人以上の子ども達が凧揚げを楽しんだ。「お兄ちゃん、これどうやって作るの~!?」「お兄ちゃん、糸つけて~!」「お兄ちゃん、キティちゃんの絵を描いて~!」「お兄ちゃん、凧が木にひっかかったから取って~!」「お兄ちゃん、だっこして~!」「お兄ちゃん、次はドラえもん描いて~!」「お゛に゛い゛ちゃん~、糸絡まった~(泣)」と揉みくちゃにされながらも楽しい時間を過ごし、最初は 2 時間のつもりだった凧揚げも、気付いたら 4 時間以上経っていた。子ども達の笑顔に、たくさんの元気をもらった日曜の午後だった。
5 月 23 日	**第 10 回事例勉強会** 2015 年 7 月から始めた「らぽーる」の事例勉強会も、5 月 16 日(月)に 10 回目となる。毎回代わり映えしないように想像されるかもしれないが、内容は毎回熱く、新しく、チャレンジングなお話合いをしている。今回も、日本初の画期的な取り組みについて議論されるシーンがあった。
5 月 23 日	**G7 伊勢志摩サミットに向けた凧揚げ交流会 in 有明(5/22)** 5 月 26 日、27 日に開催される「G7 伊勢志摩サミット」に向けて、5 月 22 日に有明東京臨海広域防災公園で行われた「世界公園凧揚げ交流会」前日の準備の様子を報告する。参加者予定者が 350 人を超えているので、準備する凧はなんと 360 個。途方に暮れそうな数だが、メンバー一同、一致団結して凧作りをがんばった。今回の凧の柄の内容は、G7 に参加する国の首相・大統領(安倍晋三首相、オバマ大統領他)・国旗、さらに、くまモンや、日本リザルツと関係の深いGGG+、UNRWA、Gavi、イボンヌ・チャカチャカさん、栄養改善ロゴなど盛りだくさん。中腰での作業のため、全員ちょっと腰を痛めつつ、着実に作り上げた。そしてかわいらしい看板も!G7&今回参加してくださったネパール等各国の凧を、くまモンが揚げているのがポイントだ。一か月ほど前に会場の東京臨海広域防災公園へ下見に行ったのだが、だたっ広く風も程よく吹くそうで、凧揚げにピッタリの会場だ。当日の参加者はなんと 350 名以上だった。準備は大変だったが、皆さまの笑顔を間近で見ることができて、「頑張ってよかった…」と思う。私はリザルツの凧揚げ大使として、3 月には釜石、そしてつい 1 週間前までは熊本で凧を大空に揚げてきた。凧揚げを通じて、「笑顔」が広がる。大空を見上げ「人」を想う。難しい顔をした大人も「子ども」

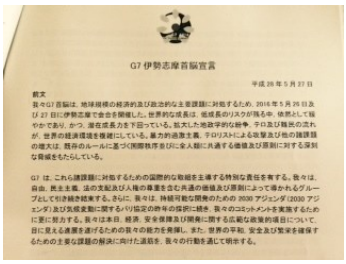
	に戻れる。凧に込める気持ちは人それぞれ(被さい地支援、G7 に向けて、防さい…)でもいいのだ。笑いあって、助け合って、凧を揚げて。熊本でも釜石でも有明でも、子どもたちの笑顔はかけがえのない宝物だ。そしてそれを想う、ご両親の気持ちもどこでも同じだと感じた。参加してくれた方々全員が笑顔になり、その笑顔が輪になって広がり、「ひと」と「ひと」がつながっていく。そんな場になっていたのであれば、私は最高の気分だ。改めて参加してくれた皆さまにお礼を申し上げたい。
5 月 24 日	**凧で栄養改善** 5月22日、凧揚げ大会。私も地震のあったネパールの国旗の上に栄養改善と書いた凧を揚げた。今年、何回か凧揚げをする機会があって、できると思った。最初は地上でぐるぐる回り、中々揚がってくれなかった。風はほどほどにあったものの、この形の凧には技がいるんだとあきらめかけた。芝生に座って休み、もう一度挑戦した。やはり同じくぐるぐる回って、落ちてしまう。周りの人はかなり高く上がり、安定して凧揚げを楽しんでいた。いつのまにかかなり遠くまで行き、芝生で横になって空をながめた。そして、揚げてみると上空まで揚がった。あきらめなければできるんだと思った。3~4 歳の子どもがとても高く凧を揚げていた。動き回るうちに凧は地上に落ちた。しかし、また歩き回っているうちに、凧は上空に安定して揚がっていた。すごいと思った。その後、もう一度揚げてみたら、どんどん揚がって写真も撮ることができた。風を読むことは大切。あと、あきらめないことも大切だと思った。こどもの心も大切かもしれない。栄養改善もきっと世界で進んでいく。
5 月 24 日	**今、ネパールが熱い!ネパール視察の旅第二弾へ…** 代表の白須が、明日から 30 日までネパールに向かう。ネパール大地震から 1 年以上が経つ。地域によって支援のレベルに大きな開きがあり、今回は詳細な状況把握のための視察だ。…ちなみにさすがの代表。視察だけじゃ終わらない。有明で大掛かりな凧揚げ交流会をしたばかりなのにネパールの現地(しかも複数箇所)でも凧揚げをするため、スーツケースいっぱいに詰め込んだ 160 個(!)の凧を持って行くという。それ以外にも子どもたちのため、大量のお菓子を持って行くという。
5 月 24 日	**熊本の口腔ケア事業** 最近、熊本では口腔ケアの重要性を指摘する新聞記事が増えている。 震災後、歯磨きなどの口のケアが十分に行えなかったことで、お年寄りの肺炎が急増しているのだ。日本リザルツではこの問題に対応するため、オーラルピースという歯磨きジェルを広める事業を実施する。オーラルピースは水がなくても使うことが出来、植物由来の成分で出来ているので飲み込んでも安心だ。歯磨き剤というよりは、食べられる口腔消毒剤だ。これを福祉避難所で配布するだけではなく、熊本でひとり暮らしされているお年寄りや、障害を持った方々を地元の団体と一緒に個別訪問してお渡ししたり、熊本歯科衛生士会と連携して口腔ケア講習会を行ったりするなど、6 月初めの事業開始に向けて、調整を進めている。 熊本県内 災害拠点病院 肺炎 地震後に急増 避難長期化 口腔ケア保てず
5 月 25 日	**PEF(パンデミック緊急ファシリティ)創設** 伊勢志摩サミットでまた新たに、感染症関係の機関の創設が決まりそうだ。それが P…Pandemic E…Emergency F…FinancingFacility 日本語でいうと、『パンデミック緊急ファシリティ』。こちらについて紐解いていく。・創設の背景：2013 年末に発生したエボラ出血熱の初期の封じ込め失敗による大流行。国際社会の連携の遅れ、流行国の保健制度の弱さ等が原因であったため、これを解決する対策が必要とされた。・創設の目的：エボラ等の緊急対応な必要な感染症の発生の際、医療チームを迅速に国際展開できる体制にする。そのために資金面の備えを充実させる。 ・仕組み：各国が一定額の保険料を支払う→世界銀行が運用→危険な感染症が発生→国際機関や NGO などを通じ、医療チームの緊急派遣に関わる費用を即座に支援。

	・関連機関：世界銀行、WHO、各国政府、再保険会社、NGO ほか。 ・資金規模：5 億ドル(約 550 億円)。 ・日本の対応：3 年間で 5000 万ドルの拠出を表明。 今、もし空気感染で広まる致死力の高い感染症などが発生してしまったら、、250 日以内に 3,300 万人以上の死者が出て、世界の GDP の 4.8%に相当する、3 兆 6,000 億ドル以上の経済的損害をもたらすとの予測もある。恐ろしい事だ。この機関の創設によって国際連携が強化され、次のパンデミック封じ込めがスムーズにいくことを願う。
5 月 25 日	**熊本日日新聞が届いた。** 5月22日の「世界凧揚げ交流会」を取材に来てくださり、23日の朝刊に記事を書いてくださった、熊本日日新聞の岡恭子記者が、新聞を送ってくださった。熊本日日新聞はカラフルで、4コマ漫画が"くまモン"だったりして、新鮮で読みごたえがある。皆さん、くまモンがスクラッチくじを削ったり、泣いたりする姿をご覧になったことはあるだろうか?私は、初めて見た。これからの日本リザルツの熊本での取り組みについても、ぜひ熊本日日新聞で取り上げてほしい。
5 月 25 日	**口腔ケア&母子メンタルサポート打ち合わせ** 本日の午前中は、地元の歯科医師の方にお会いし、口腔ケアについて面白い話を聞いてきた。口の中を綺麗に保つには、正しい呼吸法、特に舌の位置が大切だ。ポイントは二つだそうだ。①普段から鼻呼吸で、舌は上顎に付いている。②唾をのみ込むときは奥歯を噛みしめている。普段舌をどこに置いているかなんて、なかなか意識しないものだ。口呼吸に頼っていると、悪い意味で頭寒足熱になってしまって免疫力が下がり、ストレスが溜まりやすく、アトピーや大腸炎、うつ病にもなりやすくなってしまうそうだ。しかも、震災後はストレスやパニックで口呼吸が多くなるため、意識して直すことが重要だ。この歯科医師さんはリザルツが行う口腔ケア事業にご協力いただけるということで、仕事がお休みの日に配布先に一緒に来ていただき、舌の筋トレ方法などを指導していただけることになった。ありがとうございます!午後は、リザルツのもう一方の事業、母子のメンタルサポートの件で、カウンセラーの方と具体的な派遣日について打合せを行った。この方は小児科医の先生や精神科の先生、臨床心理士など、あらゆる人々のネットワークをお持ちで、本事業を全面的にサポートしていただけるとのこと。就学前の幼い子どもは、震災直後は平気そうに見えても、2~3 年経った頃突然 PTSD が発症することもあるそうだ。そうしたケースに備えて十分なケアや予防が出来るよう、周りの方にお声がけいただき、最高の専門家達を集めてくださった。地元で長く活動されている多くの NPO や専門家の方々に支えていただき、本当に頭が上がらない。力を合わせて、素晴らしい事業にしていきたいと思う。
5 月 25 日	**ネパール報告①** 本日はクアラルンプールにいる。昼前成田発のクアラルンプール行きの飛行機に乗り込み、7 時間後しっかりとクアラルンプールに到着した。クアラルンプールでは陽気なキャラクターがお出迎えしてくれた。数時間後にはネパール、カトマンズに到着する。明日から本格的にネパール視察がスタートする。
5 月 26 日	**熊本城緊急工事始まる** 震災で大きな被害を受けた熊本城だが、今後の雨や地震で石垣が再び崩落しないよう、昨日から緊急対策工事が始まった。熊本に来て多くの方とお会いしたが、皆さん口々に「熊本のシンボルが壊れてしまったのは、熊本そのものが失われてしまったようで辛い」とおっしゃる。熊本市では早急に対応するため、熊本城復元に向けたプロジェクトチームの設立を発表したが、石垣だけでも 53 カ所の損壊が見られており、調査には膨大な時間がかかりそうだ。復旧にかかる総費用は 200 億円以上で、20~30 年かかると言われている。今日は菊陽町にある歯科医師の方にお会いしてきたが、帰りに県庁前を通ると、熊本城

	の模型を発見した。ミニチュアサイズだがとても精巧で立派だ。みんなの心の拠り所となっている熊本城。一日も早い復旧を願っている。
5 月 26 日	**ネパール報告②** 朝早くに起き、今回ガイドをしてくださるナビンさんと少し打ち合わせを行った。とても日本語が堪能で、頼りになる方だ。我々が泊まっている Fuji Hotel は観光客が多いタメル地区にあり、この周辺で日用品は全て揃う。すぐに昨晩下調べをしていた JICA ネパール事務所へ。ネパールにおける JICA の取り組みや、ネパール駐在だからこそ分かることまで教えていただいた。ホテルがあるタメル地区から歩いて 15~20 分のところにある。その帰り、子どもたちに配るためのネパール菓子の買い出し。ビスケットを大量購入した。その後は、自転車をレンタルしてカトマンズ周辺を見て回ろうと思ったが、自転車を借りることができず、ひたすら歩き回った。迷子になりながらも、「人より神様のほうが多く住む街」と言われるだけあって、きらびやかな寺院や記念碑がたくさんあった。しかし、地震の影響なのか寺院の一部や塀が崩れていた。ただ人は優しく、温かいカトマンズは魅力あふれる街だ。興味深くて写真を撮っていると地元の方が「それはこの壁の神様だよ」と教えてくれた。そしてやっとの思いでホテル周辺に着き、小腹が空いていたので近くのレストランへ。餃子のような形の"Momo"をいただいた。たった 80 円でお腹いっぱい食べられるのも魅力の一つだ。
5 月 27 日	**親子断絶防止議員連盟総会** 5 月 26 日(金)衆議院第一議員会館の会議室にて、親子断絶防止議員連盟総会が開催された。冒頭に、議連の会長の保岡興治先生から、「前回の総会において出されたご意見について取り入れられるものは取り入れ、現時点において条文に入れられなくても運用において工夫したり、見直しの際に検討していきたい。今後、法案の中に記載された国の施策について具体化していく必要があるが、各省庁におかれても、積極的に意見を出してほしい」と胸震えるご挨拶があった。続いて、立法化に向けての検討状況について衆議院法制局からの報告があった。次に、離婚と子どもに関する行政サービスについて、2 年前から先駆的な取り組みをすすめる明石市の具体的施策について、泉房穂市長よりお話を伺った。お話を伺うたびに、新しいチャレンジが始まっていて、それらの施策が市民から支持されていることは、3 年連続人口が増加していることからも分かる。泉市長が繰り返しおっしゃった、「難しいことではありません。どこの自治体でもできることです」というお言葉、それから、「中学校の授業の一環で結婚・離婚をとりあげるなど、人が生きていく上ではいろいろあるので、離婚をタブー視せず直視して早い段階から取り組んでいきたい」などのお話に、頭だけでなく全身で頷きながら拝聴した。日本でも、これだけ離婚が増えているのだから、タブー視するよりも、子どもは両親が離婚していることをキャラクターの一部分として認め、堂々としていられるような、そんな環境や空気感を大人は作ってあげなくてはいけないと思う。そのためには、離婚後も両方の親からの愛情と養育を受けられて、子どもが不安でなく、情緒が安定している状態を作らなくてはならない。明石市の「こどもと親の交流ノート」の表紙をめくると、子どもの写真を貼るスペースがあり、その下にはこんなメッセージが書いてある。『あなたが、いちばん、大切です。お母さんとお父さんは、おなじ「おうち」にいないけれどお母さんもお父さんも、あなたのことが「大好き」。これまでも、これからも、ずっと、ずっと』。上記を実現するのにとても有効だ。本当に、ひとつひとつよく考えられている。議連総会に話を戻すと、泉市長のプレゼンテーションの後は、参加された国会議員の先生方からのたくさんの質問が続き、親子断絶防止法が成立したら、行政サービスはどうなっていくのかを具体的に描いてみることができ、わくわくしてきた。

5 月 28 日	**ネパール報告③** 本日は、ネパールのシンドゥパルチョーク郡ポテナムラング村に行ってきた。ネパールの方でも行ったことがある方があまりいない、カトマンズから山を 2、3 つこえた僻地だ。そこには満面の笑みの子どもたちと、優しい家族の絆があった。道中にも地震の爪痕が残っていた。学校に着いた時には、朝礼中。全校生徒は 650 名。校舎は建設中だった。日本からもお菓子を持って行った。先生の合図で一斉に凧揚げ!私も一緒に走り回った。笑顔いっぱい。「子どもたちに世界に飛び出してほしいので図書室をつくりたい。」と先生が語ってくれた。山奥の村で、カトマンズからも往復 10 時間。本を通じて世界を見てほしい。そんな切実な思いに感動した。載せきれていない写真もいっぱいある。ここまで来るには、ジェットコースターのような車に揺られること 5 時間、往復 10 時間もかかり、車内で何かにつかまっていないと飛んでいきそうだった。そんな道無き道のさきにある、ポテナムラング村にある学校での凧揚げ。一斉に凧を揚げ、みんなと一緒に走り回ったと同時に支援がここまで届いていないと身をもって知ることができた。帰国次第、ネパールで感じたことをまとめたい。
5 月 29 日	**母子のメンタルサポート事業承認** とうとう「熊本市内で被さいした母親と子どものメンタルサポート及び生活再建支援事業」の承認が下りた!そこで昨日は、子育て支援センターの所長さんとカウンセラーの方と 3 人で打ち合わせを行い、派遣日程や実際にカウンセリングを行うメンバーについて、話し合いをした。6 月 1 日から熊本市総合子育て支援センターで、精神保健福祉士や臨床心理士、小児科医など 2 人体制での巡回が始まり、子育て中のお母さん、お父さんやお子さんのメンタルサポートを行っていく。
5 月 29 日	**ネパール報告④** 28 日は多くの団体が支援を行う、シンドゥパルチョーク郡サノシルバリ地域・チョータラ周辺を視察してきた。いろんなところに地震の爪痕があった。優しいガイドの Nabin さんとサノシルバリ周辺に到着。ドイツが支援しているという学校があったが、完成まではまだまだ時間がかかりそうだ。日本からの団体の支援でできたというミーティングルームでサノシルバリの責任者の方に話を伺う。この地域は UNDP、Unicef、中国政府関係、韓国政府関係、ドイツ政府関係、JICA、Save the Children、World Vision、USAID、Peace Wind Japan などからの支援があった。多くの支援によって、トタン屋根、ヘルスセンター、VDC、ミーティングルームなどが建設されていた。次に、大規模な水道インフラ設備を行う World Vision のオフィスにてネパール国内で問題になっているトゥインについての話を聞いた。トゥインは吊り橋がない地域にある川や谷を超えるためにあるロープウェイのようなものだ。トゥインによる事故が多く、多くの人が命を落としている。特に地震後、吊り橋が壊れてしまい、応急処置でトゥインが急増。トゥインを使って通学する子どもたちもいる。これらの事態を受けて首相が「トゥイン 0」宣言をしているが、未だ改善は全くされていない。

5 月 29 日	**ネパール報告⑤** 最終日である 29 日は、ガイドの Nabin さんが関わっている、カトマンズにある Harima Educationa lSupport Center で凧揚げを行ってきた。この学校には、周辺に住む公立学校に通えない子どもたちが 15 人通っている。小学校に通えるよう、英語・数学・歴史などの一般教養の授業を 3 名の先生方で行っている。また、子どもたちのために洋服や文房具を日本人からの支援でまかなっている。日本からの本や、文房具がたくさんあった。先生方は公立学校のお給料の 5 分の 1 程度、ほぼボランティアで働いている。この活動は 2007 年に開始。9 年間で 170 名以上の子どもたちを公立学校に送り出している。もちろん、公立学校に通うための制服や教科書、授業料なども負担している。ここでも、無邪気な子どもたちの笑顔を見ることができた。
5 月 30 日	**悲しいニュース(ガザ)** ガザから悲しいニュースが届いた。市民の間で、イスラム教で禁止されている自殺が増加しているようなのだ。宗教に関係なく、自殺は悲しいことだ。ガザでは、繰り返される戦闘や高い失業率など、出口が見えない厳しい生活が続いている。そのような状況に絶望し自ら命を絶っている人が増加しているそうだ。ガザの人権団体などによると、確認された自殺者数は、2014 年と 2015 年がそれぞれ 5 人だったのに、2016 年では 4 月の時点で既に 7 人とされている。大変由々しきことだ。何ができるのか、考えていきたい。
5 月 30 日	**ネパール凧揚げ** ネパール凧揚げの記事が、産経新聞の電子版に掲載された。 「熊本の復興願いたこ揚げ ネパールの地震被災地」 熊本地震の被災者を励まそうと、ネパール北東部のシンドパルチョーク地区ポテナムラング村の学校で約 650 人の子どもたちが参加する大規模なたこ揚げ大会が開かれた。ネパールでは昨年 4 月に大地震が発生し、約 9 千人が死亡。同村でも約 300 人以上が犠牲になった。貧困問題や被災地支援に取り組む非政府組織(NGO)「日本リザルツ」が今も復興の途上にあるこの村に教材を届けたところ、「少しでも恩返しがしたい」と 27 日、たこ揚げが行われた。子どもたちは、熊本県の PR キャラクター「くまモン」のイラストや日本、ネパールの国旗が描かれた約 130 枚のたこを、復興への祈りを込めて揚げたという。日本リザルツは東日本大震災で被災した岩手県釜石市やパレスチナ自治区ガザ、熊本県益城町でもたこ揚げを企画。スタッフは「紛争や災害で苦しんでいる人たちをつなげることで、復興を支援していきたい」と話している。
6 月	
6 月 1 日	**フレンドリー・ペアレントルールの将来展望** 来る、6 月 11 日(土)、親子ネット主催「親権紛争におけるフレンドリーペアレント・ルール(寛容性の原則)の将来展望」と題したシンポジウムが開催される。基調講演をしてくださるのは、お二人とも「らぽーる」のサポートメンバーとして多大なるご尽力をいただいている上野晃弁護士と、東京国際大学教授で臨床心理士の小田切紀子先生だ。先日、本ブログでもご紹介したが、上野先生が代理人を務めておられるケースで、千葉家裁から子どもと相手の親との面会交流に寛容な別居親に親権・監護権を認めるという判決が出た。先進諸外国では当たり前のこのルールだが、日本ではおそらく初めて親権者決定に採用されたということで、メディアでもたくさん取り上げられた。今回のシンポジウムでは、後半はパネルディスカッションで、この「フレンドリー・ペアレントルール」の将来展望を有識者の方々に大いに語っていただく。こちらのパネルディスカッションには、「らぽーる」サポートメンバーの前衆議院議員・弁護士の三谷英弘先生、弁護士の杉山

	程彦先生もご登壇される。毎月の事例勉強会と違うのは、シンポジウムではオーディエンスがいるので、先生方も少し"よそ行き"な雰囲気かもしれない。いずれにしても、日本でもっとも面会交流を真剣に考えて取り組んでおられる先生方のパネルディスカッションなので、熱い議論が繰り広げられることは間違いない。
6 月 1 日	**G7 伊勢志摩サミットにおける栄養改善の成果**  G7 伊勢志摩首脳宣言 平成 28 年 5 月 27 日 前文 我々G7 首脳は、地球規模の経済的及び政治的な主要課題に対処するため、2016 年 5 月 26 日及び 27 日に伊勢志摩で会合を開催した。世界的な成長は、低成長のリスクが残るも、堅調として穏やかであり、かつ、潜在成長力を下回っている。拡大した地政学的な紛争、テロ及び難民の流れが、世界の経済環境を複雑にしている。暴力的過激主義、テロリストによる攻撃及び他の課題の増大は、既存のルールに基づく国際秩序並びに全人類に共通する価値及び原則に対する深刻な脅威をもたらしている。 G7 は、これら課題に対処するための国際的な取組を主導する特別な責任を有する。我々は、自由、民主主義、法の支配及び人権の尊重を含む共通の価値及び原則によって導かれるグループとして伊勢志摩で会合を開催した。また、我々は、持続可能な開発のための 2030 アジェンダ(2030 アジェンダ)及び気候変動に関するパリ協定の昨年の採択に続き、我々のコミットメントを実施するために更に努力する。我々は本日、経済、安全保障及び開発に関する広範な政策的項目について、目に見える進展を遂げるための我々の能力を強化し、また、世界の平和、安全及び繁栄を確保するための主要な課題の解決に向けた道筋を、我々の行動を通じて明示する。 G7 伊勢志摩サミットが 5 月 26･27 日に開催された。日本リザルツでは 5 歳未満の子どもたちの命を脅かす栄養の課題について、日本政府に提言を行ってきた。サミット後の 5 月 30 日には G7 伊勢志摩サミット開発課題についての意見交換が外務省と G7 市民社会プラットフォームの間で行われた。まず、竹若敬三国際協力局審議官(地球規模課題担当)から 5 月 27 日に発表された G7 伊勢志摩首脳宣言に則して説明をしていただいた。その後、10 の課題に関してそれぞれの NGO から質問や提案がなされ、外務省から回答いただいた。ここでは栄養改善に関する成果文書、その課題、そして会合での意見交換の様子を見ていく。まず、G7 成果文書を見ると、首脳宣言には「食料安全保障及び栄養」が盛り込まれている。ここでは 2030 アジェンダの基本項目として、開発途上国における 5 億人を飢餓及び栄養不良から救い出す目標に向けて、具体的に協同で携わることが明示されている。具体的には 1 年前のドイツでの G7 エルマウ･サミットで発表された、この 5 億人を救う「食料安全保障及び栄養に関する広範な G7 開発アプローチ」を一歩進め、「食料安全保障及び栄養に関する G7 行動ビジョン」が今回のサミットの首脳宣言で言及され、関連文書として発表された。内容としては女性のエンパワメント、人間中心のアプローチを通じた栄養の改善、農業及びフード･システムにおける持続可能性及び強じんさの確保という 3 つの優先分野を設け、共同の行動を促すものだ。また、付属文書である「国際保健に関する伊勢志摩 G7 ビジョン」においても、栄養に関する言及もあった。栄養は保健を考える上で重要な位置を占めるからだ。こうした首脳宣言や付属文書での言及、そして関連文書の発表がなされたことは、歓迎できる、すばらしいことだ。G7 サミットに参加した世界のリーダーの宣言の中に具体的に記載されたことで、世界のリーダーが栄養を重要な課題と捉え、取り組んでいくことが明確に示されている。次に成果文書の課題について考える。食料の安全保障及び栄養に関する G7 行動ビジョンは和文で 7 ページに及ぶ包括的なものだ。しかし、優先課題となる方向性を示すことに留まり、行動計画のような実効性のある詳細な計画では示されていないと考えられる。また、資金的な約束もなく、実現性が明確になっていない。実行に向けて資金約束ともう一歩踏み込んだ詳細な計画策定が必要になるはずだ。そこで、今回のサミット後の外務省との意見交換の場で食料の安全保障及び栄養に関するビジョンへの資金約束、そして、日本が議長国を務める 12 月までに、ビジョンを行動計画として発展させる可能性について伺った。回答としては、本年末までの策定を目指しているのは、G7 による食料安全保障･栄養に関する支援資金報告の手法であること、また、食料安全保障･栄養に関するサミットの成果については、6 月 14 日の外務省･NGO 定期協議全体会合の場で改めて報告･議論するとの説明だった。伊勢志摩でのサミットは終わったが、更に作業が進められていることがわかった。栄養が足りずに亡くなっていくという現実は未だに存在し、世界のどこかで母親や子どもが食べ物や栄養が足りずに困っている。こうした子どもたちに支援が届くようになることを願う。今回の G7 伊勢志摩サミットに向けて提言、意見交換、成果文書の説明を通して、日本がそして、世界のリーダーが一歩ずつ、協調して政策決定をし、少しでもよい世界になるように進めていることを垣間見ることができた。日本の外務省や関係機関、そしてサミット参加国や機関が沢山の協議や文書作成の末、宣言として発表された。これからも、小さな声を届けるべく、日本政府の益々のリーダーシップに期待して、応援し祈っていきたい。

6 月 1 日	**熊本支援事業が本格稼働** 本日から、日本リザルツとしての熊本復興支援事業を開始した。午前中は、入江精神保健福祉士と子育て支援センターを訪問。あらゆる場所にチラシを掲示してくださっていた。午前中は 20 組ほどの親子がいらっしゃった。入江さんも私も、まずは子ども達との遊びに加わりながら、少しずつ場に馴染んで、顔を覚えていただくよう努めた。その間、入江さんは何人かのお母さんから、子育てに関する相談を受けていた。印象的だったのは、「震災後、育児に関して何か困った事はないですか」というような地震を思い出す聞き方を決してされないことだ。まず普段の育児について話し、無理に震災に関する悩みを聞き出さないという姿勢に、心理士としての配慮の深さを感じた。熊本日日新聞の記者さんも取材に来られた。次回もう一度来て丁寧にお母さんの声などを集めながら、子育て特集の中で記事を書いてくださるそうだ。午後は、NPO「でんでん虫の会」が毎週水曜日に参加しているおしゃべり会に参加してきた。でんでん虫の会は、熊本でひとり暮らしされている方がお互いに支え合うことを目指して、交流活動を中心に相談と生活の支援をしている団体だ。この日は 20 名ほどの方が参加されていた。震災後はストレスから口の中の衛生状態が悪くなりやすく、さらに一人暮らしだと、どうしてもお手入れがおろそかになりがちだ。かといって、見ず知らずの人間をいきなり家にあげて、口の中を見せるのには抵抗がある。そこで今回は、まずはこの場をお借りして皆さんと話をし、希望される方のお家にオーラルピースと歯ブラシを持って、歯科衛生士の方と一緒に後日戸別訪問を行うことになった。お話する中で、早速数名の方から検診に来てほしいという要望があり、訪問日時や住所について確認をした。明日は、地元歯科医師の方と「特別養護老人ホームたくまの里」を訪問し、歯の診察とオーラルピースの配布を行う。本日、家に段ボール 10 箱分のオーラルピースが届いた。これから一本一本、大切に熊本の皆さまにお渡ししていく。
6 月 2 日	**老人ホームにオーラルピースをお届け** 本日は、熊本市東区にある特別養護老人ホーム「たくまの里」にオーラルピースをお届けしてきた。こちらのホームには、65 歳以上で、身体上または精神上著しい障がいにより常に介護が必要な状態で、居宅において適切な介護を受けることが困難な方々が入所されている。震災後は地域の避難所として、近隣住民の方々の受入れも行っていたようだ。震災後、精力的に被さい者の支援をされている山口歯科医師と三人の歯科衛生士さんで、入居されている方の口腔ケアを行っていく。オーラルピースを手の甲に出して歯磨き剤として使ったり保湿のために口の中に塗ったり、唇に塗ったり、安定剤として入れ歯に塗ったり、いろいろな使い方をされていた。ウメベースのミント味で、飲みこんでも安全だ。この方も「美味しい」とおっしゃっていた。ご不在だった方にも使っていただけるよう、職員の方に使い方を説明し、一人一人のお部屋に置いてきた。あるご家族の方からは、「こういうものをもらえて本当に嬉しい。ありがとうございます」と大変喜んでいただけた。明日は、地元の歯科衛生士の方と一緒に、一人暮らしされているお年寄りのお家を戸別訪問する。
6 月 3 日	**【結核ニュース】29 人が結核集団感染―千葉・船橋** また国内で結核の集団感染が発生した。 【毎日新聞】船橋市保健所は 1 日、29 人に上る結核の集団感染が市内で発生したと発表した。発病者は 6 人(男性 5 人・女性 1 人)、感染者は 23 人(男性 14 人・女性 9 人)。保健所によると、市内に住む 20 代男性が昨年 8 月に結核と診断され、医療機関から届け出を受けた保健所が男性の家族 4 人の感染を確認。さらに、今年 5 月までに男性の友人や勤務先の 25 人の感染を確認し、うち 6 人が発病したという。保健所は、新たな感染拡大の恐れは極めて低いとみている。市内の結核集団感染は 2013 年 11 月以来。結核は終わった病ではなく、誰でもかかる危険性のある病気だ。咳や痰が 2 週間以上止まらない、胸に痛みがあるなど、気になる症状をお持ちの方は一度検査をしてほしい。

６月３日	**一人暮らしの方へオーラルピースをお届け** 本日は、一人暮らしされている方のお家を小田歯科衛生士と一緒に 2 件訪問し、口腔ケアを行ってきた。ちなみにオーラルピースにはジェル状のものとスプレー状のものの２種類があり、今回は両方お渡しした。小田さんが、丁寧に「正しい歯の磨き方」を指導していく。これが簡単な様で、実はなかなか出来ていないものだ。オーラルピースのジェルで歯を磨いていただくと、「泡立たなくて歯が良く見えるので磨きやすい」「味もさっぱりして美味しい」とご満足の様子。こちらの方はお口が良く乾燥されるということでしたが、スプレーを使うと「しっとりしてネバネバがなくなった!」ととても嬉しそう。日々の口腔ケアのポイントは、忘れないようにメモに残す。戸別訪問では、ただ入れ歯の手入れや歯磨きの方法をお伝えするだけでなく、患者数の多い病院ではゆっくり聞けないような悩みや相談にもじっくり対応できて良かった。こちらもいろいろな話が出来て、楽しい時を過ごした。
６月４日	**子育て支援センターで第２回子育て相談** 午後から子育て支援センターにて第二回子育て相談を実施した。土曜日の午後ということで、多くの親子連れで賑わっている。平日とは違い、ちらほらお父さんの姿も見受けられた。まずは京都でスクールカウンセラー・スーパーアドバイザーとして活躍されている阿部様も加わり、子どものメンタルサポートを、今後どのように進めていくか打ち合わせ。阿部様は、東日本大震災の後も被さい地で多くの子どもたちの精神ケアに従事された。本日のカウンセリング担当は、臨床心理士の入江純子様。とても優しいオーラを持つ方で、輪の中に入るなりすぐに子ども達の人気者に。子どもと遊ぶ傍らで、多くのお母さんから、子どもの変調や子育ての悩みに関する相談を受けていた。震災後、子どもの変調を訴える保護者の相談が急増した上、2015 年度の児童虐待件数の増加が問題になっている。子ども、お母さん、お父さん、子育てに関わる全ての人達の心のケアが急務だ。(本事業は、ジャパンプラットフォームに助成いただき実施している)。
６月５日	**大津町と益城町の避難所にオーラルピースをお届け** 本日は、大津町と益城町の避難所にオーラルピースをお届けしてきた。 一件目は、大津町の本田技研体育館だ。震災の被がいが大きかった南阿蘇村の方々が多く避難されており、給水車はあるものの水はまだ来ておらず、皆さん不便な生活を強いられている。先日たくまの里でもご協力いただいた山口歯科医師、南阿蘇で被さい者を訪ね歩いて口腔ケアを行い、新聞にも何度か取り上げられている村本歯科衛生士と一緒に、住民の方々の巡回を行った。歯科医師会の宮坂先生、中久木先生等もいらっしゃっていた。長引く避難生活の中、誤嚥性肺炎を防ぐために、歯の手入れや口腔マッサージを呼び掛けるポスターがあちこちに貼ってある。村本さん自身も南阿曽村出身だ。避難所には幼馴染など顔なじみの方がたくさんいる。「地震大変だったね。」「今日はお母さんを癒しに来たとよ」と話しかけると、皆さん安心した表情で、お口の悩みを相談されていた。村本さんがオーラルピースを使って歯磨きや歯茎のマッサージを行うと、「口がすっきりして、気持ちも軽くなった!ありがとう!」と笑顔がはじけ、こちらも元気をいただいた。一通り巡回が終わると、村本さん達とお別れし、次に益城町総合体育館に向かった。こちらには今も 1000 人以上の住民が避難されている。熊本市から来てくださった添島歯科医師と合流し、オーラルピースを持って住民の方々の巡回を行った。「歯は何回磨いていますか?」「入れ歯の手入れはどういう風にやっていますか?」と一人一人に丁寧に尋ね、個人の状況に即したアドバイスや処置を行っていく。膝が痛くてあまり動かないと悩みを話された方には、足指をのばすストレッチ『ひろのば体操』のやり方をお伝えした。「梅とおからからつくった抗菌性の高い成分が入っていますし、その他の材料も飲み込んでも安全なものでつくられています。普通の歯磨き粉と違って研磨剤が入ってないので、これで入れ歯も磨けるんですよ」と添島さんが説明してオーラルピースをお渡しすると、「ちょうど歯磨き剤が無かったので嬉しい!助かります!」と皆さん喜んで受け取られていた。口腔ケアは誤嚥性肺炎予防のために大切なのはもちろんだが、口の中がネバネバすると

	気持ち悪いし、入れ歯に違和感があるとご飯が美味しく食べられず、ストレスの原因になる。今回の活動で、一人でも多くの方のお口の中がスッキリし、少しでも快適な生活を送れるようになったら嬉しく思う。
6 月 6 日	**【結核ニュース】世界で猛威…耐性菌拡大、WHO が新手法奨励** 先日、国内で結核の集団感染発生のニュースをお伝えしたが、世界では多剤耐性結核が猛威を振るっている。 【毎日新聞】「世界で猛威…耐性菌拡大、WHO が新手法奨励」：世界保健機関(WHO)は 5 月、多剤耐性結核の発見と短期間で安価に治療できる新たな手法を利用するよう奨励する声明を発表した。日本では「過去の病気」と見られがちな結核が、世界で猛威を振るっている。2014 年の死者は 150 万人でエイズを上回り、全ての感染症の中で最多。主な薬が効かなくなる多剤耐性結核がインドや中国などで拡大している。
6 月 7 日	**一人暮らしの方へオーラルピースをお届け②** 小田歯科衛生士と一緒に熊本市内で一人暮らしされている方のお宅へ戸別訪問した。戸別訪問ではまず、歯や口のことでお困りのことや悩んでいることをお聞きし、次に口の中を診て、歯垢がどこについているか、虫歯は無いか、口や舌の粘膜状態はどうか、一つ一つチェックする。さらに毎日の歯磨きの回数、時間、普段使用している歯ブラシ等を確認して、普段磨き足りてない箇所をお伝えし、効果的な歯磨きの方法を指導する。ひとつひとつの動作に無駄がなく、「さすがプロ！」と当たり前のことながら感心してしまう。小田先生がオーラルピースを使ってブラッシングを行うと、皆さまとても気持ちよさそうにされていた。「ちょっと甘くて爽やかなミントの香りがする」とオーラルピースの味は今日訪問した方にも好評。2 日間の戸別訪問には小田先生にご協力いただいた。今回の口腔ケア事業、素人の私がただオーラルピースを配るだけでは、決してここまで多くの人の笑顔に繋がることは無かったと思う。ご自身も被さいされたにも関わらず、今回一緒に活動していただいた地元の歯科医師、歯科衛生士の方々には感謝しても感謝しきれない。
6 月 8 日	**GHIT Annual Partners Meeting 2016** GHIT Annual Partners Meeting 2016-GHIT on the Ground: Innovation & Impact に参加した。CEO 兼専務理事の BT 氏のオープニング挨拶の後、早速セッションに入った。セッション 1 の内容は専門的で難しかったが、以下のような内容だった。 マラリアワクチン候補 BK-SE36 の臨床開発：マラリアに対するワクチン候補の BK-SE36 の臨床試験についての最新の報告。本臨床試験は、これで実施したことのない低年齢層(0~5 歳児)を対象に行っており、安全性、免疫原性および有効性に関する追加情報を収集することを目的としているそうだ。また、これまでのワクチン開発の経緯や臨床試験の今後の計画についてもお話しを頂いた。 住血吸虫症に対する小児用製剤の開発：住血吸虫症の標準的な治療薬として用いられているプラジカンテル(PZQ)は、成人および年齢の高い児童を対象とした経口錠剤のみで、錠剤の大きさに起因する窒息、薬剤の苦味など就学前児童、乳幼児には投薬が難しいことが課題となっており、新たに開発された小児用製剤は、就学前児童、乳幼児を含む低年齢の児童にも簡易に投薬でき、口腔内崩壊や味の改善を含め服薬時の利便性を向上させたものだ。2015 年、タンザニアにて小児を対象とした新製剤の味覚試験が実施されたそうだ。
6 月 10 日	**子どもの心のケア** 熊本日日新聞では、今日も子どもの「心のケア」が 1 面記事になっていた。記事によると、熊本市内の小中学校において、最新の調査で新たに「カウンセリングが必要」と判断された生徒が 1215 人に上ったそう

	だ。地震から 1 ヶ月半が経ち、少し落ち着いてきたこの時期、少しずつ自分の異変に気付き SOS を出し始める子どもが多く出てきている。熊本では、様々な団体がそれぞれの強みを生かした手法で子どもの心のケアに取り組んできた。被災した子どもの心のケアをテーマにした絵本を作成し、小学校などに配布した団体もある。絵本、動物とのふれあい、音楽など、その方法は実に多種多様。熊本県では「心のケアセンター」の開設も検討されている。一方で、就学前の子ども達のケアは、どうしても学校に通っている児童と比べると、手が届きにくいのが現状だ。日本リザルツは、引き続き、熊本市総合子育て支援センターにて、母子一体の心のケアのお手伝いをさせていただく。(本事業は、ジャパンプラットフォームに助成いただき実施している)
6 月 10 日	**つなみ募金** 本日、毎月恒例のつなみ募金を経済産業省の前で行った。配布物は、リザルツ、らぽーる、UNRWA と「結核のない世界」の 4 種類のパンフレットを結核関係のクリアファイルへ入れたもの。今回の参加者にはつい最近職員となった馬場、インターンの清田さんの 2 人も加わり、4 名での募金活動となったた。お天気も良く、たくさんの方たちが通られ、若い 2 人も順調に配布できた。
6 月 11 日	**子育て相談 with 小出先生** 本日は、子育て支援センターにおける子育て相談に、臨床心理士の入江先生と小児科医の小出先生が来てくださった。小出先生はもともと九州で小児科医としてお仕事をされていたが、東日本大震災を機に宮城県にフィールドを移し、現在は登米市で内科小児科医院を開業されている。被さい地における地域医療・小児医療に長年携わってこられたということで、本事業にも共感いただき、ご協力いただけることになった。まずは私を含めた 3 名で打ち合わせを行い、今後の事業の進め方について話し合った。子育て相談を行う中で、地元の専門家を紹介する案件が出てきた場合は、どこへ繋げるのが最適か、そのためにどのような準備が必要か、1 つ 1 つ確認していく。小出先生は東日本大震災後の被さい地近郊でも多くのお子さんとご家族にお話されてきた経験から、今後起こり得る様々なケースを想定したアドバイスをくださった。その後、入江先生と小出先生が子ども達と遊びながら、来訪中のお母さんのお話を聞いてまわった。特に小出先生は小児科の先生ということで、多くのお母さんが、震災後の子どものちょっとした変化に、どう対応すればよいか相談されていたようだ。私はその間ずっと子ども達と遊んでいたが、今回は 3 回目の訪問ということもあり、「先週も来てましたよね～」と何名かのお母さんから声を掛けていただいた。こうして少しずつ覚えてもらえるとやはり嬉しいものだ。子どもと全力で遊んでいると、そのパワーに圧倒され、たった 2 時間でも疲れてしまう。そんな子ども達のお世話を 24 時間 365 日行っているお母さん、お父さんの大変さは相当なものだと思う。自分の悩みや不安を子どもに悟られまいと一人で頑張りすぎてしまって、ある日糸がぷつんと切れてしまうことのないよう、少しでも日頃のストレスを軽減できるようなお手伝いをしていきたい。(本事業は、ジャパンプラットフォームに助成いただき実施している)
6 月 12 日	**フレンドリー・ペアレントルールの将来展望** 6 月 11 日(土)池袋某所にて、「フレンドリー・ペアレントルールの将来展望」が開催された。前半は、千葉家裁松戸支部で 2016 年 3 月、フレンドリー・ペアレントルールを採用した「国内初の」画期的な判決が出たことを受けて、弁護士の上野晃先生の基調講演と、先進諸国におけるフレンドリー・ペアレントルールについて、東京国際大学教授で臨床心理士の小田切紀子先生からお話しをいただいた。後半は、お二人を含め、「らぽーる」でも大変お世話になっている三谷英弘前衆議院議員・弁護士と杉山程彦弁護士も加わっていただいてのパネルディスカッションが行われた。親子断絶の問題が社会に浸透したた

	めか、あるいは、現在係争中の方々も、どうしたら裁判所にフレンドリー・ペアレントルールを用いた判断をしていただけるかということに興味があって、つまり、テーマ設定がタイムリーで的確だったためか、とにかく、親子ネット史上最大の参加人数(150 名)だった。
6 月 14 日	**【結核ニュース】結核類似菌の呼吸器系患者急増!7 年で 2.6 倍** 結核のニュースが相次いでいる。結核類似菌の呼吸器系患者急増　7 年で 2.6 倍、慶大調べ 【日経新聞 6 月 14 日】結核菌の仲間の細菌によって起きる呼吸器系の病気「肺非結核性抗酸菌症」の患者が急増していることが、慶応義塾大学の長谷川直樹教授らの調査で 13 日までにわかった。7 年間で 2.6 倍に増えていた。肺非結核性抗酸菌症は水や土などに存在する抗酸菌のうち、結核菌とライ菌以外の細菌が引き起こす。推定で年間 1300 人以上が死亡している。研究チームは 2014 年に 884 の医療機関にアンケートし、患者数を調べた。07 年の調査と比べ患者は 2.6 倍に増え、推定で 10 万人当たり 14.7 人に達した。肺非結核性抗酸菌症とは、非結核性抗酸菌とは、結核菌とライ菌以外の抗酸菌の総称だ。現在 100 菌種以上が発見されていて、それらの菌種によって起こる感染症のことを言うそうだ。非結核性抗酸菌は、自然環境中の水系・土壌中や家畜などの動物の体内、水道・貯水槽などの給水システムなどに広く生息している。菌を含んだ埃や水滴を吸入することで感染すると推定されている。国内でも 20 菌種を超える感染症が報告されていて、そのうち 7~8 割ぐらいは、MAC(Mycobacterium-avium complex)と呼ばれる菌で占められているそうだ。結核菌は他人への感染性が強いため、感染者の喀痰から直接菌が検出されると、結核病棟への入院の対象となるが、非結核性抗酸菌は菌が検出されても他人に感染することはなく、一般病棟あるいは外来にて治療をおこなうこととなる。以前は、陳旧性肺結核症、慢性閉塞性肺疾患(COPD)、肺切除後やじん肺、間質性肺炎などの既存の肺疾患を有した男性に多くみられていたが、最近では、過去に基礎疾患のない中年以降の女性の増加が顕著だそうだ。なぜ女性に多いのかは現時点でははっきりとはわかってない。結核は現在、一部の多剤耐性結核を除き多くが治癒を期待できるようになったのに対して、非結核性抗酸菌症は治療がまだ確立していないが、結核と類似した病気のため、抗結核薬を含めた 3~4 種類の薬を用いて治療を行うそうだ。
6 月 17 日	**熊本の事業が熊日新聞に取り上げられる** 6 月 16 日の熊本日日新聞で、日本リザルツが熊本で実施している母子メンタルサポート事業が取り上げられた。 「母親のストレスケアを」：地震後、幼い子どもを持つ母親のストレスケアが必要だと指摘されている。余震が続き、不安を抱えながら育児を続けている母親の中には、心の疲れを感じる人も少なくない。NGO や個人、団体がサポートに乗り出している。「眠りが浅いし、今も夜が怖い。よく行く児童館やショッピングセンターが閉まっていて、子どもをどこに連れて行ったらいいかわからない」育児中の会社員、末吉葉子さん(37)＝熊本市中央区＝が転勤で熊本に来たのは 2 年前。確かな土地勘もないまま地震に遭った。1 歳半の長女に目立った変化はないが、周囲に相談相手が少なく不安が募る。熊本市子ども支援課によると、開所する市内 19 の子育て支援センターには、地震発生後から 5 月末まで、震災に関する相談が 133 件寄せられた。「親子 2 人で過ごすのが不安」「イライラして子どもにあたりそう」など母親自身の悩みも目立つ。こうした母親のストレスを軽減させようと、貧困問題や東北の被災地支援に取組む国際 NGO「日本リザルツ」(東京都)は、6 月から同市中央区本荘の子育て支援センターで未就学児の親を対象に相談事業を始めた。 9 月まで週 2 回、連携する県内外の臨床心理士や小児科医、精神科医ら 8 人が交代でセンターを訪問。親子と一緒に遊びながら相談にあたる。別室での個別相談にも応じ、深刻なケースは医療機関につなぐ。末吉さんは臨床心理士の入江純子さん(39)＝和水町＝に自分の悩みを話した。「娘の対応についても聞け、少し落ち着いた」と表情をゆるませた。他の母親たちの声も聞いた入江さんは、「地震の影響で、育児に過敏になっている母親が増えている」と話す。メンバーのひとりで、東日本大震災の被

	災地地域で診療にあたる内科小児科医の小出佳代子さん(47)=宮城県登米市=は「母親の不安が子どもに投影されるケースもある」と分析。「震災発生から 1 ヶ月を過ぎると心的疲労が出る。専門家の傾聴や助言で母親の不安が解消すれば、子どもの心の安定にもつながる」と語る。(本事業は、ジャパンプラットフォームに助成いただき実施している)
6 月 17 日	**PAS について** 本日は、現在和訳している最中に出てきた PAS について紹介したい。皆様 PAS とは何かご存知だろうか?PAS とは Parental Alienation Syndrome の略で、日本語では片親引き離し症候群と言う。では、片親引き離し症候群とは何か。一方の親が、もう一方の親に対する誹謗や中傷、悪口などマイナスなイメージを子どもに吹き込み、子供を他方の親から引き離すようし向け、結果として別居親に会えなくさせている状況を指す。もちろん、別居や離婚してすぐのころは、相手への怒りや葛藤を抑えきれず、悪口を言ってしまうこともあるだろう。でも、例えば、子どもと同居する母親が、離れて暮らす父親の悪口を言っていると、子どもは母親に嫌われる・捨てられるという恐怖心で、同調してしまう傾向がある。これは、欧米などでは、情緒的虐待とみなされるそうだ。次に、PAS の症状について。もし、上記の状況が続いてしまうと、うつ病や円形脱毛症状を発症する子もいたり、長期にわたって情緒不安定な状態が続く場合もあったりするそうだ。子どもは、両親が離婚したことで、既に心に傷を負っているので、子どものケアを最優先して欲しいものだ。その時にしっかりケアしてあげないと、その後の子どもの精神の発達にも影響を及ぼし、自己肯定感の低下、そしてアイデンティティーが確立できないなどという悩ましい事態を引き起こす場合まである。離婚問題は、非常に難しいトピックだが、子どもには子どもの権利がしっかりある。
6 月 17 日	**インターンからのご挨拶** 6 月 6 日より、日本リザルツでインターンとして 2 ヶ月間働かせていただくハーバード大学生の「はな」だ。今年の 5 月にハーバード大学で 1 年目を終えた。9 月から 2 年生として、政治学と東アジア研究を専攻する予定で、人権問題を重視している NGO、又国際的に貢献する団体の元で働きたく、本事務所で研修をさせていただいている。2 週間とまだ短いが、学問的な法的論文の英和訳から実習的な募金活動まで、すでに様々な経験をさせていただき、とても光栄だ。
6 月 17 日	**国会議員の先生方にリザルツ新聞第 6 号をお届け** 6 月 15 日にいつもお世話になっている国会議員の先生方(722 名)全員ににリザルツ新聞第 6 号ををお届けした。今回は、凧揚げ特集。①5 月 22 日に東京臨海広域防災公園で開催された「世界凧揚げ交流会@有明」②5 月 22 日熊本益城町で行われた凧揚げ大会③5 月 28 日ネパールのポテナムラング村で 650 人以上の子供たちを一緒に行った凧揚げ大会。より多くの先生方の目に止まり、感動してくださることを願っている。
6 月 17 日	**らぽーる広報のため、柏市と近隣の市へ** 昨日、柏市と近隣の市に"営業"に出かけた。近隣の市に先に行ったが、議会として「"柏市に倣え"でやっていきたい」方針ではあるが、昨日は 17 名の市議会議員の先生方にプレゼンをして、議会の決定を待つということになった。一方、柏市役所市民課窓口では、2015 年 12 月より、離婚届用紙を取りに来た方に「らぽーる」リーフレット、クリアファイルをセットにしてお渡ししているほか、こども福祉課のカウンターにリーフレ

	ットを置いていただいている。昨日は、もう一歩進んで、保健センターにセールスに出かけた。妊娠後期の「母親学級」で親教育プログラムを組み入れていただけないか、という売り込み作戦だ。妊娠後期になると、赤ちゃんを迎える準備や出産の時のことを話し合ったりされるかと思う。でもまさか、新しい家族のはじまりのその時期に離婚の話を聞かせる人がいるだろうか?でも、全離婚件数のうちの 40%前後は、結婚(同居)5 年以内の夫婦なのだ。つまり、小さいお子さん(赤ちゃん)のいるご夫婦の離婚が意外と多い。理由はいろいろあるが、「産後うつ」が原因となるケースも多い。そこで、産後うつが起こるメカニズムを知り、上手にコミュニケーションをとったり、妻が「夫は協力してくれている」と感じられる協力方法を具体的に話し合ったり、イライラを逃がす工夫を習ったりして、産後うつによる離婚の危機を回避する術をあらかじめ身に着けておくのだ。私の説明を大きく頷きながら聴いてくださった。保健師さんは、説明が終わると、一つひとつ私の話を繰り返し、「どのお話しも本当に共感します」とおっしゃった。そして、「なのですが、実は母親学級の受講率が 20%程度で、参加される方は、心身とも準備万端で、元々何でもよくご存じの意識の高い父母なんです。本当に学んでほしい層に届けられないのが、つらいところです」と続けられた。「らぽーる」の親教育プログラムもそうだ。参加者は意識が高く、届けたい方々に届けられない・・・「同じジレンマ、感じていたんですね」と共感し合った。採否はまだだが、これから、情報交換しながら、プログラムをもっと多くの方に知っていただくためにどうするか、参加してもらえるプログラムとは?など話し合って高めていきたい。
6 月 19 日	**益城町でペットの口腔ケア** 益城町総合体育館敷地内にあるペット預かり所「ましきまちワンニャンハウス」で被さい者のワンちゃん、ネコちゃんの口腔ケアを行った。この預かり所は、ペット同伴の避難者の負担を減らそうと、NPO 法人「人と犬の命を繋ぐ会」の提案で先月 15 日に開設された。現在、避難所の住民や車中泊されている方のペット、約 30 匹の犬猫が暮らしている。今朝は飼い主の方が集まる「家族会」が開催されていたので、そこに熊本市のともだ動物病院の動物看護士、原口先生、和田先生と一緒にお伺いし、ペット用のオーラルピースを飼い主の皆さまにお渡しした。最近、食道を通過すべきものが誤って気管を通り、肺が炎症を起こしてしまう誤嚥性肺炎が話題になっているが、これは人間特有の病気ではない。犬、猫などの動物も、高齢になって飲み込む筋力が低下すると、誤嚥性肺炎にかかりやすいと言われている。また、ペットにも日頃からお口のケアを行わないと、人間と同じように歯石がつき、歯周病になったり虫歯になったりする。特に歯周病は怖く、進行すると心臓や腎臓に負担をかけ、内臓疾患を引き起こすこともあるそうだ。まずは、原口先生と和田先生が、模型を使ってペットの歯磨きの方法を講習した。柔らかめの歯ブラシを使う、嫌がるペットに無理やり歯ブラシを使うと歯磨き嫌いになってしまうのでその場合はガーゼを使うなど、単なる磨き方だけでなく、豆知識もたくさん伝授。家族の一員である大切なペットのケアということで、飼い主の皆さんも真剣に耳を傾けられていた。その後、希望された飼い主の方には、実際にペットの歯磨きも行った。オーラルピースをつけたガーゼを指に巻きつけて磨いていく。どの子も、オーラルピースの味が気に入ったのか、ジェルをぺろぺろ舐めたり、磨いている間も気持ちよさそうだ。歯磨きの後は、挟まっていた草が取れたり、歯がピカピカになって、心なしかスッキリした表情に。毎日は難しくても、長生きのためには定期的な歯磨きが不可欠だ。最後に、預かり所内のワンちゃんネコちゃんも見せていただいた。消毒が徹底されており、どのゲージもとても綺麗に手入れされていた。ペットは家族同然とはいえ、避難所で一緒にいるとどうしても周囲に気を使う。また、車中泊の場合も、ペットを車の中に一匹置いていくわけにはいかず、長時間の外出もままならない。こちらにペットを預けることで、ようやくぐっすり寝られるようになったり、仕事に行けるようになった方もいらっしゃるということだ。私も実家で犬を飼っているので、飼

	い主の方々の気持ちがよく分かる。今回の口腔ケアも多くの方に喜んでいただけて本当に良かった。
6 月 21 日	**【ニュース】栄研化学結核の検査装置海外市場を開拓** 日経新聞(12 面)に嬉しいニュースが掲載されていた。栄研化学の記事である。 「栄研化学結核の検査装置海外市場を開拓」 【日経新聞(6 月 21 日)】：医療用検査装置大手の栄研化学は結核検査装置で海外市場を開拓する。結核感染の判定が約 1 時間で終わる迅速検査装置を 2017 年からフィリピンや韓国等に向けて輸出し、将来はアフリカにも広げる。世界では今も年間 900 万人以上の新たな結核感染患者が生まれている。耐久性と判定の迅速性を武器に海外市場に参入、先行する欧米勢を追い上げる。栄研化学と結核と言えば「LAMP 法」だ。従来、結核の検査には、複雑な機器を使用せねばならず、診断結果の精度も低く、また結果が出るまでに長い時間が必要だった。その状況を打ち破ったのが簡易でコストも低く抑えられ、検査結果の精度も高く、短時間で結果がわかる「LAMP 法」だ。現在、「LAMP 法」は、結核菌のみならず、インフルエンザウィルス、腸管出血性大腸菌、マイコプラズマといった様々な病原体に対しても迅速診断法が開発され、広がりを見せている。ちなみに、日本リザルツでは昔から栄研化学を応援しており、クリアファイルまで作っている。2012 年からリザルツは粛々と計画を進め、2013 年には、日本リザルツと栄研化学、外務省による官民連携事業を成功させている。こういった地道な活動が、今の流れにつながっていると思うと嬉しい。栄研化学の素晴らしい技術で、開発途上国はじめ、結核に苦しむ人が世界中からいなくなるよう、今後も精一杯応援していきたい。
6 月 21 日	**インターンはなの『初めての～～』・その 1『初めての英和訳』** インターンのはなは、6 月から 2 ヶ月間リザルツで研修をする予定だ。大学 1 年生のインターンでも毎日勉強になる仕事をさせていただいていることを読者の皆様に知ってもらうために、今日から『初めての～～』シリーズを始める。幼い頃読んだ『初めてのおつかい』の絵本で、実際初めてのおつかいに挑んだ 7 歳の私のように、リザルツの様々なプロジェクトもこのシリーズで広め、NGO でのインターンを大学生の読者に興味を持っていただきたい。 その 1『初めての英和訳』：まさか海外で主に暮らし、現在米国へ留学中の私が、ここリザルツで初めて英和訳に挑戦するとは思いもしなかった。その上、まだ大学 1 年生の私が今まで勉強もしたことがない家事審判のような専門的な内容、そして聞いたこともない専門用語が多い文章を扱うなど、初日早々から大変勉強になる仕事をさせていただいた。 文章の概要：ドイツ国での子どもの審問の現状』(マイケル・カール、サンドラ・ガトマン)の論文は、題名に記された通り、ドイツの子どもの審問(英訳 courthearing)についてだ。特に、審問が子どもたちにどのようなストレス等を及ぼすか、そしてそのストレス等が家族構成に影響するか、との内容。又、研究者たちは子どもたちだけではなく、裁判官の態度、専門能力、そして実務経験も重要視した。審問を受けた子どもたち、そしてそれを導いた裁判官への合計 2 問の質問事項の結果によると、以下のように完結できる。(1)子どもたちは審問から適度なストレスを一時的に感じるので、審問は子どもに重大な精神的・社会的な害を与えない。(2)子どもの審問の担当を断らない裁判官は主に実務訓練を受けており、専門能力と実務経験が長い。(3)子どもの審問は子どもたちに自らの家族問題に対して意見を述べるプラットフォームを与える為、理解力のある裁決を定める為とても重要だ。短時間に英和訳ができるようになる目標で、この経験を今後の和英訳の仕事に活かしたい。そのためには、専門用語をできる限り暗記し、基本的な英文法を活用できれば良いと、初めての英和訳を通じて習った。リザルツでは法学的論文の英和訳のような仕事をまだ就職経験のない大学生のインターンができるのだ。バイリンガル力も向上した。次回の『初めての～～』を経験するのをとても楽しみにしている。
6 月 21 日	**インターンはなの『初めての～～』・その 2『初めての議事録』** 今回は初めて議事録を記した経験について書く。

	(1)会議内容を事前勉強する：とても専門的な内容の会議で、専門用語を日常用語のように次から次へと発言する出席者の流れについていくのに苦労した。議事録はただ議事を記録するためのものではなく、議事を理解した上で記録するとのことを改めて勉強した。(2)出席者の名前、肩書き、そして役職内容を事前に調べる：全出席者の名前、仕事内容を余り調べず、会議後、彼らの発言と名前を議事録にまとめるのは難しく、録音に頼り、通常短時間で済む仕事に 1 時間以上もかけてしまった。出席者の『バックグラウンド・チェック』は重要だと改めて知った。出席予定の方々の名前はもちろん、仕事内容を知ることで、誰の発言に対して集中し、詳しく記録するか、そして誰がどのような理由でその発言をするのか予想できると思う。会話の流れを事前に予想できるため、議事録も簡単に、素早く取れるような気がする。(3)会議内容に少しは興味を持つ：幸いに、今回の会議内容には興味を持っていたため、この要点は『改めて知った』よりも、『改めて思い知らされた』だ。大学で興味のある授業の方が、宿題、勉強もやりやすいように、会議内容に少しでも興味を持ったほうが 1 時間以上の議事録に集中できるような気がする。又、事前に興味を持った場合、その分野の専門家と会議後に質問を通じて、大学生のインターンでも簡単にネットワーキングができると思う。重要なのは『興味がある内容の議事録を取る』のではなく、『議事録の内容に努力してでも興味を持つ』ことだ。会議の全体図を分かりやすく示す議事録を短時間に作成する目標で、この経験を今後の議事録作成の仕事に活かしたい。リザルツでは、議事録の作成のような仕事をまだ就職経験のない大学生のインターンが経験でき、専門知識もアップする。
6 月 24 日	**第 62 回財務省・NGO 定期協議** 「第 62 回財務省・NGO の定期協議」に行った。他の NGO の考え方などを知ることができ、とても有意義な会合だった。協議の大まかな内容は、日本の財務省として、世界の栄養・貧困問題等に対し貢献していくか、租税、債務、融資等の課題にどのように対応していくかなどが協議された。今回の会議では、日本リザルツの理事も務めている、グローバル連帯税フォーラム(g-tax)の田中徹二さんも議案を提案していた。内容は、パナマ文書の公表で国民の関心が集まっていること、きちんと税金を納めている納税者に対し、OECD 租税委員会拡大会合に関する報告会を開催してほしいという要望等だった。また、タックスヘイブン・租税回避で最大の被害を受けるのは開発途上国なので、国連規模の途上国を含む広範な国々が参加できる国際的枠組みへと発展させるべきだという問題提起がなされていた。財務省としては、もっと国民に対しても報告をしていきたいとのことだ。その他にも、8 月 27-28 日にアフリカのケニアで行われる「TICAD VI」についても議題とし挙げられていた。アフリカでの開催は、今回初めてという事で、とても注目されている。
6 月 25 日	**リザルツ国際会議 1 日目** 毎年恒例のリザルツ国際会議に参加すべく、代表の白須と大崎がワシントンにやってきた。昨年は仕事が忙しくて来られなかったため、日本リザルツとしては 2 年ぶりの出席となる。初日は、朝 8 時から ACTION パートナー・ミーティングが行われた。この日のために、イギリス、フランス、カナダ、フランス、ベルギー、オーストラリア、韓国、インド、ケニア、ザンビア、南アフリカ、ジンバブエ等々、世界中の国々から ACTION のメンバーが集結した。 まずは自己紹介ということで、一人一人が「名前、所属、オリンピックで楽しみにしていること」を話した。陸上と水泳が人気のようだ。アフリカからの参加者が多いからか、ケニアにメダルを取って欲しい!と熱く語る方が沢山いた。午前中は、次の 5 年間(2017 年~2021 年)に向けて、ACTION として感染症や栄養不良の問題を解決するために、「何を」「誰に」「どのような方法で」取組んでいくか話し合いをした。リソースの確保はもちろん大

	切だが、限られた資金の中で最大のインパクトをもたらすには、どの地域にどのような症状で苦しんでいる患者がいるか、個別のケースを入念に調査し、プライオリティをつけることが必要だという意見が出た。また、ザンビア等のアフリカ諸国では、結核や HIV と比べるとどうしても子どもの健康問題がクローズアップされにくいことから、「子供の早期ケア(ECD:early childhood development)」を積極的に進めて行くことが重要だと指摘された。午後は、ACTION の正式メンバーの他に協力団体も加わり、アドボカシーに関してより具体的な話し合いが行われた。政治家に対してアドボカシーを行う際は、出来るだけ科学的・論理的に訴える必要があるが、専門的な言葉を噛み砕いて誰でも分かるように説明することが何よりも重要だという話が出て、みんなアドボカシーペーパーを作るのに苦労している様子が伝わってきた。その後、フランスの Bruno が UHC についてプレゼンテーションを行い、発展途上国でヘルスワーカーの慢性的な不足が喫緊の問題になっていると指摘した。解決のためにはヘルスワーカー育成のための資金投入だけでなく、人的資源が不足している国に専門家がきちんと流れるよう、グローバルポリシーの変革が必要だと力説されていた。最後に、Global Health Advocates インドの代表 Krishnakumar がジョギング(jogging)をしながらジャグリング(juggling)するという、ジョグリング(joggling)を披露してくれた。干飯を風船で包んだお手製のボールだ。「Joggling で検索してみて!」と言われたので調べてみると、本当に記事が出ていた。本日の会合には、ケニアのパートナーである KANCO を始め、約 100 名のメンバーが参加していた。今までメールだけでやりとりしていた米国リザルツを始めとする多くの ACTION スタッフと初めて顔を合わせ、話をすることが出来、充実した一日となった。
6 月 25 日	**長崎大学山本太郎先生勉強会「微生物と非感染疫病」を開催** 長崎大学の山本太郎教授による講演会を開催した。全く知識のない私でも吸い込まれるように山本先生の話に聞き入ってしまった。人間の内側でも外側でも、支え合い、変化しあう。人間の中にある細菌(ヒト・マイクロバイオーム)で我々が構成されている。そのマイクロバイオームが、1.食生活の変化 2.抗生物質の過剰使用 3.不必要な帝王切開 4.家畜への抗生物質の投与 などによって危機にさらされている。
6 月 26 日	**リザルツ国際会議 2 日目** ワシントン滞在 2 日目。本日の朝は、アジア太平洋タスクフォースチーム会合が開催され、オーストラリア、インド、韓国、日本の ACTION メンバーとリザルツ事務局が参加した。新たにインドネシアで ACTION のパートナー団体となる NGO を選ぶため、まずは、基準となる指標を見た。「結核や HIV に積極的に取り組んでいるか」など 13 の指標を決め、それを基にインドネシアの様々な現地 NGO を評価していく。ただし、ウェブサイトを見たり、数回現地訪問しただけではその団体の実態を把握することは不可能ということで、長期的に深く入り込んだ調査が必要だと確認した。 午後からは、リザルツ国際会議が開催された。リザルツを応援するボランティアやドナーの方々が世界中からワシントンに集結し、今年は過去最大となる 600 名近くの参加となった。リザルツ国際会議の開会が宣言されると、Joanne Carter の基調講演が行われた。さすがリザルツの代表ということで、割れるような拍手

	の中で登壇。現在アメリカでは 1,600 万人の人々が貧困状態にあるという話に始まり、「白人男性が 1 ドル稼ぐ間に黒人男性は約 60 セントしか稼げない」など、様々なデータから今も根深く残る人種差別や教育格差の現状を明らかにしていた。リザルツはそのような世界を変えるため社会的弱者に手を差し伸べ、「決して誰も取り残さない」を信念に、これからも活動していくと力説された。また、壁ごしにスポーツ観戦する親子を例に、Equality(同じにすること)と Equity(公平にすること)は全く意味が違い、リザルツは Equity を目指すのだという話もあった。こうやって図にしてみると、とても分かり易い。今年の会議にも、米国内のあらゆる州、世界中のあらゆる国から人々が集まったということで、州名や国名が読み上げられると、その地域の人々は立ち上がり大きな拍手と歓声を受けた。お祭りモード全開。呼ばれて国旗を振るカナダの人々。続いて、世界的に有名なアメリカ人医師 Paul Farmer と Joanne による対談が行われた。彼は医療 NPO の Partners in Health を創設し、ハイチに診療所を開いて無償で多くの結核患者を救ってきた。Farmer 氏は、ルワンダでも活動をしていたが、その時に同僚から「この国では、最も劣悪なホテルでさえ、普通の病院よりはまだマシだ」と言われたほど、ルワンダの医療施設は劣悪な環境だったそうだ。これまで様々な国で医療支援を行ってきた Farmar 氏だが、その中で現地のパートナーを何度も感染症で亡くされたそうで、「予防可能、治療可能な病気なのに、なぜ死ななければならないのか」と非常に悔しい想いをしたと語られていた。話の内容は深刻だが、軽快な語り口でジョークを交えながらのトークに、会場には何度も笑いが起きていた。話が終わると、サインをもらいに人々が殺到。私もすぐに駆け寄り、同じくハイチで長年医療支援に携われていた須藤昭子シスターの本をお渡した。須藤シスターのことはよくご存知だという事で、とても喜んでいただけた。続いて、こちらもアメリカでとても有名なトーク番組の司会者、Tavis Smiley による講演が行われた。Paul とは打って変わってとても力強い声とジェスチャーに、まるで大統領候補者演説を聞いているような気分に。実際に今アメリカでは大統領選の真っ最中ですが、Smiley 氏はトランプ氏のスローガン「Make America Grea tAgain(アメリカを再び偉大な国に!)」を痛烈に批判していた。そもそもアメリカが偉大な国だったのはいつのことなのか、90 年代か、70 年代か、はたまた奴隷時代まで遡るのか、さらに「誰にとって」の偉大を指すのか、裕福な白人男性か、それ以外の人々か。突っ込みどころがたくさんあると指摘し、なるほどな、と考えさせられた。それよりも未来を向いて、人種、性的指向、貧富の差などを乗り越えて一つになることが本当の「Great America」なのではないかと力説されていた。最後に、リザルツのメンバーに対して、「勇気は伝染する。この国の貧困をなくすために、まずはリザルツの人達にリーダーシップを取って動いてもらいたい」と参加者に力強く呼び掛けた。夜はドナーの方々を招待したカクテルパーティーがあり、様々な州から来られたリザルツ関係者の方とお話できた。その後は、リザルツカナダとオーストラリアの 30 周年を祝ってカラオケ大会が行われた。カラオケの機械があるのかと思ったら、まさかの生演奏。みんな食べ、飲み、歌い、踊り、大盛り上がり。
6 月 27 日	**【ニュース】感染症備え十分か(日経新聞)** 日経新聞(6 月 27 日・13 面)に感染症対策についての記事が掲載されていた。8 月のリオデジャネイロオリンピック開催を控え、蚊が媒介するジカ熱、デング熱への警戒が続いている。対策は十分なのかを検証している。ジカ熱は、3 年程前は数カ国・地域で感染者が見つかる程度だったが、2016 年 6 月 15 日時点では【60 カ国・地域】に広がっているそうだ。日本では、2013~14 年頃に海外で感染した患者が出始め、2016 年は海外で感染した患者が 7 人いた。デング熱については、2016 年に日本での感染報告はないものの、海外滞在中の感染者は 6 月 12 日時点で 145 人と、2015 年の同時期の 101 人を大き

	く上回っているそうだ。これに対し、・長崎大学のチームがブラジルで行う予定のジカウィルスの感染検査薬の評価試験・田中貴金属工業が進めているジカウィルスを短時間で検知できる試薬の研究開発・米イノビオ・ファーマシューティカルズ社が進めているワクチン開発など、世界中でジカウィルス制圧への対策が進んでいるが、現時点で、最も有効な対策はウィルスを媒介する「蚊」の駆除のようで、成田空港などでは、空港の全域でボウフラの成長を抑える薬剤を散布しているそうだ。
6 月 27 日	**リザルツ国際会議 3 日目** 本日はまず、「Poverty Project の専門家とグローバル・ヘルスメディアチャンピオン」というワークショップに参加した。初日の ACTION ステークホルダー・ミーティングで隣の席になり、仲良くなった Loyce Maturu もパネリストの一人として登壇していた。ジンバブエ出身の彼女は HIV を持って生まれ、10 才の時に両親と兄弟を結核で亡くした。さらに、その後彼女自身も結核に感染。辛い治療に加えて親族やクラスメートからは差別に合い、自殺を試みた事もあったそうだ。立ち直った今は、国際会議やメディアに自分の体験を発信することで、同じような境遇に苦しんでいる人の助けになりたい、と語っていた。続いては、大会場で Tony Hall 氏の対談があった。また、リザルツの紹介ビデオにはムハマド・ユヌス氏が登場していた。Hall 氏は、長年オハイオ州の議員として活躍され、現在は The Alliance to End Hunger という機関の代表を努めている。議員時代から貧困問題に精力的に取り組み、ノーベル賞にも 3 度ノミネートされた。彼はエチオピア大飢饉の時にアメリカ議員として初めて現地を訪問し、目の前で次々に餓死して行く子どもを目の当たりにして、大きな衝撃と無力感を感じたそうだ。その時のことが今も忘れられず、乗り越えることが出来ないからこそ、活動を続けているのだと話されていた。約 20 年前、Committee on Hunger(米国や世界の飢餓問題について議論する委員会)が議会から無くなることが分かったときには、自らハンガー・ストライキを決行し、メディアにも取り上げられて大きなムーブメントとなったそうだ。次世代のリーダーとなる若者達に対しては、「政治がおかしいと思ったら、議員に直接電話をしてみなさい。その一本の電話が、アメリカを、世界を変えるかもしれない」と強く呼びかけていた。その後は、2つの賞の表彰式が行われた。1 つ目は、貧困のない世界を作るために活躍した優れたジャーナリストに贈られる「Cameron Duncan メディアアワード」。受賞したのは、フロリダの日刊紙 Tampa Bay Times の Tim Nickens 記者。貧困を無くすことで、どのような経済効果をもたらすかを訴える社説を多く書かれた。2 つ目の賞は、「Bob Dickerson グラスルーツリーダーシップアワード」。リザルツに大きく貢献したボランティアの方々に贈られる。昼は、オーストラリア、インドのチームと結核議連の会合に関するミーティングを行った。午後もイベントは続く。私はマイクロファイナンスに関する分科会に参加した。バングラデシュの NGO、BRAC の代表 Muhammed Musa 氏もパネリストの一人で、技術指導とマイクロファイナンスを組み合わせた「Ultra-Poor Graduation program」に関する説明があった。このプログラムでは、最貧層に対してまずは無償で現金や食料を給付し、さらに貯蓄の指導や事業を始めるための訓練も行って、ある程度に収入が得られるまでサポートする。このプログラムを卒業して次にマイクロファイナンスで融資を受けられるようにするのが目的で、実際にこの活動によって多くの人々が最貧困の生活から脱することが出来たそうだ。同じくパネリストで長年ハイチで活動されている Anne Hastings さんは、バングラデシュで BRAC に出会って大きな衝撃を受け、ハイチにもマイクロファイナンスを導入したのだと熱く語られていた。本日最後に参加したワークショップは、「変化を生み出すストーリーの話し方」。効果的なアドボカシーのため、自分の体験をただ話すのではなく、いかに工夫して伝えるか。具体例を出しながら「話の中にパワフルでインパクトのある一文を用意する」「匂い、音、触感などイメージが再生されるような言葉を使う」など実践的なアドバイスが多く、とても参考になった。特に面白かったのが、「パブリック・ナラティブ」という手法。自分のストーリーを語って聞き手の共感を呼び(Story of Self)、聞き手と自分自身が共有する価値観を語り(Story of Us)、今何を

	すべきか相手に訴える(Story of Now)。この 3 つの要素を話の中に組み入れる事で、ロビーイングがより説得力のあるものになるだけではなく、人の心を動かして、共に社会を変える賛同者を増やすことが出来るそうだ。実際にオバマ氏の演説にもこの法則が頻繁に見受けられるということで、非常に効果が高いとか。本日参加した講演やワークショップはどれも中身の濃いものばかりで、とても勉強になった。
6 月 27 日	**小さな現場から大きなイニシアティブへ** 6 月 20 日(月)日本リザルツ事務所にて、国際協力機構(JICA)のアフリカにおける栄養改善への新たなイニシアティブについてお話を伺う機会があった。JICA を含め、栄養改善に関心のある NGO や研究機関、政府関係者 15 名ほどが出席し、このイニシアティブの枠組みを伺うことができた。これまで、途上国の子どもたちの命を守るべく、栄養改善の取り組みに関心を持つ NGO が集まって、様々な関係者に声を上げてきた。政府機関としては外務省、財務省、内閣官房と対話を続けて来ることができた。また、研究機関、国連機関、援助実施機関の皆様とも連携を深めるように情報共有を進めてきた。世界栄養報告書など、世界的な栄養改善の潮流を日本に伝えるイベントを開催することもできた。国会議員の皆様も途上国の栄養改善への関心は高く、国際母子栄養改善議員連盟も昨年設立されている。途上国の片隅で小さな支援事業を行っている NGO が、その小さな声を伝え、日本の ODA の政策や支援にその思いを託し、途上国の人々に裨益していくことを望んでいる。今回、日本の ODA の実施機関である JICA の新たな試みの方向性をその実施前に伺うことができたことを感謝している。この機会を通して日本の中で、栄養改善への取り組みにおける実施面での連帯が始まりつつあると感じている。これまでの政策中心の対話が、実施面での情報交換にまで広がっていることを感謝したい。事業規模も体制も異なるが、沢山の栄養改善への意思が、様々な情報共有と連携の中で、小さな現場から大きなイニシアティブまでつながって、人々に届くことを願う。
6 月 28 日	**リザルツ国際会議 4 日目** 本日は、グローバル・ファンドに関する講演に出席した。まずはグローバルファンドの Mark Dybul 事務局長からスカイプでメッセージ。グローバルファンドの為に活動し、大きな成果をあげている ACTION のパートナー、リザルツのメンバーに感謝の意が述べられた。昨日のイタリアに続き、今朝フランスが 2017 年からの 3 年間で 10.8 億ユーロ(約 1,200 億円)の拠出を発表したという速報が入り、会場が拍手に湧き起こった。グローバルファンドの Linda Mafu 市民社会・政治アドボカシーチーフは、「グローバルファンドは、これまでに 1,700 万人の命を救ってきた。その数は 2016 年末までに、2,200 万に到達する見込みです。世界中の誰もがグローバル・ファミリー。誰の命も取り残すことのないよう、活動に邁進していきたい」と語られていた。昨日、違うワークショップに登壇していた Loyce は本日の講演でもメインスピーカー。ただでさえ心が不安定になりがちな思春期の子ども達は、重い感染症に感染すると心を病んでしまうことが多いそうだ。医療支援を行うことはもちろん大切だが、心のケアも同じくらい重要だと強く訴えていた。現在 24 歳の Loyce さんも 12 歳の時に結核と HIV の感染が発覚したということで、当事者の言葉は重く、説得力があった。お昼にはリザルツオーストラリアのサラ、リザルツ韓国のサニーと再びランチ・ミーティングを行った。午後からは、様々なアプローチから子ども達の栄養不良の問題に取組む専門家達による講演が行われた。世界銀行の Keith Hansen 人間開発部副総裁は、乳幼児期のケアの重要性を繰り返し訴え、特に生後 1,000 日以内の子どもの栄養に投資することで、その国の

	将来の収益が 100 倍増えることを強調されていた。2 カ月前にリザルツが共催した GNR セミナーのために来日してくださった IFPRI の Lawrence Haddad 氏もパネリストの一人だ。母親の胎内にいるときから乳幼児期にかけては、脳の構造ができ上がっていく大切な時期なため、ここで十分な栄養を取れるか否かで、子供の一生が左右されるとのこと。この時期に栄養不良になると、ニューロンの数が少なくなり脳が小さくなってしまうそうだ。African Early Childhood Network の Lynette Okengo 代表は、幼児教育の重要性をお話されていた。すると 2 日前の Joanne の講演で見たものとよく似たイラストが。Equity(公平にすること)を伝えるためのこの表現、有名みたいだ。その後は、リザルツのグラスルーツ理事会選挙に向けた演説があり、候補者がリザルツにかける熱い気持ちを語った。投票は 7 月 5 日までだそうだ。最後に、明日のアドボカシーの日に向けた準備会合に参加した。キャピトルヒル(連邦議事堂)に行くグループと世界銀行に行くグループに分かれており、私は栄養関連のアドボカシー会合に出席するため世界銀行に行く。準備会合では、世界銀行の最近の動向や、質問の中身について簡単に確認した。
6 月 28 日	**「TICAD Ⅵの開催と今後のアフリカ支援」セミナーに参加** 国際開発ジャーナル社主催によるセミナーに参加した。テーマは、「TICAD Ⅵのポイントとは何か、アフリカ向け無償資金協力はどう動くか」の 2 つだ。TICAD Ⅵのポイントについては、外務省国際協力局国別開発協力第三課課長の今福孝男氏、アフリカ向け無償資金協力については JICA 資金協力業務部の佐々木隆宏氏がプレゼンをされていた。以下、要点を書き出す。 【アフリカの課題】・紛争・政治的混乱が依然として勃発→平和と安定の達成が課題・深刻な貧困・開発問題、格差が存続→貧困削減、均衡ある開発が課題(MDGs 達成の遅れ、極度の貧困、感染症、食糧危機等)、特に強調されていたのは、「貧困削減&持続的開発」だった。 【TICAD のポイント】・パートナーシップとオーナーシップを重視・官民一体となった対アフリカ支援・一国一国レベルではなく地域統合の視点・質の高いインフラ投資の促進・人材育成への協力、そして、今回のⅥでの最重要ポイントは以下の「新たな課題」に関する対応だ。・エボラ出血熱の流行と保健システムの脆弱性への対応・暴力的過激主義の拡大とテロ多発の拡大への対応・国際資源価格の下落への対応・開発と貧困削減に向けたアフリカ自身の取組の推進。一番初めの「エボラ出血熱の流行と保健システムの脆弱性への対応」のついては、UHC の構築、これに尽きる。我々のアドボカシー活動と直接つながってきた。 【無償資金協力の運用改善について】最初に「無償資金協力」とは、JICA が行っている開発途上国に対する返済を課さない資金協力のことで、開発途上国の経済社会開発の発展に必要な資機材、設備、役務を調達する資金を供与するものだ。無償資金協力が抱える主な課題は以下の通りだ。課題：入札不調不落・調査不足・設計積算不備・様々なリスク(治安、紛争、為替、感染症、先方政府手続き・予算ギャップ・人材不足他)、入札自体がうまくいかないと何も始まらない。また、入札がまとまり、工事が実施されると、新たに様々な課題が生じる。これに対し、JICA は細かく現状分析をし、改善策を講じているそうだ。改善策は先方(施工業者)負担事項の履行強化・予備的経費の本格導入・調達ガイドラインの改定・調査内容の充実化・モニタリング体制の強化。一つ一つの課題に対して、当たり前のことを当たり前にやるという佐々木氏の言葉が印象的だった。
6 月 28 日	**第 11 回事例勉強会** 6 月 23 日(木)19 時から、第 11 回事例勉強会が開催された。AFCC (ASSOCIATION OF FAMILY AND CONCILIATION COURTS)から、2016 年 4 月に発刊された論文集から関連のありそうな 2 編の論文をリザルツのスタッフとインターンの 2 人の若者が必死になって翻訳してくれた。1 編はドイツの、もう 1 編はスウェーデンの論文で、どちらも裁判実務だったり家族法だったり

	の知識が必要な…、日本語で読んでも難しい内容だったが、難しさを楽しみながら翻訳に取り組んでくれた 2 人と、その訳を日本語だけで読んで頭に入ってくるよう編集してくれたスタッフに本当に感謝している。訳してもらったものは、らぽーるが大切に保管し、弁護団の先生方が必要に応じて裁判等で引用されたりすることになった。そして、この若者のがんばりに触発されて 2 人の"大人"が、新たに翻訳が必要となった論文を自ら翻訳するとお申し出になった。こういう若い方から広がる"がんばりの連鎖"って美しい。若い方といえばもう 1 人、今回の事例勉強会には、若くてかわいらしいゲストが来てくださった。ボランティアでらぽーる設立当初から支えていただいている方のお嬢さまです。勉強会の日の朝、フランスから到着したばかりでお疲れのところ、母娘で参加してくださった。フランスで離婚後、50%と 50%で共同養育を実践していたという彼女が「両親が離婚したら、子どもは 2 つの家それぞれに自分の部屋があって…、両方の親に愛されながら成長していけたんじゃないかと思う…」と話すと、お嬢さまは「両方の家にちゃんと自分の居場所があって安心できた」と話され、皆さん、聴き入っていた。
6 月 29 日	**SDGs を括る 2 つのキーワードの起源** 持続可能な開発目標(SDGs)が発表されてから、ずいぶん時間がたった。開発にずっと関与してきた人にとってみれば、その目標に馴染んでしまい、もはやあまり新鮮さは感じられないのかも知れない。少し開発の世界から離れていた私は、まだミレニアム開発目標(MDGs)の時代を少し懐かしく思い返したりする。2016 年 JANIC の総会の第 2 部の対談の中で、包摂性(Incluvise)と普遍性(Universal)という SDGs の鍵概念ともいえる言葉がスクリーンに映しだされた。包摂性は「誰ひとり置き去りにしない:none left behind」で、普遍性は「先進国と途上国に共に適用」ということであり、SDGs の精神でもある。このようなキーワードがどのように表舞台に出てきたのだろうか?個人や当事者のコミュニティ、市民社会の内側ではずっと、考えられてきたのだろうけど、多くの人々が目にする政治的なイベントという意味での表舞台だ。Health for all は 1978 年のアルマ・アタ宣言に起源がありそうだし、education for all はタイのジョムティエンで開催された「万人のための教育(EFA)世界会議」に端を発する。"all"はかつて多くの目標に入れ込まれたものの、数よりも内容やバラツキの問題が大きくなり、"universal"が上位に位置づけるべき社会政策となったのかも知れない。"universal"は、社会福祉のノーマライゼーション(normalization)の手段、あるいはデザインの分野でよく見かける。で、"incluvise"。格差や社会的排除(social exclusion)を問題にするときの対立概念として、社会的包摂(social inclusion)がヨーロッパを中心に使われだしたとある。人権をめぐる規約や条約の歴史とも重なる。個人的には、日本にコミュニティ心理学をもたらした山本和郎氏の著作にある「決して切り捨てのない社会」がよりぴったりくる表現か。ただ、排除されるかも知れない対象者の声をきくこと、また、当事者が声を出せるという前提条件があることを忘れないでおこう。
6 月 29 日	**リザルツ国際会議 5 日目** 本日はリザルツ国際会議の目玉イベント、「アドボカシーデー」だ。一部のグループはキャピトルヒルへ、一部は世界銀行へと向かう。私は世界銀行グループの保健・栄養・人口部門(HNP:Health Nutrition and Population)の会合に出席させていただいた。世界銀行本部の建物で入館証を受け取り、HNP が入っている別の建物へ。一つ一つの建物が大きい上、いくつにも分かれており、規模の大きさに圧倒される。参加者は ACTION 事務局とイギリス、インド、韓国のチーム、私の 10 名程だ。まず、世界銀行 HNP の担当者から、グループに関する説明があった。世界銀行は、感染症の予防や母子保健、栄養改善などに積極的に投資しているが、その中でも HNP は、特に途上国における貧困層を対象に調査・分析・評価を行っており、より効果の高い融資を行うべく現地に密着した活動を行っているとのこと。ただ、栄養問題に関しては、なかなか改善されたという成果が指標で見えにくいので HNP としても苦労され

	ているそうだ。話は今年 8 月にナイロビで開催される TICAD にも及び、日本の栄養に関する新たなイニシアティブについて資料をお渡しして説明すると「ちょうどこれについて情報が欲しいと思っていたところなのよ」ととても喜ばれた。アドボカシーというよりは情報共有と質疑応答をメインとした会合で、終始和やかな雰囲気で行われた。各々の会合が終わると、一日の締めくくりにレセプションが行われた。これまで何度かお話したボランティアの方やパートナー団体との方とも再会し、今日の活動について報告し合った。レセプションの最中、Sherrod Brown 民主党議員からスピーチが行われた。アメリカの男女格差や、住宅問題、低所得者の栄養不良問題に言及し、貧困問題に精力的に取組むリザルツに感謝の意が述べられた。本日は連日の会合に比べると比較的ゆったりしたスケジュールで、皆さんもいつもよりリラックスした表情だった。明日は ACTION のディレクターズ会合が行われる。
6 月 29 日	**【Gavi】Gavi の理事会はマラリアワクチンの試験的導入プロジェクトへの支援に合意** 先日発表された、Gavi のプレスリリースを紹介する。「Gavi の理事会はマラリアワクチンの試験的導入プロジェクトへの支援に合意」：ンゴジ・オコンジョ-イウェアラ理事長のもとでの初の理事会で、Gavi はマラリアワクチンのパイロット・プロジェクトに対する資金調達について決議した。2016 年 6 月 23 日、ジュネーブ:Gavi ワクチンアライアンスは、WHO のマラリアワクチンに関するパイロット・プロジェクトを支援する用意がある。本日の Gavi 理事会会合で、アライアンスは最大 27.5 百万米ドルを同プロジェクトの第一フェーズに支援すると決定した。支援は他の組織も同様の財政支援を行う場合にのみ実施される。このパイロット・プロジェクトは、GSK が開発した RTS、S マラリアワクチンをどのようにアフリカに導入するか、現実的な視点から検討するために行われる。このワクチンを導入した場合接種は 4 回必要だが、うち 3 回は子どもを対象とする通常の予防接種スケジュール外で行われることになるからだ。マラリアで死亡する人々は年間 44 万人に上るといわれているが、このパイロット・プロジェクトにより、ワクチンによる死亡率の削減について更なるエビデンスが集まることにもなる。世界保健機関(WHO)は現在パイロット・プロジェクトの最終化をしている最中で、WHO の SAGE(予防接種に関する専門家グループ)及び MPAC(マラリアに関するアドバイザリー委員会)の助言を受けて、アフリカにおける三箇所のパイロットサイトを選びプロジェクトの実施を開始する予定だ。ンゴジ・オコンジョ-イウェアラ Gavi 理事長は述べている。「マラリアワクチンの実用化はさまざまな機会をもたらすと共に、試練も予想される。それらに対する理解を深めるため、Gavi はこの世界初の試みを支援する準備がある。マラリアはアフリカにとって大きな重荷となっている。本日理事会に出席しているアフリカ諸国の保健大臣のおっしゃるように、マラリアワクチンがコミュニティにもたらす影響を理解することは不可欠なのだ。我々はこのパイロットを実施するための資金を募るため、他の機関にも働きかける」また、Gavi の CEO のセス・バークレー博士は述べている。「データによると、マラリアワクチンはアフリカにおけるマラリアの死亡率削減に大きく貢献する。RTS、S ワクチンは臨床第三相において 39%の有効性を示した。今回のパイロットでは、ワクチンが現実社会で接種された場合のインパクトを調査する。最終的には、現行の他の手段と組み合わせることでこのワクチンがマラリアとの戦いにどのような価値を持つのか、保健関係者が判断する手助けとなる」そして、WHO のマラリアプログラム長のペドロ・アロンソ博士も述べている。「マラリアワクチンは何十年もの間、近代医学における'聖杯'だと言われてきた。Gavi による財政支援は、アフリカで何万人もの命を救う可能性を持つ第一世代のマラリアワクチンの実用化のパイロットを助ける」欧州医薬品庁は 2015 年、科学的な観点から RTS、S マラリアワクチンを支持した。WHO もこのワクチンに対し上記パイロットの開始前に事前承認を与える予定だ。アフリカでの臨床実験では、RTS、S ワクチンを子どもたちに 4 回接種した場合、39%の確率でマラリアを予防するという結果が出ている。これは現在入手可能なその他の予防・治療ツールと組み合わせて使用した場合だ。このワクチンの効果は非常に高く、200 人ごとに 1 人の子どもの命を確実に救うことができると予測されている。今回の理事会では、パイロット・プロジェクトの実施にあたって関係者の協力が必要なこと、また、現段階で不足している資金を調達する必要があることが確認された。また、本日の決定は、将来 Gavi がマラリアワクチンやその他のワクチンのパ

	イロット・プロジェクトに財政支援を行うことを確約するものではないこと、プロジェクトの進捗に応じた定期的な報告が不可欠であることも同意された。本日の決定は 2017 年から 2020 年にかけて実施されるパイロットの第一フェーズにのみ関わるもので、第二フェーズへの財政支援は改めて Gavi 理事会の承認を必要とする。もし第二フェーズが成功し WHO が同ワクチンの本格的な導入を推奨すれば、Gavi 理事会はアフリカにおける導入を財政支援するかどうか再度検討することになる。
6 月 30 日	**リザルツ国際会議 6 日目** 本日は ACTION のディレクター会合が行われ、日本リザルツの白須代表を含む、各団体のトップが 2017 年~2021 年の 5 年間のフレームワークについて話し合った。ACTION ネットワーク全体としての今後の行動指針を決める大切な会議ということで、議論は多いに盛り上がり、一日中激しい意見が飛び交ったそうだ。会議は 2 時間近く延長されてようやく本日分が終了し、その頃には皆さまクタクタにお疲れの様子だった。この会議には団体の代表のみが参加を許されるため、私はその間お休みをいただき、ワシントン市内を観光した。ワシントンの中心にある国立公園の周辺に観光名所が集中しているため、すべて徒歩で回ることが出来た。連邦議事堂、議会図書館、スミソニアン航空宇宙博物館、ワシントン記念塔、第二次世界大戦記念碑、リンカーンメモリアル、ホワイトハウス。明日の朝も飛行機の時間ギリギリまで白須代表が ACTION のディレクター会合に出席し、それから帰国予定だ。
7 月	
7 月 1 日	**新しい抗 HIV 薬の承認** 新しい抗 HIV 薬が承認されたニュースを紹介する。【抗 HIV 薬「ゲンボイヤ配合錠」の承認】現在日本には、25 種類以上の抗 HIV 薬がある。今回、2016 年 7 月 8 日より鳥居薬品が販売を開始する薬品名は、ゲンボイヤ配合錠というもので、1 日 1 回 1 錠の服薬によって治療を行う抗 HIV 薬だ。日本たばこ産業株式会社によると、米国及び欧州では、既に 2015 年 11 月に本配合錠の承認を取得し、Genvoya という製品名で販売している。2013 年より国内で販売している抗 HIV 薬スタリビルド配合錠という薬品には、テノホビルジソプロキシルフマル酸塩(TDF)が配合されているが、TDF は腎臓や骨への悪影響が懸念されている物質だ。しかし、今回の新薬ではテノホビルアラフェナミド(TAF)に置き換えたことで、TDF の安全性上の懸念であった腎臓や骨への影響が軽減されることがわかった。日本では、一日に約 4 人が新たに HIV に感染していると言われているが、今回の承認により、薬の使用が進めば、AIDS 発症者数の減少が期待される。結核と HIV には、実は深い関係がある。【結核と HIV の二重感染】結核と HIV の病気の二重感染が、世界中でとても深刻な問題になっている。HIV で免疫力が低下すると、他の病気にもかかりやすくなる。そして、結核に感染する確率も大幅に上がる。なんと、HIV 感染者の死因第一位は結核であるとも言われている。日本リザルツでも『STOP 結核キャンペーン』を行い、結核の制圧に向けて様々な取り組みをしている。万が一、HIV/AIDS や結核に感染した疑いがあったら、放っておかず、早めの検査をして欲しい。放っておくと、自身の健康が損なわれるだけでなく、知らず知らずのうちに周辺の人にも感染してしまう恐れがあるからだ。
7 月 1 日	**リザルツ国際会議最終日** 6 月 30 日、前日に引き続き ACTION のディレクター会合が行われた。日本リザルツは、午前中だけ白須代表が参加し、TICAD に向けた動きなど ACTION 全体の栄養戦略について話し合った。今回初めて参加したリザルツ国際会議では、様々なワークショップに参加した。世界中から集まった人々と触れ合う中で、とても良い刺激を受けることが出来た。自分の勉強不足や貧困問題に取り組む姿勢の甘さを痛感し、恥ずかしくなることもあったが、今回学んだことを活かし、成長できるよう頑張っていきたい。

７月２日	**伝えることは奥深い** 授業の中で、私の人生観を変えた、素晴らしい本を紹介したい。「見田宗介著　社会学入門-人間と社会の未来(岩波新書)」という本だ。見田先生は、日本を代表する社会学者の一人。が、現代の社会問題のすべては、一つの学問では解決できず、経済や法、政治、宗教、倫理、教育、メディア、テクノロジー等々を横断的に統合しなければ解けない問題であるとしている。子どもの貧困問題は、単なる、社会福祉・経済だけの問題ではない。特に、この本の始めに書かれていることに心打たれた。「初めの炎を保つこと」その志＜初めの炎＞を保つこと、自分にとって、時代にとって、人間にとって、あるいは人間を含む一切の存在にとって、本質的な問題を問いつづけるために、そしてこの問題を問いつづけることのためにだけ、あらゆる個別の学問の領域を仕切る国境を超えつづけること。私の＜初めの炎＞とはなんだろう。先日受けた新聞のインタビューで頂いた宿題の答えは、この炎なのではないかと思っている。
７月３日	**熊本日誌①** ７月１日の夜から熊本に来ている。７月２日、午前中はホテル周辺を歩いた。繁華街からは少し離れているが、熊本市総合子育て支援センターまで歩いて10分ほどのところだ。熊本市内は地震が起こる前の生活に徐々に戻りつつあると報道されているし、地元の人と話してみると聞こえてくることがある。まず、ホテルの隣のマンションの駐車場を見て言葉を失った。全体にアスファルトがうねっているかと思うと突然7~8 センチくらいの段差が 10 メートルくらいにわたって現われていたり、植え込みを囲うレンガが写真のとおり崩れていたり…そんな駐車場ですが、車はきれいに駐車されていた。柱もシャッターも斜めになってしまった建物には「危険」を告げる赤い紙が貼ってあった。熊本は現在、住宅が全壊して避難所生活が続いている方々の多いところから、被さいが少なかった地域や人々は震災前と同様に暮らせるようになったところまで、地域ごとに、またその家族や人ごとに様々な状況があるようだ。ホテルの近くの洋品店で開店準備をされていたご夫婦に少しお話を伺うことができた。キミドリ T シャツを着ていたが、やはりメッセージ性のある T シャツ効果というのは確かにあって、あちらから話しかけてくださった。お話の中で「(普通の生活に戻ったように見えるけど)熊本の人(女性)は我慢強かけん」と話していた。前述のマンションの住人の方々も、駐車場がうねっていても、段差ができていても、我慢されてきちんと駐車されている。きっと、もっと大変な思いをいまだにされている方も、大切な家族を亡くされた方もいらっしゃる、そんな想いで目の前の不便さや不安などをぐっとこらえて、我慢されているにちがいないだろう。元々我慢強い気質であったなら尚更だ。午後には、熊本市総合子育て支援センターでの母子カウンセリングに参加した。私には施設も新鮮で、小さいお子さんはしぐさも表情もかわいくて、こちらが癒された。臨床心理士の入江純子先生は、すごく自然に親子と関わる中で母親から悩みを引き出していたし、小児科医の室英理子先生は、お子さんの小麦アレルギーについてなど積極的に親御さんからの質問を受けていた。先生方と打合せやフィードバッグを行う中で、「夫婦仲がうまくいっていないので、子どもが親の顔色ばかり見るようになってしまったという相談もあった」という話題が出たので、らぽーる事業について資料をお渡しして説明ができた。名刺交換の際に少しお話はしていたが、詳しい説明は関連する話題が出た時に、と決めていた。思っていたとおり、効果的に説明できた。日本では都市部であっても「離婚」という言葉を忌み嫌ったり、タブー視しがちだが、これだけ数が増えてきたからには、正面から向き合うべきだと思う。そして、カウンセリングも、もっと気軽に通えるようにしていきたい。(本事業は、ジャパンプラットフォームに助成いただき実施している)

7月4日	**熊本日誌②** 今日は、熊本市内で活動した。まず、「ひごっこ親子でお出かけすくすくマップ」というリーフレットを手に、日曜日に開いていてお話を聞き、「らぽーる」の取り組みを紹介できて、リーフレットを置いていただける可能性のありそうなところを探した。該当する施設は児童館、図書館、そして「母子・父子福祉センター」だ。そりゃもう、「母子・父子福祉センター」でしょう!と思い、バスを乗り継いで行った。雨が降ったり止んだりで蒸し暑く、後で鏡を見てびっくりしたが、湿気で髪の毛がひどいことになったまま、事前のお約束もなく突撃訪問してしまった。「母子・父子福祉センター」は郊外の静かな住宅街の中にある。植木はきれいに整えられ、建物はシックで素敵だ。女性の館長さんで社会福祉士の竹原さまという方が対応してくれた。今日は珍しく静かな一日なのでと、いろいろなエピソードや、館内をご案内くださったり、母体である社会福祉法人の事業内容を説明くださったりして、気付けば 2 時間以上居座ってしまった。とても優しく受容的で、それでいて頼りがいがあって…、離婚の混乱の中で竹原さまのような方に出会えたら、センターで用意されている手厚い就業支援(たとえばパソコンなら、基礎からパワーポイントまでのコースがあり、簿記、マナー、医療事務等も、検定受験料とテキスト代のみ自己負担で受けられます)を利用して自立を目指そうという気持ちになれるだろう。センターでは就業支援の他、親向け、子ども向けの教養講座や茶話会、親子で取り組めるライフプランを考える会、お料理教室、子どもの科学実験など、本当にひとり親家庭のニーズに合った、痒い所に手が届くサービス内容が用意されている。施設内のインテリアなども落ち着いていて、バブル全盛期にできたので、床のタイルも信楽焼だったりして豪華だ。地震の時も本や食器はずい分落ちて壊れたし、業務用冷蔵庫も大きく動いたけれど、建物はなんともなかったそうだ。ひとり親家庭の親の自立を応援し、親と子に居心地のよい居場所を長期にわたり提供し、見守り続けるセンターの存在意義は大きいが、竹原さまの存在が、センターのサービスをより人に寄り添う質の高いものにしているなぁ~と感じた。とても勉強になって得るものの多い 2 時間だった。東京にいらしたらリザルツにお寄りくださるそうで、もちろんらぽーるリーフレットもおいてくださるそうだ。面会交流で合意のない父母間の間に入ることの難しさについても、違う立場から今後意見や情報交換ができそうで、出会いに感謝しながらセンターを出た。その後は、くまモンスクエアでくまモンに会いたかったのだが、小さいお子さんの間をかき分けて前に出るわけにもいかず、遠巻きにちょっとだけ見た。くまモン出動時間後に、缶バッジなどを購入した。その後、お城の石垣の様子を見に行くなど、とにかく街を歩き回った。商店街も百貨店も、夏のセールやお中元の売り出しなどで賑わい、「がんばろう熊本」のエネルギーをいっぱい感じた。でも、昨日も書いたが、表面上は日常を取り戻したかに見えても、やせ我慢だったりするかもしれない。そこにメンタルケアを紹介したり、気負いなく受けられる体制づくりを続けていったりしたいと思う。がんばろう熊本、支え合おう熊本、心ひとつに。
7月4日	**【ニュース】結核、低まん延国へ新目標　東京五輪に向け厚労省** 今日は結核の最新ニュースをお届けする。 結核、低まん延国へ新目標　東京五輪に向け厚労省(日経新聞 7/1) 厚生労働省の結核部会は 1 日までに、1 年間に新たに結核と診断される患者数を 2020 年までに 10 万人当たり 10 人以下とする目標を定め、対策を強化していくことを決めた。10 人以下は世界保健機関(WHO)が定める結核の低まん延国の条件。日本は先進国の中では結核の罹患(りかん)率が高いことが問題となっており、20 年の東京五輪・パラリンピックまでの達成を目指す。今年の夏をめどに予防指針を改正し、新目標を盛り込む。結核の蔓延の「高・中・低」の定義だが、WHO によると、結核低まん延国は罹患率が人口 10 万人当たり 10 以下、中まん延国が 20 以上 100 以下、高まん延国は、100 以上

	と定義されている。日本は今、中まん延国だ。諸外国と比較した日本の結核届出率のグラフを見ると、日本はやはり高い値だ。結核は誰でもかかる病気だ。咳や痰が 2 週間以上止まらない、胸に痛みがあるなど、気になる症状をお持ちの方は一度検査をぜひ受けて欲しい。
7 月 4 日	**栄養改善の成果** 第 127 回 6 月 23 日、GII/IDI に関する外務省/NGO 懇談会が行われた。これは保健分野で活動する NGO と外務省との定期的な対話の時間だ。日本リザルツも参加し、G7 伊勢志摩サミットの成果における食料安全保障と栄養改善に関することを伺った。 G7 伊勢志摩サミットの成果として発表された「食料安全保障と栄養に関する G7 行動ビジョン」には、エルマウ・サミットで掲げた「2030 年までに途上国において 5 億人を飢餓・栄養不良から救出する」という目標を達成するために G7 が取る行動は列記されているが、資金約束や具体的な個別の時限等の計画はなく、個々の国に任されているものだった。この点について伺うと、昨年のドイツでのエルマウ・サミットでも、投入する金額自体よりも支援の結果としての成果を重視することとなり、資金目標という形では示さず共通の成果目標を示したという説明に留まった。これに関連するものとして、G7 は食料の安全保障、農業・栄養への支援資金額を一貫してモニタリングできる、透明性の高い共通の支援資金報告手法を今年中に策定予定であり、作業を進めているということ、また 3 年に 1 度の包括的な G7 進捗報告書の食料安全保障・栄養に関するエルマウ・コミットメントの部分では、小規模農家を対象とした支援プログラムの割合や、女性の能力強化(ジェンダー支援)の目的を持った農業プログラムの支援額の割合などが捕捉されることとなるという話をいただいた。確かにこのフレームワークの中で弱い立場に置かれた人々への支援、そして、そこにどの位資金が投入されたかを捕捉することができれば、達成状況とそれに向けた努力を見ることができることになる。WHO 国際栄養目標 2025 には 6 つの目標があり、国連で定めた持続可能な開発目標も 2030 年までに飢餓の撲滅や栄養不良の解消を明示している。こうした世界的な目標の対象者毎の達成状況や資金拠出が確認できれば、達成に向けてモニタリングをし、必要な対策を取っていく助けになる。説明責任を強化する支援資金報告手法が策定され、世界で定めた目標に日本も貢献し、効果的な支援が行われることを願う。
7 月 4 日	**インターンはなの『初めての～～』・その 3『初めての名刺』** 今回の投稿は初めての名刺についてだ。まさか正社員ではない、大学 1 年生の私にまで名刺を作っていただけるなんて、夢にも思わなかった。名刺は海外でも『business card』として、ネットワークのために使用されているが、日本ではとても特別な意味を持っていることについて、今回のブログ投稿を通じ、説明したい。もしかしたら先週の投稿と違って、とても読みにくい内容になるかもしれないが、ご了承して欲しい。海外育ちの私が、リザルツに訪れる方々と社員たちの交流を見て疑問に思ったのは、名刺がなぜ自己紹介の過程で重要視されているかだった。もちろん、挨拶をし、名前を述べ、日本特有の『おじぎ』をしますが、その上に名前・肩書き・連絡先が記してあるメモ用紙のような薄っぺらい紙を渡すのは、最初、とても不審に思った。そのような薄っぺらい紙だけで本当にその人の事がわかるのか。名前・肩書き・連絡先だけで、相手の『人間性』を本当につかめるのか。人間は名前・肩書き・連絡先だけの存在(動物)ではないと思う。私は机に積み上げられた数十枚の名刺を見て、先ほど会った方々の顔を思い出せない事に、心がとても痛んだ。社交的な場で、大勢の人々に囲まれながら一人一人、相手の情報を集めるのは時間的に不可能だ。そんな時、名刺は簡単に数十人と同時につながることができ、情報を入手できるとても便利なツールだ。相手の情報(連絡先など)がシンプルに記されているのは、後々の交渉などを容易にするなど利点が多い。それでも、他の動物にはない人間特有の『挨拶』を、便利で『システム的』な過程にするのは、本当に良いことなのか。私は、お互いを知るための過程をなるべく簡易にしたいという人間の怠惰さを少し感じてしまったのだ。という事で、今週は初めての名刺を通じて、『人間を人間にするのはなにか』との、とても変わっ

	た、哲学的な考えをさせていただいた。分かりにくい内容で申し訳ない。残念ながら、出会えた人々を一人一人と名前・肩書き・連絡先以上の内容を把握するような、お互いの『人間性』を大事にするようなユートピアは逆に想像しにくいかと思う。多分、ここに来て仕事が始まって早々に、色々な社交的な活動(会議など)に参加し、大勢の人々が名刺交換をしているのを初めて目撃したのが、海外育ちの私にはとても衝撃的な経験だったのだと思う。それより何より、リザルツでは名刺のような、ネットワークに必要な道具を大学生のインターンが作っていただけるのだ。国際交流に重要なプロフェッショナリズムもアップした。次回の『初めての～～』を経験するのをとても楽しみにしている。
7月4日	**ダッカの痛ましい事件** 開発途上国で働いた経験のある人、あるいは今まさに開発途上国で働いている人ならば、この事件を通じて様々なことを思われたに違いない。あの国でなぜこんなことが起こってしまったのか、これからどうなるのかという不安が湧き起こったかもしれない。ただ、なんといってもその命を、その存在を、つながりを持った方々との関係と人生の軌跡が、そこで断ち切られたことに対して、表現尽くせない苦悩を想像すると、私も体が硬直する。実は、その渦中にあって、この困難な状況にありながら、大きな責任を負いつつ、傍らにいなければならない方を知っている。昔、お世話になった方だ。その方のことが心配だ。　普段は目を凝らしても見えないつながりが、あるとき、ふと立ち現れる。ふと立ち現れるつながりは嬉しい方がいいが、悲しみを分担するというのもありだ。つながりを作る活動がその時は実を結ばなくとも、ある日ふと役立つような、そんなつながりがあるだろう。熊本の被さい地からの活動報告をみて、そう思う。
7月4日	**「聴く」ということ** 先日、家の近くで開催された「傾聴研修会」に参加した。主催は、地域で女性のための電話相談を行っているボランティア団体で、約 40 名の参加者がいた(そのうち男性は 1 名だけ)。2 時間という限られた時間だったが、産業カウンセラーによる講義に続いて、参加者間で実習を行うなど、とても充実した研修だった。講師の言葉で印象に残ったことは、「聞く」と「聴く」は違う、ということだ。聞く:音や声などを耳に感じとること。聞こえる、聞いて知るなど受身的である。聴く:聴こうと努力する。心を込めて聴く。積極的に耳を傾ける、という意味だ。研修を終わって感じたことは、良い聴き手になるには、技術的な面はもちろんのこと、何より忍耐強く、話し手の心に寄り添う気持ち、一緒に考えていこうとする気持ちが大切である、ということだ。2 時間の研修で良い聴き手になれたとは思いませんが、学びや気づきをこれから仕事やプライベートで少しでも生かしていけたらと思っている。
7月5日	**熊本日誌③** 7 月 4 日(月)の相談会は午前中だった。「お集まり」という読み聞かせがあり、0～2 歳のお子さんとお母さんが集まった。静かにお話に聴き入る姿がかわいかった。その後、お子さんを遊ばせながら、担当の先生がお母さん方の様々なご相談に応じられた。0～2 歳というと、目が離せない年頃なので、お母さんがご相談中は私たちがお子さんのお名前を呼び、一緒に遊んで待っていた。私が滞在中のホテルから子育て支援センターまでは歩いて 10～15 分だが、大きな橋を渡って行く。先日の大雨の足跡で、橋げたに木の枝がいっぱい絡みついているのを見つけた。本来、道だったであろうところにも土砂が積もっていた。大変な大雨だったことが分かる。午後は日本財団さんの事務所をお借りして事務仕事を行った。私たち以外は、時々他団体の方がお一人で来られて 1 時間ほどいらして、またお出かけになる感じだった。静かで、コーヒーなどのお飲み物もいただけるし、気付くと 20 時前になっていた。20 時ごろには鍵が閉まるということで撤収した。蒸し暑い一日で、炎天下に歩くことも(現地スタッフは自転車でどこまでも行くことが)多いので、ばてないように体調管理していきたい。(本事業は、ジャパンプラットフォームに助成いただき実施している)

7 月 5 日	**弁護士の助っ人** 日本リザルツでは、母子メンタルケア事業の中で、6 月から総合子育て支援センターにて子育て相談事業を実施している。その一環として、8 月と 9 月に専門家無料相談会を予定している。熊本地震によって、勤め先が長期休業を余儀なくされてしまった人や職を失った人が多くおり、地震発生以降、熊本労働局には約 5700 件を超える相談が寄せられている特に幼い子どもを持つ親は専門機関に行く余裕がないことから、生活再建の目途が立たず、財政的にも精神的にも不安定な状況が続いている状態だ。そこで被さい者、特に子育て世帯を対象に、生活再建に向けて市内の各地区(中央区、東区、西区、南区、北区)で弁護士や医師、税理士、社会福祉士などの専門家を派遣した無料相談会を行うことになった。本日は熊本市総合子育て支援センターでの活動を終えた後、熊本子ども・女性支援ネットワークの方にご紹介していただいた弁護士先生の事務所にお邪魔し、日本リザルツの活動や本事業について説明した。こちらの先生は、地元住民のために水俣病やハンセン病などの問題に長年取り組んで来られ、以前は議員としても活躍されていたとのこと。本事業にご共感いただき、今回の専門家無料相談会にもご協力いただけることになった。地元の本当に多くの方々に支えられ、私たちの熊本での活動は成り立っている。有り難いことだ。(本事業は、ジャパンプラットフォームに助成いただき実施している)
7 月 6 日	**熊本日誌④** 7 月 5 日(火)の相談会は 10~13 時だった。9 時半から臨床心理士の入江純子先生と長野雅恵先生と打ち合わせをしていたら、ジャパンプラットフォーム(JPF)の皆さんが事業のモニタリングのために子育て支援センターにいらっしゃった。この事業は、JPF さんからの助成を得て実施している。入江先生、長野先生にはお子さんとお母さんの近くに行っていただき、いつものように相談をお受けいただき、リザルツの 2 名は JPF さんのインタビューをお受けした。事業が概ね、JPF さんに提出した申請書に沿って順調に進んでおり、変更事項があってもその理由や必然性が正当であると判断されるとのことで、モニタリングは 1 時間半ほどで無事終了した。ご指摘があったのが、熊本と東京のコミュニケーション、リザルツから JPF さんへの報告・連絡・相談をもう少し密に行いましょうという点だった。今後は十分に気を付けていきたい。JPF さんからは「よくこれだけ、地元の団体と連携したり、専門家の協力を得られたりしましたね」とお褒めの言葉も頂戴して、現地で 1 人で苦労してきたスタッフには自信と今後の励みにもなった。午前の相談会が終了して、空港行きのバスに乗ったが、最初は涼しかった車内が段々暑くなって、運転手さんに「冷房を強くしてほしい」等の声があがっていが、エアコンが壊れたとの理由でついに空港まで冷房なしだった。熊本は 35 度まで気温が上がったそうなので、車内の温度は 40 度を超えていたことだろう。空港についてバスを降りる頃には、皆さん、まるでシャワーを浴びたかのように汗びっしょりだった。私は、あまり汗をかかないので熱がこもってしまい、ずっと気分が悪く頭痛がして、軽い熱中症状態だった。それでも無事に帰宅することができた。東京は 21 度で、熊本との温度差に驚いたが、私にとってはありがたい涼しさだった。
7 月 6 日	**インターンはなの『初めての~~』・その 4『初めての特許庁でランチ』** 今回は初めて、特許庁の食堂で昼食を食べた経験について書く。まさか普通の大学 1 年生の私が、日本のために働く人々が食べる昼食を、道を一本隔てた所にある特許庁で食べることができるなど、夢にも思わなかった。さすが、最高のロケーションに事務所を持つ日本リザルツ!出来立てでヘルシー、ボリューム満点で美味しくて、その上激安(約 500 円)な定食を食べたが、味の感想とは別に、今日は特許庁のような省庁で 1 時間過ごして、実感したこと・心に残ったことについて語りたい。まず、大学 1 年生の私が気付いたことは、社員の皆さんの年齢。年齢は実際には本人に聞いてみないとわからないので、外見だけで決められないが、特許庁の食堂にいた方々はほとんど年配の方々だった。そしてその大半が、男性だ。政治学を専攻している女子学生として、これはとても気になることだった。私は、働いているのも年配の男性が多いということではないかと思ったのだ。もちろん、食堂にいる方達が全員職員ではないと思う。しかし、食堂にいる人々の属性には、全体の職員の属性が反映されていると思われる。若者と女性が少な過ぎる…。果たして、今

	の日本は若者や女性が政治・公共政策の場でも、実力を認められ、いきいき働けるような社会であるのか。そんな社会ではないのではないだろうか。省庁で働くのは、若者や女性にはあまり魅力的なことではないのか。もしそうであるならば、私は同じ若者として、そして女性として信じられないことだ。私たちを育ててきてくれた人々、社会、国に『恩返し』をするような国家公務員の仕事はとても素晴らしく、とても立派だと思うからだ。特許庁の食堂でのランチを通じて、もっと若者や女性が国家公務員として活躍できる日本になったらいいなと思った。それより何より、リザルツではアドボカシーの NGO として、最高のロケーションで大学生のインターンが働けるのが素晴らしいと思う。国会議事堂周辺なので、国の政治への興味もアップした。次回の『初めての～～』を経験するのをとても楽しみにしている。
7 月 6 日	**専門家相談会会場** 本日は業務の合間に、8 月 6 日に行われる専門家無料相談会会場の予約と下見に行ってきた。相談会は、中央区 2 回、北区 1 回、東区 1 回、西区 1 回、南区 1 回の計 6 回開催予定だが、初回は中央区にある「熊本市ふれあい文化センター」で実施する。私たちが普段活動を行っている、熊本市総合子育て支援センターから徒歩 10 分の距離だ。玄関には短冊の飾りつけが。そういえば明日は七夕だ。会場となる部屋は、本日舞踊サークルの方が使われていたため写真を撮れなかったが、明るく開放的で、複数の専門家による相談を同時に行うのに十分な広さだ。当日は多くのお母さん、お父さんに来ていただき、少しでも生活再建のお手伝いが行えるよう、準備を進めていきたいと思う。(本事業は、ジャパンプラットフォームに助成いただき実施している)
7 月 7 日	**つなみ募金の申請へ** 早いもので、私も入社してから昨日で一か月が経った。毎日、代表やスタッフから支えられ、日々勤勉している。さて、昨日は毎月経産省の前で行っている「つなみ募金」の申請のため、丸の内警察署まで行ってきた。つなみ募金とは、熊本地震、東日本大震災、ハイチ支援などの募金を呼び掛けるほか、私たちの活動を多くの方に知って頂こうと、パンフレットやクリアファイルを配布する活動だ。ちなみに、先月はこのような資料を配布した。今月は先月に比べ、リザルツの活動を少し理解することが出来、街中の人たちにより多くの情報提供が出来るかと思う。今月は、次の月曜日、7 月 11 日 12:30-13:30 頃に行う予定だ。なお、リザルツでは、現在も熊本はもちろんのこと、東北の支援も続けている。災害は、時間の経過と共に忘れられてしまうことも少なくない。しかし、実際にはその地域の方々の暮らしは、まだまだ大変だったりする。リザルツは少しでも多くの人々を助けられるよう今後も活動していく。私たちの「We love Japan」の T シャツの裏には、こんな言葉がある。HOLD MY HAND & WE WILL WALK TOGETHER(手を取って、一緒に歩こう)。来週月曜日お時間があえば、経済産業省前にぜひお立ち寄りいただきたい。
7 月 7 日	**大学とは何かを考える** 私は駒澤大学 GMS 学部に所属する学生だ。この時期は、長かった前期授業も終盤ということもあって、学生の中では「単位がほしい」と呟く友達がたくさんいる。さらには七夕である今日、大学の七夕飾りには「単位ください」と切実な願いを書いた短冊がぶら下がっていた。火曜の 3 限目に履修している社会学で先生がよくおっしゃっている。「授業受けて取得した単位を大学卒業のためだけの資格にするな」んー。そうだなと思う。最終目標が「単位=卒業」になってしまっている学生が多すぎると思う。なんで授業を受けているのか。なんで学んでいるのか。そう考えると授業にも力が入る。今、大学の力は計り知れないと確信している。授業はもちろん、いろんな専門書がある図書館、同じ学生の仲間、教授をつかまえれば研究室にも入り込める。学ぶ環境としては最高だ。ケニアにもネパールにも、世界中には学校に行けない子どもたちがたく

	さんいる。それを自分の目で見て、教育の重要性について身をもって感じた。大学に来て、授業に出ることができて、学ぶことができる。それがどれだけ貴重な体験なのか、こんな環境にいる我々にできることは何なのかを考えている。
7月7日	**「心のケア」は子育て支援** 本日の熊本日日新聞を読んでいると、「心のケア」は子育て支援という大きな見出しが目に入った。内容は、乳幼児健診の際に熊本地震を経験した子どもの心のケアに取り組むため、県が開催した研修会のレポート記事だ。そこで講演された専門家は「保護者の不安は子どもに投影される。保護者の不安を取り除くことがカギとなる。心のケアは子育て支援と一緒。被さいの程度にかかわらず、地域の子育て支援の中で、不安の解消に努めたい」と話されており、私達が現在、子育て支援センターで行っている活動の方向性に間違いはないのだと確信し、自信になった。また、記事の中では被さい者の心の動きについても紹介されていた。被さいすると、その人の心は①ぼうぜん自失期②ハネムーン期③幻滅期の順に移っていくそうだ。①は被さいから数時間後～数週間、ショックを受けてぼうぜん自失となる時期。②は「みんな一体となって頑張ろう」と精神的に高揚する時期で、数日から数カ月続く。③はメディアが災害を報じなくなり、被さい地以外の人々の関心が薄れ、被さい者が無力感を感じる様になる時期。いまの熊本は②から③にかけた時期にあると思う。「がんばろう熊本!」といった応援メッセージを街中の標識やローカルメディアで繰り返し目にする一方、全国区の新聞やテレビではほとんど震災について報じられなくなってきた。こうした時期にあるからこそ、被さいされた方の気持ちがストレスで潰されてしまわないよう、1人1人に寄り添って話を聞くことで、私達なりの心のケアを続けていければと思う。
7月8日	**子育て防災ハンドブック鋭意製作中** これまでブログの中で、日本リザルツの熊本事業として「子育て支援センターにおける子育て相談」と「弁護士や医師による専門家無料相談会」を紹介してきたが、実はもう一つある。それは「子育て世帯向け防災ハンドブックの作成」だ。避難所を離れ、現在自宅で生活している人々の中にも、震災後の子どものストレスに対してどのように対応したら分からない上、身近に相談出来る人がいなくて悩んでいるお母さん、お父さんが多くいるとメディアでも頻繁に報じられている。そのような中、同じ境遇にいる子育て家庭の悩みと対処法を知る事で、孤立感が解消され、さらに緊急時に必要な連絡先がまとめてあることで普段から安心して暮らせるのではないのかと考え、このハンドブックを作成することになった。これまでの子育て支援センターにおける活動の中で、親御さんから相談が多かった悩みや、それに対する専門家の先生からのアドバイスも参考にしながら盛り込んでいるので、「震災後の育児」という観点からはかなり実践的な内容のハンドブックになる予定だ。ちなみに、可愛いイラストが無料&著作権フリーで使えるサイトがあり、そこからたくさんのイラストを使わせていただいている。とてもカラフルで優しいハンドブックになる予定ですので、完成まで楽しみに待っていて欲しい。(本事業は、ジャパンプラットフォームに助成いただき実施している)
7月9日	**【結核ニュース】北九州市で21人集団感染** 国内で、また結核の集団感染が発生した。 【産経ニュース(7/8)】北九州市は8日、同市小倉北区の病院と高齢者施設で入院患者、職員計21人が結核に集団感染し、うち6人が発症したと発表した。 別の病気で入院し、高齢者施設にも出入りしていた60代男性が結核を発症。市はこの男性から21人に感染が広がったとみて、詳しい原因を調べている。市によると、60代男性は3月に結核と診断され、4月に死亡した。同室だった70代男性が5月に発症したため、病院がこの2人と接触した患者や職員計91人を検査し、集団感染が分かった。1人の患者さんから、接触した方々に知らぬ間に一気に広がる結核。空気感染の恐ろしさはここにある。夏バテなどで体が疲労し、免疫力や抵抗力が弱くなりやすいこの時期、我々も注意が必要だ。結核は誰でもかかる病気だ。咳や痰が2週間以上止まらない、胸に痛みがあるなど、気になる症状をお持ちの方は一度検査を受けて欲しい。

7 月 11 日	**ユキとニナ** 離婚、そして片親と離れて暮らすことをどう伝えるか?もちろん、子どもの年齢によって、理解のキャパシティというか、理解の仕方が異なるので、ただ伝えればいいというものではない。伝えるのは親の言い訳でも正当性でもなく、変わらない関心と親としての責任、安心であろう。らぽーる事業では、親教育の中でどうやって親が子どもに離婚のことを伝えるか学習するセクションがある。その伝え方について、親教育では時間があれば映画「ユキとニナ」で使われているシーンを見て学習したりする。あるタイミングで両親がそれなりに考えた伝え方で、離婚のことや離れてくらすことを彼らの子どもユキに伝える。日本人の母親とフランス人の父親はそれぞれにうまく伝えたのだけれど、ユキはショックを隠し切れず、仲良しのニナとともに家出してしまう。親子にかぎらず、親友間でもその行動や状況から、相手を察する感情と言葉が絶えず交されている。情動調律というそうな。「ユキとニナ」には、もうひとつのスレ違いもさり気なく、組み込まれている。国際離婚の問題だ。しかし、両親の関係はどうであれ、ユキの成長は続くし、両親の責任は変わらない。ユキが異文化の垣根を超えて、かつて住んだ国の親友ニナとも父親ともスカイプでつながるラストに、希望が見える。さて、先日、成長した「ユキ」が「らぽーる」に来た。真っ直ぐ目を見据え、「同じような経験をした子どもたちを救うために、弁護士をめざします」と、私たちに宣言したのである。
7 月 11 日	**【ニュース】黄熱病がアンゴラで大流行** 本日は、ワシントンポスト紙に掲載されていた「黄熱病の大流行」についての記事を紹介する。 「アンゴラの黄熱病流行は世界的危機になりうる」 ワシントンポスト紙 2016 年 6 月 27 日(抜粋)。 アンゴラの都市部で黄熱病が大流行している。そして、人口の大多数がワクチン未接種の周辺国に国境を越えて飛び火している。アンゴラでは 3,000 件、隣国のコンゴでは 1,000 件の感染が報告されており、すでに 400 人以上が死亡した。今後アンゴラにいる数千人の中国人によりウィルスがアジアに運ばれる恐れがある。アジアでは、農村部の貧困層のほとんどはワクチン未接種である。黄熱病は当初発熱、筋肉痛、吐き気等マラリアと似た症状を呈すが、次第に皮膚が腫れ、鼻、口、目から出血する。ここ数年 WHO は非常事態に備えて 600 万回分のワクチンを確保してきたが、速いスピードで拡大する流行を食い止めるには不十分である。アンゴラでは 600 万人接種キャンペーンが行われたが、未だ何百万人もの人々が未接種である。中国の農村地域で接種を行う場合、膨大なワクチンの量が必要となる。現在ワクチンを製造している主要な会社は 4 社あるが、流行を食い止めるためのキャンペーンに十分なワクチンの生産はできない。かつて欧米では黄熱病は疫病であった。1702 年ニューヨークでは人口の 10%を黄熱病で失い、1793 年にはフィラデルフィアで数千人が死亡、1878 年にはミシシッピで 13,000 人が犠牲になり、当時黄熱病は「アメリカのペスト」とさえ呼ばれた。しかしその後の予防接種と蚊駆除プログラムが功を奏し、米国では次第に姿を消した。今再び黄熱病が国政的脅威として浮上していることは、国や国際保健機関による備えが不十分であること、アフリカが都市化し相互接続した大陸へ変容している、という事実を反映している。80 年前に開発された黄熱病ワクチンは、一度の接種で 10 年間の効果が持続し、エボラ出血熱やマラリアに比べると予防効果が高い。しかし、一回分のワクチンを生産するために 12 か月を要するため、拡大する感染への迅速な対応を阻んでいる。かつて黄熱病はアフリカやラテンアメリカの熱帯地域の森林等僻地で流行する病気だったが、ワクチン接種率が低く人口密度の高い都市部での大流行は感染が急速に拡大するため恐るべきことである。現在アンゴラと国際衛生当局は全てのアンゴラ国民への接種を希望しているが、ワクチンが不足しいるため状況は複雑である。「完全に防止できる方法がありながら悲劇的な状況だ」、と米国疾病対策センター・グローバル疾病検出オペレーションセンター所長のレイ・アーサー氏は言っている。黄熱病と言えば、野口英世博士。野口英世博士は、幾多の障害を乗り越え、天性の忍耐力で世界的に名声を上げた日本が世界に誇る医学者だ。博士は晩年

	ガーナに渡り、黄熱病の研究に身を捧げる途中で黄熱病のため、1928 年、51 歳で亡くなった。アフリカの医学研究や医療活動の分野で卓越した業績をあげた方々を表彰する「野口英世アフリカ賞基金」という基金も設立されている。
7 月 11 日	**つなみ募金** 本日は、毎月恒例の「つなみ募金」を行った。つなみ募金は熊本支援をはじめとし、ハイチ・東北の復興のために毎月行われているものだ。また、リザルツをさらに多くの方々に知って頂く、とても大事な活動の一つだ。本日は、5 名のスタッフで、リザルツの紹介のチラシとストップ結核パートナーシップ日本のチラシを配布した。本日は、猛暑の中だったが、被さい地の方々の復興のために、元気いっぱいに配布作業が出来た。来月も、11 日に募金活動を予定している。是非、お時間に余裕のある方は、経済産業省の前にお越しいただきたい。
7 月 11 日	**参議院議員選挙 in 熊本** 昨日は参議院議員選挙だった。選挙権年齢が「18 歳以上」に引き上げられた初の国政選挙ということで、全国的にも高い注目度だったが、震災のあった熊本でも、被さい者の方々にとって大きな意味を持った選挙だった。開票所が罹災証明書の発行場所として使われていたり、職員の方々は震災対応に手一杯で人員が足りなかったりと、場所と人手の確保が難しい中でのバタバタの選挙で、投票率は 51.46%と過去最低ながらも微減に留まったそうだ。今回、熊本では政府の大型補正予算や農業、中小企業の再建支援策などを全面に押し出した方が当選されました。昨日の時点で、県内の避難者は 5,000 人を切ったものの、本当に大変なのはこれからだ。政治の力と草の根の力の双方から、被さい者の生活再建を後押ししていけたらと思う。
7 月 12 日	**らぽーるの活動。間に入るということ** 「らぽーる」は「離婚と親子の相談室らぽーる」ですが、決して離婚をすすめるわけではない。相談者のお電話でのお話しにはじっくりと、そして注意深く耳を傾け、ご来所された場合には、相談者のお話しを目と耳と心で聴くよう心掛けている。そうすると、相談者の迷いや、意を決した様子や、我慢の限界まで来ているのか、もう少し頑張ってみようと思っていらっしゃるのか、怒りの感情にとらわれていらっしゃるのか、などのことが見えてくる。でも、迷いや怒りなどの一時的で不安定な感情で人生を左右する決断をしない方がいいに決まっている。カウンセリングによって、迷いも怒りもいっぱいお話しいただくことで、冷静さを取り戻されたり、また、自分の感情でなく、子どもを中心に据えた ADR(裁判外紛争解決手続き)で共同養育計画合意書を記入していくとき、気づけば怒りの感情を一時横に置いて合意書に向かっていたりするものだ。その結果、結論を急がず保留期間を設ける父母(その間も面会交流や家族で過ごす時間について取り決めます)、離婚を決め面会交流その他を公正証書にする父母、夫婦の間に第三者が入ることで、すれ違っていた関係が好転し元のさやに納まる父母…、選ぶ道は様々ですが、お互いに譲歩して話し合って決めた道へ歩を運ぶ足取りは、どこか自信にあふれ、希望が持てる気がする。そして、らぽーるの ADR"卒業生"の皆さんは、取り決めを守る傾向が強い。これからも「らぽーる」は、相談者のお気持ちに寄り添って、まずは子ども、そして、その家族にとっての最善は何かを一緒に考えていきたいと思う。
7 月 12 日	**被さい地の気まぐれな天気** 空がどんよりして雨と突風が吹きあれたと思ったら…急に青空が見えて太陽の光が差し込んだりと、熊本の空はずっと不安定だ。本日も午前中は暑かったため、子育て支援センターではプールが開放され、子どもたちが元気いっぱいに遊んでいた。しかしお昼頃から急に嵐に。ゴーっという音に驚いて外を見てみるとテントが吹き飛ばされそうになっており、びしょぬれになりながらも職員総出で慌てて片付けていた。プール遊びの時間は終わっていたので大丈夫だったが、こんな天気が続くと、子ども達は安心してお外遊びも出

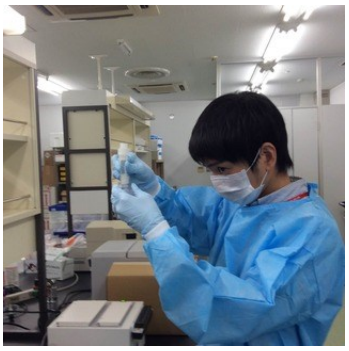
	来ない。昨日も局地的な大雨で、御船町に避難勧告が発令されていた。規模は小さいながらも余震はまだ続いている。天気もここまで気まぐれだと、みんな心の休まる暇がない。本日担当されたカウンセリングの先生は「熊本(特に熊本市)の人は、東日本大震災と比べると被さいの規模が小さいから大丈夫だと自分に言い聞かせて、自制している人が多い。それでも知らず知らずのうちにストレスが蓄積されていて、急に身体症状に現れたり、フラッシュバックに襲われたりする」とおっしゃっていたが、本当にその通りだと思う。暑すぎるのも困るが、まずは早く安定した天気に戻ってほしいものだ。
7 月 14 日	**第 6 回アフリカ開発会議(TICAD VI)** 日本が主催するアフリカ開発会議(TICAD)は、これまで 5 年に一度日本で開催されてきたが、今年の TICAD VI は 8 月 27 日･28 日に初めてアフリカ(ケニアのナイロビ)で開催され、今後は 3 年ごとの開催になる。リザルツでは、この機をとらえ、特に保健･栄養の分野でアドボカシーを行うべく準備を進めている。今朝もその件で米国と電話会議を行なった。私たち日本人はとかく、「アフリカ」と一言で片付けてしまいがちだが、実際は 54 か国約 10 億人の人口を抱える、経済、文化的にも実に多様な大陸だ。私自身、4 年間アフリカで仕事をした経験から、同じ国のなかでも異なる民族と言語が存在し、国境というのは宗主国の都合で後から引かれたものだ、というあたりまえのことを改めて認識することが多かった。「アフリカは..」などと軽はずみに言おうものなら、「アフリカとひとくくりにしてものを言わないで!」と一喝された。そんな「アフリカ」の開発のための会議を開催することはとてもチャレンジングなことかもしれないが、国際社会で TICAD の認知度が着実に高まっていることは喜ばしいことではないか。代表の白須が良く言うように、世界中の子どもたちがお腹いっぱい食べられ、笑顔でいられるよう、一歩ずつ、前進していきたい。
7 月 14 日	**参議院選挙の投票** 参議院選挙が終わり、また東京都知事選挙がやってくる。これまで戦争反対、原発反対、格差是正などこれまでいろんな声が聞こえていた。そうした声が反映されるかと思っていたけれど、事前調査の通り、このように聞こえてくる声は実現しなかったと思う。小さな声ばかり聞いていたのか、多数の人が考えていることを理解できていないのかもしれない。イギリスの EU 離脱も国民投票で決まった。国民の意見が反映されたはずなのに、その後に投票をし直したいという声さえ出たと聞いた。意見が反映される仕組みがあり、反映されても、それもまた受け入れたくないと声がある。どちらも多数決で決まっている。いろんな考え方がある。正しいと思っていることが、多数決ではそうでないこともある。でも投票の機会はある。小さな自己主張はしていきたいと思う。
7 月 14 日	**健軍文化ホールの下見** 本日は、東区で専門家無料相談会の会場となる健軍文化ホールに行き、使用料の支払いと下見を行ってきた。こちらに住んでいると耳にすることが多い熊本市東部「健軍」。厳かでかっこいい響きがして個人的に好きな地名だ。少し歴史を調べてみると、名前から連想される通り、旧陸軍飛行場や三菱重工熊本航空機製作所など、軍事関連産業で栄えた地域だそうだ。現在も陸上自衛隊の駐屯地があり、軍都の名残を留めている。さて、相談会の会場はフローリングで清潔感があり 60 名以上入る広々としたお部屋だ。アクセスも良いので、当日多くの方が来られてもバッチリだ。文化ホールの受付に相談会のチラシも置かせていただけた。
7 月 15 日	**MDGs と SDGs について** 来月の TICAD 開催を控え、今日は「MDGs」と「SDGs」について簡単におさらいしようと思う。 ■MDGsとSDGs MDGs:Millennium Development Goal⇒ミレニアム開発目標。2000 年の「国

	連ミレニアム宣言」を受け、2015 年を期限として掲げられた 8 の国際目標。SDGs:Sustainable Development Goals⇒持続可能な開発目標、MDGs に続く、2016 年から 2030 年までの 17 の国際目標。 ■二つの違い：MDGs は、人間開発分野における目標で、途上国の貧困や初等教育、保健等の従来通りの開発問題が中心だ。また、先進国はそれを援助する側という位置づけだった。一方、SDGs では開発という側面だけでなく、経済面・社会面・環境面の 3 つの側面全てに対応することが求められ、対象は全ての国。先進国における生産と消費、自然エネルギー、途上国における国内の資金動員などの課題も取り扱われている。 ■日本リザルツの働き：SDGs と世界で活躍する国際協力 NGO を紹介する冊子「NGO GUIDE」では、1 つ目の目標「貧困をなくそう(貧困の根絶)」の項目で日本リザルツが紹介されている。しかし、日々の活動は、「貧困の根絶」という目標に限定されず、目標 2:飢餓の根絶、目標 3:健康な生活、目標 10:不平等の緩和など、多岐に渡っている。毎日、こちらに関連する色々な新しいアドボカシーネタが舞い込んでくるので、とってもエキサイティングだ。今日もテキパキ白須代表の下、大きな目標達成に向けて地道にがんばろうと思う。
7 月 15 日	**インターンはなの『初めての～～』・その 4『初めての会合』** 今回の投稿は初めて参加した会合についてだ。一緒に参加したリザルツ職員の議事録を基に、会合の内容を説明していきたい。会合の名前は『ストップ結核ジャパン・アクションプラン第 16 回フォローアップ会合』。省庁、ストップ結核パートナーシップなどの結核の専門家が集まるような会合に、インターンのはなが突入した。最初に話し合われたのが重要な今後の結核戦略について。6 月の WHO Strategic and Technical Advisory ミーティングの報告に始まり、Stop TB Strategy(ストップ結核世界計画 2011-2015 年)から End TB Strategy の目標に転換された件など内容の濃い話し合いが続いた。日本は 2020 年のオリンピックに向けて、増加する外国人への対策も必要となる。一番印象に残った発言は『日本の結核を制圧するには、世界の結核を制圧することが必要だ』ということ。納得した。次は、第 15 回会合議案の進捗状況についてだ。今後の JICA の技術協力事業は、インドネシア、フィリピン、ベトナム、アフガニスタン、タイの 5 か国が結核予防対策を強化していくことだという。インドネシア、フィリピン、ベトナムは、栄研とニプロの TB LAMP 法とジェノスカラーをさらに広めることが重要で、アフガニスタンでは現行のプロジェクト(結核対策プロジェクトフェーズ 3)を継続するそうだ。アフリカなどにもこのようなプログラムを強化していきたいとの話になった。そして、G7 伊勢志摩サミット・保健大臣会合と TICADVI について。TICAD(8 月 27―28 日)に関しては、3 年おきに日本とアフリカで交互に開催する見込みだ。会議が行われる際にサイドイベントをいろいろと考えているらしい。保健大臣会合(9 月 11―12 日)に関しては、特に新しいものはないが、以下のように結核予防対策に取り組むとのこと。1.Global Health Architecture は IHR(WHO 国際保健規則)の強化、2.Universal Health Coverage では国際調整の枠組みの強化、3.薬剤耐性では GHIT のような官民連携の強化・促進。代表の白須は特定の疾患名「結核」をしっかり取り入れていくことが大事だと、皆様に強く訴えていた。加えて、このプロジェクト等を支える平成 29 年度結核関連予算概算要求に向けても話し合いが行われた。最後に、第 6 回 The Union アジア太平洋地域学術大会が議題に。2017 年 3 月 22-25 日に東京国際フォーラムで開催される予定だ。日本としての開催は、50 年ぶりということらしく、約 1,000 人の参加者のうち 300 人が外国人の予定だ。また、日本リザルツが(私が!)アジア・太平洋結核議連をこの時に開催してほしいと要請した。次回の会合は JICA で開かれる。内容は専門性が高く、難しかったのだが、とても勉強になった。
7 月 15 日	**南九州税理士会** 久々にすっきり晴れた今日、専門家無料相談会の件で税理士の先生と打ち合わせを行うため、南九州税理士会にお邪魔してきた。南九州税理士会は、熊本・鹿児島・大分・宮崎 4 県の約 2,000 人以上

	の税理士で組織された特別法人で、確定申告期の無料相談や租税教室への講師派遣など、地域の方々に貢献するために活動されているそうだ。今回お話した税理士の先生も、震災後から積極的に被さい地でボランティア活動をされているそうで、8 月 6 日から始まる専門家無料相談会にもご協力いただけることになった。地震によって自宅の一部が壊れた場合、税の軽減や免除などを受けられる可能性がある。税制上の処置について聞きたいことや悩んでいることがある方は、ぜひ相談会に来て欲しい。(本事業は、ジャパンプラットフォームに助成いただき実施している)
7 月 16 日	**考えるシリーズ Vol3【貧困って?】** 授業後予定がない日は、図書館に行き、気になる本を片っ端から読むという生活を送っている。そんな生活を送っているからか「考える」ことが多くなった。ということで『初めての～～』を真似して、勝手にシリーズ化した。もともと本を読むことは大好きなので、集中すると一気に読んでしまう。学校と家の往復が、電車一本、且つ 1 時間以上の私にとって、通学時間が絶好の読書タイムだ。読む本はジャンル問わず、手に取っているつもりだが、やはりクセなのか「国際関係」とか「比較社会学」「比較宗教学」を読むことが多い。またまた、心のモヤモヤが晴れるモノが 1996 年、私が生まれた年に書かれていた。例によって見田宗介先生の著書だ。現代社会の理論―情報化・消費化社会の現在と未来(岩波新書)第 3 章"南の貧困/北の貧困"、『貧困というコンセプト 2 重の剥奪』、貧困の定義について、多く使われているのは「1 日あたりの生活費が 1 ドル」という水準だが、これは適切な定義の仕方と言えるのか?よく耳にする「貧困」を語る上で使われるモノだ。我々から見れば、「1 日を 1 ドル以下で?」と考え、非常にインパクトがある。が、見田先生はこの定義についてこう述べている。アメリカの原住民のいくつかの社会の中にも、それぞれに違ったかたちの、静かで美しく、豊かな日々があった。彼らが住み、あるいは自由に移動していた自然の空間から切り離され、共同体を解体された時に、彼らは新しく不幸となり、貧困になった。経済学の測定する「所得」の量は、このときは以前より多くなっていたはずである。貧困は、金銭を持たないことにあるのではない。金銭を必要とする生活の形式の中で、金銭を持たないことにある。貨幣からの疎外の以前に、貨幣への疎外がある。この 2 重の疎外が、貧困の概念である。つまり、貨幣からの豊かさしか手に入れることのできない生活システムの中に投げ込まれる時、「所得」が人々の豊かさと貧困の物差しになる。見田先生は、長く自給自足、自然・共同体の中で暮らしていたドミニカの農民を例に挙げ、彼らの「所得」を 1 ドル以上にする政策によって「自分たちの食べるもの」を作ることを禁止された彼らは、食べるものを市場で買うほかなく「所得」は増大せざるおえなくなり、市場より、以前より貧しい食物しか手に入れられなくなっても、統計上、所得は向上し、「貧困」から救い上げられた人になる。この貧困の定義は、間違っているはずである。そして、こう著書をしめている。貧困/富裕、不幸/幸福という 2 つの問題を別に考えれば良い。「貧困でも幸福」な生はある。それは貨幣経済の支配し尽くしたシステム中にある世界の都市で、貨幣を少ししか得ることができず、けれども愛情や、感動のような至高のものに祝福されているような生のことである。一方で「貨幣を必要としない世界の貧困」を語るのは、空を飛ぶ鳥にも野に咲く百合も収入がないから「貧困」だということと同じぐらい、意味のない尺度である。このような本を読むと、自分に何ができるだろうと考える。するべきことは、見田先生の例にあった、情報化/消費化社会のシステムを押し付けるようなモノではなく、単純に幸せを感じてほしい。その人に寄り添って、理解しあって、支え合う。ただそれだけだと思った。これをすることで人は金銭的に「豊か」になるのか「幸せ」になるのか広い視野で考える必要があると感じた。「豊か」になることで「不幸」になる人もいる。そして「豊か」になるシステムの外部で、公害などの環境の限界が目の前で起こるかもしれない。私は「幸せ」を中心に考えたいと改めて強く思った。
7 月 19 日	**釜石から熊本へ** 釜石では、朝方の気温は 20 度前後だ。上着を着こんだものの、風邪気味だったせいもあり、鼻水が止まらなかった。2 日後の今は、熊本にいる。直線距離で 1,200km、道のり距離だと 1,600km。歩いたわけではないが、そこにいる人々を置き去りにしてきたような気持になった。そんな風に思いをめぐらせながら着い

	た熊本は、一気に気温があがり、軽く 30 度越え。クマゼミがわんわんと泣き、音が体に突き刺さるようだ。日本財団の熊本事務所の一室をお借りし、前任者からの引継ぎ作業を行った。人、環境、仕事内容にとにかく少しでも早く適応したいと、いまは精一杯やっている状況だ。
7 月 19 日	**【Gavi プレスリリース】100 万人近いミャンマーの子供が肺炎球菌ワクチンで救われることでしょう。** Gavi の 7 月のプレスリリースが出た。「100 万人近いミャンマーの子供が肺炎球菌ワクチンで救われることでしょう」(7 月 1 日)ミャンマーは、7 月の肺炎球菌ワクチンプロジェクトのスタートによって、10 種類の病気に対抗する 9 種類のワクチンを国の免疫プログラムの一環で導入予定だ。ミャンマーでは、5 歳以下の子供たちのうち 16%が、肺炎球菌が原因で亡くなっていると推定されている。肺炎球菌ワクチンは、100 万人近くの子供たちの命を救い、それは明らかにミャンマーの子供たちの死の減少に貢献する。ミャンマー政府は、伝統的なワクチンに資金を投入し、また、Gavi によってサポートされたワクチンの協調融資の増加も約束している。また、大臣は、WHO とユニセフ、Gavi の過去数年に及ぶ貢献に感謝し、保健医療従事者たちによる献身を称賛している。彼らの働きなしに、ミャンマーの子どもたちを守るための強力なツールが子供たちに届けられることはなかった。現在、ミャンマーの免疫プログラムには、10 の病気に対抗する 9 つのワクチンが含まれている。こちらに加えてミャンマー政府は、2017 年に日本脳炎のワクチンを導入していく予定だ。同時に、ロタウィルスのワクチンと子宮頸がんを防ぐ HPV のワクチンの導入も検討中だ。ミャンマー政府は、Gavi の AMC を通じた肺炎球菌ワクチンを導入する 57 番目の国だ。イタリア、イギリス、カナダ、ロシア、ノルウェーとビル&メリンダ・ゲイツ財団によって、2020 年までに 100 万人以上の子供たちを肺炎球菌から守ることが期待されている。ワクチンで救える命、どんどん救っていきたい。
7 月 19 日	**新装熊本事務所** 私達が熊本で事業を実施するにあたり、事務所として利用させていただいている日本財団災害復興支援センター熊本本部。連休中に部屋の改装が行われ、より快適な職場に生まれ変わった。地震が起きてすぐに来熊し、オフィスに泊まらせていただいた日々が懐かしく思い出される。徐々に机や椅子、事務用品が揃い、自動販売機も設置され・・・今回のリフォームで床にパネルカーペットが敷き詰められ、隣の部屋との壁が取り外された。このような素晴らしい仕事環境を、無料で NPO に提供してくださる日本財団さんに感謝している。熊本で被さい者支援を行っている方々は、県内・県外の団体に関わらず利用出来るそうなので、ぜひ活用してみてほしい。
7 月 20 日	**【ご挨拶】はじめまして** 佐保が、新たに日本リザルツの職員となった。佐保は、これまで企業の広報の仕事をしてきた。広報とは、その名の通り「広く知らしめる」ことだ。その手段は、新聞・テレビなどのメディアや講演活動、自社の Web サイト、SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)など多岐に渡る。個々の製品やサービスについて、伝えたいことを伝えたい人へ届けることは、リザルツの活動である「アドボカシー(政策提言)」と共通する点もあると思う。「貧困と飢餓のない世界」の実現に向けて、これまでの経験を活かしながらも日々勉強し、取り組んでいきたい。
7 月 20 日	**インターンはなの『初めての～～』・その 5『初めての名刺整理』** 日本リザルツでのインターンが残り 2 週間となった。さて、今回は『初めての名刺整理』について話したいと思

	う。まさか大学１年生の私が、名前・住所・電話番号・Ｅメールなどの個人情報が記されている大事な『名刺』を数百枚も整理できるなど、夢にも思わなかった。名刺整理について、私の感想を説明していきたい。仕事の流れは、最初に日本リザルツ職員が名刺を業界・業種・職場別にフォルダーに整理し、私がパソコンに名前とメールアドレスのみ登録していく。こうしておくと、一斉にお知らせのメールを送る時に、とても便利だ。長時間に渡って黙々と作業を続け、何とかひと段落つけることができたが、思っていたより時間がかかってしまった。けれど、とてもいい勉強になった。ここで、ちょっとだけ、インターンの私が名刺整理で『初めて』を通じて感じたことを述べたい。これは、長い海外生活から一時帰国してきた大学生にしか述べられない意見かもしれない。まずは、名前だ。とても複雑で、難しい漢字の名前を持つ人がいることに驚いた。読みにくい名前を持つ方々の中には、漢字の隣に小さくひらがなで振り仮名をふっている方もいた。親が心を込め、考えた上で名付けた名前が、他人にとって読みにくいものになってしまうのは、ちょっと悲しいことだ。私自身、珍しい苗字とよく言われ、読み方を間違えられたりするので簡単で単純な名前がいいなと個人的には思う。次に、職業だ。具体的な例は記されないが、世の中には色々なお仕事がある、と当たり前なことに気付いた私。就活前にそれを気付かせてくれた日本リザルツに感謝している。同じ組織、部署内でも様々な役職があり、多種多様な分野で働ける。これからの就活が明るく見えて来た。そして、最後に、女性に関してだ。組織名は伏せておくが、ある名刺に記されていたのは、女性の社会進出を支援するような役職だった。米国では当たり前の『ジェンダー平等』に貢献できるような仕事が日本にもあるなど、日本人としてとてもありがたい。女性として、フェミニストとして、尊敬している。しかし、その職業に就いているのが女性の方だと気付いた途端、疑問がわいた。その他の分野で出世している女性は当然いるとは想像がつくが、女性社員に『普通の職業』を与えず、わざと『女性を重視する職業』を与えることは、本当に男女平等に結びつくのだろうか。そもそも、女性だけの社会進出を支援する部署を設立することで、ますます『ジェンダー平等』問題が男性職員から切り離されていくような気がした。女性は体力的に男性より劣っているとか、女性は弱いといった理由から、女性に特別に優しい男性というのは、本来のジェントルマンではない。そういった偏見を持たず、同じ人間として接してくれる男性が、今求められると私は考えている。
7 月 20 日	**ボールプール** 子育て相談も回を重ね、7 月 20 日で８回目になる。当初の相談には震災との関連が示唆されるような相談もあったとのことだが、今回のお母さんの話にはむしろ日常の中のちょっとした気がかりといった話題が多かったようだ。ここでの相談ではないが、専門家の方が経験した震災直後の子どもたちには、攻撃的な行動がよくみられたという。少し成長した子どもたちは、ここにあるようなボールプールはボールのぶつけ合いの修羅場となったらしい。 ここ子育て支援センターではこのボールプールに入れるのは 2 歳以下までと決められている。なんだか気持よさそうなこのボールプールに私は浸かってみたい気持ちになった。子育て支援センターには看護の実習生がきていた。今日は子育て相談の専門家が質問攻めにあっていた。
7 月 21 日	**栄養改善の国際展開** 7 月 14 日に内閣官房健康・医療戦略室の国際栄養の展開検討チームの最終会合が行われた。昨年の 3 月から、日本政府として国際栄養の海外展開を如何に推進していけるか、関係省庁、栄養関連の企業が参加して合計 9 回開催された。NGO も途中から正式メンバーになった。こうした政府の会合に参加できるのは非常に興味深く、多くを学ばせていただいた。○日本政府や企業の働き：日本政府や企業の動きについて学ぶことができた。特に内閣総理大臣を直接に補佐および支援する補助機関である内閣官房という機関について知ることができた。縦割り行政と言われるが、この会合では関係省庁も参加し、それぞれの立場で同じ目標を目指して話し合いを進めて行く。日本を国や組織として意識することは日常な

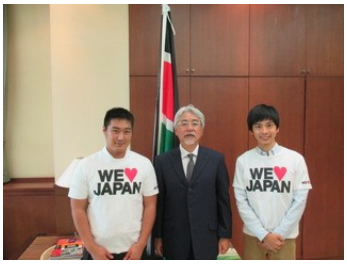
	いけれども、省庁がどんな動きをして、日本政府としての働きをしていくかを垣間見ることができた。また、栄養に関連する日本企業が海外進出する際の様々な課題を理解することできた。○栄養改善の国際展開の実動：最終報告書にもあるが、この会合の結果、新しい独立した組織が作られ、内閣官房の主導ではなく、その組織の主導で栄養改善の国際展開への動きが進められていく。政策レベルから実務レベルに動き、栄養改善の活動が具体的に始まっていく。新たなステップを見ることができて良かった。○NGO の参画：会合の最終報告書には NGO の参画の可能性が示された。企業が栄養改善の国際展開をする上で、NGO が持っている海外の情報や拠点、住民の健康状況などが役に立つことがあるかもしれない。また、企業の活動が営利だけでなく、栄養不良の改善に役立ち、住民にとって不利益にならないように、NGO が企業の進出や実施を見守る立場を取ることができるかもしれない。NGO がそれぞれの立場で参画の推進は判断することだけれども、こうした可能性があることは良かったと思う。○政策提言ということ：流れが逆風であった時もあきらめずに説明し、また機会がある毎にコメントや意見、書類を提出していくと、小さな声でも聞かれる時がある。NGO が参画すること自体そのものが最終ゴールではない。しかし、営利目的でない NGO が活動経験を生かし、参加することがあれば、効果的な実施につながることもあると思う。この会合が関係者に情報が公開され、意見を伝えられる体制であったことは嬉しかった。
7 月 21 日	**栄研化学訪問** 本日は、朝 9 時に那須塩原へ。私を含めリザルツの職員 3 名で、LAMP 法の勉強のため、栄研化学に伺った。LAMP 法とは、栄研化学が 1998 年に発明した、結核の検査方法のことである。現在結核の検査方法は、いくつか種類があるが、比較的器材や検査も安く、簡単に出来る方法と言われている。まだ、WHO からの推奨は頂けてないようだが、日本でも約 300 カ所で使用されており、今後さらに、発展途上国などでも使用されていくと期待している。実際に発展途上国では、日本やアメリカなど先進国で当たり前に行われている検査が行えない。しかし、金銭不足で実験器材の少ない発展途上国では、栄研化学の LAMP 法が狭くて設備の整っていない場所で行え、一番実用的で確実性のある方法だと感じた。リザルツでも、来週からスタッフがケニアに行く予定だ。ケニアのスラム街では、依然として結核患者が多く、検診すら受けられない方が沢山いる。その方達のために、結核クリニックの修復をし、さらなる診療所への結核患者のアクセスを増やすためにアドボカシーをしていく。少しでも多くの結核患者を助け、制圧に向けて努力していく。 
7 月 21 日	**ママ向け防災冊子** このあたりのハズと思うが、みつからず、結局反対の方向を走っていた。土地勘がまったくないので、少しの移動さえ、迷ってしまう。朝といっても日差しはすでに強烈で、汗が目に入って痛い。目的の場所らしきその建物はなんだかしゃれた感じ。事務所らしくない。迎えてくださった環境ネットワークくまもとの事務局長、園田さんによると、昔は喫茶店だったとか。それを改装したのだという。そのくつろぎの空間に加えて冷たいお茶がおいしく、喫茶店にいるようだった。 園田さんとは、現在用意している冊子について、意見を伺った。新潟地震の経験から生まれたママ向け防災冊子「あんしんの種」いう優れた冊子があるけれども、熊本の経験はどこが違うのか、どう差別化するのか、その限界についてもお話しした。「あんしんの種」のネーミングが

	ともかく素晴らしい。何かいいネーミングはないか?あんしんの芽、あんしんの蔓(つる)・・。ネーミングはともあれ、タイミングもあり、実用性に焦点を充てたものにする。
7 月 22 日	**ADR の問合せが増えている** 7 月に入って、ADR の問合せが増えた。昨日も 2 通の特定記録郵便を出した。これは、一方の親御さんからお申込みをいただいた場合、もう一方の親御さんに対して、「〇〇様(お子様のお名前)の今後の養育について協議のご提案」というタイトルのお誘いのお手紙をお出しするものだ。「らぽーる」にとって、「ドキドキする瞬間その 1」だ。どうか、思いが伝わり、ADR が成立しますようにと祈る思いで、郵便局へもっていく。「ドキドキする瞬間その 2」は、お誘いのお手紙の締め切り日にやってくる。直接お電話でお話しすることもあれば、FAX が届くこともある。よく、申込者からも、お手紙を受け取った方からも、申込者の代理人であるかのように勘違いをされたりするが、そこは丁寧に中立であるということを説明する。そしていよいよ ADR 期日には、「ドキドキする瞬間その 3」を迎える。お父さん、お母さん、仲裁人の弁護士、「らぽーる」スタッフの 4 人が顔を合わせる瞬間だ。「らぽーる」側もドキドキするくらいだから、お父さん、お母さん方の不安と緊張は、その何十倍も大きいと思う。そこは、お気持ちを汲んだ対応を心掛けている。「らぽーる」の ADR で合意したご両親は概ね、話し合って合意したという達成感を持ってその後の人生をリスタートできており、ADR で取り決めた内容を守る傾向が強い。この ADR のよさを、また「親教育プログラム」も「共同養育計画合意書」も、いろいろな方法で啓蒙していかなくてはならない。子どもの笑顔を、家族の笑顔を守るために。
7 月 22 日	**専門家無料相談** 8 月 6 日(中央区ふれあい文化センター)を初回とし、連続 6 回の子育て支援を中心とした専門家無料相談会の開催準備に追われている。弁護士、税理士、社会福祉士、保育士、小児科医にお集まりいただき、面談によるワンストップサービスを目指すもの。子育てや震災関連のこころのケアについては、行政の電話窓口や特別に設置された相談所が熊本市のあちこちに設けられている。しかし、子どもが夏休みとなる 8 月から 9 月にかけて開催すること、またまだ余裕がなく、こういった相談所に足を運べない方々に提供すること、既存のサービスへとつなげることを目指している。8 月 14 日(北部公民館)、8 月 27 日(西部公民館)、9 月 4 日(健軍文化ホール)、9 月 17 日(飽田公民館)、9 月 25 日(子ども文化会館)のいずれも午後に開催する予定。ただし、中央区にあるすべての公共施設は「拠点避難所」となっており、しかも満員の状態であるため、子ども文化会館は仮の設定となっている。ところで、熊本市の感染症情報によると、ヘルパンギーナが 5 週連続増加中とのことである。4 歳以下のお子さんをお持ちの方は気をつけられたし。(この事業は JPF の助成をうけている)
7 月 24 日	**夏休みの始まり** 子どもたち、そしてお子さんをお持ちの家族にとって、ひと塊の特別な日々がもう始まっていることを知った。そう、「夏休み」なのである。本日、子育て相談会にお見えになった親子は 6 組。前回と比較すると急に少なくなった。その訳は「夏休み」なのである。夏休み期間中の天候がもっとも安定し、まだなんだか活力がある夏休み前半に、遠いところにお出かけしたり、おじいちゃんやおばあちゃんのいる実家に行くのである。震災で疲れたお母さんが祖母や祖父の助けを借りて、心身を休める機会になるかもしれない。あるいは、震災で心身ともに疲弊していらっしゃるかも知れない両親を親子ともに見舞いにいくのかもしれない。お母さんが見守る中、ずりばいのあかちゃんはお母さんとの距離をどんどん伸ばしていく。少しずつひとりの世界を広げていく冒険に等しい営みなのかもしれない。その冒険家はしばし私の膝の上に乗った後、また未知の世界へと旅立っていった。(この事業は JPF の助成を受けている)

7 月 25 日	**パネルシアター** 母と子がそれぞれの場所を見つけ、自分たちでおもちゃを取り出して遊ぶ。しかし、ある時間になると隣の大きな部屋で保育士さんによる母子の体操やちょっとしたエンターテイメントが行われる。今日の目玉はパネルシアターだ。動く紙芝居。不織布と呼ばれる布に、フェルトの絵人形をくっつけたり、裏返したり、回転させたり、操り人形のようにたくみに動かす。子どもたちは、その動きにくぎ付けになる。保育士さんも声色を変え、しゃべっている方の人形を動かしたりして、アニメを見ているように物語を紡いでいく。アニメと違うのは、双方向なのである。操る保育士さんもちゃんと反応を見ながら人形を動かし、子どもたちも楽しいシーンではきゃんきゃんと同調する。 本日は 15 組以上の方が見えられた。これから、つかまり立ちし、歩きはじめるという年齢のお子さんが多かったもしれない。昼過ぎから雨となった。(この事業は JPF の助成を受けている)
7 月 26 日	**熊本市ふれあい文化センター** 熊本市中央区にある「ふれあい文化センター」で 8 月 6 日(土)に最初の専門家無料相談会を開催する。夕方、下見のため本館を訪問したが、肝心の集会室を見ることができなかった。夕方からの利用は新館が主で、古い本館の集会室は鍵が閉まったままであった。ふれあい文化センターは中央区の老人福祉センターとして利用されており、本館の 1 階にはリハビリ室や調理室、休憩室等があった。新館には学習室や図書室、浴室(65 才以上のみ)などがあり、震災後も次々にオープンしているが、3 階のホールは使用できない状態がまだ続いている。 パーキングは 18 台。センターは、産業道路と国道 266 号の交差点から約 200m 入ったところにある。近くに熊本大学医学付属病院と熊本地域医療センターがある。公共交通の場合は、どちらかを経由するバスを利用すると良いかもしれない。駐輪スペースもあまりない。
7 月 27 日	**ポリオとターリバーン** 世界三大感染症の一つであるポリオ。世界で初めて撲滅に成功した天然痘(※1980 年、WHO が撲滅を宣言。)と同様、根絶可能な感染症として、各国政府・団体が長い間継続して闘っている。日本では、1980 年の 1 例を最後に新たな患者は出ていない。残るはパキスタンとアフガニスタン。ポリオは、ワクチンを接種することで発症を防ぐことができるとされているが、隣国するパキスタンとアフガニスタンで感染が残っているのには、政治・社会的な理由がある。The Gurdian の記事に書かれているように、ターリバーン(イスラム原理主義組織)の唱えるキャンペーンが要因の一つとなっているようだ。彼らは、アメリカの陰謀だとしてワクチン接種に反対している。イスラム法に則っていないとの誤解から子どもにワクチン接種をさせない親もいる。ポリオワクチンを推進するソーシャルワーカーは、内情をアメリカに報告するスパイと考えられ、2012~15 年の間にはおよそ 70 人ものヘルスワーカーが殺された。間違った教えがこのような事態を招いてしまうなんて悲しいことである。政治、宗教、教育、貧困…様々な問題が複雑に関係している。それぞれの視座から状況を理解することから努めたいと思う。
7 月 27 日	**「動く→動かす」2016 年度第 9 期年間総会・シンポジウムに参加** 今日は、青山のウィメンズプラザで開催された「動く→動かす」2016 年度第 9 期年間総会・シンポジウムに参加してきた。「動く→動かす」とは、『もう一歩、貧困のない世界へ』をテーマに 70 以上の NGO・NPO 団体が参加しているネットワーク組織である。今回の総会の内容は、2015 年度の事業報告・会計報告、2016 年度の事業報告・予算に関するパネルディカッション、最後に役員(代表・運営委員・監事)の選出というものである。MDGs から SDGs への転機期となる年であったと同時に、伊勢志摩サミットや TICADⅥ(2016 年 8 月)の準備も進めねばならず、大変慌ただしい年となった 2015 年度だった。日々

	の活動において、SDGs の目標達成のためにたくさんの人々を巻き込んでいくアドボカシー活動が求められた。年間に 13 もの SDGs のアドボカシーイベントが開催されている。日本リザルツも 10 月に行われたグローバルフェスタなどに参画している。こういった活動は SDGs の普及へ大いに役立ったと思われるが、どの程度の効果があったのか認知度を測ることができたらもっといいなと思った。そして、2016 年度も引き続き、より幅広い団体や市民を巻き込んだ活動をしていくべく、セッション 2 では「SDGs 時代と「動く→動かす」の未来」と題して、運営・キャンペーン・政策にわけ、パネルディスカッションが行われた。印象に残ったのは、情報収集の難しさについて語られた部分だった。情報は世の中にたくさん溢れているものの、貴重な重要な情報というのは、実は数少なく、しかもそういった情報はここにいる会員それぞれが握っているという言葉だ。連携をもっと深めて、効率的に情報共有していきたい。
7 月 27 日	**平面図と高架橋** 専門家無料相談会にご協力いただける弁護士事務所を訪ねた。事前に地図を印刷し、なんどもなんども見ながら、その場所をめざした。地図の道どおり来ているのに道がない。上を見上げると高架橋があり、まさかあれが目指す道なのか?と、木陰でもういちど地図を見る。しょせん地図は平面図なのである。立体にはめっぽう弱い。自転車に乗るハズが、こんどは自転車をかつぐように下にある写真の坂を上って高架橋の道にでた。弁護士事務所にはご参加いただけることに感謝を申しあげた。
7 月 28 日	**インターンはなの『初めての～～』・その 7『初めてのインターン』** あっという間に 2 ヶ月が過ぎた。英語では『time flies when you're having fun』(楽しいことに限って、時は早く過ぎ去る)ということわざがある。まさにそのような感じだ。今回は、2 ヶ月間のインターン経験の総まとめとして、日本リザルツでの『初めてのインターン』の感想を書きたい。また、この経験を通じて、今後の人生に活かせるような自分へのアドバイスも記す。以前の投稿にも書かせていただいた通り、和訳と議事録作成のような大事な仕事をたくさんさせていただいた。海外で生まれ育った私は、国際協力に興味を持ち、大学では政治学を専攻した。今回のインターンでは数多くの経験を通じて、NGO の仕組みを勉強でき、また、日本社会の成り立ちについて独自の意見を持つことができた。そして、日本リザルツに最も感謝していることは、自分の日本語に少しは自信を持てたことだ。親から日本語を学んだものの、今まで家でしか話す機会がなかった日本語。そんな日本語を毎日のように話し、書き、読む機会を与えてもらえるなんて、夢にも思っていなかったので、とてもいい経験になった。不安だった日本語のレベルを高めてくれた日本リザルツにとても感謝している。そして、次に今回のインターン経験から得た今後の自分へのアドバイスを書きたい。 1)謙虚になる：アドボカシーを専門とする NGO は、他組織と密な関係性を保つことが必要であるため、どんな方にも謙虚に接することが大切だと気が付いた。周りのサポートがあるからこそ、日本リザルツは成り立っている。私も色々な方々と交流を深める日本リザルツのように、謙虚でありながらも芯の強い女性になりたい。2)前向きになる：幅広い分野に携わっている日本リザルツ。貧困・結核をはじめ、国際的な大きな問題の解決策を編み出すことは容易なことではない。代表の白須さんのように、それぞれの問題を真正面から受け止め、前向きに取り組み、笑顔で進めていくことは国際協力の場では欠かせないと思った。小さな進歩を続けるからこそ、大きなインパクトに辿り着くことができる。仕事に対して、人生に対して、前向きになることを学んだ。3)視野を広める：最後に、視野を広めること。今まで国際協力にしか興味を持っていなかった私は、日本リザルツに訪れた数々の優秀な方々と接したからこそ、世の中には色々な仕事があり、そして世界に貢献できるような職業は国際協力関連だけではない、と気付いた。柔軟な考えを持ち、物事に柔軟に対応していくことで、より素晴らしい人生を歩むことができる。これからはもっと視野を広めて、将来に向け頑張っていきたい。日本リザルツの皆様には、2 ヶ月間、本当にお世話になった。心が温かく、素晴らしい方々と仕事ができ、一生の思い出になった。読者の皆様、今後も日本リザルツを応援して欲しい。

7 月 28 日	**FUJISAN 地球フェスタ WA2016 in 御殿場に参加** 7 月 23 日、FUJISAN 地球フェスタ WA2016 in 御殿場に参加してきた。FUJISAN 地球フェスタ WA2016 とは、未来の子どもたちに美しい地球を残したい。そんな思いを持った世界中の人々が集まって行われるイベントだ。子どもサミットや、官庁後援コンテストなどなど盛りだくさんの内容だった。会場内は、日本中から集まった応援メッセージで彩られ、和気あいあいとしていた。リザルツのメッセージもあった。この美しい地球を大切にしていきたいと思った。
7 月 28 日	**ケニア上陸** ひとつ前のブログでも報告があった通り、ついに念願のケニアに上陸した。荷造りの時に悩んだことの一つが、滞在中の服装だ。ナイロビは高山都市のため、一年を通して気温が 20 度前後と大変過ごしやすいのだが、6 月~8 月はなんとケニアの冬にあたり、気温が 10℃を下回ることがあるそうだ。乗り継ぎ地だったエチオピアでは雨が降りしきり凍えるような寒さだったため少し心配だったが、ナイロビのジョモ・ケニヤッタ国際空港に到着するとポカポカと暖かくて一安心した。空港からホテルまでは車で移動。最初は空港周辺の長閑な風景も・・・町の中心部に近づくにつれてだんだんと人通りが増え、アフリカ特有の、エネルギッシュで少しカオスな活気に包まれてきた。「本当にケニアに来たんだ」と実感し、こちらもワクワクしてきた。ホテルでは、日本リザルツケニアオフィスのメンバーのデニスさんとお会いすることが出来た。日本にいるときから、現地 NGO 登録の申請や銀行口座開設の準備など、本事業の実施に向けてずっと協力いただいていた。約一年前からメールでやり取りをしていたデニスさんと念願の初対面ということで、感動もひとしおだった。昼食を食べながら話をしていると、デニスさんの人柄の良さに惹かれ、人脈の広さに驚かされた。このような素晴らしい方とこれから一緒に活動できることを、心から嬉しく思う。明日は在ケニア日本大使館に伺う。(本事業は、日本 NGO 連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
7 月 28 日	**市民活動支援施設** 熊本市市民活動支援センター「あいぽーと」と熊本市社会福祉協議会のボランティア・市民活動センターを訪問した。「あいぽーと」は市電の交通局駅の前にあり、申し分ないロケーションである。しかし、一階の相談窓口を除いて、被災した施設の修繕のため、本来の目的である情報発信や市民活動、集会などの活動は停滞しているようである。チラシを置いていただいたが、ホームページ上にも情報を掲載してもらうよう、申請手続きをしようと思う。中央区新町にある社会福祉協議会のボランティア活動センターも被災の関係でドアに留意するよう張り紙があった。少し遅めの時刻、しかも暑いさなかだったせいかもしれないが、人影はほとんどなかった。しかし、こころよく専門家無料相談会のチラシと子育て相談のチラシを置いてくださった。
7 月 29 日	**第 12 回事例勉強会** 「らぽーる」の協力者(弁護士、臨床心理士、研究者、有識者等)と相談員、ボランティアのメンバーで、月 1 回集まっては情報交換したり、具体例を取り上げ、対応を協議したりする機会を設けている。誰ともなく「事例勉強会」と呼ぶようになったこのミーティングですが、毎回、参加しながら、ふと客観的に「事例勉強会」を俯瞰している自分がいて、改めて「そうそうたるメンバーだわ…」と感じる瞬間が何度かある。昨夜は、501 号室(いつものお部屋)が使用中だったため、504 号室で小じんまりと全員が近い距離でのミーティングだった。それが話しやすい雰囲気を醸し出したのか、あるいは心理の専門家がいらしたからか、それとも女性の人数が多かったからか、柔らかい空気が流れていたように思う。今回は 2 人の新しい仲間が加わった。1 人は、養育費の未払い問題と向き合う高校生。高校生ですが、ずい分いろいろリサーチされていたり、

	勉強もされていたりして、いきなり、「日本の面会交流最先端」のミーティングに参加されても、ちゃんと話題について来られていて、会議中ずっとノートをとっておられました。将来は法曹界で活躍したいという彼女は、「次回もぜひ参加させてください」と目をキラキラさせて帰られた。どうか、今のお気持ちを忘れないで、と祈る思いで見送った。もう一人は、「離婚・面会交流コンサルタント」のしばはし聡子さん。小学生のお子さんと同居されている親御さんだ。なんと、いつも議事進行役を務めていただいている方と同窓生で共通のご友人がいらっしゃることが分かり、一同「世の中狭い」と驚いた。「らぽーる」に賛同し、集まってくださる方々とのご縁を、これからも大切にしていきたいと思った 1 日だった。
7 月 29 日	**在ケニア日本大使館**  本日は、午前中ケニアの日本大使館にて署名式を行った。ケニア大使館の外見は、テロ対策などの関係上お見せすることは出来ないが、非常に警備が厳しく整った場所だ。大使とは約 20 分間の面会だったが、私たちが行う事業内容もお伝えし、活動する際の注意事項やケニア事情をお聞きすることが出来た。(本事業は、日本 NGO 連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
7 月 29 日	**県庁ホールでの出来事** いつもは閑散とした県庁ホールの昼時間。なんだろうこの人だかりは?と横目でみつつ、県庁の食堂で、魚定食を食べた。暑いからあっさりしたものがいい。だいたいは和定食を選ぶ。県庁の食堂は明るく、窓から緑の木々が望めて、落ち着いた雰囲気だ。いつもと違ってあまり食堂が混んでいなかったなどと思いながら、先ほどのホールに差し掛かったところで、美しい弦楽器の調べが聞こえてきた。スーパーキッズオーケストラが阿蘇で合宿をしており、ここ熊本県庁で被災された方々を励ましに来たとのことである。
7 月 31 日	**Dr.どっぐ** ジリジリとした日差しが容赦なくたたきつける交差点で、信号が青になるのを待っていた。ほどなく、赤ちゃんを抱え、右手に 2 歳ぐらいの男の子を引き連れたお母さんが、同じく待つために横に立った。左手に日傘をさしている。自動車の熱い排気ガスが追い打ちをかける。あまりにも信号が長いので、思わず「なかなか青にならないですね」とそのお母さんに声をかけた。「そうですね」とお母さんが返されたところで、信号が青になった。 子育て相談を行っている熊本市総合子育て支援センターに差し掛かったところで、どこからか「熱中症には気を付けないとな」と言われているような声がしてふと左をみると、着ぐるみを来たドクターがベンチに腰掛けているではないか。この暑いのになんで着ぐるみ?ベンチにかけている手がリアルすぎて、怖くなった。動物病院が仕組んだものらしい。いままで気づかなかった。この日は、早くから、わりあい多くの親子が支援センターにやって来ていた。夕方から夜にかけて、子育て支援と専門家無料相談がもっと活用していただけるように、地元の NPO グループが集まる 2 つの会合(くまもと NPO ネット[仮称]第 2 回準備会、熊本こども・女性支援ネット講演会[こども・女性のために救援・復興は私たちの手で)でチラシを配り、利用と情報拡散をお願いした。(この事業はジャパンプラットフォームの助成を受けて実施している)
7 月 31 日	**新都知事誕生** 本日、東京都知事選挙の投票が行われ、無所属の新人として立候補されていた小池百合子さんの当選が確実になった。初めての女性都知事誕生となった。小池さんは、エジプトのカイロ大学でアラビア語を学ばれ、議員時代には日本・パレスチナ友好議員連盟の会長として、中東の平和のために率先して活動されてこられた。また、昨年 11 月にガザから 3 人の子どもが来日した際は、安倍晋三内閣総理大臣への

	表敬訪問に同席してくださった。新たな都知事として、東京、日本、そして世界の平和と発展のため、これから益々ご活躍されることと思う。リザルツ一同、応援している。
8 月	
8 月 1 日	**アフリカにおける栄養改善** 8 月 27 日（土）・28 日（日）にケニアのナイロビにおいて、第 6 回アフリカ開発会議（TICAD VI）が開催される。これに向けて 7 月 26 日（火）に、第 4 回 TICAD VI に関する外務省と市民ネットワーク for TICAD との対話が行われた。外務省からは藤田順三 TICAD 担当大使が参加された。多くの NGO と共に日本リザルツからも参加させていただいた。TICAD VI では、ナイロビ宣言が採択されることになっている。そのドラフトに向けて、日本リザルツからも意見を既に出している。内容は次の通りである。栄養改善については 3 点程コメントを出した。フード・バリュー・チェーンつまり、食の供給や消費を考えるに当たっては、栄養不良を視点に入れることが重要であること。また、栄養のイニシアティブを行う際に、単なる実施に留まらず、栄養不良の削減という明確な目標を入れること。実施に当たっては政府や企業のみならず、NGO も参加できる枠組みにすること。更に食料の安全保障を考えるに当たっては、地域の食材を生かし、小規模農家や栄養不良、環境に配慮を忘れないことである。栄養以外にも、予防接種の完全普及、小規模ビジネスにおいて女性が参加できるように配慮することについてもコメントしていた。今回の会合では、その他の NGO からのコメントも含め、この段階では外務省が検討中という回答に留まった。また、外務省の栄養改善に向けての政策や戦略について質問をさせて頂いた。回答としては、栄養改善に向けて国別のデータ収集が行うことができる体制をつくること、また民間企業による国際栄養改善が進むようにするということであった。これらは JICA や内閣官房主導で検討された国際栄養プラットフォームのことを指していると考えられる。TICAD VI に向けて様々な政策的な協議が行われていると思う。明日 8 月 2 日 4 時から国際母子栄養改善議員連盟が開かれる。良い情報共有と協議の場となり、アフリカの人々の幸せに繋がってほしいと願う。
8 月 1 日	**KANCO との初めての打ち合わせ** 本日は、ケニアでこれからパートナーとして協力して仕事を行なっていく KANCO スタッフと初めての打ち合わせを行った。KANCO とは、Kenya AIDS NGOs Consortium の略で、1990 年に創立され、現在では 700 団体以上が加盟する大きなネットワークを持つ NGO 団体だ。今後、私達のプロジェクトを行うための最初の段階として、様々なアドバイスなどをいただき、充実した打ち合わせを行うことが出来た。私達のプロジェクトは、ケニアで結核のアドボカシーと結核診療所の修復作業を行う。ケニアは結核の高蔓延国だが、中でもスラム街には、約 2 倍の結核患者がいる状態だ。一部の人々の間では、結核がいまだ不治の病と考えられており、結核菌を持っているだけで、いじめなどの差別対象とされてしまっている。その結果、結核診療所に診察を受けに来る患者が非常に少ないのが現状だ。また、結核診療所の屋根が破損していたり、結核患者専門の待合室がなかったりといった状況が、さらに事態を悪化させている。その中で、私たちが目をつけたのが、2012 年に代表が訪れたスラム街のカンゲミという地域だ。このプロジェクトは 3 年間で行う予定で、その 1 年目として、カンゲミの結核診療所の修復とカンゲミを中心とした結核のアドボカシーを行う。明後日には、カンゲミの診療所を管軸しているメディカルオフィサーの方と会議があり、そちらでさらなる詳細を決めていく予定だ。プロジェクトを成功させるため、精一杯頑張っていく。(本事業は、日本 NGO 連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
8 月 2 日	**ODA 政策と栄養** 7 月 28 日（木）に外務省で平成 28 年度の第一回 NGO・ODA 政策協議会が開かれた。SDGs の ODA 政策への反映、開発協力重点方針等の報告があり、その後協議事項として G8 食料安全保障及

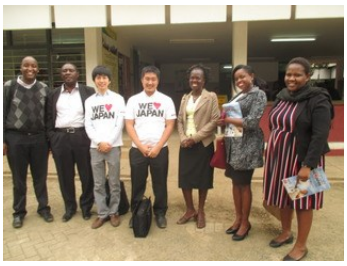
	び栄養のためのニューアライアンス他が挙げられた。G8 食料安全保障及び栄養のためのニューアライアンスの協議の中で、いくつかの NGO から、この G8 で民間投資による途上国での栄養改善を推進するニューアライアンスについて貧しい農家を置き去りにしないように、進捗や日本政府の役割などが質問されていた。今回のこの協議事項の提案には日本リザルツは参加していないが、多くの NGO が途上国の食料や栄養の課題に関心を持ち、良い形で進むように願っていることがわかった。日本国内の動きを見ると、内閣官房の主導で日本の企業の国際栄養の国際展開が検討されており、新たなプラットフォームが設立される方向にある。同じ栄養の民間投資ということで共通するので、ニューアライアンスとこのプラットフォームの関係や外務省の関わりについては関心がある。栄養改善は多くのセクターに関係している。保健も農業も教育も経済も。従ってこれらに関わるアクターも多く存在することになる。沢山の省庁が関係し、その他、企業、学術関係者、専門家、NGO、現地政府、住民など多くの人々がつながって、効果的な取り組みをすることで、きっとより大きな成果がでると思う。今日は第四回国際母子栄養改善議員連盟が 4 時から行われる。政治家の方の他、様々な方が参加して、情報共有や連携が益々進み、効果的な栄養改善につながることを心から願う。
8 月 2 日	**ストップ結核パートナーシップ推進議員連盟** 8 月 1 日(月)、参議院議員会館にて『ストップ結核パートナーシップ推進議員連盟』が開催された。多くの国会議員の先生方、各省庁、企業、NGO の各ステークホルダーが参加し、大変な盛り上がりだった。司会は、事務局長を務める浜田昌良参議院議員。会長を務める、武見敬三参議院議員からのご挨拶、ストップ結核パートナーシップ日本、厚生労働省、外務省と続く。高階恵美子議員、古屋範子議員もいらっしゃった。結核はまだ人々にとって脅威である。特に多剤耐性菌などの課題が拡大し、国際社会で官民 NGO が連携する必要がある。また、来年 3 月東京にて 40 年ぶりに『第 6 回国際結核肺疾患予防連合アジア太平洋地域学術大会』が開催されるとの説明が、ストップ結核パートナーシップ日本の石川所長からあった。そして、世界の議員連盟（今回はアジア）から、この大会に合わせて『アジア・太平洋結核議員連盟』の会合の同時開催の要望があった。2015 年に設立された『アジア・太平洋結核議員連盟』として、この地域に対する結核予防の戦略を今後、より強化していくために検討してもらいたい。また、ストップ結核パートナーシップ日本から、官民が協力して結核の世界的流行を終息させることに貢献するとともに、日本が 2020 年の東京オリンピックまでに中蔓延国から低蔓延国となるよう対策を講じるため革新的な予算要求となることが、要望された。
8 月 2 日	**【結核制圧】各国と日本とが、さらに密に協力していく体制を！** 昨日 8 月 1 日、「ストップ結核パートナーシップ推進議員連盟」が開催され、私も参加してきた。色々な話題がある中で、私が最も注目した話題は、来年 3 月に東京で 40 年ぶりに開催されるという『第 6 回国際結核肺疾患予防連合アジア太平洋地域学術大会』と世界の議員連盟との協力体制を強固にする『アジア・太平洋結核議員連盟』の話題だ。日本の議員連盟にのみ、注力してしまっているが、そうか！アジアにも世界にも、こういった議員連盟が存在しているのだ。皆で手と手を取り合って、協力していけたらアジアの結核制圧に向けての動きはもっともっと加速していけるはずだと期待している。
8 月 2 日	**KANCO Office にて** 体調を崩していた大崎も少し復活し、初めて 2 人で KANCO Office に行った。KANCO Office の 3 階にオフィスがある。本日は、事務作業に追われていたが、昨日会議で話した KANCO の方と少しお話をし、保健省とのミーティングに向けて戦略を練った。なお、水曜日にメディカルオフィサーの方と会議があるとお伝えしたが、プロジェクトを確実に進めるには、より広い地域を管轄している County(地方行政区)の方とまずは話した方が良いということになり、来週頭にミーティングを行うことになった。また、初めてケニアの薬局に

	行ったが、薬が 120 円くらいで非常に安かった。ケニアは食事をすると日本とあまり変わらない値段の場所が多いが、特定のものは非常に安い時がある。まだまだわからないことが、たくさんある。(本事業は、日本 NGO 連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
8 月 2 日	**熊本ローカル情報** 東京で初めての場所を訪問するときはたいてい電車を使う。ネットの乗り換え案内などで、どの電車に乗り、どこで乗り換えるか、チェックする。8 月 14 日（日）に熊本市北区で開催する専門家無料相談会会場の下見のために、北部公民館の行き方をグーグルマップでチェックし、目標とする鹿児島本線の西里駅まで来た。ところがその先がやたら長かった。周囲は田んぼが広がり、上り坂になっていた。炎天下を 1 時間歩きとおし、ようやく目的とする北部公民館にたどりついた。北部公民館はいわゆる熊本市北区役所北部総合出張所という複合施設の中にあり、近くには北部保健相談所や体育館などがある。目の前の薩摩街道・鹿児島街道には産交バスのバス停があり、熊本市内の中心に行けると、公民館の方が教えてくれた。ローカルのバス路線はややこしく、分かりづらい。乗り換え案内にも出てこない。ローカルバスに限らず、地元の情報はあとになってじわじわと出てくる。（この事業はジャパンプラットフォームの助成を受けて行われている）
8 月 3 日	**お子さんからの相談** 「らぽーる」のリーフレットには、「パパとママのことで心配しているお子さんも電話してね」と、お子様向けのメッセージも書き込んである。先日、泣きながらも勇気をもって電話してきてくれた 10 代のお子さんがオフィスを訪問してくれた。お子さんは両親の喧嘩を見て、また、両親が離婚の話をするのを聞いて、怖くて不安で心配で、どうしたらいいかわからなくて、すがる思いで電話をくれたそうだ。電話に出たとき、お子さんの泣き声が聞こえたので、「落ち着くまで待ってますね、話せるようになったら話してね」と声掛けして、その子の泣き声を聞きながらじっと待った。鼻をすする音は、「助けて！」という叫びにも聞こえて、胸を締め付けられた。遠いところに住むお子さんだったので、もっと近ければもっとできることもあったのが…3 つほど、すぐにできることをお伝えして、その結果を見てまたお話ししようとゆるい約束をした。電話を切るときははきはきと「今日はありがとうございました。お母さんからも電話するように言います」と言っていた。ご両親に、お子さんの気持ちをわかってほしいと感じた。
8 月 3 日	**第四回国際母子栄養改善議員連盟** 8 月 2 日(火)、衆議院第一議員会館にて、第四回国際母子栄養改善議員連盟が開催され、日本リザルツのメンバーも参加した。国会議員の先生や省庁、国際機関、企業、NGO 等、栄養改善に取り組む、もしくは関心のある方々約 100 名（議員関係者約 40 名）が一堂に会した。栄養議連会長の山東昭子参議院議員から開会のご挨拶。栄養改善が世界平和につながる重要な課題として栄養議連の意義を語られた。司会を務めたのは、栄養議連事務局長のあべ俊子衆議院議員。内閣官房健康・医療戦略室、厚生労働省大臣官房山本尚子審議官より、「栄養改善事業推進プラットフォーム」等について説明があった。政府組織だけではなく、民間企業や学術研究団体、NGO など、それぞれが連携し合って進める必要があるとおっしゃっていた。農林水産省丸山審議官は、今月末に迫った TICAD Ⅵにおけるサイドイベントについて説明された。JICA の榎本氏からは、TICAD Ⅵのサイドイベントにおける新たなアフリカ・イニシアチブについてお話があった。財務省国際局開発政策課の三村氏は、世界銀行の SUN（Scaling Up Nutrition）信託基金について報告がされた。続いて、あべ俊子先生から、前回の議連で設立承認された「国際母子栄養改善国家戦略タスクフォース」の活動状況についてご

	報告があった。外務省国際協力局西野氏は、2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向けた中長期的な栄養改善の取組みについて説明がなされた。そして、先の参議院議員選挙で当選された今井絵理子参議院議員が初めて参加された。栄養議連の事務局次長に就任され、今後の抱負を述べられた。多くの参加者から栄養改善に関する取組みの進捗や今後の戦略等について発言があった。今回の会議で発言された方々は、日本栄養士連盟加藤会長、ニューヨークの The New School 教授、セーブ・ザ・チルドレン千賀事務局長、ワールド・ビジョン・ジャパン、アライアンス・フォーラム財団、国際ロータリー日本事務局、UNICEF 東京事務所、国連開発計画（UNDP）、ジョイセフだった。今回の栄養議連も様々な立場から多くの発表がなされ、大変有意義な会になった。今年は、「SDGs」と「栄養のための行動の 10 年」が開始される年で、栄養改善がますます注目されている。今後の具体的な施策に期待したい。
8 月 3 日	**銀行口座開設 in ケニア** 銀行開設に必要な手紙がようやく入手できたため、本日は本事業用の口座開設のために銀行に行ってきた。その手紙は、ケニアの NGO を管轄しているところ(NGOs Co-ordination Board)から発行されるものだ。やっと昨日、金曜日に開設手続きの時間を取ってもらうことができた。Results Japan Kenya Office のデニスさんが、月曜日も朝から夜 8 時ごろまでその手紙の為に、NGOs Co-ordination Board の事務所で待っていてくれていたのだがもらうことが出来なかた。昨日待望の手紙がやっと夕方にもらえ、本日銀行に行くことが出来た。さすがに日本みたいに期日通りとはいかないものだ。ケニアの銀行は、こんな感じである。銀行のため、中の写真は撮れなかったが、銀行の方は丁寧に対応していただき、とても親切だった。口座開設に必要な手続きを終え、Denise さんと私で携帯ショップに行き、ポータブル Wi-fi 等を購入した。その後、文房具など必要なものを買い、オフィスに戻った。文房具もあまり日本と値段は変わらず、普通のホッチキスでも 700 円程の価格だった。(本事業は、日本 NGO 連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
8 月 4 日	**7 月 28 日は「世界肝炎デー(World Hepatitis Day)」** インド映画の大スターと言えばアミターブ・バッチャン（Amitabh Bachchan）。インド映画をあまり知らない方も彼の名前は聞いたことがあるのでは？1970 年代からインドの映画界 Bollywood（ボリウッド）で人気を博し、一躍スターになった。第 81 回アカデミー賞で作品賞、監督賞ほか最多 8 部門を受賞したインド映画「スラムドッグ$ミリオネア」の中では、主人公がバッチャンのブロマイドを持っているシーンもある。実は彼、2000 年頃から B 型肝炎を患っている。「Defeated Hepatatis, You too can:Amitabh Bachchan」7 月 28 日の「世界肝炎デー(World Hepatitis Day)」には、ソーシャルメディアでキャンペーンが行われていた。2005 年から UNICEF の Good will Ambassador に就任されている。いつか保健分野の取組み等で会ってみたいなと思う。
8 月 4 日	**County の人たちとのミーティングに向けて** 本日、KANCO のスタッフが County の人とのミーティングを火曜日にセッティングしてくれた。そのため、ミーティングに向けて、資料作成や計画の練り直しなどさらに忙しくなってきた。オフィスは、陽も入り、とても過ごしやすく綺麗だ。County の方と来週ミーティングをすることで、やっと修復作業計画のスタートの見込みが見えてきた。現在ケニアは夜 20:00 近くだが、明日の KANCO とのミーティングに向けてまだまだ眠るのは先になりそうだ。(本事業は、日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
8 月 4 日	**専門家無料相談会ツールキット** 初回の専門家無料相談会（8/6 熊本市ふれあい文化センター）のカウントダウンが始まり、あれもこれもやらねばと思いつつ、準備をしてきた。趣旨書や相談票、腕章、名札入れ、会場配置図などをそれぞれ入

	れたファイルを作成し、この一式があれば活動が行えるようになっている。専門家相談会ツールキットと名付けた。この他に、各ツールの補充とアンケートや整理券、会場案内などを入れた自分用のツールキットがある。道具が整えばすべて良し、ではないが、枠組みをつくることで後の仕事が比較的スムーズになると思っている。（この事業はジャパンプラットフォームの助成を受けて行われている）
8 月 5 日	**ケニアの日本料理** 鶏肉料理や魚料理など、ケニアの食事は美味しいものが多い。しかし、メニューを眺めていて見覚えのある料理名が目に飛び込むと、好奇心からつい注文したくなるものだ。本日は、ケニアで食べた日本料理をご紹介する。我々がイメージするものとは見た目も味もはかなり違う。まずはこちら。「野菜の天ぷら」だ。サクサク衣の軽い口当たり、とはいかないが、これはこれでフライドポテトの野菜版という感じで美味しかった。私は「ラーメン」を注文したのが、どこをどう見ても麺のめの字も見当たらない。しかしウェイターはこれをラーメンと言い張る。さすがにおかしいので、他のスタッフに確認すると、麺がついてきた。最初に出てきたものは、麺を入れ忘れていたようだ。ナイロビでの仕事は、事業立ち上げ時期なこともありとても大変だが、仕事の合間にこういったハプニングを楽しめるのも海外プロジェクトの醍醐味だ。ちなみにケニアのラーメンは、味も食感も完全に焼きそばだった。
8 月 5 日	**KANCO との打ち合わせ** 本日は、County とのミーティングに向けて KANCO のスタッフと打ち合わせをした。。昨日の反省を踏まえ、さらに良い資料を作ろうと二人で夜遅くまで仕上げていた。このミーティングでも、作った資料についてアドバイスを少しいただき、これからどうしていくか方向性を固めていた。プロジェクトを行うにあたり、現在が一番大変で大切な時期だ。ケニアの現状をさらに調べ、理解し、火曜日の County とのミーティングに臨めたら良い。 (本事業は、日本 NGO 連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
8 月 6 日	**KANCO との打ち合わせ②** 午前中の KANCO スタッフとの打ち合わせに続き、午後は KANCO の代表アランとお会いした。さすがケニア最大 NGO のトップの方ということで、分刻みのスケジュールで動かれている。KANCO は本事業のパートナー団体だが、KANCO スタッフは本来の仕事もある中で、こちらが求めるものとあちらが協力できる範囲をすり合わせていく必要がある。事業を本格的に開始する前にそれぞれの役割を明確にして、しっかりと組織体制を固めなければならないということで、資料のブラッシュアップやファイナンシャルフローチャートの作成など、また沢山の宿題をいただいた。また、カンゲミで活動を行うにあたって Work Permit を持つことの重要性やセキュリティについてもお話を伺うことが出来た。とりあえず、一番の山場は来週の County のミーティングだ。これを乗り越えれば、いっきに事業が動き出す。(本事業は、日本 NGO 連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
8 月 8 日	**8 月 6 日という日** 連日の 35 度越えの暑さ。熊本市では夏のハイライトでもある火の国祭りが催され、イベントや総踊りと呼ばれる群舞が行われているとのことである。8 月 6 日は、広島で平和記念式典（広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）が催される日であり、今年はリオ・デ・ジャネイロで南米初のオリンピックが開幕した日でもあった。 子育て専門家無料相談会は、同じ 6 日の午後に開催されたのだが、暑さやイベントのせいか、思ったより相談される方が少なかった。8 月 14 日（日）には、熊本市北区の北部公民会大会議室で同じ時刻の 13:00-17:00 に開催するので、ちょっと専門家に聞いてみたいと思われる方にはぜひ

	お越しいただきたい。（この事業はジャパンプラットフォームの助成を受けて行われている）
８月８日	**窓から見た外側** 本日は、明日の County とのミーティングに向けて最終調整をした。これからの方向性が決まる非常に大切なミーティングになる。KANCO スタッフで明日同行して頂ける Rahab さんとも打ち合わせをし、リザルツのプロジェクトをどうすれば、明確に理解してくれるかなどを話し合った。ところで、ケニアは経済が急成長しているが、なかなか日本の企業が参入していない。しかし、車に関してはほとんどの人が、日本車の中古車を使っていて、やはり日本の車産業は誇れるものだなと感じる。そして、休日にスーパーに行ってみると、なんと日清のラーメンを売っていた。味は、日本の味とは程遠い味だがケニアにも日清が参入しているとは、日本企業に期待したい！ (本事業は、日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
８月８日	**みんなで自動車** 子育て相談会が開かれた本日は、なぜか元気な子が多かったような気がする。まだ朝のうちだし、広い場所におともだちもたくさんいて、みんな走る、走る、走る。ひとりが自動車にまたがるとみんなまたがって、床を蹴る、蹴る、蹴る。自動車には丸いタイヤがついているから、歩くよりスピードが出る。先生によると、7-8 歳ごろまでは、スピードがでる乗り物が好きなのだそうだ。ひっくりかえったりしながらも少しずつ怖さや対処の仕方を学んでいくのだろう。お子さんたちが遊んでいる間に、子育て相談の先生方は、お母さんたちの輪に入り、お話を聞いている。（この事業はジャパンプラットフォームの助成を受けて行われている）
８月９日	**IT 起業ガザに光（朝日新聞８月９日）** 日本リザルツが支援を続けているガザ地区のニュースを紹介する。戦火で荒れたパレスチナ地区ガザで生き抜く手段として IT による起業が人気だそうだ。そして、日本の若者たちも次々支援に乗り出しているそうだ。素晴らしいことですね。昨年、日本リザルツが招いたガザの子供達と釜石の子供達との凧揚げの様子は、たくさんのメディアにも取り上げられている。今後もガザへ色々な支援・協力ができたらいいなと思う。
８月９日	**County とのミーティング** 本日は、ケニアに来てからのミーティングで一番大事だと言っても過言ではない County の方とのミーティングが Nyayo House(政府機関が数多く入っている場所)で行われた。リザルツのプロジェクトに大変好感を持っていただき、成功したミーティングになった。このミーティングの結果、木曜日に Sub-county の人とのミーティングをセットしていただき、これで本格的にプロジェクトが始動しそうだ。また、明日からはさらにプロジェクトを詰めていき、少しでも早くケニアの結核予防に専念していきたい。(本事業は、日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
８月９日	**ナイロビ車事情** みなさん、こんばんは。本日はケニアの車事情、私がナイロビに来て実感した 3 つのポイントをお伝えする。①渋滞がすごい！時間帯にもよるが、とにかく混む。とくに朝と夕方は、普通なら 30 分で着く場所も 2 時間ほどかかる。それでも、みんな車と車の間の隙間を縫うようにして、スイスイ追い越していく。恐るべき運転技術だ。②信号がほとんどない！運転手的には良いかもしれないが、歩行者としては道を渡るとき怖い。でも、ケニア人はやはり器用に渡っていく。③日本車が多い！日本の車がとにかく多い。今まで乗った車はほとんど日本車だった。(本事業は、日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)

8 月 10 日	**「グローバルフェスタ JAPAN2016」説明会に参加** 夏真っ盛りですが、様々なことが秋に向けて準備が進められている。今年の「グローバルフェスタ JAPAN」は、場所を日比谷公園からお台場センタープロムナード公園へ移した昨年と同様で、お台場での開催だ。10 月 1 日（土）、10 月 2 日（日）、各日 10:00～17:00 の開催だが、毎年 10 月 6 日の国際協力の日を記念して、その前の土日に開催されている。例年、2 日間で約 10 万人のご来場がある、大きなイベントである。私は説明会には初めて参加したが、主催者の方々の熱い思いが伝わってきた。若い世代からシニア層まで、楽しく分かりやすい行事を通して国際協力をより身近なものに感じて欲しいという思い、そして一歩進んで、国際協力の現状、必要性、政府と NGO、市民社会の協力についての理解を得たい、そしてさらにもう一歩進んで、国際協力への参加を促進したい…、そんな思いのこもったイベントなのだ。
8 月 10 日	**カンゲミ地区の CHV について** 本日は私たちがプロジェクトを行う上で。とても重要なパートナーとなる、CHV についてご紹介させていただきたい。CHV とは、Community Health Volunteer の略語で、コミュニティ保健戦略に則って活動しており、村の代表が開催する会合で選出される。農村地域では無給で活動されている方もいるが、皆強い責任感と義務感を持って、地区の保健衛生環境の向上に取り組んでいる。カンゲミ地区には、コミュニティと呼ばれる 4 つの集まりがあり、それぞれに 50 人の CHV がいる。通常だと、3 日間かけて訓練が行われているが、資金や資材不足で、実際には訓練を受けていない人もいる。日本リザルツでは、そうした方々を対象にトレーニングを行い、結核に特化した啓発活動を行っていく予定だ。カンゲミ地区はスラム街のため、日本の団体や企業、あるいはケニアの国民までもが危険で近寄りがたいと思っている。しかし、そのような地域で活動を行わない限り、結核は抑止できない。一人でも多くの結核患者を救いたい。(本事業は、日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
8 月 11 日	**栄研化学の LAMP 法による結核遺伝子検査法が WHO の推奨を取得と発表(8/10)** 日本リザルツが長年に渡って応援してきた、栄研化学のＬＡＭＰ法による結核遺伝子検査法が、ＷＨＯの推奨を取得した！先日、日本リザルツのメンバーで LAMP 法の講習のため、那須の栄研化学の研究所にお邪魔したばかりだったため、ただ今喜びで興奮冷めやらぬ状態だ。従来、結核の検査には、複雑な機器の使用をせねばならず、診断結果の精度も低く、また結果が出るまでに長い時間が必要だ。その状況を打ち破ったのが簡易でコストも低く抑えられ、検査結果の精度も高く、短時間で結果がわかる「LAMP 法」だ。現在、「LAMP 法」は、結核菌のみならず、マラリア、インフルエンザウィルス、腸管出血性大腸菌、マイコプラズマといった様々な病原体に対しても迅速診断法が開発され、広がりを見せている。ちなみに、日本リザルツでは昔から栄研化学を応援しており、クリアファイルまで作ってしまっている仲である。2013 年には、日本リザルツと栄研化学、外務省による官民連携事業も成功させている。栄研化学の素晴らしい技術で、発展途上国はじめ、結核に苦しむ人が世界中からいなくなるよう、今後も精一杯応援していきたい。
8 月 11 日	**メディカルオフィサーと打ち合わせ**  本日は、ウェストランズ・ヘルスセンターにて、サブ・カウンティのメディカルオフィサーと会合を行った。ケニアの行政組織について簡単に解説を行う。ケニアは以前、8 つの「州」に分かれていた。しかし、2013 年に、地方分権化を進めるため行政区画が再編されることになり、州が解体されて 47 の「カウンティ」が設置された。カウンティの下にはさらに細かい「サブ・カウンティ」に分かれており、選挙区もこのサブ・カウンティが基準になる。「ナイロビ」というカウンティの中には、17 のサブ・カウン

	ティがあり、その一つがカンゲミを含む「ウェストランズ」だ。ちなみにウエストランドは植民地時代から続く高級住宅街として知られている。本日は、本事業実施地でもあるカンゲミ・ヘルスセンターを管轄しているメディカルオフィサーの方と話をするために、彼女らが働いているウェストランズ・ヘルスセンターを訪問した。ウェストランズ・ヘルスセンターは、ナイロビでも有数の医療施設だと聞いていたが、やはり日本の感覚からすると全く違った。待合室と言っても、外の広場に屋根がついているだけなので風が吹き込んで寒く、8 歳くらいの子どもが赤ちゃんを一生懸命毛布で暖めている姿が印象的だった。打ち合わせには、ヘルスセンターからメディカルオフィサーの 3 人、KANCO から 2 人、日本リザルツからはデニスさんを含む 3 人が出席し、非常に良い雰囲気の中で話し合いが行われた。本事業について理解、賛同いただくことができ、一安心した。一昨日にカウンティ「ナイロビ」を管轄している方、本日はサブ・カウンティ「ウェストランズ」を管轄している方とお会いし、次はいよいよカンゲミのコミュニティ・ユニットを管轄している PHO(パブリック・ヘルス・センター)の方と具体的な話を詰めていく予定だ。一日でも早く事業が形になるよう、頑張りたい。(本事業は、日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
8 月 11 日	**カンゲミ・ヘルスセンター** 本日は Sub-county の方とのミーティング終了後、現地のスタッフの方に、これからメインで活動を行うスラム街のカンゲミを訪ねてもらった。2012 年に代表が訪問した時よりも、外観はペイントされていて綺麗になっていたが、内観はほとんど変わっておらず、やはり修復作業が必要な状態だそうだ。修復作業の詳細については、これから Public Health Officer の方とのミーティングで決めていく。また、本日の Sub-county とのミーティングにおいて、カンゲミを含むウエストランド地域で結核に関する活動を行っている海外の NGO も判明した。そちらとも連絡をとり、来週ミーティングを行う予定だ。その NGO は、長年ウエストランドにおいて活動を行っているようで、協力をしながらさらに良い結核アドボカシー活動が出来たら良いと思う。昔は診察室として使われていたが、屋根の骨組みがむき出しになって現在は物置になっているとのこと。 (本事業は、日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
8 月 11 日	**The Rio N4G Summit** リオ・デ・ジャネイロで開催されているオリンピック。オリンピック開幕の前日、8 月 4 日には、イギリス、ブラジル、そして日本の政府が第二回となる「Nutrition for Growth（成長のための栄養）Summit」を開催した。これは 2013 年にイギリスとブラジルの政府、CIFF （Chirdren's Investment Fund Foundation）により初めて開催された会合で、世界の栄養問題の解決に向けてステークホルダーがコミットメントを示す場となっている。2013 年の時には、栄養不良の対策に向けて 40 億ドル以上の新しい約束がなされた。日本政府の部分では、今年５月の伊勢志摩サミットでの成果や栄養改善事業推進プラットフォームの設置について、また今月末の TICAD Ⅵにおける報告の機会などが記載されていた。栄養問題についてそれぞれの状況を確認することも大切だが、少し具体性に欠ける内容という印象だった。次回は 2020 年の東京オリンピックではなく、2017 年の G7 に向けてイタリアにプレッジの場の主催を検討してほしいと市民団体などのコミュニティが要望を出している。4 年に一度と限定することなく、世界の子どもやお母さんなど困っている人々に目を向けて取り組んでいけると良いと思う。
8 月 12 日	**エチオピアの保健普及員** 昨日（8 月 11 日）の朝日新聞にエチオピアの保健普及員の記事が掲載された。エチオピアでは、全国の 1 万 6 千か所にヘルスポストと呼ばれる地域の保健医療の拠点を設置し、3 万人以上の保健普及員

	が予防接種やエイズやマラリアの検査を行い、農村の医療事情を大きく向上させた。5 歳未満の死亡率は、2000 年の 145 人/1,000 人から、2015 年には 59 人/1,000 人に減少し、エイズ死亡率も 78%減、マラリア死亡率も 74%減となったそうだ。8 月 27 日、28 日に TICAD VI がケニアのナイロビで開催されるが、保健システムの脆弱性が新たな課題として挙げられているので、エチオピアの取り組みは各国の注目を集めそうだ。保健普及員導入を資金面で支えたのが、グローバルファンドだ。日本もこれまでに 23.5 億ドル以上を拠出しており、今年 5 月には新たに 8 億ドルの拠出を発表している。日本リザルツはグローバルファンドのアドボカシーも行っている。結果がこのように新聞記事になるのは大変嬉しいことだ。
8 月 12 日	**Kilimani 警察署** 本日は、事務所近くにある Kilimani 警察署に行ってきた。来週の月曜日、カンゲミ・ヘルスセンターのパブリック・ヘルス・オフィサーと打ち合わせを行いに、カンゲミに入域することなったため、警察官に同行してもらえるようお願いに行ったのだ。ナイロビ市内に幾つかあるスラムの中で、カンゲミ・スラムは、キベラ・スラム、マザレ・スラムに次ぐ 3 番目の規模を誇る。もちろんカンゲミに入る際は現地スタッフと行動を共にするし、安全には十分に配慮するが、念には念を入れて、警備を雇うことになった。何より、この時期に万が一何か起こったら、今月末の TICAD にも影響が出かねない。「邦人がナイロビで事件に巻き込まれ、治安上の懸念から TICAD 中止に！」なんてニュースが新聞の見出しを飾らないよう、日中でも外出の際は常に気を張っている。警察署は一階建てのシンプルな建物で、そこで働く警官も非常にフランクな方だった。手続きと支払いが終わり、警察を出ようとすると、入口のドアに「zero TB deaths」と書かれたシールを発見。警察に限らず、様々な場所でこのシールを目にすることが多く、ケニアで結核がいかに大きな問題になっているかを実感する。さて、いよいよ来週の月曜日は初めてのカンゲミ。安全に気をつけて行ってきたい。 (本事業は、日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
8 月 12 日	**連日の記録越え** 連日の記録越え。オリンピックのことではなく、熊本市の最高気温が 37 度超。運動禁止はもちろん、電車やバスの待ち時間さえ、日差しを浴びていると少し息苦しさを感じる。11 日が山の日で休日となり、そのままお盆休みをとり、里帰りされる方も多かったのか、今日、子育て支援センターにお越しなった親子は少なかった。加えて子育てセンター体験の中高生が 5 人もいたので、子ども目線から見れば、圧倒的に大人たちが多かったのである。一人の子どもに 5 人の視線が注がれる場面も。子ども同士の出会いと遊びの促進も子育てセンターの重要な機能なので、こういうときは、余った大人は子どもたちの関心や遊びを疎外しないよう壁にくっついた「物体」となる。この日から数回、非常に経験のある臨床心理士の方に子育て相談会に加わっていただく。相談会終了後、より深い関わりや個別ケースの方向について意見をいただいた。（この事業はジャパンプラットフォームの助成を受けて行われている）
8 月 13 日	**【ニュース】ナイジェリアで新たなポリオ感染者(8/11)** ナイジェリアの紛争地域で、野生株による新たなポリオ患者の存在が確認された。ポリオは、根絶間近とされている感染症で、ポリオ常在国(野生型ポリオの発症が続いている国)は、パキスタンとアフガニスタンの二国のみとされていた。ナイジェリアでは、2 年前を最後にポリオの感染は確認されておらず、あと少しで、ポリオ・フリー国として認定される予定だった。日本リザルツでは、長年ポリオ根絶に向けたアドボカシーに取り組んで来た。今、我々にできることは何か、考えて行動していかねばと思っている。■世界ポリオ根絶イニシアティブについて～世界ポリオ根絶イニシアティブは、ユニセフのほか各国政府、WHO、ロータリー・インターナショナル、米国疾病管理予防センターにより推進され、ビル&メリンダ・ゲイツ財団などの主要なパートナー団体により支援されている。

8 月 15 日	**テロに遭わないために…** 本日(8/15)は、外務省の領事局海外邦人安全課の伯耆田さまから、海外での安全対策について、直接レクチャーしていただく機会を頂いた。昨年 11 月にフランスのパリで発生した、コンサートホールや北部のサッカー場などを標的とした同時多発テロ事件以降、世界各地でテロが発生している。さらに、邦人 7 名死亡、1 名負傷したダッカの襲撃テロ事件が発生し、日本人がテロを含むさまざまな事件の被害に遭う危険があり、今後も継続して注意が必要だ。本日は、テロ対策のための"いろは"を共有する。 ◆テロ対策：①まずはターゲットにならないようにする。・目立つ服装、目立つ車、目立つ行動を避ける。・イヤホン等で音楽を聞くなどして外部の音を遮断しない。・避難できる服装を着用(ハイヒール、サンダル、半ズボンは高リスク)。・宗教関連施設、軍・警察施設、外国関連施設にはなるべく近づかない。・ガラスを多く使用した建物にはなるべく近づかない。・人が多く集まる場所にいる時間をできるだけ短くする。(空港の受付カウンター、ホテルのロビー等)・大きな荷物,不自然な厚着,不審者,不審物には近づかない。②テロに遭遇してしまったら。・爆発音・銃撃音が聞こえたら直ちに伏せる。・頑丈な物陰に隠れる。・できるだけ速やかに現場から離れ近寄らない。・カバン等で頭部を保護し、姿勢を低くして爆発時点から離れる。・複数の爆発物が仕掛けられている可能性に注意。 常に「ここは日本ではない」という意識を持つことが、海外渡航で重要なことだと思った。
8 月 15 日	**凧揚げ青年、世界に羽ばたく** 本日から日本リザルツの職員に長坂が加わった。マスコミでの勤務経験を活かして、どんどん日本リザルツの面白い活動を発信していくそうだ。長坂は、白石に同行し、外務省に行ってきた。白石は大学 1 年の時、「アフリカに行ってみたかった」と興味本位で行ったボランティアで開眼し、もっと現地の人の声を聞いて、それを日本のみなさんに伝えたい!という夢を抱き、現在は日本リザルツでインターンをしている。これまで、釜石、熊本、そしてネパールの山奥まで国内外を飛び回り、凧を揚げて、世界と日本の人をつないできた。そして彼あ、今月末から 1 年間、世界一周凧揚げの旅に出る。アフリカ・ケニアを皮切りに、アジアなど 16 か国以上をまわり、凧を揚げ、世界の人をつないでくるそうだ。しかし、世界の治安や社会情勢は不安定。青年が 1 人で開発途上国を放浪するのは、やはり心配…ということで、外務省の方に安全に旅をするためのノウハウを伺いに行ってきたのだ。外務省の伯耆田邦人援護官も「彼の活動がきっかけで、世界の人に日本に目を向けてもらって、輪が広がるといい」と応援していた。凧揚げ青年の出国は８月末。青年の大志が無事に実現できることを、リザルツ職員一同祈っている。
8 月 15 日	**PHO とのミーティング** 本日は、カンゲミ・ヘルスセンターで Public Health Officer とのミーティングを行った。車でヘルスセンターの敷地内まで入ったので、直接スラム街を歩くことはなかった。しかし、車の窓越しに見えた八百屋、携帯ショップ、洋服屋などは非常に賑わっており、地元の人々の生活を感じることができた。ミーティングは約一時間で、主に修復作業のことについて話し合った。診療所は、シロアリなどに侵食されていて、外壁や屋根がボロボロになっている。修復するためにどんな材料を使うのか、修復中の業務はどうするのか等心配されていたので、一つ一つ丁寧にお答えした。とりあえず、修復に関してはゴーサインをいただけたので良かった。今週中に、今度は修復会社を含めて話し合いを行い、詳細を決めていく予定だ。(本事業は、日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
8 月 16 日	**子育て支援センターの役割** 朝、雨が降って、普通の暑さになった。お盆の間は、子育て相談はなかったが明日から、また週 2 回のペースで始まる。本事業で行っている医師と心理士のチームによる子育て相談は、そもそも熊本市総合子育て支援センターが日常的に行っている子育て支援プログラムに寄りそう形で実施されている。子育て支援セン

	ターというのは元を辿れば、平成 21 年度から始まった厚生労働省の地域子育て支援拠点事業によるイニシアティブで、全国に展開された拠点施設の設置事業である。目的は子育て中の親子が気軽に集い、相互交流や子育ての不安・悩みを相談できる場を提供するというもの。熊本市には20箇所あり、育児相談、親子の遊び場、育児講座、情報提供、地域との交流に関して、それぞれが独自のプログラムを組み、提供しているようである。本事業が実施する医師と心理士のチームによる子育て相談は、震災後の親子のメンタルケアに焦点をあてていて、20 ある子育て支援センターの中で、熊本市総合子育て支援センターのみで提供されている期間限定の外部専門家によるサービスと見ることもできる。さて、総合支援センターの子育てに関する情報は、非常に充実していて、常に関連するパンフレットやチラシ、新聞、情報誌があふれんばかりに、棚に並んでいる。（この事業はジャパンプラットフォームの助成を受けて行われている）
8 月 16 日	**Malteser International とのミーティング** 本日は、KANCO の会議室にてミーティングが二つあったので、まず一つ目を報告する。最初のミーティングはカンゲミ地区で活動を行っている Malteser International という国際 NGO との話し合いだ。Malteser International は、2001 年からカンゲミ地区を含む Westlands において、結核などの保健事業に力を入れて行っており、様々な功績をあげている。同じ地区で類似活動を行っている NGO はなかなかいないため、このような情報共有の場は非常に貴重だ。お互いの組織の活動や今後のプランについて、活発な議論を行った。まだ、現地調査に関しては行っていないということだったが、過去のアドボカシー実績や経験などから、結核患者の発見の重要性など、事業を行う上でアドバイスを頂いた。今回のミーティングを通して、パートナーシップの大切さを改めて感じた。今後もプロジェクトを進めながら、定期的に話し合いの場を設け、お互いに助け合っていきたいと思う。あくまでも、個々の実績を競うのではなく、ケニアの方々のために協力しながら、事業を実施していきたい。(本事業は、日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
8 月 17 日	**CHA とのミーティング** 前半のミーティングに引き続き、後半はカンゲミを担当している CHA(チャー)の Lilian Nyokabi さんが加わり、具体的なワークスケジュールや予算について話し合いを行った。CHA とは Community Health Assistant の略で、地域で活動している CHV (CHV:Community Health Volunteer)の取りまとめを行っており、本事業の重要なパートナーとなる。 Lilian さんは一人でなんと約 250 名の CHV を担当している方で、多忙のところ、今日のミーティングのために駆けつけてくださった。まずは、昨日カンゲミで PHO と話し合った内容について情報共有を行い、クリニック改修の今後の動きについて確認した。その後、本事業の柱となる CHV への研修やベースライン調査の中身についてひとつひとつ見ていき、限られた予算の中で最大限の効果を上げるため、予算配分の組み換えの必要性について議論した。また、アドボカシーは建物の建設や物資の配布と違い、経過が目に見えにくいため、具体的なマイルストーンの設定が鍵となるといった意見も飛び出した。こうして現地で協力の輪がどんどん広がるのは、やはり嬉しいものだ。(本事業は、日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
8 月 17 日	**海外渡航のための予防接種。治療より予防！** 第 6 回アフリカ開発会議、TICAD Ⅵ(8 月 27,28 日開催)が近づいている。今年はケニアでの開催ということで、リザルツからも関連イベントへの参加のため、数名がケニア入りの予定だ。そのため先々週、ケニ

	アに行く予定のメンバーが予防接種を受けに行ってきた。受けたのは、黄熱病とＡ型肝炎の予防接種だ。二つとも感染すると死に至ることもある恐ろしい感染症のため、感染しないように予防接種が義務付けられている。かからないように事前に備えることが、とても大切なのだ。予防接種は重要だ。世界的にも、「治療」より「予防」により力を注ぐ方が、結果的に様々なコストが低くなると提唱されている。今、声高に叫ばれている「UHC の実現」のためにも、世界中の誰一人として取り残さない予防接種の実施がなされるよう、今後もアドボカシー活動をがんばりたい。
8 月 17 日	**KANCO スタッフとの打ち合わせ** 本日は、昨日のアドバイスを受け、予算について本格的に KANCO スタッフと話し合った。ケニアに来てからずっと思っていたが、日本とケニアの「会議」の扱いには違いがある。例えば、一日中会議を行う場合は、朝 10 時と午後４時に必ずティータイムが設けられていたり、会議を主催する立場になった場合、参加者に交通費、もしくはランチ代を支払わなければならなかったりなど、日本にはない「会議」文化がある。また、ケニアではこの 3－4 年で物価が 30%以上高騰しているため、ほとんど日本の物価と変わらなくなってきた（日本の 1 円はケニアの 1 ケニアシリングとほぼ同じだ）。普段、私たちが街中で食べている昼食も 500-700 円ほどするのが当たり前だ。私たちが組んでいた予算に関しても少し情報が古く、現在ケニアで相場となっている講師謝礼や調査費と差が出てきてしまったため、KANCO スタッフと現実的な予算を考えながら話し合ってきた。限られた資金で事業を行うため、非常に厳しい状況下ではあるが、最善を尽くしていきたい。(本事業は、日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
8 月 17 日	**子ども目線** 子ども目線という言葉そのものの意味するところは、子どもの目の高さから見える世界があるということだが、拡大解釈して、「大人」が子どもの目の高さや体格から触れる、感じられる対象がある、さらには子どもの身になって理解する、想像することを指して使われていることもあるようだ。しかし、物理的な子ども目線は体格の成長とともに変化していくだろうし、子どもから見える世界も成長とともに変わっていくに違いない。それに合わせて「大人」による子ども目線も変化していかなければならない。特に体格の成長が著しい乳幼児が見ている世界を理解していくのは容易ではないのではないか。でもお母さんたちは子どもたちとのやり取りの中で自然にそれを見つけ、自らも子ども目線を獲得していくのではないか、そう思った今日の子ども相談会であった。さて、子ども目線で写真にある遊具に乗ってみたい気がする。これは乗って跳ねる乗り物だと分かった。（この事業はジャパンプラットフォームの助成を受けて行われている）
8 月 18 日	**道中の過ごし方** 8 月 16 日から熊本に来ている。夏休みで新幹線も駅も混んでいた。お盆の最終日でもあり、指定席は満席だとアナウンスされていたが、自由席には少し空席もあった。読みたい本が何冊かあり、品川から新大阪までの２時間半で１冊、新大阪から熊本までの３時間半で１冊、調子よく読めたらもう１冊と思って、3 冊の本をかばんに入れていた。他に目を通したい書類もあったので、結局読めたのは 2 冊だった。「家族依存症」は 10 年以上前にお風呂で読んだ本なので、湿ってフニャフニャになっていたが、いい本なので乾かして保管していた。再度読んでよかった。「愛着障害」も、本棚に並べておいて、また何年か経ってきっと読もうと思う。有意義な移動時間を過ごせた。
8 月 18 日	**帰る場所があるということ―映画「歌声にのった少年」―** 日本リザルツは、国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）のキャンペーン事務局をしている。パレスチナ難民の生活、教育、保健などの生活援助を行い、最終的にはパレスチナ難民問題の解決を目指す国連機関だ。世界の難民（2,000 万人）のうち 4 人に 1 人がパレスチナ難民だと言われている。

	1948 年のアラブ・イスラエル戦争を契機に、彼らは故郷を追われた。これがパレスチナ難民問題の発端だ。そして、戦争勃発から 70 年となる今でも、彼らは、故郷に帰ることができていない。ヨルダン川西岸とガザ地区などの限定された場所で生活をしたり、海外に逃れて暮らしたりしている。故郷を追われても、夢を持つ心は誰もが同じ。ガザ地区に住む 1 人の少年は「歌手になって世界を変えたい」という希望を持ち続け、アラブ・アイドルというオーディション番組で優勝し、夢を叶えた。来月、そんな彼の生い立ちを取り上げた映画「歌声にのった少年」が日本でも公開される。モチーフとなったのは、ムハンマド・アッサーフさん。現在、彼は UNRWA の青年大使をしている。歌はもちろんだが、祖国を想う気持ちを率直に綴った歌詞が多くの人の心を掴み、今ではヨーロッパでも活動を行っている。映画の公開は 9 月 24 日（土）。みなさんも是非、映画館に足を運んでほしい。そして、この映画が日本のみなさんのパレスチナ問題に対する関心を高めるきっかけになればと思っている。
8 月 18 日	**元インターンの訪問** 本日昼に本年 1 月から約 2 か月インターンをしてくれた大学 3 年生の女性が事務所を訪問してくれた。9 月後半から国連ユースボランティアとしてモザンビークの首都マプトで、国連開発計画の一端の国連ボランティアのオフィスで 5 ヶ月働くことを報告しに来てくれた。仕事の内容は主に広報・アドボカシーを担当し、国連ボランティアリズムを推進していくものだそうだ。当団体での経験をアピールし、合格できたと嬉しい報告を受けた。8 月下旬にケニア入りし、凧揚げ大使として 1 年間アフリカと東南アジアを訪問するもう一人のインターンの人とモザンビークで落ち合う約束を取り交わすなど、若い人達が次々と世界を見てくることは素晴らしいことだ。当団体は彼らの応援を今後も続けていきたいと思う。
8 月 18 日	**感謝、感謝…** いよいよ、来週の 24 日に日本を発ち「凧揚げの旅」に飛び出す。私は、これまで岩手県釜石、熊本、東京都有明、ネパールのポテナムラングで「大空で世界をつなげる凧揚げ」をしてきた。ケニアのエスンバ村での凧揚げを皮切りに、世界各地で凧揚げを行い「子どもたちの希望と可能性に満ちた世界」になる一助になればと思っている。これまでご支援いただいた、国会議員の先生方、各省庁の方々、NGO 関係者のみなさま、深く御礼申し上げたい。ひと回りもふた回りも大きくなって帰ってくるつもりだ。
8 月 18 日	**調整ごとが続く** 本日は、一日中オフィスで様々な調整を行っていた。まずは、今週ずっと連絡を取っていた修復会社の都合がようやくついたということで、明日朝 9 時から、パブリック・ヘルス・オフィサーを交えてカンゲミ・ヘルスセンターにて打ち合わせを行うことになった。これで、クリニック修復活動を始められそうだ。また、いつもお世話になっているハイヤー会社に連絡をし、明日の朝一と夕方に来ていただけることになった。そして、ここから銀行口座の開設もあるのだが、これがなかなか大変そうだ。近年、ケニアではテロの活動資金のやり取り用に口座が開設される恐れから、新規の銀行口座開設の条件が非常に厳しくなっているそうだ。スムーズに開設できるようにしたい。(本事業は、日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
8 月 19 日	**この街** 熊本出身の当時のアイドル歌手が作詞した曲に「この街」というのがある。歌が下手なのでカラオケにはほとんど行かない私ですが、たまに連れて行かれると「この街」を歌ったりしていた。こんな歌詞だ。 街のはずれの駅で　あなたを見送ったのは 二年も前のことね　元気にしてるかな？ この街も変わったわ　あの海も埋め立てられ

	砂浜もなくなった　みんな思い出だわ 子どもの頃遊んだ広場は　大きなビルが みんな消えてしまった　空に浮かぶ白い雲のように でもこの街が好きよ　生まれた街だから 空はまだ青く広いわ　田んぼも この街が大好きよ　のんびりしてるから 魚も安くて新鮮 卒業してみんなは　この街を出て行くけど 方言を使わなくなるのは寂しいわ 古い校舎も建て替えられて　記念碑さえ みんな消えてゆく　空に浮かぶ白い雲のように でもこの街が好きよ　育った街だから 星はまだ夜空いっぱい　ほたるも この街が大好きよ　きれいな泊川 このまま変わらないでいて 熊本へ来て今日で３日、７月の５日間も含めると８日、まずはこの街を好きになろうと思っていたが、朝６時ごろからすでにカンカン照りで、蒸し暑さや、やたら信号が変わるまでの時間が長いことや、慣れないことで感じる不便さに、「んーもぉっ！」と思うこともあり、そんなときには大人げない自分に、「一体何しに来てるんですか？」と問いかけては「はっ」とする。そんな自問自答の日々だが、市電が走る街の景色も、人の温かさも、のんびりしたペースも、すでに「この街」が好きかも…と、いきなり団子を食べつつ思うのだった。
８月 19 日	**イボンヌ・チャカチャカさん、「賢人達人会」のメンバーに！** リザルツのブログで何度も登場しているイボンヌ・チャカチャカさんが、このたび、あしなが育英会が運営する「賢人達人会」のアドバイザーに任命されたそうだ。「賢人達人会」では、単なる支援で終わらないための「アフリカ遺児高等教育支援 100 年構想」の実現に向けて、国際的な影響力を持つ方々を集めている。彼女が理事長を務めるプリンセス・オブ・アフリカ財団（南アフリカ）は、2015 年より、RESULTS も参加している結核、ワクチン、栄養、子どもの保健などのアドボカシーを行うグローバル・パートナシップ「ACTION」に加盟している。Gavi ワクチンアライアンスのチャンピオンや東北被災地の釜石応援ふるさと大使として、これまで何度も来日されたイボンヌさん。こうしてさらに活躍されているお知らせを聞くと、大変嬉しくなる。
８月 19 日	**10 月 1 日、2 日はお台場へ！今年もこの季節がやってきた！** 「グローバルフェスタ JAPAN2016」が 10 月 1 日（土）、2 日（日）に、お台場センタープロムナードで開かれる。国際協力といわれても、なかなかピンとこない方も多いかもしれない。このイベントは、そんな、みなさんに国際協力について知ってもらい、より身近に感じてもらおうというのが狙いだ。今年のテーマは、for the First Step～新しい目標に向かって～。昨年の国連総会で「持続可能な開発目標（SDGs）」が採択されたように、世界でも短期的な経済開発ではなく、気象変動や社会の情勢を鑑みて、より長期的な視点をもって開発を進めていこうという気運が高まっている。日本リザルツもブースを出展する予定だ。ますますパワーアップした日本リザルツの活動状況を知ってもらうため、現在、様々なイベントを企画中だ。東京近郊にお住まいのみなさまは、是非、お台場に立ち寄ってほしい。
８月 19 日	**建設業者と打ち合わせ** 本日は、カンゲミ・ヘルスセンターの結核クリニックへ建設会社の方に来ていただき、パブリック・ヘルスオフィサー(PHO)の Oloo さんを交えて詳しい修繕内容について決めてきた。建物の平面図(完成予想図)を元に、外壁の素材はどうするか、パーテーションをどこに設置するかなど、クリニックを巡りながら確認していく。ま

	た、予算を考慮して、集中的にリノベーションする部分、逆に現状を生かしてそのまま残す部分なども決めてきた。平面図がどうしても実際のクリニックの大きさと会わない部分があり、建設会社、PHO 共に頭を抱えていたのだが、スタッフの馬場が「診察室と医薬品配布室の場所を入れ替えたらどうか」と提案すると、見事に全て解決！当初のプランからは少し変わったが、全員が納得する形となった。見積書の情報が少し古かったため、予算内での修繕は困難かと思われたが、そこは建設業者の方になんとか頑張ってもらうことになった。来週中に建設業者の方に修繕工事に必要な許可証を取得していただき、契約を交わして、いよいよ再来週から工事開始予定だ。思えば、クリニック改修のために、カウンティの方に許可をもらい、サブ・カウンティの方に許可をもらい、PHOに許可をもらいと、ここに来るまで長い道のりだった。ケニアで何かをしようと思ったとき、ひとつひとつのプロセスの煩雑さや手間に気を揉み、焦ることも多いが、「郷に入っては郷に従え」を胸に、じっくり着実に進めていこうと思う。(本事業は、日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
8 月 19 日	**ナイバシャへ** 明日開催される KANCO 主催の結核メディアミーティング（Media Editors Dialogue Meeting）の為、夕方にオフィスを出発し、車で約 2 時間半のナイバシャ(Naivasha)というところに来ている。私たちも、ケニアでナイロビ以外の都市を訪れるのは初めてだった為、少しワクワクしながらやって来た。ナイロビは首都なだけあって非常に栄えているが、ナイバシャに来るまでの風景は全く違うものだった。自然豊かな風景に癒された。家もわずかしかない。動物たちにも遭遇！少し、栄えているところもあった。ホテルの敷地内でも、ロバやシマウマなどたくさんの動物を見ることができる。明日は一日中ミーティングで、アフリカ結核議連(Africa TB Caucus)メンバーや、保健省の結核・肺疾患課、インターナショナル・バジェット・パートナーシップ(IBP)等の NGO、そして地元のメディアが多く集まり、主にケニアの結核の現状や今年のアクションプラン、アドボカシーにおけるメディアの役割等について話し合う予定だ。スタッフ二人で We love Japan T シャツを着て、多くの方にリザルツのプロジェクトを知っていただきたいと思う。(本事業は、日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
8 月 19 日	**感謝、感謝…②** 本日は朝一で大学へ行き、休学手続きをやっとの思いで終えてきた。次、ここへ来るのは 1 年後か…と好きになれなかった、駅から遠いキャンパス、座り心地の悪い椅子しかない教場がなんだか、愛おしく思えた。この学校にも「ひと回りもふた回りも大きくなって帰ってきます。」と言ってきた。リザルツオフィスで、凧の準備などをしていると、「もうすぐか…」とやっと 1 年間日本を離れ、世界を旅し、凧を揚げるのだという実感が湧いてきた。この週末も、日本で過ごす最後の週末だ。中学校、高校、大学の友達から「ご飯行こう」と誘われ、最後の週末が一層忙しくなりそうだ。
8 月 20 日	**熊本市専門家無料相談会西部公民館会場を下見** 8 月 18 日、表題の件で西区まで下見に出かけた。専門家無料相談会は、8 月 6 日の中央区を皮切りに、8 月 14 日の北区でも開催した。今回の下見は、8 月 27 日西区での開催会場だ。繁華街からは車で 40 分ほどかかり、同じ市内でもちょっと離れている。西部公民館は西区区役所と並んで立っていて、分かりやすい。公民館に入ると正面に階段があり、上って左手奥に、会議室 A がある。会議室 A は、今はスクール形式になっているが、当日動かして、各専門家の相談ブースっぽく工夫しようと思う。西区は、熊本市内で被がいが大きい地域で、今も土日も「罹災証明」発行窓口は営業しているそうだ。下見に行ったときも、番号札で対応されていた。区役所内にもチラシを置いていただけた。相談したい方が、その道の専門家にすぐに気軽に相談できるように、縁を取り持つおばちゃんになりたいと思う。（この事業はジャパンプラットフォームの助成を受けて行われている）

8 月 22 日	**Media Editors Dialogue Meeting** ナイバシャで開催された、Media Editors Dialogue Meeting に参加したので、その様子を報告する。この日はテレビ局、新聞社、ラジオ等、あらゆる媒体から約 20 人のメディア関係者が集結し、KANCO や保健省の方とケニアの保健問題について話し合った。KANCO のアラン代表による開会の挨拶の後、保健省の Christine Wambugu 結核プログラム担当から、ケニアにおける最新の結核データと政府が主導する国家戦略についての紹介があった。大変勉強になったので、詳しく紹介する。ケニアの結核の現状について：・2015 年には、新たに約 9 万人の結核患者が発生・最も生産性が高い年齢（15～34 歳）の結核死亡者数が多く、国内経済に大きな影響を与えている・結核患者数は男性の方が女性より多い傾向がある・ケニアは、世界の結核の 80%を占める 22 の高結核負担国のひとつ・ケニアは、WHO が目標とする結核患者発見率（70%）と治療成功率（85%）の両方を達成したアフリカで最初の国・ケニア国内で結核患者が多いのは、ナイロビやモンバサなどの大都市と北部のカウンティ人口密度の高い大都市で患者数が多いのは分かるが、北部の田舎町でも多いのはなぜ？ひとつは、地方だと、まだ牛の糞を固めて作る伝統的な住居が多いのだが、窓がなくて換気できない上に大人数で住んでいるため、結核の感染拡大のリスクが大きいことにある。もうひとつ驚いたのが、ケニア人の結核菌保有率が 70%～90%だということだ。結核菌に感染しても発病する人は 10～20%ほどなので、必ずしも「結核菌保有者数＝結核患者数」ではないが、それにしても高い数字だ。このように、ケニアで結核の問題は深刻だ。それでも他の蔓延国と比較すると、患者発見率は 80%、治療成功率は 88%と、飛躍的に状況が改善している国でもある。それも、ケニア政府が主導している「結核・ハンセン病・肺疾患に関する国家戦略計画 2015-2018」の効果が大きいとのことだ。KANCO の Jack からは、ヘルスケアの資金に関する話があった。近年、ドナー国からの財政支援は減っているにも関わらず、ケニア政府のヘルスケアに対する拠出はあまり増えていないため、上記の国家戦略を実施するための資金も大きく不足しているそうだ。また、カウンティがグローバルファンドをはじめとする海外からの援助に依存しきっていることも、大きな問題となっている。また、ケニアは「Vision2030」という長期開発戦略に基づき、2030 年までの上位中所得国入りを目指しているが、所得の拡大に伴って他国からの ODA 額は減り、Gavi からの支援も数年後には卒業プロセスに移行すると言われている。そうかと言って、すぐに海外援助から脱却することは不可能なため、増税などの方法で少しずつ国内の財源を増やし、自立に向けて歩み始めることが大切だと力説されていた。ケニアメディア評議会の Victor Bwire 氏は、参加者に向けて、ケニアの保健問題解決に向けたメディアの役割の重要性について語られていた。新聞やテレビで、結核の深刻さを裏付ける正しいデータや、読者、視聴者の琴線に触れるようなストーリーを伝えれば、ドナーや政府からの資金拠出を拡大させることが出来るが、間違った数字や情報を伝えれば、一気に偏見が拡がる恐れもあり、その効果はプラスにもマイナスにも働く。報道する立場として、どのような姿勢で情報を伝えていくべきか、参加者の議論も白熱した。会議の後は、参加していたメディアの方とも名刺交換し、私たちの事業を行う上でのコネクションづくりの場としても、非常に充実した一日になった。(本事業は、日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
8 月 20 日	**【ニュース】アフリカ地熱開発を支援　政府、技術・資金供与(8/20 日経)** 8 月 20 日(土)の日本経済新聞一面に「アフリカ地熱開発を支援」の記事が掲載されていた。 日本政府や商社、重電大手がアフリカで地熱発電の開発支援や事業拡大に乗り出すという内容の記事だが、注目したいのはこの部分だ。

	アフリカで打ち出す主な政策：食生活改善へ農業指導や栄養教育 『日本政府は TICAD の場で、地熱など経済分野以外の支援策も打ち出す。日本の食品大手と共に新組織「栄養改善プラットフォーム」を発足させ、途上国向けに栄養価の高い食品を開発販売する』 リザルツも推し進めている栄養改善の波が来ている。
8 月 22 日	**旅の相棒、たこ作り** 本日は恒例？「たこ作り」をした。私が世界各地で揚げる「たこ」を作った。これまでは、紙製で四角のたこだったが、今回は世界中を旅する途中で、雨に打たれ壊れてしまうのを防ぐため、小さく畳み持ち運べるようにするために、軽く丈夫で畳みやすい、ビニール製にした。そして、世界を繋げると言う意味を込め、しっぽの部分には、世界の国旗を貼り、にぎやかな雰囲気だ。そんなたこ作りで、大活躍してくれたのが、本日、ボランティアでリザルツのお手伝いをしにきてくれた、渡久地さんと佐藤さんだ。高校 1 年生の彼女たちと、話しながら作業を進め、あっという間に 15 枚のたこが完成した。このたこで、笑顔の輪を広げてくる。
8 月 22 日	**エチオピアの外相（保健相）の記事** 本日の東京新聞にエチオピアのテドロス・アダノム外相の記事が掲載された。テドロス氏は保健相を歴任し、保健センターや保健ポストを全国に広めた人物だ。テドロス氏は、グローバルファンドからの資金が有効に使われ、日本からの支援が多くの子どもの命を救っていることを知って欲しい、また、日本から学んだカイゼンの哲学が人々を根本から変えつつあると記載されている。なお、テドロス氏は今週末にケニアで開催される TICAD VI にいらっしゃるそうだ。
8 月 22 日	**TICAD VI に向けて** 今週 8/27・28 に控えた TICAD VI(第六回アフリカ開発会議)に向けて、ケニアはどんどん盛り上がってきている。会場付近の通行が制限されるという路上看板が増えてきており、主な交通手段が車とバスしかないナイロビでは、ちょっとした騒ぎになっている。「どんなことを話し合うのか」までは分からずとも、そうした看板のおかげで「何やら大きな会議があるようだぞ」ということは現地の一般の方々にも浸透しつつあるようだ。また、本日ショッピングモールに買い出しに行ったのだが、荷物検査が普段よりも厳しくなっているように感じた。今回の TICAD は、アフリカで初めて開催される会議ということで、アフリカ諸国からも、多くの日本企業からも注目されている。今回の TICAD が日本とアフリカの架け橋となり、アフリカが日本人にとって身近な地域になることを祈って、私たちも出来るだけアピールしていきたい。
8 月 23 日	**LAMP 法講習会** 結核菌の検査方法である「LAMP 法」の講習会が、日本リザルツのオフィスで開かれ、医療関係者や NGO 関係者など多くの方が参加し、検査の仕組みについて学んだ。LAMP 法を用いた結核菌検査は他の方法に比べて簡単なのが特徴だ。この方法が出来たことで、開発途上国の医療施設やスタッフでも結核菌を正確に検出することが可能になった。この度、LAMP 法の結核検査法が世界保健機関（WHO）の推奨を受けた。WHO の推奨を受けると、開発途上国の医療施設で LAMP 法を導入するのがより容易になるということで、これまで以上に普及が進むことが期待される。今日の講習会では、まず結核が起こるメカニズムや LAMP 法を使った結核菌検査法の説明を受けた。そして、実際に機械を使い、LAMP 法による結核菌の検査方法を体感した。不器用な私でも簡単に操作ができた上、薬剤の色の変化で、結核菌の有無を見分けられるため、非常に分かりやすかった。開発途上国の医療施設においても、スタッフが簡単に使用できると感じた。また LAMP 法は、他の結核菌検査に比べてコストが安いことも特長だ。依然として世界で蔓延する結核の制圧に向けて、この LAMP 法が一翼を担ってくれることを期待している。

8 月 23 日	**進化し続けるケニア** 本日は、私たちの住んでいるケニア事情をご紹介したい。まず、皆様は「ケニア」と聞いて何をイメージするだろうか？私がケニアに来る前は、「サファリ」や「マサイ族」だった。ケニアの特徴の一つとして、日本のように整備された道が少ないことが挙げられる。まだまだコンクリートで舗装されていない土の車道や穴の空いた歩道など、数々の危険な場所が存在する。それでも、中国が高速道路を建設したり、日本も道路整備を進めるなど、様々な国が力を入れ、ケニアの発展に貢献している。テクノロジーに関しても他国の力を借りつつ飛躍的な進化を遂げている。先日のブログでも紹介した通り、ケニアの携帯所有率は 80%以上となっている。また、車に関してもほとんどが日本から輸入されていて、多くの方が車を所有している。ケニア＝アフリカ＝物価が安いと思われがちですが、実はガソリンも日本と料金が変わらない。経済発展が進んだ分、ケニアの物価は大幅に上がっており、2011 年から 2014 年だけでも 30%高くなっている。そのためか、貧富の差は非常に大きい。私たちのいる地域は、360°見廻してみてもアパートやビルなど高層の建物が非常に多くある。しかし、だからといってケニア人が皆お金持ちというわけではなく、道を歩いているとお金や食料を求めてくる子ども達もいる。ただ、貧しいからと言って、決して幸せではないということではない。ケニアの皆さんはよく輝きのある笑顔をされている。私たちの事業を通して、さらに輝く笑顔の持てる人を増やしていきたい。
8 月 24 日	**【ニュース】栄研化学と HUMAN、LAMP 法による結核およびマラリア遺伝子検査薬の海外販売契約を締結(8/23)** 先日、栄研科学の LAMP 法による結核遺伝子検査法が、WHO の推奨を取得したというニュースをお伝えしたばかりだが、またもや朗報だ。この度、栄研が独ヒューマン・ゲゼルシャフト社と、LAMP 法による結核遺伝子検査薬・測定装置およびマラリア遺伝子検査薬・測定装置の海外市場（中国、韓国、台湾、タイは除く）における販売契約を締結したと発表された。たびたびご紹介している通り、LAMP 法で検出できるのは結核菌だけではない。LAMP 法によるマラリア検出試薬は、4 種類のマラリア原虫および熱帯熱マラリア原虫単独を約 1 時間で高感度に検出できるため、現在汎用されている顕微鏡法では見逃されていたマラリア患者を精度よく見つけ出すことが可能になるそうだ。ちなみに私がいるナイロビにはマラリアを媒介する蚊はいないが、地方のヴィクトリア湖周辺やインド洋岸付近では大変流行している。ケニア国民の 70%以上が感染のリスクに晒されているといわれており、実際に毎年約 4,000 人のケニア人がマラリアで命を落としている。LAMP 法が世界に普及することで、結核やマラリアに苦しむ人々がいち早く発見され、適切な治療を受けられるようになると良いと思う。
8 月 24 日	**感謝、感謝…③** ついに今日、日本を飛び出す。私も 1 月からリザルツでお世話になっているが、たくさんの経験を得ることができた。2 月、300 名以上の方々が参加してくださった GGG＋フォーラム。3 月には、釜石、ガザをはじめとする世界各地で開催された世界凧揚げ交流会 2016。3 月末には、第 7 回サンキューセミナーでは初めての司会。5 月には、熊本、ネパールへ行き、凧揚げをしてきた。私も大学で国際関係学を専攻する身ですが、これらリザルツでの経験は、大学では得られない、国際関係についてのより広く深い理解ができた。リザルツは、人間として成長できた場所でもあった。全て中途半端で、全力になれない私だが、普段忘れてしまいがちな、人間として当たり前の事を思い出し、人間としても一回り大きくなれた。常に素直に、謙虚に、前向きに、ひたむきに日々を過ごしたい。最後に、この 8 ヶ月間に出会った全ての方々に感謝したい。また、今後、大きくなった白石陸をお見せできることを楽しみにしていてほしい。私はリザルツ代表、白須さん以上の人間になってやろうと、リザルツに入った時から思っていた。この意気込みを絶対に忘れず、突き進んでいく。

8 月 24 日	**TICAD VI に向けて代表来たる！** 本会議を今週の土日に控える中、リザルツ代表の白須と秘書の佐保、そしてインターンの白石が TICAD VI に参加すべく、遂に日本を発った。本日、私たちは TICAD の入場パスを取得しに行ったが、普段街中ではめったに見ることのない、数多くの日本人を目にした。TICAD では本会議以外にも、周辺の会場で 50 以上のサイドイベントが開催され、アフリカ中から 30 カ国以上の代表団がケニアに集まり、アフリカ諸国の発展のために真剣に議論を行う。いくつかのサイドイベントはすでに始まっており、私たちの代表もスピーチをする予定だ。明日には、安倍首相を含む日本の代表団も到着するそうなので、警備がさらに厳しくなりそうだ。アフリカと日本の友好を祈って、私たちは We love Japan T シャツを身にまとい、参加してくる。
8 月 25 日	**たこ揚げ大使、毎日新聞に掲載！** 我らがたこ揚げ大使、白石君のインタビュー記事が、8/22 付けの毎日新聞に掲載された。「たこ揚げ大使」を自称する春日部市の大学生、白石陸さん（19）が 24 日、世界の途上国でたこを揚げる旅に出発する。「たこには人をつなぎ、笑顔をもたらす力がある」と白石さん。滞在先での交流の様子をインターネットなどで発信するほか、貧困地帯に暮らす子どもたちの現状を世界に訴えるつもりでいる…」。困難にぶつかり悩みながらも、まっすぐな気持ちで物事に取り組む白石君を、リザルツに入ってからずっと見てきた。彼なら持ち前の明るさと熱意で、きっと世界中の子供たちを笑顔にしてくれることと思う。最初はケニアというということで、私のいるナイロビに明日やって来る予定だ。皆さまも、これから一年間にわたる白石君の旅を、応援して欲しい。
8 月 25 日	**今日の子育て相談「言葉のシャワー」** 8 月 22 日の「子育て相談」は、約 35 組のママとお子さん方のご来場で大賑わいだった。「お集まり」では、ママと赤ちゃんの体操（ベビーマッサージ）教室だ。まだハイハイが始まる前のねんねの赤ちゃんにやさしくやさしくマッサージをしながら、合間にママの産後の骨盤矯正も行える体操を組み込んだ独創性のある構成だった。赤ちゃんたちの気持ちよさそうなお顔を見ていると、幸せな気分になる。写真の掲載ができたらよいのだが…、どうぞそこは想像力を膨らませてほしい。ベビーマッサージもそうだが、子育て相談に入ってくださった精神科医と臨床心理士の先生方とのデブリーフィングでも出たのだが、ママ（パパ）が行動を言語化することが大事なようだ。「さぁ～、今から〇〇ちゃんとママとで体操しますよ～、頭のくるくるマッサージからだよ～、くるくる…」という具合に。この言葉のシャワーを浴びて、赤ちゃんは親のご機嫌を知ったり、言葉を覚えたり、愛情を感じたりするそうだ。一方的に見えるけど、ちゃんとしたコミュニケーションなのだと感じた。
8 月 25 日	**日本組がついにケニアにやってきた！** 今朝早く、ついに日本組がケニアに到着した。代表を始め、リザルツスタッフの元気な姿を久々に見られて嬉しく思う。私たちが事務所で仕事を終えた後、ホテルで合流し、夕食を食べながら明日のスケジュールについて確認した。ケニアの食事も皆さん"美味しい"と言って召し上がっていた。明日は朝早くから、それぞれ違うサイドイベントに参加してくる。TICAD は栄養や保健、経済などアフリカが抱える様々な問題について改めて考える良い機会だ。私たちも、これからケニアで事業するにあたり、アフリカのことをさらに理解し、貢献出来るようにしっかりと勉強してきたいと思う。

8 月 26 日	**いよいよ TICAD Ⅵ** およそ丸一日かけてナイロビに到着した。笑顔で声をかけてくださる人が多く、すぐにこの街が気に入ってしまった。文字通り、笑顔は世界共通の言語だなとあらためて感じる。今日覚えたスワヒリ語のあいさつ。■asantesana(thank you very much)アサンテサナ、■karibsana(most welcome)カリブサナ。TICAD 開催にあたり、イベント関連の看板が空港や街中でも多く見られ、いよいよ始まるのだなという空気が流れている。我々もアドボカシーにしっかり取り組みたい。
8 月 26 日	**高校生ボランティアさんに感謝！** 日本リザルツには現在、高校生の方がボランティアとしてお手伝いに来てくださっている。高校 1 年生の渡久地さんと佐藤さんだ。夏休みは部活と遊ぶことに一生懸命だった自分自身の高校時代と比べると、目的意識を持って有意義に夏休みを過ごす彼女たちの意識の高さに感嘆している。また、TICAD の準備などに追われて業務がたて込んでいる時だったため、ボランティアの方が業務を手伝って下さり、スタッフ一同、本当に助かった。こうしたボランティアの方たちの支えがあって、日本リザルツの活動が成り立っているのだと改めて実感した。お 2 人ともボランティアの経験を通じて、貧困問題など国際社会が抱える問題について関心を持つようになったそうだ。これから、どんどん知識と経験を身に付けて、世界に羽ばたいていって欲しいと思う。
9 月	
9 月 1 日	**結核集団感染のニュース相次ぐ** 昨年 12 月に北海道の千歳保健所管内の病院に勤務する女性が結核と診断され、女性の家族や同僚、それに入院患者ら合わせて 14 人が集団感染し、このうち 3 人が発病していたと発表された。7 月 5 日に船橋市保健所管内の 30 代の男性が結核と診断され、家族と男性が講師を務める学習塾の同僚や生徒合わせて 56 人が感染し、このうち 15 人が発病していたと発表された。「結核の症状はかぜの初期症状に似ているが、2 週間以上咳が続くようであれば、早めに受診して集団感染を予防してほしい」と呼びかけている。日本はいまだ結核の中まん延国（人口 10 万人あたり 14.4 人、2015 年）であり、低まん延国（人口 10 万人あたり 10 人以下）を目指している。
9 月 1 日	**9 月 1 日は防災の日** 今日、9 月 1 日は防災の日。日本リザルツのオフィスがある霞が関周辺も朝から慌しい雰囲気。政府主催の防災訓練があるため、大臣の方々が続々と首相官邸に向かっていた。防災の日は、1923 年 9 月 1 日に発生した関東大震災で 14 万人もの死者・行方不明者が出たことを教訓に 1960 年に制定され、毎年、この日に合わせて、各地で防災訓練が行われている。2011 年の東日本大震災では、想定外の津波が押し寄せたことによって戦後最大の 2 万 3,000 人もの死者・行方不明者が出ている。今年発生した熊本地震の復興は、まだ道半ば。未だに仮設住宅や避難所での不自由な生活を余儀なくされている方もいる。災害に遭われたみなさんをどうやったら元気にできるか？日本リザルツでも、これまで災害復興に関する様々な活動を行ってきた。その 1 つが「凧揚げ」、釜石、熊本、そしてネパールでも。災害の被さい地を訪問し、凧を揚げることでみなさんに元気を与え、復興への活力につながるよう取り組んできた。各地での震災復興に向けた活動の様子は来月（10 月）1 日～2 日に開催される「グローバルフェスタ JAPAN2016」でも紹介する。折しも、週明けの台風 10 号は東北地方を直撃し、14 人の方が犠牲になった。災害による悲劇を少しでも減らすために、防災の日をきっかけに、人々の災害に対する意識が少しでも向上すればと願っている。
9 月 1 日	**熊本だより①** 漸く朝晩は過ごしやすくなり、真夏から秋の入口へと、季節が動いたのを感じ、地元の方ともそんな会話を交わしている中、「熊本市内で被さいした母親と子どものメンタルサポート及び生活再建支援事業」も終

	盤に入ってきた。熊本市総合子育て支援センターでの子育て相談はすっかり定着し、適宜、臨床心理士や医師にその場でつないでいる。個室での相談件数も増え、4 月の怖かった記憶がフラッシュバックして、それをうまく表出できない子どもたちが、夜泣きをしたりという相談が増えるかもしれない。また、生活再建に向けての専門家無料相談会は、次回で 4 回目、9 月 4 日（日）13～17 時、健軍文化ホールでの開催となる。弁護士、税理士、小児科医、精神保健福祉士、保育士が、無料で相談に応じている。（この事業はジャパンプラットフォームの助成を受けて行われている）
9 月 2 日	**凧あげ大使と夕食会** ナイロビに滞在中のリザルツ凧あげ大使白石君、これから主にアフリカ諸国をまわり、訪れた町で凧揚げを行うとのこと。アフリカの農村にある日突然、日本人のお兄さんが凧を持って現れたら、きっと現地の子供たちは大喜び。ちなみに南アフリカのケープタウンでは、アフリカ最大規模の凧揚げフェスティバルが毎年開催されている。ルールがなく、誰でも簡単に楽しめる凧揚げは、国境を超える遊びだ。世界一周の意気込みを尋ねると、「とにかく生きて帰ることです!」と断言する凧あげ大使。日本で一緒に働いていた仲間と、こうして海外で会うのは嬉しいものだ。昔話に花が咲き、とても楽しい夕食会になった。
9 月 2 日	**[報告]栄養アドボカシー会議** 栄養アドボカシー会議が日本リザルツオフィスにて開かれ、NGO 関係者などが集まり、栄養政策のアドボカシー戦略について、闊達な協議が繰り広げられた。まずは、先週開催された TICAD Ⅵについて日本リザルツから報告が行われ、冒頭では、ケニアの TICAD Ⅵサイドイベントで大好評だった日本リザルツ代表、白須のスピーチが披露され、ケニア同様拍手喝采を浴びた。続いて秘書の佐保が、TICAD Ⅵの報告を行い、G7 シチリアサミットで栄養のプレッジ会合が開催されるよう要望されていたことや、安倍首相の基調講演で「食と健康のアフリカ・イニシアチブ（IFNA)」に触れていたことなどを紹介した。また、日本リザルツ主催で行った NGO の意見交換会の様子も紹介され、IFNA 立ち上げに際し、NGO が連携することの重要性が示された。TICAD Ⅵで掲げられた主要政策の 1 つに栄養改善が入ったことで、栄養への関心が高まっている。今後、栄養関連の開発プロジェクトをどのように具体化できるか、官、民、そして日本リザルツを含めた NGO が一丸となって、取り組んでいきたい。
9 月 2 日	**アウォリ氏との面談** 本日はトヨタケニアに伺い、会長のデニス・アウォリさんと面談を行った。アウォリさんは大変お忙しい方だが、仕事の合間を縫って時間を作ってくださった。一階は展示場になっており、朝から多くのお客さんで賑わっていた。実は、アウォリさんはリザルツとは長い付き合いで、2008 年にリザルツの報告書にも出ていただいたことがある。当時、アウォリさんは駐日ケニア共和国大使館特命全権大使で、日本リザルツの結核アドボカシーの話や、カンゲミで行っているプロジェクトの話、同行した STOP TB Partnership の Evaline からは、ケニアの結核の深刻さと制圧の重要性を伝えた。栄研化学の LAMP 法について紹介すると、TICAD の際、栄研化学のブースとして使用されていた Mobile Laboratory がトヨタ通商の車ということで、話が盛り上がった。この車は TICAD 閉幕時、大統領夫人の行なっている Beyond Zero Campaign という妊婦と子どもの健康のキャンペーンの為に寄付されたとのこと。最後に一緒に写真に収まり、次はカンゲミクリニックで会うことを約束した。

９月３日	**ガザの若者に生きる希望を：ガザ・イノベーション・チャレンジ・ビジネスコンテスト** 「天井のない監獄」とも呼ばれるガザ地区。イスラエルとの紛争で長きにわたり境界が封鎖されていることから、今も尚、住民は塀の中の限られた場所での不自由な暮らしを強いられている。そのガザ地区が抱えている大きな問題の 1 つが失業だ。パレスチナ中央統計局によると、2014 年のガザの失業率は 43%と世界で最も高く、中でも、若者の失業率は 60%～70%と言われている。長期化する紛争に加え、大学を卒業しても仕事がないため貧困に喘ぐ日々…ガザの若者たちは二重の苦しみを抱え、先の見えない日々を過ごしているのだ。何とかして、ガザの若者たちに生きる希望を与えられないだろうか。そこで企画されたのが、起業支援プロジェクト「ガザ・イノベーション・チャレンジ・ビジネスコンテスト」。日本が資金、技術、経営など様々な面からサポートを行うことで、ガザの若者たちのアイデアをビジネスとして形にし、ガザに住む若者の起業と雇用を促進させるプロジェクトだ。そして先日、総額１万ドル（約 100 万円）のビジネスコンテストがガザで開催された。下記の 2 つが選ばれ、今後、事業展開に向けて準備を進めていくことになった。「戦闘によって破壊された建物を再建する際に使う建築資材を、ガザにある灰から作るプロジェクト」「電気設備の脆弱なガザで、消費電力の少ない昇降機を製造するプロジェクト」プロジェクトを運営するのは、日本の民間企業に勤める上川路文哉さん。元々パレスチナ問題への関心が高く、ビジネスでただお金を稼ぐのではなく「ビジネスを通じて、パレスチナの困っている人たちを助けたい」と事業を立ち上げ、先日、日本リザルツのオフィスにも立ち寄られ、今後のプロジェクトの方針を紹介してくれた。
９月４日	**熊本だより③ 第４回専門家無料相談会** 今日は、台風 12 号が接近する中、「第 4 回専門家無料相談会」を開催した。雨は勢いよく降り始めましたが、風はまだ弱く、佐賀県からご参加くださった小児科医の先生も、無事ご帰宅されたようだ。今日のご来場者数は少なかったが、13 時にいらして、弁護士、税理士、精神保健福祉士、小児科医のブースを次々と訪ねられて、それぞれにご相談をされた方がいて、この相談会の「ワンストップで各専門家に相談できる便利さ」を堪能されていた。大いに歓迎している。また、熊本市総合子育て支援センター子育て相談では、保健師さんから紹介されたという、別室相談を希望の方の対応を入江純子心理士が対応し、小児科医は、この企画の発起人でもあり、近県の先生方に広報や協力の依頼を引き受けられた小出佳代子先生が、はるばる宮城県から来てくださった。プリブリーフィングとデブリーフィングの時間を活用して、お世話になった先生方への報告の仕方や、ここでの活動の意義と、今後についても 3 人で話し合った。
９月５日	**ケニアの新聞記事から** ケニアの三大新聞社でもある Daily Nation の website に、結核に関する記事が掲載されていた。タイトルは、"The TB patients who must sneak into hospital" (こっそりと病院に行かなければならない結核患者) 冒頭には、一人の結核患者の女性の話が記載され、この女性は多剤耐性結核(MDR-TB)の為、バイクに乗れず、働くことも出来ない。MDR-TB は約 150 万円の治療費がかかり、治療期間は約 2 年間、一日 15 錠の薬を飲み、肩身の狭い思いをしながら、困窮した生活を強いられている。MDR-TB 患者のため、人と接することは禁止されているが、ケニアでは隔離出来る場所が少ないため、彼女のように家から病院に通っている結核患者がたくさんいる。本記事では、ケニアの地域別の結核患者数や結核に対する偏見、そして結核と栄養失調の関係性まで、ケニアの結核事情が全般的に、分かりやすく紹介されている。メディアに結核を取り上げられることは、一つの効果的なアドボカシーであり、ケニアのような識字率が 80%を超える国では、新聞やテレビなどで掲載されると認識と意識に変化が出てくる。今後、さらに結核の記事が取り上げられることを願っている。
９月５日	**防さい冊子「おまもりブック」ができました！** 熊本で先週から、日本リザルツ特製の防さい冊子「おまもりブック」の配布を開始し、好評を得ている。表紙が塗り絵になっていたり、写真が貼れるコーナーやお絵かきコーナーなどを入れ込んだ構成にしていて、親子で楽しく防さい対策ができる冊子になっている。

9 月 6 日	**熊本だより④ 市内 20 箇所の子育て支援センター** 「おまもりブック」を熊本市内の 20 箇所の子育て支援センターに送った。
9 月 6 日	**グローバルフェスタ、ボランティア募集！** 10 月 1 日（土）、2 日（日）に、お台場センタープロムナードで行われる「グローバルフェスタ JAPAN2016」。日本リザルツは今年もテントブースを設置する。今年のテーマは「災害からの復興に向け、世界に元気を！」。気象変動が進み、国際社会でも災害や防災に注目が集まっている。日本リザルツでは、これまで東北、ネパール、熊本などで、被さい地復興に向けた凧揚げ事業などの活動を行い、現地の人々に元気を与えてきた。イベントでは、こうした一連の震災復興事業を紹介する予定。また現在、イベント当日に日本リザルツの活動を一緒に紹介して下さるボランティアの方を募集している。
9 月 7 日	**CHV Training に向けて** 来週の火曜日から始まる CHV(Community Health Volunteer)のトレーニングに向けて、着々と準備を進めており、本日も保健局の方と連絡を取り、会場や事前ミーティングの日程などを決めた。会場は、カンゲミにある教会を借りることになり、来週の月曜日には、トレーニングの講師の方と KANCO オフィスにてミーティングを行い、さらに内容を詰めていく予定。私たちも初めての為、戸惑う事はまだまだあるが、当日問題なくトレーニングが出来るようしっかりと準備をしていく。
9 月 7 日	**[報告]SDGs 市民社会戦略会議** 「持続可能な開発目標（SDGs）」達成に向けた「SDGs 市民社会戦略会議」が開かれ、多くの NGO 関係者が参加し、NGO の知見をどのように日本政府の方針に反映させていくのか、今後の戦略を議論した。国際開発の分野においても、環境や社会への影響を鑑みてより長期的な視点で開発を進めようという気運が高まっており、2015 年、国連が「持続可能な開発目標（SDGs）」を発表した。こうした経緯から、日本政府もSDGs達成のための実施指針の作成に取り掛かっており、今日の会議では、指針に市民社会や NGO の声をどう反映させるかを討議した。具体的には、次の 2 点。出席者からは、男女平等、マイノリティを含む共生社会の実現、将来世代に対する責任、貧困・格差の解消など、様々なアイデアが出された。その後、キーワードに基づいた具体的な施策について議論が行われ、「現在、国際社会が抱える問題はそれぞれの分野が複雑に絡み合っているため、個別の開発目標ごとに議論するのではなく、包括的な視点で議論すべきではないか」とか、「政策立案者がつかみ難い、社会の弱者の声を届けるべきだ」など、活発な意見交換がなされた。
9 月 7 日	**ポリオ議連総会に参加** 本日は、参議院議員会館で開催された「世界の子どもたちのためにポリオ根絶目指す議員連盟」の総会に参加してきた。 今回の議案は以下の通り。1 役員体制について 2 ナイジェリアにおける野生株ポリオ発症例の状況と対策について 3 GPEI への拠出と根絶計画について 4 ポリオ根絶に関するイベントについて 5 その他。2 の『ナイジェリアにおける野生株ポリオ発症例の状況と対策について』については、以前リザルツブログでも紹介したが、外務省の相星氏から概要説明があった。
9 月 8 日	**くまもん塗り絵大会@ケニア** ナイロビ郊外にあるサイディア・フラハ子どもの家（SAIDIA FURAHA CHILDREN'S HOME）という施設を訪問した。荒川勝巳さんという日本人の方が経営している児童養護施設で、保育園と低学年向けプライマリースクール（1～4 年生）が併設され、日本リザルツケニア事務所スタッフのデニスさんも、設立者の一人だ。今回こちらを訪れた理由はケニアの子どもたちにくまもんの塗り絵を塗ってもらうことで、熊本の被さい者の方々に、元気いっぱいのエールを届けたい。施設は日本からの支援で建てられ、先生方に今

	回の塗り絵の趣旨を説し、早速授業の中で子どもたちに取り組んでもらった。 子ども達が楽しそうに塗り絵をしている様子をお伝えする。保育園クラス：先生が、まず塗り絵をして見本を見せたり、保育園の一番下のBaby クラスでは、子ども達に自由に塗らせたりしていた。1 年生のクラス：こちらのクラスは、先生が子ども達に何にどの色を使うかなどを教えてから始めていた。2 年生のクラス：こちらの先生はとても厳しく、花に緑色を使うと、「そんな色の花はないよ！」と怒っていました。3 年生のクラス：さすがは 3 年生！先生に何も言われずに綺麗に塗り絵をしていた。4 年生のクラス：最上級生らしく、「こんな色を使った方がいいよ！」などとみんなでアドバイスをし合いながら塗り絵をしていた。
9 月 9 日	**熊本だより⑥ 会場下見 ～続き～** ラックにチラシを入れていただき、イベント後の掲示用に、A3 拡大版もしてきた。川尻駅の駅員さんも「せっかくだから、貼っときます」とチラシを預かってくれた。
9 月 9 日	**「市民ネットワーク for TICAD」定例会** 「市民ネットワーク for TICAD」の定例会に参加してきた。「市民ネットワーク for TICAD」には、日本リザルツを含む日本の NGO30 団体が参加しており、アフリカ開発会議（TICAD）に向けて日本とアフリカの市民の声を届けるべく活動している。TICAD VI 市民社会報告シンポジウム日本とアフリカの新たな歴史の始まり ＝ TICAD VI を越えて＝【プログラム】第一部：日本とアフリカの新たな歴史の始まり＝TICAD VI を出発点に＝第二部：新たな時代の日本・アフリカ市民社会＝TICAD VI を踏まえて。
9 月 10 日	**カンゲミクリニック進捗状況** 昨日は、修復工事の進捗状況を確認するため、カンゲミ・ヘルスセンターの結核クリニックに行ってきた。入り口には修復中の結核診療所の場所が記載されていた。天井や外壁の修繕はされていたが、全体として予定より少し遅れているようなので、丁寧かつスピードアップして工事を進めるよう、修復業者に厳しく伝えた。来週も 3 日間カンゲミを訪れるので、昼休みなど空いている時間に現場を訪れて様子を見に行く。
9 月 11 日	**[ニュース] 国内外で感染症拡大相次ぐ** 日本リザルツが力を入れている事業、感染症対策で心配なニュースが入ってきた。今、国内外で様々な感染症が広がっている。ブラジルで開かれたリオ・デ・ジャネイロ五輪で話題になったジカ熱。中南米を越えて東南アジアにも被害が拡大、特にタイとシンガポールでは、それぞれ 100 人以上の感染者が確認されている。また、アフリカでは黄熱病が流行。アンゴラで 2,000 人以上が感染した上、中国でも感染が確認されるなど猛威を振るっている。こうした感染症の拡大は開発途上国だけの問題ではなく、今、感染症は日本でも猛威を振るっている。はしかの集団感染で関西国際空港の利用者、少なくとも 39 人がはしかに集団感染したほか、千葉県松戸市の病院でも乳幼児 10 人の感染が確認されている。
9 月 12 日	**Facilitator とのミーティング** 本日ケニアは祝日だったが、いよいよ明日から始まる CHV (Community Health Volunteer) Training の講師の方とミーティングを行った。ミーティングでは、タイムテーブルやトレーニングの内容確認など最終調整を行った。トレーニングを受ける CHV が、本当に来てくれるか心配だったが、講師の方が自

	信を持って「絶対に来る」と言ってくれたので安心した。CHV の方々は「やりたい」という気持ちでいっぱいだそうで、私たちも、明日から三日間を非常に楽しみにしている。
9 月 12 日	**つなみ募金** 本日も恒例のつなみ募金を経済産業省前で行った。先週とは違い気温は 30 度以下で熱中症の心配をせずに済んだ。配布物は、リザルツのパンフレット、らぽーる事業で行っているクラウドファンディングの案内等。新人 2 人が新しい We love T シャツを着て初参加した。
9 月 12 日	**【進捗報告】らぽーるクラウドファンディング！！** 皆様からの暖かいご支援、そして応援のおかげで、なんと目標金額の 93%である 197,000 円まで集まっている！「プロによるコミュニケーション講座を開催！」講座で使用する冊子の制作も進んでいる。
9 月 12 日	**[G7 保健会合]「神戸宣言」採択** 世界の医療分野の課題を先進 7 か国の保健担当大臣が議論する「G7 神戸保健大臣会合」が 9 月 11 日、12 日に開かれ、エボラ出血熱やジカ熱など世界的に蔓延する感染症の対策として、国連機関と連携して効果的に対応にあたることを盛り込んだ「神戸宣言」を採択し、閉幕した。神戸宣言のポイント：1．感染症など公衆衛生危機の対応：世界保健機関(WHO)と国連人道問題調整室(OCHA)による緊急時の連携手順の作成を歓迎・集団感染時の指揮系統の確立と WHO の改革推進。2．誰もが受けられる医療制度の構築：生活習慣病などの疾病予防の重要性を確認・認知症治療に必要な政策を導入、治療法の開発を促進させる研究の奨励・持続的な保健システムの確立。3．薬剤耐性菌への対策：国際会議など G7 各国が連携して対策を実施。
9 月 14 日	**修復工事の進捗状況** 本日も修復状況を確認する為カンゲミ結核クリニックを訪問、床のタイル張りが完成し安心した。床は見違えるほど綺麗になり、今後は壁や屋根などを直していく。現在 CHV のトレーニングを行なっているところは、結核クリニックから歩いて 5 分くらいのところにあり、この 3 日間は毎日様子を見に行くことが出来、進捗状況もしっかりと確認できる。
9 月 14 日	**栄養改善をさらに推進すべく！** 先月の第 6 回アフリカ開発会議（TICAD VI）の安倍総理の基調演説の中で JICA の新しい取組「食と栄養のアフリカ・イニシアチブ（IFNA）」が言及されたことは、以前ご紹介した。IFNA とは別に、産官学連携の新しい栄養に関する枠組「栄養改善事業推進プラットフォーム」も昨日正式に発足し、日本リザルツは、運営委員の一員として第 1 回運営委員会に出席した。栄養改善事業推進プラットフォームでは、日本の技術と知見を生かし、途上国の栄養改善に向けて具体的な事業案件を実施していく。事業案件は基礎情報や栄養ニーズを調査した上で進められているが、現在構想中の案件については、発足記念セミナーにて紹介する。そして、本日も栄養をテーマに、外務省、農林水産省、JICA の方々と NGO との会議を日本リザルツ事務所にて開催した。会議の冒頭では、農林水産省 大屋様、JICA 榎本様・稲田様、外務省 網島様より TICAD VI のサイドイベントや展示会、本会合の様子につ

	いてご報告をしていただいた。農林水産省と JICA のサイドイベントでは、代表の白須もスピーチを行い、どちらも予想人数を超える多くの方々が参加し、大変盛り上がっていた。農林水産省　大屋様は、参加された方の食と栄養に関する関心の高さに驚いたとおっしゃっていたが、講演会場の外に設置されていた展示の周りで、アフリカの方が熱心に質問されていたことを覚えている。また、IFNA　については、「アフリカの飢餓や栄養不良の問題に取り組む新しい枠組であり、賛同するパートナーには広くオープンになっている」と JICA　榎本様よりお話しいただいた。具体的な計画やターゲット国はこれからアナウンスされるが、現地のネットワークを持っているNGOがどのように貢献できるか、私たちも考えなければならない。外務省　網島様からは、本会合についてご説明いただき、アフリカ諸国からの要望、"質の高い生活のための強靭な保健システム促進"が一つの大きな柱として、ナイロビ宣言にも含まれたとお話された。また、内閣官房　吉岡様には、経協インフラ戦略会議で議論されたアフリカ支援策についてご説明いただいた。支援策の中には、「衛生確保等栄養改善の総合的取組」が含まれ、IFNA や産官学連携のプラットフォーム等とどう関連づけられていくのか、今後の施策に注目したい。
9 月 14 日	**[告知]熊本地震復興くまモン塗り絵、初お披露目** 熊本地震から今日で　5　か月。住民のみなさんは今も物資が充分でない環境での生活を余儀なくされている。日本リザルツも地震発生直後から熊本で支援活動を行っており、中でも、好評なのが熊本の子供たちを元気づけるために作成した「震災復興くまモン塗り絵」。塗り絵はテレビゲームと違い、クレヨンや色鉛筆があれば出来ます。インフラが不十分な中でも、子供たちが楽しめるからと作成した。塗り絵をしているのは熊本の子供たちだけではなく、今、「くまモン塗り絵大会」と称し、日本リザルツが事業をしている世界各国の子供たちにも塗り絵を行ってもらい、9　月上旬には早速、ケニアの小学校で大会が開かれ、ヨルダンの子供たちからも絵が集まっている。そして、熊本地震から 5 か月の節目ということで、復興への願いを込めて日本リザルツでも塗り絵大会を開催した。やってみると大人でも楽しく、スタッフ一同が思い思いの色を塗っていた。国内外から集めた塗り絵の様子は今週土曜日（17　日）に熊本市で初お披露目する。当日は同時に弁護士や税理士、それに小児科医など、プロのアドバイスを受けることが出来る「専門家無料相談会」も実施される。
9 月 14 日	**CHV トレーニング　for Central CU【一日目】** カンゲミにある教会 A.C.K. St. John Church Kangemi Parish にて、コミュニティ・ヘルス・ボランティア（CHV）を対象にした結核のトレーニングを実施した。カンゲミにはCentral　、Gichagi A、Gichagi B　、Kibagare　の４つのコミュニティ・ユニット（CU）があり、本日は Central で 3 日間開催される研修の　1　日目だ。老若男女、約　20 人の CHV と、ナイロビ・カウンティから 3 人の講師が出席した。携帯電話をマナーモードにする、勝手に歩き回らない、他の参加者の意見を尊重する、など研修中のルールもしっかり決めた。まずは各 CHV が自己紹介を行い「研修を通して結核に関する知識をつけたい」、「結核患者を自分で発見できるようになってコミュニティに貢献したい」など皆さん熱い思いを語ってくれた。私たちからは、日本リザルツのプロジェクトの紹介や、トレーニングを通して CHV の方々と良い関係を築いていきたいことを伝えた。次に、現時点で　CHV　が結核に関する知識をど

	れだけ持っているかを測るための簡単なテストを実施した。「結核は感染者と食事を分けあうことでも感染するか？」「長引く咳など、結核が疑われる症状が出たら、真っ先にすべきことは何か？」など、中々の難問も。これまで結核に関する専門的なトレーニングを受けたことのない CHV の方々は頭を抱えていた。3 日間の研修を終える頃には、これらの問題に簡単に答えられるくらいの十分な知識を習得し、ぜひ結核のリソース・パーソンになってほしい！と、講師が CHV に激励を送った。セッション 1 では、ケニアの保健省が 2006 年に策定したコミュニティ・ヘルス戦略（CHS）を中心に、国が実施している結核対策に関する説明が行われた。本戦略では、ケニアの各コミュニティにおいて 5,000 人が 1 次レベルの保健医療サービスを受けることを目指している一方、カンゲミではその 10 倍にあたる 50,000 人が医療サービスを受けることを目標にしている。セッション 2 では、結核の定義、症状、感染方法について紹介された。結核は空気感染のため、食器の共有では感染しないこと、母子で遺伝もしないし、魔術によって引き起こされる病気でもないことを強調していた。結核の話で魔術やヒーラーという単語が出てくるあたりは、さすがケニア。結核は肺だけの病気ではない。リンパ腺、腎臓などに発症する肺外結核の話には、CHV 一同驚いていた。セッション 3 は、結核の診断方法や治療方法に関する説明。初めての治療には 6 か月、再治療の場合には 8 か月間薬を飲み続けること、そして CHV は結核患者が投薬を中断しないよう、最期まで見届けることの重要性が強調された。これは DOTS（Directly Observed Treatment、Short-course、直視監視下短期化学療法）と呼ばれ、日本の古知新先生が発案し、世界中に普及した治療法。セッション 4 は薬剤耐性結核、セッション 5 は結核と関連の深い HIV に関するレクチャーで、症状や感染方法、治療法について説明が行われた。CHV として正しい知識を持ち、偏見を持たずに患者と接することの重要性が繰り返し伝えられた。講師の方々はただ説明するだけでなく、会場内を歩き回って参加者に質問しながら進めたり、途中でストレッチを挟むなど、中だるみしないように様々な工夫と配慮が見られた。そのかいもあってか、参加者も研修中は真剣な面持ちで講師の話に耳を傾け、ワークショップでは議論がはずみ、とても良い雰囲気で一日目のトレーニングを終えることが出来た。(本事業は、日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施している)
9 月 15 日	**第 63 回財務省 NGO 定期協議** 第 63 回財務省 NGO 定期協議に参加した。今回の議題は、8 月の第 6 回アフリカ開発会議（TICAD VI）に関連し、財務省より TICAD VI の概要報告（特に保健分野における成果）があった。保健分野の成果として、①安倍総理も出席された「アフリカにおけるユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC in Africa）」の会合で発表された新しい政策枠組と、②「アフリカの民間セクター開発のための共同イニシアティブ」の第 3 フェーズの発表について、説明があった。①パートナーたちによるアフリカにおけるユニバーサル・ヘルス・カバレッジの促進のためのフレームワークの公表： 世界銀行とグローバルファンド（世界エイズ・結核・マラリア対策基金）が 240 億ドルの支援を表明②日本政府・アフリカ開発銀行（AfDB）共同プレスリリース（仮訳）②の「アフリカの民間セクター開発のための共同イニシアティブ」の第 3 フェーズについては、これまでの経済的インフラ（運輸、エネルギー等）だけではなく、社会的インフラ（保健、教育、栄養）も重点分野として位置付けられ、「ナイロビ宣言」の 1 つの柱である"強靭な保健システム"に沿った形になっている。
9 月 16 日	**[報告]ストップ結核パートナーシップ常任理事会** 「ストップ結核パートナーシップ日本」常任理事会が開かれ、代表の白須も参加し、来年度の予算要求や今後の活動方針について活発な議論が繰り広げられた。「ストップ結核パートナーシップ日本」の取り組みが形になり、ニュースでも報告されている通り、日本における結核の新規患者数は減少しつつあるが、しかし、まだ課題が残されている。世界保健機関（WHO）は人口 10 万人あたりの新規結核患者数 10 人以下の国を「低蔓延国」と定め、多くの先進国は「低蔓延国」とされている。一方、日本の 2015 年の結核罹患率は人口 10 万人あたり、14.4 人と依然として「中蔓延国」に分類されている。厚生労働省は

	2020 年までに「低蔓延国」になることを目標にしている。常任理事会でも、今後結核対策を進めていく上で、政府や企業、関係機関がどのように連携を取って行けばよいのかが話された。
9 月 15 日	**CHV トレーニング for Central CU【二日目】** Central のコミュニティ・ヘルス・ボランティア（CHV）トレーニング 2 日目。 まずは昨日に引き続き、HIV 検査とカウンセリングに関するレクチャーを行い、一人でも多くの住民に HIV 検査と治療を受けてもらうためには、一番初めに住民と接することになる CHV が HIV/AIDS の正しい知識を持っている必要がある。そこで実際の場面を想定し、2 人の CHV がカウンセラー、HIV 患者に扮してシミュレーションが行われた。まずはカウンセラー役の男性が、家族や恋人を守るためにも HIV ステータスを把握することの重要性を伝え、女性に HIV 検査を受けるよう説得した。その中で、HIV に関する誤解や偏見を相手から取り除いていくことがとても大切だ。また、検査の結果陽性であることが発覚した場合、HIV がすぐに死に結びつく病ではないこと、治療によって健常者と同じくらいの期間生きられることをしっかりと伝え、患者がパニックにならないよう優しく語りかけていた。驚いたのが、ケニアでは結核患者のなんと 45%が HIV に感染しているという事実。カンゲミのある Westlands 地区では少しその割合は下がり、37～40%ということだが、それにしても高い割合だ。ケニアから本気で結核をなくしていくためには、結核対策だけでは不十分で、合わせて HIV 対策も行っていくことが不可欠なのだと再認識した。そして HIV と同じくらい、結核と切っても切り離せないのが栄養で、セッション 6 では結核と栄養の関係について説明が行われ、各セッションの冒頭で、講師の方は必ず言葉の定義を参加者に尋ねている。Nutrition（栄養）とは何か？Malnutrition（栄養不良）とは何か？なんとなく分かっているような気でいても、いざ聞かれると答えられないものだ。まずは自分自身がその言葉を正確に捉えていないと、アドボカシーで他人を動かすことなんて出来るはずがない。今回の研修は、主催者である私たちにとっても大変勉強になっている。栄養不良で体の免疫力が落ちている状態だと結核を発病しやすく、さらに結核治療では薬の副作用で食欲不振になる傾向があるため、栄養不良に陥りやすい。そのため CHV には、住民に献立の配慮などのアドバイスも出来るよう、栄養に関する知識も求められる。セッション 7 は、感染症を語るうえで不可欠な「感染・予防・制御」（IPC ：Infection, Prevention, Control）についての話があった。結核は、治療も予防も可能な病気で、予防の方法として、幼少期の BCG ワクチンの注射やイソニアジド予防療法（IPT）が紹介された。セッション 8 のテーマは「アドボカシー、コミュニケーション、社会動員」（ACSM：Advocacy, Communication and Social Mobilization）。社会を動かすために、効果的なコミュニケーションとアドボカシーの方法を学んた。再びロールプレイングで、CHV 自ら良いコミュニケーション例と悪いコミュニケーション例を演じ、意思疎通において何が重要なのかを全員で話し合っていく。ボディ・ラングウェッジやアイコンタクトを意識する、相手の言葉にしっかりと耳を傾ける、声のトーンに気を付ける、一方的に非難しない、話しながら相手が抱えている問題を見極められるよう観察する、高齢の方と話すときにはスラングを使わない、などなど様々な意見が飛び出した。本日も丸一日の研修で、午後になると参加者の顔にも疲労の色が見えてきたが、ミニゲームやストレッチを挟んで、なんとか乗り切った。
9 月 16 日	**修復業者とのミーティング** 本日は、カンゲミの結核クリニックにて修復業者や保健省の方々と最終の打ち合わせを行った。新たに設置された待合室は、以前は外にあったが、患者さんのプライバシーを守るためにも屋内に設けた。本日時点で、80%程度の修復が終わっており、あと残っているものは窓の付け替え、ペンキ塗りなど細かい作業だけ。修復業者によると、来週半ばには完成する見込みで、来週の木曜日にもう一度保健省の

	方々と結核クリニックを訪れ、最終確認を行う予定だ。
9 月 16 日	**[明日開催]くまモン塗り絵初お披露目** 今回の熊本への訪問理由は、「被災地復興くまモン塗り絵」の初お披露目である。続々と熊本の子供たちから絵が集まり、また、ケニア、ヨルダンの子供たちも塗り絵に参加してくれた。日本リザルツのスタッフ一同も塗り絵をした。
9 月 16 日	**映画「歌声にのった少年」** 昨日の朝日新聞朝刊に「ガザの歌手　希望の歌声」という記事が掲載され、パレスチナ自治区ガザ出身の青年、ムハンマド・アッサーフさんが、スター歌手になった実話に基づく映画が来る 9 月 24 日（土）から公開される。ムハンマド・アッサーフさんは、リザルツがキャンペーン事務局を務めている UNRWA（国連パレスチナ難民救済事業機関）の青年大使だ。パレスチナ問題に対する関心が高まっていて、新聞報道にもいろいろな記事が出ていて盛り上がっている。
9 月 16 日	**CHV トレーニング for Central CU【三日目】** 本日最初に行われたセッション 8 のテーマは、「偏見と差別」。アドボカシーを通して、カンゲミコミュニティから結核に対する偏見を無くしていくことも、私たちの重要な任務だ。結核・HIV 患者が進んで治療を受けに来られる環境をつくるためには、患者自身がセルフ・スティグマ（内なる偏見）を克服しなければならない。そのためにコミュニティ・ヘルス・ボランティア（CHV）として何が出来るか、グループで話し合った。「病気に関する正しい知識を伝える」、「コミュニティのサポートグループや地域の活動に参加するよう勧める」「自分を愛する方法を教える」など様々な意見が出たが、まずは CHV 自身が偏見をもってないか自己を振り返り、家族や友人など身近な所から正しい情報を広めていくことが最も重要だという結論に至った。ここからはより実践的なトレーニングに移り、セッション 9 では、実際にこれからの活動で使用するツールが配布され、結核患者の記録や報告の方法を学んだ。「結核アポイントメントカード」に名前、年齢、性別、連絡先などの個人情報や治療開始日、投薬回数、毎月の体重の変化等が記録出来るようになっており、結核患者が診察や治療の予約を取るときに使用する。このカードをクリニックが毎回確認することで、患者の治療状況を把握し、途中で投薬をやめることのないよう厳しく管理する。左の白い紙が「コミュニティ結核スクリーニングカード」は、結核の発症が疑われる住民を発見した時に、CHV が使用するシートだ。二週間以上咳が続いているか、急激な体重の減少はないか、などの項目に YES か NO で答えられるようになっており、その回答によって、至急結核の検査を受けさせる、クリニックを紹介する、結核に関するレクチャーを行う、など適切な対応方法が記載されている。その後、全員でカンゲミ・ヘルスセンターを訪問し、クリニックのドクターから結核患者の照会方法や処方する薬についての説明があった。会場に戻った後は研修の続き、セッション 10 では、結核患者の家族など、感染の可能性がある人たちを割り出すための接触者調査（Contact Tracing）と、治療のためのアポイントを 2 回無視してクリニックに来なかった患者を追跡する治療中断者調査（Defaulter Tracing）の方法についてレクチャーが行われた。特に後者は深刻な問題で、長引く治療が嫌になったり、クリニックに通うのが面倒になったりして、勝手に薬を飲むのをやめてしまう患者さんが多く、そうすると病気が悪化するばかりでなく、薬剤耐性結核を発症する恐れもあり、非常に危険だ。レクチャーが一通り終わると、4 つのグループに分かれてアクションプランを作成し、結核をなくしていくため、コミュニティに最大限の効果をもたらすには具体的にどのような活動を行っていけばよいか、これまでの講義を踏まえて真剣に話し合っていた。そして発表。担当する世帯の範囲が被らないように CHV 同士で話し合う、戸別訪問をして結核患者がいないか調査をする、学校に行って結核の話をする、治療を啓発するフライヤーを配る・・・等々、実施期間と共にかなり具体的な予定が立てられており、驚いた。こうして全てのトレーニングが終了したところで、参加者全員に、研修の最初に受けたものと同じ結核のテストをもう一度受けてもらった。その結果は・・・ほぼ全員が、大幅な点数アップだった。特にトレーニング前の正答率が 20%だった 2 人は 90%まで上がり、講師の方も、「これなら安心して任せられる」と感無量の様子だ

	った。最期に結核クリニックの前で記念撮影。素晴らしい講師と熱心な CHV の方々に囲まれて、これからの事業がさらに楽しみになった。
9 月 17 日	**[本日開催]復興くまモン塗り絵初お披露目会！** 今日はいよいよ「震災復興くまモン塗り絵」初お披露目の日。熊本の子供たちからは 80 枚の絵が集まり、ケニアからもたくさんの写真が届いた。パレスチナの子供たちのブースもあり、日本リザルツは国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）のキャンペーン事務局でもある。日本人医師、清田明宏先生の絵本「ガザ　戦争しか知らないこどもたち」も一緒に展示し、多くの来場者の方が真剣に本を手に取って読んで下さった。
9 月 18 日	**熊本だより⑧　～第 5 回専門家相談会と子育て相談会～** 9 月 17 日（土）の第 5 回専門家相談会は、南区の飽田公民館で 13～17 時の間、開催された。コラボレーションイベントとして、東京から長坂が駆けつけ、「被さい地復興くまモン塗り絵」初お披露目を行った。13 時前に、相談者がお一人と、くまモン塗り絵展示イベントの取材に記者さんがお一人来られたが、それぞれお待たせせず対応できた。それでも、長坂のメディアワークで記者の方が取材に来られたり、相談者のアンケートには、皆さん、大変満足されている様子が綴られ、「おまもりブック」とくまモン塗り絵を 5 部欲しい、20 部欲しいというリクエストなどもあり、その点はよかったと思う。「子育て相談」の方は、個別相談ご希望者が 3 名いらして順番に対応されたとのこと、総合子育て支援センターで相談が可能なことの周知がすっかり広がったといえる。熊本で知り合えた方々は、長坂も感じたようですが、皆さん温かく飾らずオープンで、1 か月滞在してきた私にとっては親戚のようにも思えた。今の気持ちを覚えたての熊本弁で言うと、「これからも折に触れ keep in touch ばするばってん、一旦活動んあとぜきばせにゃん」（共通語：これからも折に触れ keep in touch するけれど、一旦活動の扉を閉めなければならない）「あとぜき」「くまモン体操」を総合子育て支援センターで教えていただいた。
9 月 20 日	**CU 視察** 本日は、先週金曜日に訪れたカンゲミの CU (Community Unit) の雰囲気の紹介。カンゲミは大きく分けて 5～6 つの地域に分かれ、今回訪れたのは、4 つの CU(Kangemi Central, Kibagare, Gichagi A, Gichagi B)と資金不足のため CU が作られていない Waruku という地域でそれぞれの地域を紹介する。まずは、Kangemi Central。数々のお店が立ち並んでいて、道路も少し広め。次は、CU のない Waruku。学校の中では大勢の小学生が勉強していたが、スペースが限られているため、狭い環境で学んでいた。次は、Kibagare。このように、家と家の間に洗濯物が干されていた。最後に、Gichagi A と B。Gichagi にある私立病院だ。非常に綺麗な作りで、低価格で診断と治療を行っているとのこと。ケニアでは、Kangemi Health Centre のように、公立病院では全て無料で治療が受けられるが、歩いて行くことや待ち時間を考え、低価格で治療が受けられる私立病院に行く人も少なくないらしい。今回の視察で、より理解が深まった。今後、ここで事業をするにあたって、どういう生活をしているか、どういう人たちが住んでいるのかを知るよい機会になった。
9 月 20 日	**NGO Board へ** 昨日手続きのため監督官庁とも言える、NGO Board を訪れた。NGO Co-ordination Board とは、ケニアで活動する NGO が必ず関わることになる組織で、現地 NGO 登録や銀行開設の承認などを行っている。その為、オフィスの待合室は満席で立って待っている方々も多くいた。全ての団体のファイルが積み重ねられ、この山が部屋中何箇所にもあり、さすが全ての NGO をまとめているだけに凄い量に驚いた。

9 月 22 日	**カンゲミにて** 本日は、カンゲミにて修復会社と保健省の方々と修復状況の確認を行った。修復会社の方によると、本日の夕方には、ほとんどの作業が終わるとのこと。綺麗になった結核クリニックの様子を少し紹介していく。窓や台も付いた。あとは、ペンキを塗るだけ。薬を保管する場所には棚が付き、薬やファイルの整理が簡単に出来るようになっている。洗面台については以前は水も出なかったが、現在はしっかりと使えるようになっている。3 週間前は使われていない部屋があり、限られたスペースで非常に狭かったが、今は患者、医者ともに居心地の良い環境の結核クリニックになった。
9 月 22 日	**[速報]日本、シリア問題に 1,250 億円支援表明** 国連安保理ハイレベル会合の演説の中で、内戦が続くシリア問題解決のため、シリアと周辺諸国に総額 1250 億円の支援を表明した。具体的には、シリア、イラクと周辺諸国に対して、食料・飲料水の供給、ワクチン接種、教育や職業訓練などを国際機関と連携して、総額 1,250 億円の支援を実施するという。今回注目すべき点は、支援策の中でワクチン接種の実施が明記されていることで、感染症対策は、日本リザルツが力を入れて行っている取り組みの 1 つである。
9 月 22 日	**栄養改善事業推進プラットフォーム発足記念セミナー ～途上国での栄養改善事業展開に向けて～** 昨日、世界の栄養改善のための官民連携の枠組「栄養改善事業推進プラットフォーム（以下 Nutrition Japan）」発足記念セミナーに参加してきた。Nutrition Japan は、民間企業、政府関係機関、学術研究団体、NGO 等、様々な組織が連携し合い、途上国・新興国の栄養不良問題に取り組むことを目的に立ち上げられた。発足記念セミナーでは、栄養改善における国際的な動向や日本国内の施策、企業のビジネス展開事例など、栄養に係わる情報が共有された。冒頭の開会挨拶の中で、食品産業センター理事長 村上 秀徳氏は、日本企業の製品開発力や技術を活かした栄養改善ビジネスの展開において、Nutrition Japan への期待について述べられた。内閣官房 健康・医療戦略室参事官 岡島 洋之氏からは、Nutrition Japan の仕組みについて説明があり、配布された資料は WEB でも公開されている。Global Alliance for Improved Nutrition（GAIN）理事会議長 Vinita Bali 氏と SUN（Scaling Up Nutrition）Business Network の Geraldine Murphy 氏より、今回の発足記念セミナーのために、ビデオメッセージが届けられ、会場で放映された。Vinita Bali 氏は、「Nutrition Japan は、日本政府のリーダーシップのもと、栄養が重要な国際的課題として、維持されていることを示している。このことは、世界的に問題となっている栄養の過不足問題（肥満と栄養不良の共存）によるリスクの観点から必要であり、価値あることである。」と述べられた。SUN Business Network は、栄養改善に取り組む国際的ネットワークで、260 以上の企業が参画している。Geraldine Murphy 氏からは、「栄養改善事業推進プラットフォームのメンバー企業が SUN Business Network にも参画することで、国際レベルでネットワークを構築でき、連携して取り組むことができる」と、Nutrition Japan を歓迎するメッセージが届けられた。また、栄養問題に取り組む企業として、株式会社ファーストリテイリング CSR ソーシングチーム 青沼 愛氏が登壇し、大変興味深い事例を紹介された。Nutrition Japan の活動を通して、今後このような成功事例がどんどん出てくることを期待したい。
9 月 23 日	**熊本だより⑩ ～「おまもりブック」お届け～** 9 月 20 日と 21 日の 2 日間は、「おまもりブック」とくまモン塗り絵を熊本市西区、南区の幼稚園、認定子ども園、保育園に全部で 17 園に 2,500 部届けた。各園 100 部～200 部ずつ届けましたが、なかなかの力仕事で、お手伝いいただいた 20 代の山下早紀さんと共に、身体中に痛みと重みを感じている。どの園でも、園長先生か事務長さんがご対応くださり、ねぎらいとお礼の言葉とともにお受け取りいただいた。子どもたちは本当にかわいくて、未来がキラキラ輝いて見え、そ

	んな熊本市の子どもたちに「おまもりブック」とくまモン塗り絵をお届けできて、楽しい時間であった。初版の際、市内全区に点在する子育て支援センターに送ったが、中央区の子育て支援センターに併設された保育園から「また増刷する機会があればぜひうちにも…」というリクエストもあがっており、早く届けたいと思っている。
9 月 24 日	**ケニアスタッフの帰国** 本日、日本リザルツケニア事務所のスタッフとして一緒に事業を行っていた馬場が帰国した。2ヶ月前、ケニアに来たばかりの頃は右も左も分からない状態でしたが、2 人で力を合わせて何とかここまで事業を軌道に乗せることが出来た。英語が堪能な彼には助けられることが多く、修復中は何度も建設会社と打ち合わせを行って信頼関係を築き、それでも譲れない部分はしっかりと主張して、修復監督としての役割をしっかりと果たしてくれた。立ち上げの時期は乗り越えたものの、コミュニティ・ヘルス・ボランティアのトレーニングやマルチ・ステークホルダー・ミーティングの開催など、まだまだ大変なのはこれから。日本人スタッフは一人となり、心細い気持ちもあるが、現地スタッフやパートナーと協力して、少しでも良い事業にしていきたい。
9 月 24 日	**ケニア最終日** いよいよ、私のケニア活動の最終日となった。あっという間の２ヶ月間だった。朝からカンゲミに行っていたが、クリニックはもうほぼ全ての修復が終わり、最終調整をしている状態だった。とりあえずは、これで安心して日本に戻ることができる。ケニアでの事務所立ち上げから、クリニックの修復作業、ボランティアのトレーニングなど、色々大変なこともあったが、所長の大崎と力を合わせてここまでやってこられたのも、デニスさんなどのリザルツスタッフ、KANCO スタッフをはじめ、大勢の方々にサポートしていただいたおかげだ。ケニア事業は必ず成功すると、日本から応援していきたいと思う。
9 月 24 日	**映画「歌声にのった少年」本日公開！** 映画「歌声にのった少年」本日公開！パレスチナ難民問題を取り上げた映画「歌声にのった少年」が本日（24 日）から公開になったのを機に観賞してきた。この映画、ムハンマド・アッサーフさんという 1 人の歌手の実話を基に作られており、アッサーフさん自身もパレスチナのガザ地区出身。現在は日本リザルツがキャンペーン事務局をしている国連パレスチナ難民救済事業機関の（UNRWA）の青年大使をしている。映画を見て、夢を掴むために奮闘する彼の姿に感銘を受けたと同時に、映画を通じてガザ地区の現状を目の当たりにし、彼らが故郷に戻れるよう、「私たち一人ひとりができることは何かないのか」と再考するきっかけにもなった。
9 月 27 日	**熊本だより⑪ ～惜別～** 9 月 20 日、21 日、「おまもりブック」とくまモン塗り絵の届けを終えてから、今回の活動で大変お世話になった方々へお礼のご挨拶に伺った。「熊本市総合子育て支援センター」では、たくさんのお母さんとお子さんと出会い、そしていつもお元気で、明るくて、訪れる親子が快適に感じる空間を作るために、責任感を持って誠実に仕事に取り組まれる所長の乃美延子さまはじめ職員の方々と一緒に仕事ができたことに感謝している。次に「熊本市母子・父子福祉センター」、館長の竹原美佐子さまはじめ職員の方々に挨拶をした。「おまもりブック」を届けに一緒に行っていただいた山下早紀さんも同センターの方で、保育園等探しに大活躍された。それから、前任の大崎のときから、現地アドバイザーとして、今回の活動をサポートしてくれた「熊本子ども・女性支援ネット」の園田敬子さまにも挨拶に伺った。そして、熊本の拠点として、事務所を使わせていただいた日本財団、センター長の梅谷佳明さまはじめスタッフの方々には、いつも親切にしていただき、くまモン塗り絵にもご協力いただいた。

9 月 27 日	**CHV トレーニング for GichagiA CU【一日目】** 本日から、Gichaghi A というコミュニティ・ユニット(CU)で活動するコミュニティ・ヘルス・ボランティア(CHV)を対象にした、結核トレーニングが始まった。まずは、本トレーニングに参加した 20 名の CHV が自己紹介を行った。多剤耐性結核について知識をつけたい、住民に結核のことを教えられるようになりたい等、各自が意気込みを発表し、私からはプロジェクトの全体像について説明を行った。結核の知識を確認するプレテストでは、やはり皆さん苦戦している様子。トレーニング最終日に再び同じテストを受け、どれだけ点数が上がるか楽しみです。ちなみにレクチャーやディスカッションは英語 7 割、スワヒリ語 3 割ほどで行われる。一つのセンテンスでも、英語で話していたと思ったらいきなりスワヒリ語に切り替わることがあって面白い。講師も CHV も両言語を自在に使いこなすが、議論が白熱するとスワヒリ語になる傾向があるようだ。研修の流れや内容は、先々週に実施したものと同じだが、参加者が異なるとトレーニング全体の雰囲気も変わる。Gichagi A は、前回の Central の CHV と比べると、少し静かでおとなしめの印象だ。しかし、トレーニングが進むにつれて、積極的に発言する方々が増えてきた。レクチャーの間に挟まれる、ミニゲームや体操などのレクリエーションも今回は違う。興味深かったのが、自分の秘密を紙に書き出し、それを畳んで見えないようにして周りの人と交換する、というゲームだ。隠し事が周囲にばれてしまうかもしれないというスリルの中で最初は盛り上がっていたが、講師の方が「これが結核や HIV に感染しているという情報だったら？」と話すと会場が一気に静まりかえった。各家庭を訪問し、住民の健康状態を把握することが CHV の任務だが、その情報をもし漏らしてしまったら、担当の住民が周囲から差別や偏見の対象にされてしまうかもしれない。責任の重い仕事だ。そして、その仕事をサポートする我々も、責任重大。初心を忘れず、住民の一人ひとりに寄り添った事業にしていきたいと思う。(本事業は、日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施しています)
9 月 27 日	**[開催間近]10 月 1 日、2 日はグローバルフェスタ JAPAN2016** 国内最大級の国際協力イベント「グローバルフェスタ JAPAN2016」の開催が、今週末（10 月 1 日～2 日）に迫ってきた。今年の目玉は、世界中の子供たちによる熊本地震復興「くまモン塗り絵」お披露目会です。結核アドボカシー・キャンペーンを実施しているケニアはもちろん、熊本、東京、パレスチナから、すでに 300 近い絵が集まってきている。日本リザルツが東日本大震災以降、復興の願いを込めて実施している「凧揚げ事業」と、「凧で世界をつなぎたい」と世界一周の旅に出た青年白石の最新状況も写真とともに報告する。また、今回のイベント企業の方々にもノベルティグッズのご協力をいただいている。栄研化学株式会社様、株式会社グランバー様、株式会社フードランド様、株式会社トライフ様、日本ビーシージー製造株式会社、日本ベクトン・ディッキンソン社様、本当に感謝したい。日本リザルツでは当日、私たちと一緒にイベントに参加してくださるお手伝いの方を募集している。みなさんも、私たちと一緒に「We love Japan」T シャツを着て、国内最大級の国際協力イベントに参加してほしい。

9 月 27 日	**TICAD VI 市民社会報告シンポジウム 日本とアフリカの新たな歴史の始まり TICAD VI を越えて** 昨日は、「TICAD VI 市民社会報告シンポジウム」に参加した。イベントの主催は、市民ネットワーク for TICAD です。日本とアフリカの市民の声を届けようという趣旨で設立されたネットワークで、日本の NGO30 団体（日本リザルツも！）が参加している。「（アフリカ開発会議が）ただ終わっただけではなく、どうだったのか、これからどう実施していくのか…今日は皆さんと考える場にしたい」と話すのは、司会を務めたウォーターエイドジャパン・高橋さん。市民社会の立場から振り返る TICAD VI について、パネリストのみなさんから貴重なお話を聞くことができました。シンポジウムはテーマ別に第一部と第二部に分かれていた。第一部：日本とアフリカの新たな歴史の始まり＝TICAD VI を出発点に＝パネル発題：はじめての TICAD アフリカ開催！その成果と課題とは？（ファシリテーター：稲場 雅紀氏 アフリカ日本協議会国際保健部門ディレクター）・外務省アフリカ部（藤田 順三氏 アフリカ開発会議（TICAD）、アフリカにおける地域経済共同体（RECs）・平和・安全保障担当大使）・在京アフリカ外交団（フランソワ・ウビダ駐日ブルキナファソ大使）・ケニア市民社会の取組み（米良 彰子 ハンガー・フリー・ワールド地域開発・アドボカシー担当）・日・アフリカ市民社会の取組み（近藤 光氏 ACE ガーナ・プロジェクトマネージャー）今回の TICAD はある意味で次元の違う会議だった、と語られた TICAD 担当大使の藤田氏。初のアフリカ開催で、参加者およそ 11,000 人（日本からは 3,000 人）とこの種の会議では最大級規模だった。アフリカ諸国、日本、国際機関、民間企業や NGO 等、すべての参加者のオーナーシップを尊重し、どう今後盛り上げていくか考えたいとお話されていた。フランソワ・ウビダ駐日ブルキナファソ大使からは、「（アフリカ側の）要請を盛り込んでいただけた。何が足りなかったかを主張するのではなく、やれることを今取り組むことが大事だと思う」と力強い言葉があった。今回から 5 年から 3 年ごとの開催に変わったアフリカ開発会議。つまり次は 3 年後、あっという間にやってくる。宣言内容がどう実施されるか、今後しっかりモニタリングしていく必要がある。第二部：新たな時代の日本・アフリカ市民社会＝TICAD VI を踏まえて、パネル発題：安倍総理スピーチと「ナイロビ宣言」、市民社会はどう評価する？（ファシリテーター：高橋 郁 ウォーターエイドジャパン事務局長）・雨宮 知子氏 難民を助ける会 AAR Japan 支援事業部主任 ・稲場 雅紀氏 アフリカ日本協議会 国際保健部門ディレクター・津山 直子氏 アフリカ日本協議会代表理事・福田 友子氏 ジョイセフ アドボカシーグループ チーフ・米良 彰子氏 ハンガー・フリー・ワールド地域開発・アドボカシー担当、第二部では、市民社会から見た TICAD VI をテーマにパネルディスカッションが行われました。安倍総理からは、「アフリカに 3 年で 300 億ドル」「インフラ投資 100 億ドル」「1,000 万人に人材育成、5 万人に職業訓練」「5 億ドルの保健支援」などいくつかのプレッジがあった。これに対し、パネリストからは実施プランが不明瞭だという意見や、内容が FOCAC と似ているという声があった。今後の動きに注目したい。
9 月 28 日	**CHV トレーニング for GichagiA CU【二日目】** Gichagi A の結核トレーニング二日目。まずは昨日の復習から。一人一人を指名して「結核治療にかかる期間は？」「CD4 とは何を測るため数値？」など、昨日学習した内容に関する質問を行って答えられた人から座っていく。答えられないといつまでも立っていなければならず、学校の授業を思い出した。前回のトレーニングと同様、HIV 患者に対するカウンセリングのロールプレイングも行った。右の男性がドクター、左の女性が HIV 患者役だ。医者が感染したことを告げると、女

	性は取り乱し今にも泣きそうな表情となって、迫真の演技。カウンセラー役の男性は、言葉を選びながら、慎重に HIV の治療法やパートナーとの付き合い方などを伝えていきました。こちらは結核を予防し、感染拡大防止のために大切なことは何かを話し合うグループワーク。ただ講義を聞くだけより、こうしたワークショップを行うと皆活き活きとした表情になる。どのグループも素晴らしい発表で、日本の結核対策にも共通する内容でしたので、ここで少しご紹介する。結核予防のために大切なこと：こまめに換気を行い、清潔を心掛ける。・栄養をしっかり取り、免疫力を高める。・人ごみを避け、誰かが咳やくしゃみをしたときは口を手で覆う。・子どもが生まれたら BCG 予防接種を受けさせる。・教会、集会、学校などのコミュニティや各家庭で啓発活動を行い、住民の意識を高める。感染拡大防止のために大切なこと・訪問した家庭で結核のスクリーニングを行う。・結核患者の衣服・寝具の天日干しを行う。・患者が治療を最後まで中断しないようにフォローアップを行う。（DOTS）・治療中断者調査（Defaulter Tracing）を行う。・治療中の飲酒・喫煙を避ける。明日は Gichagi A のトレーニング最終日！今回は、どのようなアクションプランが出来るのか今から楽しみだ。
9 月 28 日	**[速報]くまモン塗り絵初お披露目、西日本新聞に掲載** 今月 17 日に開かれた熊本地震復興「くまモン塗り絵」初お披露目会の様子が、9 月 27 日付の西日本新聞熊本県版で紹介された。
9 月 29 日	**CHV トレーニング for GichagiA CU【三日目】** 本日は小雨。最近天気がぐずついて冷え込む日が多いと思ったら、ナイロビでは 10～11 月は小雨季に当たるそうだ。（大雨季は 3～5 月）。さて、今日は Gichagi A のトレーニング最終日。昨日に続き、ワークショップを行った。テーマは「結核患者の家を何度も訪れ、記録を続けることはどうして大切なのか？」：継続的に薬を取りにいくよう指導し、治療を成功させるため・周りの家族にも感染・発症していないか確認するため・カンゲミ全体の結核患者の分布を知るため・政府や NGO に記録を報告し、結核に関する統計や政策を実現するためなどの意見が出た。自分たちの活動の意義を再確認できるこのようなワークショップは、CHV のモチベーションを保つ上でもとても大切だ。お昼には CHV 全員でカンゲミ・ヘルスセンターを訪問した。クリニックのドクターが様々なツールを紹介しながら、結核患者が見つかった時のクリニックへの紹介(Refer)方法や、接触者調査（Contact Tracing）、治療中断者調査（Defaulter Tracing）について説明した。結核患者に関するすべての情報が記録されるカードは、外に絶対に流出することがないよう、クリニックで厳重に保管されている。ドクターから説明を聞いて活動の具体的なイメージがわいたのか、「担当区域で結核患者を見つけたときも、ここのクリニックを紹介しても良いのか」など、CHV の方々から様々な質問が飛び出した。会場に戻って講義の続きを受けた後は、初日に行った結核テストを再度行いました。Central のときは大幅な得点アップであったが、今回はどうだろうか。なんと、100 点が 6 人も！Gichagi A はプレテストの段階から高得点者が多かったようだが、それにしても 20 人中 6 人は凄い。満

	点を取った CHV は名前が呼ばれ、拍手が送られた。そして最後に、グループごとにアクションプランの作成を行った。活動、責任者、リソース、タイムフレーム、指標にカテゴリー分けをして、今後どのように活動をすすめていくかを考える。結核に関するパンフレットなどを住民に配布する、結核クリニックの看護師やドクターとミーティングの場を設ける、学校でヘルス・トークを行うなど、様々なアイデアが出た。丸一日使って３日間連続でトレーニングを行い、講師もCHVも大変だったとは思いますが、今回も非常に充実した中身の濃いものになりました。これで、全４回の研修もようやく折り返し地点。来週は、Gichagi B のトレーニングだ。
9 月 29 日	**結核集団感染のニュース-3** 先週に引き続き、また沖縄で結核集団感染のニュースが発表された。「沖縄県健康長寿課は２８日、北部保健所管内で肺結核を発病した４０代女性から、計１６人が感染し、うち２人が発病する集団感染が発生したと発表した。女性は通院治療中。発病者は全員、結核菌を排出しておらず、周囲に感染させる恐れはないという。沖縄県によると、女性は２０１４年１０月に医療機関に受診した際、胸部エックス線検査で異常が確認されたが菌は検出されなかった。１６年５月に悪寒や高熱で再受診した際、胸部の異常陰影ともに、たんの検査で肺結核と診断され、入院した。」集団感染のニュースではありませんが、結核治療に関して、ケニア全土で小児結核薬投与が開始されたとの発表が UNITAID さんからあった。「ケニアの国立結核・ハンセン病・肺疾患プログラム（NTLD-プログラム）が小児用結核治療薬を 10 月 1 日からケニア全土に配置すると発表。今後は低価格の飲みやすい小児薬が結核と診断されたすべての子供たちの治療に取り入れられる。今年の世界結核デー（3 月 24 日）にケニア保健省は MulikaTB!MalizaTB!キャンペーン（スワヒリ語で「結核に光を、結核に終わりを」)をスタートさせ、結核への理解と世論の高まりを目指しています。ケニアでは結核は依然として公衆衛生上の難題で、2014 年には 10 万人あたり 250 人の患者数。WHO により結核高蔓延国に指定されています。」日本リザルツでは現在、日本 NGO 連携無償資金協力事業として、ケニアのカンゲミにおいて、結核診療所の修復作業とコミュニティ主導の結核予防・啓発活動の拡大支援事業を行っておる。
9 月 30 日	**離婚と親子の相談室「第 14 回事例勉強会」開催(9 月 26 日)** 離婚と親子の相談室らぽーる主催の「第 14 回事例勉強会」が、9 月 26 日に開催された。この「事例勉強会」は、離婚と親子の問題に関係する大学関係者、弁護士、臨床心理士、関連団体の方、その他オブザーバーが一堂に会し、離婚と親子の問題について話し合い、情報交換を行う会だ。今回も最新の ADR 事例、フレンドリーペアレントに関する情報などについて、活発に議論が行われ、有意義な意見交換の場となった。
10 月	
10 月 1 日	**グローバルフェスタ JAPAN2016 始まる** 国内最大級の国際協力イベント「グローバルフェスタ JAPAN2016」が、 本日、始まった。今回の目玉は「くまモン塗り絵」のお披露目。リザルツクリエイティブ部長池田のアイデアで、素敵な展覧会ブースが出来上がった。塗り絵は、結核プロジェクトを行っているケニアからも取り寄せた。日本リザルツがキャンペーン事務局をする国連パレスチナ難民救済事業機関を通じ、パレスチナ自治区ガザ地区やヨルダンの難民キャンプからも塗り絵の様子が集まった。特に、「くまモン塗り絵」は大好評！あっという間になくなった。「グローバルフェスタ JAPAN2016」は、明日（10 月 2 日）もお台場センタープロムナードで行われ、明日の目玉は「凧揚げ青年」白石陸の最新状況報告である。

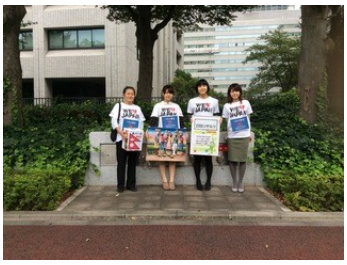
10 月 1 日	**旅便り vol5@ケニア キスム** キスムは、ケニアの第 2、第 3 の都市と呼ばれているが、ナイロビのような"シティー"ではない。ナイロビが商業都市、キスムが工業都市、エスンバが農村というのが私の中の勝手なイメージだ。本日(9/30)の朝一でナイロビからバスに乗り、バスで 8 時間程。夕方前にはキスムに到着していたので、ぶらぶらと散歩してきた。フードマーケットは、多くの人で賑わっており、特に夕方という時間帯だからなのか歩けないぐらい。そして少し離れると、工場がたくさん並んで、農耕具やペイント関連、パソコン機器など、製品は多種多様にある。そして、Edward に勧められた「Hippo Point(ヒッポーポイント)」へ。ここは文字通り、"カバ"に出会える場所、ケニア、ウガンダ、タンザニアに囲まれたアフリカ最大の湖、「ヴィクトリア湖」。日本の旅行代理店でもここでのクルーズを含むパックが販売されているとか…見渡すかぎり、湖！だった。私が行ったのが、ちょうど夕暮れ時で少し雲があったが、綺麗な夕日が水面に消えてゆくのが、見えた。改めて、ここがアフリカで、アフリカはとても広いんだな、と感じた。肝心の「カバ」は、夕方でもう船は出せないと言われ、目にすることができなかった。バスの中で雑感を書き留めているノートを見返し、挟んであったどこかのレシートを発見した。頭の中にすーっと蘇ってきた記憶…これを書き留めたのは、Edward が手伝いをしている商店の倉庫の中。夕方の豪雨に襲われ、空は真っ暗、雨宿りのために倉庫に入っていた。小さな倉庫の中には、数人のケニアの人たち、スワヒリ語で話すので全く意味がわからない…。それを聞き流しながら、スマホの小さなあかりでノートを照らして書いた。日にちはわからない。そんなことが日常茶飯事だった。以下、その時に書き留めていた雑感、私の個人的な意見である。私は今ケニアの西側、実にナイロビから計 10 時間、乗り合いバスを乗り継ぎ、やっとたどり着く村「エスンバ」に住んでいる。ここには電気、水道のインフラはもちろん無い。これぞ、アフリカの農村と言っていい。ナイロビで TICAD VI に出席した後すぐに、この地にやって来た。早 1 ヶ月が経っている。TICAD VI はある意味で異次元の会議だった。初のアフリカ開催、参加者は 1 万 1 千人を超えたという。安倍総理のスピーチやナイロビ宣言には「アフリカに、3 年間で 300 億ドル」などいくつかのプレッジを含んでいた。これらは日本におけるアフリカ開発の大きな一歩であることには違いない。しかし、議論されるべきは本質的なことであるべきである。人は数ではなく、それぞれに背景と物語をもち、それぞれの人生の主役であることを忘れてはいけない。アフリカ開発・支援に関わる産官学 NGO 問わず、すべての団体は、数字と文字がいっぱいの報告書をまとめることに必死になっている。しかし国際協力の本質は、数字で表すことは難しい「幸せで可能性にあふれた人間らしい生活」を創造することにある。決して収入、何とか率何%だけではないはずだ。ここエスンバに住む人々は自給自足、自然・共同体に近い生活様式をしている。もし仮に、それを絶対的貧困からの離脱のため、「自己消費作物から換金作物へ」と看板をつけ支援を行えば、その手のノウハウがない彼らはわずかには収入を得ることができるだろう。がしかし、以前より貧しい食物しか手に入れられなくなるかもしれない。これは支援によって貧困になり不幸になっているのだ。それでも支援した側の報告書には大きく「収入の増加」と記載することができるのである。では、本質的な支援とはどんなものだろうか。包括的で柔軟性を持ち、持続的な人間らしい生活を目指す支援のことだ。しかしそれらはあくまで手段であって、目的ではない。「私はこの人たちを幸せにしたい」という「始めの炎」を持ち続け、振り返れば野心的で革新的な支援の形になっているのかもしれない。私ひとりにできることは小さいかもしれない。しかし目の前のことを当たり前にやる。それが世界に貢献していることになる。見て見ぬ振りはできない。本当に"人間らしい生活"とはなにか。それを探し求め、それを目指すのが我々の重い重い責務なのではないのか。そんな思いでケニアの田舎の村エスンバ、小さな商店の倉庫に山積み置かれる砂糖の麻袋の上でレシートの裏にこの文章を書き留めている。書き留めた後に、Edward の家までの 1 時間と 30 分、真っ暗な道を歩いたことを忘れていない。(これは日常茶飯事のことではなく、いつもはバイクタクシーで 15 分。)電波から離れ、電子書籍も読めず、新聞もない、話す言葉はスワヒリ語、私に話しかけるときだけ英語になる。私はカタコト英語しかできず、こんな暮らしをしていると、こんなことを考えつくのかもしれない。

10 月 2 日	**グローバルフェスタ JAPAN2 日目** グローバルフェスタ JAPAN2016、2 日目。お天気にも恵まれ多くの人がイベントに訪れた。活動報告ブースでは凧も揚がり、多くの来場者の注目を集めていた。無事 2 日間の日程を終えることが出来たのは、関係機関様、企業様、そしてボランティアの皆様のお陰で、日本リザルツスタッフ一同、心より御礼申し上げる。
10 月 3 日	**グローバルフェスタ JAPAN2016(UNRWA 紹介編)** 日本リザルツは国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）のキャンペーン事務局をしている。東日本大震災以降、被さい地復興の願いを込めて、パレスチナ自治区ガザ地区では毎年 3 月に凧揚げが行われている。また、今年 4 月に発生した熊本地震を受けて、ガザ地区ハンユニスの子供たちやヨルダンにあるホソン難民キャンプの子供たちも塗り絵大会に参加してくれた。ブースではガザ地区の様子を紹介するコーナーもあった。UNRWA の日本人医師清田明宏先生が書かれた絵本「ガザ　戦争しか知らないこどもたち」も展示された。絵本は、平成 27 年度厚生労働省の児童福祉文化賞の推薦作品に選ばれている。日本と違い、生まれたときから紛争しか知らないパレスチナの人たち。彼らが、少しでも希望が持てる社会を作れるよう、日本リザルツは UNRWA の活動を応援していく。
10 月 3 日	**グローバルフェスタ-親子ネット** リザルツのテント前では、親子ネットさんが緑色のお揃いの T シャツを着て、熱心に親子断絶防止法にかかわるアンケート活動を行っていた。1 日目は小雨が降ったりやんだりしていたが、2 日目はお天気がよく、朝から一日中頑張っていたので、夕方には朝お会いしたときとは全く違ってよく日に焼けた赤いお顔になっていた。
10 月 4 日	**CHV トレーニング for GichagiB CU【一日目】** 本日から、GichagiB の結核トレーニングが始まった。本ブログで何度か紹介しているが、カンゲミには KangemiCentral、GichagiA、GichagiB、Kibagare という 4 つのコミュニティ・ユニット(CU)があり、各 CU には 50 名のコミュニティ・ヘルス・ボランティア（CHV）が在籍している。CHV はコミュニティ保健戦略（CHS）に則って活動しており、一か月に 30～90 世帯を訪問して住民の健康管理やアドバイスを行っている。さて、本日の GichagiB からの参加者は、全体的に Central、GichagiA より年齢層が若いせいか、テンションも高め。まずは結核の知識について確認するためのプレテストを行った。サブ・カウンティ保健管理チームを取りまとめている Namisi 氏も特別講師として参加した。皆、真剣な表情で講義に耳を傾けている。ノートもしっかりと取り、疲れたら全員でストレッチした。昼食タイムも、講師陣は打ち合わせを行った。

10 月 5 日	**CHV トレーニング for GichagiB CU【二日目】** GichagiB の結核トレーニング 2 日目。本日も、たくさんの写真と共に研修の様子をご報告する。まずは出席を確認するため、参加者名簿にサイン。ここから一日が始まる。今日も CHV はやる気十分。大切なポイントはしっかりノートに書き留めて。会場のすぐ横は小学校。休み時間になると研修会場が子どもたちの元気な声に包まれる。参加者が HIV 患者とカウンセラーに扮してロールプレイング。長丁場のため、ティータイムでほっと一休み。参加者同士で話も弾む。グループワークでは、結核予防の効果的な方法について議論し、発表した。
10 月 5 日	**スタッフ長坂の寄稿が 10 月 2 日付の朝日新聞「声」欄に掲載** 新聞投稿はアドボカシーの基本。開発途上国の任務は虫との戦い。日本リザルツスタッフ一同が愛用する「キンカン」はじめ、蚊取り線香などの定番商品の良さについて述べられている。「キンカン」を製造している株式会社金冠堂さんの広報担当の横尾さんが丁度、朝日新聞の記事を読まれ、社内の皆様にも共有していただいた。プロジェクトを行う開発途上国は衛生環境も悪く、虫も多い地域。ケニアで結核プロジェクトに従事する大崎は 120ml の特大サイズを持ち込んでいる。
10 月 6 日	**CHV トレーニング for GichagiB CU【三日目】** GichagiB の結核トレーニング最終日。まずは昨日の復習から。講師から紙製のボールを受け取ったら、質問に答えるまで座ることが出来ない。カンゲミ・ヘルスセンターへ移動、課外授業はテンションも上がる。クリニックのドクターから、結核スクリーニングの方法を学ぶ。ちょうど診察中の患者もいらした。栄養士さんも駆けつけ、結核を予防するためには、栄養バランスの取れた食事をとり、免疫力を高めることが最も大切。会場に戻り、結核のテストを再度受けた。結果発表。満点の方はいなかったが、研修後は 20 人中 16 人も 90 点台を獲得した！最後に 4 つのグループに分かれて、アクションプランを発表した。クリニックで栄養の大切さについて話を聞いたためか、戸別訪問の中で住民への食事指導をプランに取り入れたグループが多かった。これで、残りのトレーニングは Kibagare 地区」を残すのみとなった。私たちにとっては 4 回目でも、参加者にとっては初めての結核研修。少しでもより良いものにするため、最後まで気を抜かずコーディネートしていきたい。(本事業は、日本ＮＧＯ連携無償資金協力事業として外務省から助成をいただき実施)
10 月 7 日	**釜石生活①～仙人峠の風～** 東日本大震災以降、岩手県釜石市に事務所を構え、様々な角度からの支援活動を行ってきたが、間もなく、子どもにスポットを当てた新しい取り組みが始まる予定。数日前から釜石入りして、新プロジェクトの援助者になってくださる方や、連携させていただく団体などを訪ねて挨拶したり、常駐するために住まいの準備をしたりしている。その中で、今回は日本リザルツが借りている仮設住宅とその環境の話。仙人峠という名の峠を越えた、さらに山奥にあり、清流に沿った道路は清々しく気持ちがよいが、夕方 6 時には真っ暗でこわい。朝晩はかなり冷え込み、そして、このエリアの特徴は、風が強いこと。「あー、あの辺風が強いとこですから」と言われ、これからも、毎晩のようにあの強風が吹きすさぶかと思うと、仙人の修行で風を起こしていると思えてきて「そうか、それで仙人峠と名がついたのか…」と納得した。
10 月 7 日	**新しいインターンを迎える** みなさま、はじめまして。9 月 27 日からインターンとして日本リザルツの活動に参加させていただく事になった村椿だ。国際協力の現場を肌で感じ、多くのことを吸収したいと思い入った。大学では国際政治経済を学び、国際ボランティアサークルで活動している。「ひとりひとりに世界を変える力がある」これは本当だと思

	う。少しの力だが、自分にできることをひとつずつ、しっかりと行なっていきたい。先日、さっそく国内最大級の国際イベント、グローバルフェスタのお手伝いをした。リザルツは、熊本、ケニア、ガザの子ども達が描いた塗り絵の展示やリザルツスタッフの白石くんの活動報告、前日につくったパンフレット袋の配布を行った。たくさんのひとがブースの前を通ったなか、興味を持って立ち止まって話を聞いて下さる方がいて、嬉しかった。また、リザルツが他の団体と密接にかかわりを持っていること、白須代表が熱い思いを持って活動していること、国際協力に関わる人達の熱意を、すごく感じた。働く人ってかっこいいと思う。
10 月 7 日	**[報告]国際協力調査会・経協インフラ総合戦略調査特別委員会** 本日（7 日）国際協力調査会・経協インフラ総合戦略特別調査会特別委員会が自民党本部で開かれた。外務省や内閣官房など省庁を始め、国際機関や民間企業、NGO も出席し、「持続可能な開発目標（SDGs）」達成に向けた意見交換を行った。会議開始は朝 8:00。朝からみなさん元気。NGO からは、日本国内で女性や子供への取り組みを推進して欲しいとか、母子保健に関する日本の知見を世界に広げて欲しいとか、国を挙げて、SDGs 推進に励むためのキャンペーンを実施したいなどの意見が出されていた。委員会では、国際保健分野の推進や栄養改善など日本リザルツが実施する事業についても取り上げられた。「持続可能な開発目標（SDGs）」の期限は 2030 年。14 年後のゴールに向けて、NGO はもちろん地方を巻き込んでオールジャパンで活動に取り組みたい。
10 月 7 日	**熊本だより⑫～去る日のこと～** 熊本での支援活動は 9 月 29 日をもっていったん完了した。熊本を去る日には、朝から訪れる人が後を絶たない。まずは宅急便業者、東京事務所へ２個、自宅へ２個、発送した。次は、日本財団さん、電子レンジと自転車を使っていただくことになった。その次には、50 センチ立方の冷蔵庫、格安布団セットなどを、熊本市母子・父子福祉センターへ。DV などで着の身着のまま逃げて来られる方もいるかもしれない。差し上げたものは、東京事務所や釜石へ送ることも考えたが、買った値段との比較で、現地で使っていただける方がいらっしゃるならばその方がよい…ということで行く先が決まった。何もなくなった部屋はがらんとして寂しくなった。でも、、一人の知り合いもいなかったこの街で、1 か月の間に信頼できる仕事の仲間ができ、尊敬できる先生方にもお会いでき、また、熊本を離れてからはお友達として仲良くしたい人にも会えて、思わず「くまもとサプライズ」の「もんもんもん、くまモン、熊本が大好きでよかった～♪」と心の中で口ずさんだ。報告書をまとめなくてはならないが、まずは熊本の皆さま、くまモン、本当にありがとう。
10 月 8 日	**[ニュース]ノーベル平和賞受賞のサントス大統領のもう一つの顔とは…** 今年のノーベル平和賞が発表され、半世紀以上にわたる内戦の終結に尽力したということで、南米・コロンビアのフアン・マヌエル・サントス大統領に授与されることが決まった。実はサントス大統領、「持続可能な開発目標（SDGs）」の生みの親で、SDGs のコンセプトが打ち出されたのは、2012 年の「リオ+20」サミット。コロンビア政府が発案し、様々な国のサポートを得て承認されまた。また、コロンビアは、SDGs が国連で採択される前の 2015 年 2 月、「ポスト 2015 推進のための政府機関間委員会」を設置し、国を挙げて SDGs を推進する体制を確立している。サントス大統領のノーベル平和賞受賞で、SDGs 推進に拍車がかかることは間違いない。

10 月 9 日	**釜石生活④～震災の記憶～** 東日本大震災から 5 年 7 か月経ち、釜石の市街地には、新しいお店やホテルが建ち並び、前を向いて進む街のエネルギーを感じる。辛い体験ではあるけれど、震災の記憶を自ら語り部となり伝えていく活動をされている方がいる。釜石市鵜住居にある「宝来館」という旅館の女将さん。震災直後、孤立してしまったその集落の方々が集まって、知恵を絞り助け合って、お風呂の残り湯でお米を炊き、飢えをしのいで救助を待ったというエピソードをニュースで見た。その宿の女将さんが、宿泊客の希望者に対して、当時のことを写真、動画とともに話をされていると知り、ぜひ一度参加したいと思い、行ってきた。建物は建て替えられ新しくなっていた。東日本大震災では 2 階まで浸かってしまったということで、集落は何日も孤立して、自衛隊の救援隊が山側から道もないところを助けに来てくれて助かったそうだ。その隊長は、ハイチの大地震で活躍した方だった。30 分ほどのお話がいったん終了し解散した後にも、大漁旗の話題、ハイチでのリザルツの活動、毎月の募金のこと、ラグビーワールドカップを釜石で！の活動の話などに花が咲いた。イボンヌ・チャカチャカさんの話題を出すと、「そう！外国の方と心が通じるんですよね！」と共感されていた。
10 月 10 日	**[ニュース]毛利衛さん議長に耐性菌拡大防止を！** 日本リザルツが力を入れる感染症対策に関して、新たなニュースが飛び込んできた。政府が、耐性菌の感染拡大を防止するため、宇宙飛行士の毛利衛さんを議長にした会議を発足させる方針を固めた。抗生物質が効きにくい耐性菌は、抗生物質を使いすぎることなどで生み出され、感染すると死に至るケースもあり、G 7 伊勢志摩サミットや国連総会でも取り上げられるなど国際的に問題解決に向けた議論が進められている。特に、日本リザルツが力を入れる結核の分野では、薬が効かない多剤耐性結核の感染拡大が深刻な問題となっている。新たに発足する会議は「薬剤耐性対策推進国民啓発会議」といい、来月（11 月）1 日に初会合が開かれるらしい。今回の会議を契機に、国民が一丸となって感染症拡大抑止に取り組みたい。
10 月 12 日	**ケニアの難民キャンプ** 皆さんはケニアと聞いて何を思い浮かべるだろうか？サファリ？マサイ族？アフリカ料理？あまり知られていなが、実はケニアには世界最大の難民キャンプがある。ケニア東部、ソマリアとの国境近くにあるダダーブ難民キャンプ。1991 年に設置されたこちらのキャンプには、紛争を逃れてやってきた 30 万人以上のソマリア難民が生活している。しかし今年の 5 月、ケニア政府は経済的な負担や治安上の脅威を理由に、11 月末までにキャンプを閉鎖すると発表した。ケニアが閉鎖に踏み切れば、居場所を失った難民はどこへ行けばよいのか。紛争の続くソマリアに帰るのか、命がけでヨーロッパへ渡るのか。国際社会からも非難の声が高まっており、先日ノルウェー難民評議会(NRC:ノルウェー最大の人道支援非政府組織)が、キャンプ閉鎖は国際法、特に 1951 年に制定された難民条約に違反しているとして、声明を出した。数十万人の難民の命を左右する決断を行ったケニア政府の責任は重大だが、同時に国際社会もケニアだけに負担を押し付けるのではなく、日本を含む世界全体でこの人道問題にどう立ち向かうか、対策を考えていかなければない。

10 月 12 日	**つなみ募金** 昨日、恒例のつなみ募金を経済産業省前で行い、今回は学生インターンの村椿さんが、可愛い笑顔でつなみ募金デビューした。爽やかな青空の下、気持ちよくリザルツパンフレット、リザルツ新聞などの配布を総勢 5 名がお揃いのリザルツ T シャツを着て行った。 
10 月 12 日	**[ニュース]感染症に更なる理解を！** 本日（10 月 12 日付）の公明新聞に面白いコラムが出ていた。 コラムでは、以下の 2 点について触れている。「再興感染症」制圧目前だったものの、再び感染が拡大している感染症。「多剤耐性」従来使われていた複数の薬に耐えられる病原菌。再興感染症は、日本リザルツが力を入れるポリオでも深刻な問題で、ポリオ常在国(野生型ポリオの発症が続いている国)は、パキスタンとアフガニスタンの 2 か国で制圧間近だったのだが、ナイジェリアで新たなポリオ感染者が発見された。また、多剤耐性は日本リザルツが力を入れる結核でも大きな懸念事項で、政府も宇宙飛行士の毛利衛さんを議長にした耐性菌拡大対策の会議を来月（11 月）から開くなど、取り組みが始まっている。
10 月 12 日	**[ニュース]UNHCR フィリッポ・グランディ氏掲載** 本日の日本経済新聞に国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）フィリッポ・グランディ高等弁務官の声が掲載されている。Voice 国内避難民最大、和平に期待（2016/10/12 付 日本経済新聞 朝刊）グランディ氏は、日本リザルツがキャンペーン事務局を担当する国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）の事務局長を務められた方で、これまでに何度もお世話になっている。8 月に開かれた第 6 回アフリカ開発会議（TICAD VI）でも偶然お会いした。 Voice 国内避難民最大、和平に期待 「コロンビアには約700万人の国内避難民がいる。平和的な対話でしか問題は解消されない」。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）のグランディ高等弁務官（写真はロイター＝は記者会見で、今年のノーベル平和賞が同国のサントス大統領に決まったことを歓迎した。同国の国内避難民は世界で最大。「和平への対話が前進すると信じている」と期待を示した。 例外はもう一つあった。前任者でもあるグテレス元ポルトガル首相が国連の事務総長に選ばれたことだ。「ひどい紛争への対応を最重要課題とする、世界でトップ級のピースメーカーだ」とグテレス氏を高く評価。深刻化する難民問題に立ち向かう自身にも「とても励みになる」と語った。（ジュネーブ＝原克彦）
10 月 13 日	**[ニュース]子育て支援が日本の特効薬に** 12 日付の朝日新聞夕刊に面白いニュースが。社会学者の柴田悠（しばた・はるか）さんが、子育てや保育事業に力を入れると国の経済成長につながることを明らかにした書籍を紹介している。実はこの研究、かの有名なマツコ・デラックスさんがテレビで提唱したことがきっかけで有名になり、「マツコ案」として話題になった。日本リザルツが力を入れる「持続可能な開発目標（SDGs）」も、女性と子供の健やかな生活の確保を第一に掲げていて、日本でも、こうした施策に力が注がれることを期待している。
10 月 14 日	**メディカル・オフィサーと打ち合わせ** 本日、ウェストランズ・ヘルスセンターにて Namisi メディカル・オフィサー、Peres 結核・肺疾患コーディネーター、Zafarani コミュニティ戦略コーディネーターと打ち合わせを行った。議題は、10 日後に迫ったマルチ・ステークホルダー・ミーティングとクリニック譲渡式の最終調整。両イベントの参加者がほぼ確定したため、発言者の順番をどうするか、司会は誰に頼むかなど、ロジの部分についても話し合った。これほど大きなイベントを現地責任者として任されるのは初めての経験なので、自分の進めている方向は正しいのだろうか・・・と不安に襲われることもあるが、悩みつつも、少しずつ形になっていくのは楽しくもある。来週月曜からは、Kibagare のコミュニティ・ヘルス・ボランティアを対象にした最後の結核トレーニングが開催される。クリニック譲渡式当日までは怒涛の 1 週間半となりそうだが、体調を整え心して取り組んでいこうと思う。
10 月 14 日	**熊本地震から今日で半年** 今日（10 月 14 日）は、熊本地震の発生から半年。日本リザルツも熊本のみなさんを元気にしたいと、取り組みを行っている。10 月 12 日付毎日新聞朝刊には、おまもりブックとくまモン塗り絵の様子を書いた

	スタッフ長坂の寄稿が掲載された。もっと多くの人たちを元気にしたい。日本リザルツでは、おまもりブックの増刷を進めている。
10 月 15 日	**リザルツで新聞投稿が熱い** リザルツの事業の一つである離婚と親子の相談室「らぽーる」の相談員である嶋貫さんの投稿が、朝日新聞の声欄に掲載されたので、ご紹介したい。タイトルは「優先席に座る健常者の皆様へ」となっており、足が不自由なので周囲に迷惑をかけたくないために、シルバーシートの前に立った際に見られる行動について書かれている。障がい者の方たちに優しい社会であってほしいと切に思う。
10 月 16 日	**[速報]世界ポリオデー　広告アート展示開始！** 10 月 24 日は世界ポリオデー、日本リザルツでも、ポリオの抑止に向けた取り組みを始めた。それが、今日からスタートした「東京メトロ池袋駅　世界ポリオデー　アート広告」。池袋は 1 日 50 万人の乗降客数を誇るマンモス駅。遂に広告とご対面。おしゃれで、素敵な広告だ。丁度、取材に行った時間は、学生の帰宅時間帯。多くの学生さんがポスターに関心を示していた。若い人たちにも、ポリオやワクチン接種に関心を持ってもらうきっかけになればいい！展示するのは、オーストラリアの芸術家アレクシア・シンクレアの VARIO LAVERA,EDWARD JENNER'S SMALL POX DISCOVERY のポスター作品。 このポスターは、アニー・リーボヴィッツをはじめとする世界の著名なアーティスト 38 組が、ワクチンをテーマにアート作品を制作した、The Art of Saving a Life（ザ・アートオブセービングアライフ）プロジェクトの作品の一つ。プロジェクトは、現在、世界には約 26 のワクチンが存在しており、ワクチンによって毎年約 300 万人の命が救われている一方で、未だ 5 人に一人の子どもたちがワクチンにアクセスできていない現状を改善するためにゲイツ財団が実施したものだ。
10 月 18 日	**[告知]長い道のり～パレスチナ難民の苦難の歴史～トークイベント＆写真展** 国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）のピエール・クレヘンビュール事務局長が 10 月 24 日～26 日まで訪日される。クレヘンビュール事務局長は、昨年はガザの子どもたちと一緒に訪日し、安倍首相へ表敬訪問したほか、釜石で凧揚げもした。
10 月 18 日	**来週 25 日はクリニック譲渡式！** 来週 25 日(火)に、カンゲミにてマルチ・ステークホルダー会合と結核クリニック譲渡セレモニーを開催する。事業を開始して約 2 か月半経過したが、これまで天井や外壁が崩れてほとんど使用されていなかった結核クリニックの改修工事し、地域住民の健康管理を担っているコミュニティ・ヘルス・ボランティア（CHV）に対して、結核に関する知識を向上させるためのトレーニングを行ってきた。当日のマルチ・ステークホルダー会合では、トレーニングを終えた CHV が年間活動計画の発表を行い、ナイロビ・カウンティやウェストランズ・サブカウンティの保健担当者を始めとするパブリック・セクター、トヨタケニア、栄研化学などの企業、KANCO や STOP TB Partnership ケニアなどの市民社会からも発言いただく予定だ。また、クリニック譲渡式ではテープカットだけでなく、日本大使館やケニア内閣府の保健省の方々に挨拶いただくことになっており、有り難いことに 150 名近くの方々が出席予定だ。本日は CHV トレーニングの傍ら、メディアにプレスリリースを発信したり、スピーカーの調整を行ったり、当日必要になるものを発注したりと、準備に奔走していた。忙しいと、ついつい周りが見えなくなって顔が強張ってしまいがちだが、大変な中でも笑顔を忘れないよう気をつ

	けたいと思う。
10 月 19 日	**CHV トレーニング for Kibagare【三日目】** Kibagare のコミュニティ・ヘルス・ボランティア（CHV）トレーニング最終日。午前中は、カンゲミ・ヘルスセンターにて課外授業。栄養士の方が来て、腕周りの太さや身長、体重から住民の栄養状態を測る方法を参加者に伝授した。結核の発症と栄養不良は切っても切り離せない関係にある。ワークショップでは、今後活動を行っていく上で、コミュニティ内で活用できそうな組織や人々は誰か、またそれらの組織と関係を構築するにはどうしたら良いかを話し合った。活用できる組織としてカンゲミ内の民間クリニック、教会、学校などの名前が挙がり、特にカンゲミで活動する宗教的リーダーや政治家とは、積極的にヘルス・トークを行っていくべきだと皆さん力説されていた。講義終了後のポストテストでは、今回もほぼ全員が大幅な得点アップを果たし、毎回この結果を見る度に、トレーニングを実施して本当に良かったと実感する。講師の方々も満面の笑顔になり、本当に嬉しそうだ。最後にアクションプランを発表して、4 つのコミュニティ・ユニット×3 日間で、計 12 日間のトレーニング全課程が終了した。これほど充実した研修が実現したのも、毎回素晴らしい講義をされた講師の方々と、最後まで真面目に、そして積極的な姿勢でトレーニングに臨んでくれた CHV の方々のおかげだ。
10 月 19 日	**[最新情報]塗り絵の輪広がる！** スタッフ長坂の寄稿が 10 月 17 日付西日本新聞に掲載された。記事では熊本地震を受けて、日本リザルツが作成したくまモン塗り絵のことを取り上げている。現在、日本リザルツでは塗り絵大会を世界各国で行っている。熊本はもちろん、ケニア、ヨルダン、パレスチナ自治区ガザ地区からも塗り絵が届き、すでに日本リザルツオフィスには 500 を超える絵が集まっている。塗り絵は世界共通で楽しめる玩具。塗り絵大会は、日本リザルツがキャンペーン事務局を務める国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA)のご協力で行われた。
10 月 19 日	**世界ポリオデー　広告アート展示が盛り上がっております！** 本日は、東京メトロ池袋駅で開催している「世界ポリオデー広告アート展示」に、ポリオ議連メンバーの逢沢一郎様、ポリオ患者で雑誌『WaWaWa』創刊者としても活躍している阿部恒世様、ポリオの会の小山万里子様をはじめ、ポリオ関係者が集結した！遅れて参議院議員の藤末健三先生も登場した。
10 月 19 日	**CHV トレーニング for　Kibagare【一日目・二日目】** 昨日から、Kibagare のコミュニティ・ヘルス・ボランティアを対象とした結核トレーニングが始まっている。先月から KangemiCentral、GichagiA、GichagiB と実施してきた研修は、今回のグループで最後となる。Kibagare のコミュニティ・ユニットは非常に真面目で、皆さん真剣に講義を聞いていた。ケニアでは時間にルーズな方が多く、スケジュール通りにいかないことは当たり前だが、今回のグループは開始

	時間や休憩時間をしっかり厳守していたため、スムーズに講義が進んた。ノートにびっちりとメモを取り、大切な箇所はスマホで記録する方も。講師の一人は、保健省結核チームのユニフォームである黄緑のポロシャツを着用し、どことなく配色が親子ネットの T シャツと似ている。今日は天気が良かったため、講師陣は外でトレーニングの準備や、テストの採点を行っていた。カンゲミでは急に電気が止まったり、携帯の電波がなくなったりと、毎回何かしらのハプニングが起こるが、さすがに 4 回目のトレーニングともなると、冷静に対応出来るようになった。明日はいよいよトレーニング最終日。クリニック譲渡式の準備を進めつつも、トレーニングが疎かにならないよう、気を引き締めていきたい。
10 月 20 日	**NGO ユニット勉強会に参加** 本日、NGO ユニット勉強会「JPF 事業における良いプロポーザルの書き方勉強会」が ADRA さんの事務所において開催された。リザルツからはオフィスのスタッフ４名とケニアから大崎がスカイプで参加した。勉強会では、グッドサンプルとして、４団体の申請書をテキストとし、それぞれの団体から申請書をどのように記載したか、どこを注意したか等の説明をしていた。また、JPF さんからは、日常的な JPF さんとのコミュニケーションが大事であり、基本項目シートを必ず確認するようアドバイスがあり、今後申請書を作成する際には、大いに参考にさせていただく。
10 月 20 日	**旅便り vol6@ケニア Edward ファミリー特集①** エスンバで活動していると、日本に帰りたいというよりはナイロビに帰りたくなる。Luanda の小さなスーパーマーケットで見つけた、ケチャップと醤油で、そこらじゅうで売っている、玉ねぎ、人参、ニンニク、キャベツ、トマト、ジャガイモ等々、そして、ウガリ、パスタ、米、それらの組み合わせで調理。実は先週の金曜日(14 日)、Edward の愛娘、Lucia(ルシア)の卒園式に出席したので、その様子をざーっとご紹介したい。日本とは全く違う。Edward 家には 3 人の、かわいいかわいい子ども達がいる。ではなぜ、今までのエスンバ特集で登場をしなかったか(少しバリスタだけしたが…)、それはママと共に、キスムの少し北側にある町"Kakamega(カカメガ)"に住んでいるから。ママはエスンバ、カカメガが含まれる Vihigacounty にある唯一の公立の病院"Kakamega Hospital"で看護師として働き、3 人の子ども達は、公立の Essumba Primary School ではなく、名門私立の"Kakamega Hill School"で勉学に励んでいる。私は Edward 家のカカメガハウスに初めてお邪魔した。エスンバ-カカメガ間は、乗合バスで 1 時間程、200Ksh(=200 円)しないぐらい。キスムまでとは言えないが、立派な町だ。卒園式前日の夜、Edward と Mama に連れられて、町の大きなスーパーマーケットへ。そこで大量の食材を買い込み、明日の準備に取り掛かる。これでケニアに来てから 4 校も学校を訪れたことになる。

10 月 22 日	**世界食糧デーイベントに参加して** 先日、世界食糧デーイベントに参加してきた。国際機構や民間企業、学生など様々な方がいた。世界中の人達が食べられるだけの食糧はあるのに、なぜ飢餓がなくならないのか。日本も食品ロスの問題を抱えている。お金があればすぐに食べ物を手に入れられ、自然と切り離されて生活していると、食べ物がどうつくられているのか目にすることは滅多にない。「命を食べている」という言葉を忘れずにいたい。残さず食べることが、小さいことだけれど大切なことであると感じた。
10 月 22 日	**釜石生活⑨～相談室開設に向けて～** 市役所から委託を受け、相談室の開設準備を始めた。国に対して申請した内容が承認された時点で、事業の内容について詳しくご説明する。今、公にできることは、こちらのスペースで、１１月１日から事業を開始するという点と、事業は相談室の開設と研修会、学習会、相談会、ワークショップ等の開催で、東京の「らぽーる」、熊本でのメンタルサポート事業と同様に、対象者を「子どもとその家族」としている。
10 月 22 日	**[ニュース]UNRWA クレヘンビュール事務局長の寄稿が朝日新聞に掲載** 本日付（10 月 22 日）の朝日新聞「私の視点」欄（15 面）に、ピエール・クレヘンビュール事務局長の寄稿が掲載されている。記事では、パレスチナ難民と日本のつながりについて紹介した後、日本のみなさんへの期待を述べている。1．教育分野と保健分野で日本の技術を活かすこと 2．難民の自立を促す仕組みづくり（就労・自立支援）3．日本国内でパレスチナの人々への関心を高めること。この 3 つについて、日本のみなさんに協力をお願いしたいと述べている。
10 月 23 日	**旅便り vol7@ケニア Essumba 特集③** 昨日(10 月 22 日)、白須代表がエスンバを訪問した。Edward 氏と共に、エスンバコミュニティーを歩いて回り、彼がサポートする 3 家族を訪問、その中で浮き彫りになった問題点を、再度まとめてお伝えする。まずは、1 軒目。この家の家主は、70 歳後半のおじいちゃん。スナノミ症に感染し、この家で一人暮らし。そして、2 軒目。この家は小さな子どもが 5 人いる、3 世代の家庭で、2 歳でスナノミ症に感染している女の子もいる。さらに、3 軒目。ここは家族の 3 人がスナノミ症に感染しており、足・手を見せてくれた。スナノミ症による痛みのせいか、ぐったりとした様子のお子さんもいる。そして、Edward 氏の隣の家の方で、彼は 45 歳、農作業ができないために木炭を売ってお金を得ている。しかし、彼の 80 歳を超えた母親を養える収入はなく、それを知っている Edward 氏はその家族に支援している。まずは、Jigger(スナノミ症)について、その恐ろしさを伝える。スナノミというその名の通り、砂の中にいるノミが感染して生じる寄生虫性皮膚疾患で、ここケニアでも、特にエスンバのような農村部、さらにはスラム街で未だ多くの人を苦しめている。スナノミ症の発症部位は、もちろんノミが侵入しやすい部位の足の爪周囲などであり、感染すると痛みと痒みが生じる。ここエスンバで行われる治療方法は「ノミの除去」。熱した針やナイフで、皮膚を取り除きノミの卵や虫体を除去するもので、これは二次感染やその他の感染症にも繋がりかねない治療法でもある。しかしこれらは靴を履き、毎日、水と石けんで全身を洗えていれば、予防ができる病気だ。Essumba Primary School では、約 80%の子どもたちが裸足、もしくはサンダルで登校し、教室の床もボロボロで、スナノミが多く潜んでいる。さらに水を得るためには雨水を貯めるか、少し離れた川まで水くみに行かなければならない。エスンバではスナノミ症以外にも、HIV/AIDS、結核、コレラ、マラリアが大きな問題になっており、すべて症状や感染源が異なるが、どれも貧困層に感染者が多い病だ。エスンバに住む彼らの生活は貧

	困そのものだ。家の中にもスナノミが潜んでいる。トイレは特にそうだ。さらにエスンバから最寄りのこのような感染症に対応出来る病院は、Kakamega County Referral Hospital で、最短でも 1 時間弱かかる。次は教育について。幾度となくブログに登場している Essumba Primary School は公立学校。Kakamega Hill School は、有名私立学校。わたしが 1 年前、エスンバを訪れた際は、Essumba Primary School の先生方がボイコットし授業が行えない状況が 3 ヶ月も続いていた。子どもたちにとってこの勉強する機会を奪われた 3 ヶ月は非常に大きいものだった。特に公立学校の教育環境はひどく、図書館には本がない。このような環境があることを知っていただければ幸いだ。
10 月 23 日	**釜石生活⑩～KmeetsK～** KmeetsK それは、Kamaishi meets Kumamon!だもん。10 月 24 日（月）、社会福祉法人愛泉会かまいしこども園にて、くまモン塗り絵大会が行われることになった。協力のお願いに行った先は、「認定こども園」の園長。"KmeetsK"は、Kumamon meets Kamaishi!でもよくて・・・、だから、"KmeetsK"だ、と園児の笑顔を見て思した。皆さん、「認定こども園」てなんだろうか？【認定こども園】幼稚園および保育所等における就学前の子どもに対する保育および教育並びに保護者に対する子育て支援の総合的な提供を行う施設であり、都道府県知事が条例に基づき認定する。平成 18(2006)年 10 月に創設された。インターネット検索すると、上記のように定義され、下の 3 つのポイントにまとめられる。①保護者の働いている状況に関係なく、どの子どもでも教育・保育を一緒に受けられる。②保護者が失業したなど、就労状況が変わっても、継続して利用できる。③子育て支援の場としても利用するので、通園してない子どもの交流の拠点としての役割を果たし、子育て相談や親子の交流の場に参加しやすくする。制度が子ども目線になっているようで、調べていてほっとした。
10 月 24 日	**釜石生活⑪～くまモン塗り絵大会だもん～** 10 月 24 日（月）「社会福祉法人愛泉会かまいしこども園」にて、「くまモン塗り絵大会」を実施した。初めにホールに集まってくれた年中、年長さんに、「くまモンは熊本県にいまするが、熊本県でもこの前大きな地震が起こった。くまモンも怖かったと思うが、熊本に住んでいる子どもたちも、すごく怖かった。だから、かまいしこども園のみんなでくまモンの塗り絵をして、応援してるよ、頑張ろうね、の気持ちを送ってあげてください」「は～い」そして、教室へ移動して、塗り絵の時間となった。年長さんの中でも際立って丁寧に塗る女の子もいた。塗り絵がそろそろ終了というとき、みんな一斉に窓側に集まったかと思うと、「今日はありがとうございました」と声をそろえて言ってくれて、代表の年長さんが、こんな素敵なサンキューカードをくれた。今日一日、ボランティアでお手伝いされた木下さんも、「リザルツの活動で子どもにはあまり関わったことがなかったが、子どもの発想や発言がおもしろくて、カードまでいただいて楽しかった」と話されていた。日本リザルツでも、色紙やカードをよく作るが、もらってみると本当にうれしいもので、じ～んときた。
10 月 24 日	**[報告]公明党 SDGs 推進委員会ヒアリング** 10 月 7 日に開催された国際協力調査会・経協インフラ総合戦略調査特別委員会に引き続き、公明党 SDGs 推進委員会によるヒアリングが行われ、公明党の議員の先生方との意見交換がなされた。先日は自民党でも国際協力調査会・経協インフラ総合戦略調査特別委員会が開催された。外務省や内閣官房など各省庁を始め、国際機関や民間企業、NGO も出席し、「持続可能な開発目標（SDGs）」達成に向けてどのような施策を練ればよいか議論が行われた。座長の谷合正明参議院議員はもちろんのこと、山口那津男代表も参加された。NGO からは、地方の声をもっと施策に反映してほしい、ビジネス分野でも SDGs を広めていってほしい、誰も取り残さない社会を目指すため、困っている人の声に耳を傾けてほ

	しい、などの意見が出された。
10 月 24 日	**今日（10 月 24 日）はポリオデー** 本日、10 月 24 日は、ポリオワクチンを発明したジョナス・ソーク博士の誕生日にちなんだ「世界ポリオデー」。ポリオは感染し発症すると身体に「まひ」が残り、命を落すこともある恐ろしい感染症。発症してしまうと治療法がなく、今のところ、ワクチンを接種することが唯一の予防法だ。今回は、そんなポリオについてまとめてみた。■ポリオとは：ポリオ（急性灰白髄炎）は脊髄性小児麻痺とも呼ばれ、ポリオウィルスによって発生する疾病。名前のとおり子ども（特に 5 歳以下）がかかることが多く、麻痺などを起こすことのある病気。主に感染した人の便を介してうつり、手足の筋肉や呼吸する筋肉等に作用して麻痺を生じることがある。永続的な後遺症を残すことがあり、特に成人では亡くなる確率も高いものとなっている。■世界のポリオ：・発症国は、二か国のみ！　アフガニスタン、パキスタン。2015 年のポリオ確定症例数は、世界で 72 症、しかし、今年 8 月ナイジェリアにて野生株によるポリオ患者発生。■日本とポリオ：1980 年を最後に、日本では野生株による患者は見つかっていない。■ワクチンの種類：生ポリオワクチンと不活化ポリオワクチンがある。・生ポリオワクチン：経口接種、不活化ポリオワクチン：注射、・生ポリオワクチンには、病原性を弱めたウィルスが入っている。・麻しん（はしか）や風しん（三日ばしか）のワクチン、結核のＢＣＧが生ワクチン。・不活化ポリオワクチンは、不活化した（殺した）ウィルスからつくられている。・百日せきや日本脳炎のワクチンが不活化ワクチン。・2012 年 9 月 1 日から生ポリオワクチンの定期予防接種は中止、不活化ポリオワクチンの定期接種が導入。■接種時期と回数：生後 3 カ月を迎えたら 4 回接種。■ポリオ議連について：正式名称：ポリオ根絶を目指す議員連盟　■ポリオ議連の概略：2011 年 5 月に設立。ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団らと連携して、世界からポリオ根絶を目指す、保健医療分野の政策シンクタンクである一般社団法人 JIGH を事務局とする、日本の超党派の議員連盟。■GPEI(Global Polio Eradication Initiative)について：世界保健機関（WHO）、ロータリー、米国疾病対策センター（CDC）、ユニセフが中心となって、世界中の子どもにポリオの予防接種を提供し、世界からポリオを撲滅することを目的とした世界規模の活動組織。日本リザルツもポリオ根絶のために日々アドボカシー活動に励んでいる。
10 月 25 日	**UNRWA 事務局長、公明党代表に表敬訪問** 日本リザルツは国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）のキャンペーン事務局をしている。国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）のピエール・クレヘンビュール事務局長が、ついに訪日された。クレヘンビュール事務局長は、清田明宏 UNRWA 保健局長、マリア・モハメディ UNRWA シニアアドバイザー、服部修 UNRWA 上席渉外官とともに、公明党の山口那津男代表を表敬した。また、公明党難民政策プロジェクトチームに所属する谷合正明参議院議員、岡本三成衆議院議員、輿水恵一衆議院議員にも面会した。山口代表は、10 月 22 日付の朝日新聞に掲載されたクレヘンビュール事務局長の「私の視点」をご覧になったそうで、今後、公明党が中心となってパレスチナ難民の生活向上に協力していくという力強いお言葉をいただいた。パレスチナ難民の 65%が 25 歳以下。会談の中では、母子保健分野、教育分野の拡充に加え、若者の就労や雇用支援に重点を置いた協力が必要であることが挙げられていた。UNRWA で配布されている母子手帳は日本の知見が活かされおり、山口代表も興味深く見ていらっしゃった。
10 月 25 日	**頼もしい姿@ケニア** 現地責任者、大崎所長は「現地の人ともっと仲良くなりたい」と、今はケニアの言葉、スワヒリ語を勉強している。白須によると、すっかり、ケニアの CHV の方の人気者になっているとのこと。現地の人に愛され、なんと頼もしい姿なのか。現地の人も We love T シャツを着ている。大崎のアイデアだ。

10 月 26 日	**マルチ・ステークホルダー会合&クリニック譲渡式【準備編】** マルチ・ステークホルダー会合&クリニック譲渡式の前日、修了証や T シャツ、筆記具など当日必要になるものをすべて会場に運びこみ、準備を行った。キスムから、凧あげ大使の白石も応援に駆けつけてくれて、百人力だ。まず、クリニックに停めてあった車を移動してもらい、空いたスペースに 2 張のテントを設置した。業者に結核クリニックにプレートを、テントにリザルツのバナーを取り付けてもらった。外部の支援で建てられた建物には、必ずこのようなプレートが貼られる。新たに制作した日本リザルツのバナー。今回に限らず、今後も様々なイベントで活用していく。また、クリニックの掃除に来てくれた CHV の方々に、代表の白須が日本から運んできてくれた T シャツを配布した。みんな早速新品の T シャツを身にまとい、とても嬉しそうだ。こその後、マルチ・ステークホルダー会合の会場となる A.C.KChurch の大ホールに行き、会場のセッティングを行った。プロジェクターをどこに設置し、椅子や机をどのように並べたら発表が見やすくなるか、試行錯誤を繰り返した。急に大雨が降って予定を変更せざるを得なくなるなど、全てのセッティングが終わったころにはクタクタになっていたが、とりあえず準備が完了して一安心だ。
10 月 26 日	**UNRWA 事務局長、訪日最終日** 日本リザルツがキャンペーン事務局をしている国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）のピエール・クレヘンビュール事務局長が訪日されている。訪日最終日も、クレヘンビュール事務局長は精力的に活動を行い、今日向かったのは議員会館。衆議院議員河野太郎先生に面会した。パレスチナ難民問題に精通している河野先生とは教育支援について、具体的なプロジェクトの議論がなされた。続いて、参議院議員武見敬三先生。パレスチナ難民問題に熱心に取り組まれている。ガザの現状について、真剣に事務局長の話を聞き、質問されていた。日本滞在は今日が最後。でも、大忙しの事務局長はこの後、韓国に行き、世界中のひとりでも多くの人にパレスチナ難民問題に関心を持ってもらえるよう、働きかけていくそうだ。
10 月 27 日	**清田保健局長、安倍夫人を表敬訪問** 国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）のピエール・クレヘンビュール事務局長とともに訪日された、日本人医師清田明宏保健局長は日本に残り、精力的に活動を続けている。今日向かったのは首相公邸、安倍晋三首相の奥様、安倍昭恵夫人への表敬訪問。清田保健局長は、ICEJ の山本真希様とともに、パレスチナでの活動を報告した。清田保健局長は、ご自身が書かれた「ガザ 戦争しか知らないこどもたち」を紹介した。この絵本は、平成 27 年度厚生労働省の児童福祉文化賞の推薦作品に選ばれている。昭恵夫人は、UNRWA のプロジェクトを紹介するビデオを見て、目に涙を浮かべる場面も。清田保健局長からパレスチナの現状や子どもたちの様子について、熱心に聞かれていた。山本様はパレスチナの女性が作った刺繍を紹介していた。絵本と帯を持って、最後はみなさんで記念写真。少しでもパレスチナ難民のみなさんが希望を持った生活がおくれるよう、日本リザルツも UNRWA の活動を精一杯応援していく。

10 月 27 日	**結核クリニック譲渡式** 25 日のお昼からは、結核クリニックの改修工事が完了したことを記念して、クリニック譲渡式を開催した。前日は雨だったため少し不安だったが、幸い天気にも恵まれ、約 150 名の方々に参加いただいた。会場はすぐに満席になり、テントに入りきらず立ち見になってしまった方々も。We Love Japan の T シャツを着ているのは CHV の皆さん。セレモニーの余興として、結核に関する劇も行われた。男性に結核が発症して奥さんが狼狽えていると、村のヒーラーがやって来て、これは悪い魔術のせいだと叫ぶ。そこに CHV が登場し、これは医学で治る病気だからと、カンゲミ・ヘルスセンターに行くよう説得するというストーリーだ。先ほどのマルチ・ステークホルダー会合でアクションプランを発表してくれた CHV の Fredrick Oyugi 氏からは、会合で話し合われた内容について参加者に報告を行った。また、今回のプロジェクトが終了しても CHV としての活動は続けていきたい、と宣言していた。頼もしい。郡政委員(County Commissioner)Kangemi Chief の NamanKarithi 氏は、プロジェクトの実施場所としてカンゲミを選ばれたことに対して感謝の意を述べられた。Deputy County Commissioner(DCC)の Sam Ojwang 氏からは、CHV が活動する際の安全管理は郡政委員が責任をもって行っていくので安心してほしい、と力強い言葉をいただいた。ウェストランズ・サブカウンティ Medical Officer of Health の Florence Namisi 氏が、「このプロジェクトがカンゲミにもたらした、そしてこれからもたらされることになる RESULT（成果）は、RESULTS Japan によるものだとずっと語り継がれていくでしょう」と話されると、大きな拍手が沸き起った。ナイロビ・カウンティ Deputy County Director of Medical Services の Carol Ngunu 氏は、2010 年の憲法改正によって州がカウンティに再編されて以来、地方分権化のもとでヘルス・サービスの模索を続けているが、CHV なしには住民に対して十分な保健サービスの提供は実現しえないだろう、と CHV の活動の重要性について語られた。STOP TB Partnership Kenya の理事で、保健省国家結核・ハンセン病・肺疾患プログラム Head of Preventionand Health Promotion の Samuel Misoi 氏は、ケニアの結核問題の変遷について話された。1990 年代、ケニア全体で結核患者は 1 万人以下だが、HIV の感染拡大にともなって、2007 年には結核患者数が 11 万 6000 人と爆発的に増加したそうだ。この問題を解決していくために、国内で子ども用の結核治療薬（child-friendly medicine）を普及させるなど国家戦略を実施していくと同時に、日本を含む諸外国と積極的に協力していく必要があると熱く語られていた。最後のスピーカーは、在ケニア日本大使館の植澤利次大使。大使は先日ナイロビで開始された TICAD VI に触れ、アフリカにおける保健システム強化の重要性について話された。また、「この結核クリニックはナイロビの他の大きな病院に比べると小さいかもしれないが、カンゲミでサポートが必要な方々にとっては非常に大きな意味を持つことなるだろうと、今日ここに来て強く感じた」と話された。大使はスワヒリ語が非常に堪能で、スピーチの間、絶えず参加者から拍手が送られていた。全員のスピーチが終わると、結核トレーニング修了証の授与を行った。ナイロビ・カウンティの Carol 氏から 3 日間のトレーニングを受けた CHV に、植澤大使から全 12 日間の研修を実施した講師の方々に修了証が渡された。セレモニーも

	いよいよ大詰め。サブ・カウンティの Namisi 氏、カウンティの Carol 氏、保健省の Misoi 氏、日本リザルツの白須代表の 4 名でテープカットを行った。この瞬間は、やはり嬉しい。サプライズで、ケニア国旗と日本国旗が描かれたケーキも登場。サブ・カウンティからのプレゼントだ。最後に、全員で記念撮影を行い、クリニック譲渡式は幕を閉じた。
10 月 27 日	**マルチ・ステークホルダー会合** いよいよイベント当日。マルチ・ステークホルダー会合は朝 8 時と大変早い時間の開催となったが、保健省や市民社会、日本からは栄研化学など、30 名以上の方々が参加された。まずは、ウェストランズ・サブカウンティ TB Lung Coordinator の Peres Anyango 氏が、カンゲミにおける結核の現状について説明を行った。ケニア国内、そしてカンゲミにおいては、ここ数年で徐々に結核患者の数が減ってきており、結核ゼロを実現させるためには、今が最も大切な時期なのだと話された。次に、同じくウェストランズ・サブカウンティ Community Strategy Coordinator の Zafarani Njorog 氏から、ウェストランズの結核コミュニティに関する話がった。ウェストランズには 7 つのコミュニティ・ユニットがあり（うち 4 つはカンゲミのコミュニティ・ユニット）、住民全体の約 62%をカバーしている。ウェストランズで初めてコミュニティ・ユニットが活動を始めたのは 2009 年からで、資金不足により十分なトレーニングが実施できず、これまで十分な活動が行えていなかったらしい。私からは、日本リザルツの活動紹介、そして本プロジェクトの全体像について説明した。その後は、本会合開催の目的でもあるアクションプランの発表です。Kangemi Central、GichagiA、GichagiB、Kibagare それぞれのコミュニティ・ユニットから代表して 4 名のコミュニティ・ヘルス・ボランティア（CHV）の方々がプレゼンを行った。結核スクリーニング調査、戸別訪問、教会や小学校でのヘルス・トーク、DOT の実施、デフォルター・トレーシング、コンタクト・トレーシング等、月ごとのスケジュール表に詳細な予定がぎっしり書きこんであり、参加者も皆驚いていた。活動のモチベーションを保ち、これらの計画を実現させるためにどのようなサポートを行っていけばよいのかが、私たちにとってこれから大きな課題となる。CHV による発表の後は、市民社会を代表して、KANCO と STOP TB Partnership Kenya からスピーチが行われた。日本リザルツと同様、草の根で長年、結核問題に携わってきた両団体は、大切なパートナーだ。次に、プライベートセクターを代表し、栄研化学の渡辺さんが LAMP 法の説明をされた。ケニアにおける結核の診断機器としては GeneXpert が主流だが、LAMP 法は安価でメンテンナンスが簡単な上、迅速・正確な検査が可能だ。先日 WHO の推奨を受けたことから、今後ケニアでの普及にも大きな期待が寄せられている。最後に、ナイロビ・カウンティ TB coordinators の Martin Mulonzi 氏が、パブリック・セクターを代表してスピーチを行った。結核は予防可能、治療可能な病気であることを繰り返し強調したうえで、結核をなくしていくためには当事者や医療関係者だけでなく、国民一人ひとりが関心を持ち、ケニア全体で一丸となって取り組んでいかなければならないと力説されていた。
10 月 31 日	**白須代表、念願のキンカン初訪問** 10 月 28 日（金）、代表の白須とともに「キンカン」でおなじみの金冠堂さんを訪問した。白須は今回のケニア視察でもキンカンを持参した。朝日新聞の「声」欄に掲載されたスタッフ長坂の寄稿を、金冠堂の職員の方が読んでくださっていたのが事の始まり。日頃の感謝の気持ちを伝えに御挨拶に伺った。広報担当の横尾さんによると、実は、キンカンはもともとやけどの薬だったそうだ。第二次世界大戦時、医療物資が不足する中で、戦時中の焼夷弾でできたやけどの炎症を抑えるために開発されたものとのこと。日本リザルツが力を入れる感染症事業は、虫を媒介とする病気も多いのが現状で、キンカンパワーで、感染症を少しでも抑止したい。

10 月 31 日	**スナノミについてのアドボカシーペーパー** 白石さん in ケニアの報告によるスナノミについてのアドボカシーペーパーが出来上がった。スナノミ退治運動を、広げていきたい。
10 月 31 日	**おまもりブックを熊本へ！！第二弾-熊本市幼稚園行脚と新幹線フェア(10/28-10/30)-** 先週末の 10 月 28 日～30 日にかけて、「おまもりブックを熊本へ！！第二弾」と題して、熊本へ行ってきた。今回の目的は次の二つ。【1】熊本市内の約 30 カ所の幼稚園へ、おまもりブックを手渡しで配布、【2】熊本市南区の新幹線フェア（1 万人来場）にて、おまもりブックを配布。【1】では、園長先生や職員さんに、この冊子を作った経緯や子どもが楽しめる内容（塗り絵ができる、写真が貼れる、お絵かきもできる等）になっていること、世界各地で塗り絵大会を行っていることなどを説明してお渡しすることが目標。【2】は、ちょっとしたシンデレラストーリー（？）があり、冊子配布第一弾で冊子を受け取ったあるお子さんが、家でお母さんに冊子を自慢したところ、なんとお母様が区の職員さんで、この冊子を見て感動され、「今回のイベントで冊子を配布したい！」とリザルツに直接お電話をくださり実現した企画だ！3 日間での配布冊数は、なんと合計 7,000 冊！今回くまもと特派員を仰せつかった私、先に熊本に到着していた段ボールの数におののいた…。（日本財団さんのご厚意で、冊子を置かせてもらっていた。）幼稚園ごとに仕分けした冊子を持って、いざ出陣！ここからは、、言葉はいらない…撮影が OK だった幼稚園での手渡しの様子をずら～っと写真でお届けする！以上が 28 日、29 日の幼稚園配布の様子。そして次は、30 日に行われた新幹線フェスでの様子を。晴天に恵まれ、本当にすごい数の親子連れが訪れていた。行きの列車は早朝にも関わらず、満員御礼！しかも珍しい SL 列車にも遭遇し、いいスターだ！うれしい事に、テント丸ごと塗り絵コーナーを作ってくださり、日本リザルツの紹介までしていただいた。そして、ここでも果敢にポリオのポストカード 5,000 枚を配りまくる特派員…（10/24 のポリオの日の余波）もみくちゃにされながらも無事、皆様にお渡しすることができた。楽しそうに夢中になって塗り絵をしている子どもたちや親御さんたちの様子を見ていて、この活動を通じ、熊本の皆さんの元気に少しでも貢献できたかもしれない…とうれしい気持ちでいっぱいだ。冊子が欲しい！わが町用に作って欲しい!スポンサーになりたい！等、お問い合せ、いつでもお待ちしている。
10 月 31 日	**釜石生活⑫～熊出没に注意～** 釜石での相談室開設準備は、ゆっくりではあるが、一歩一歩進んでいる。釜石市保健福祉部子ども課の委託事業のため、打合せ等でよく訪ねていく子ども課は、のぞみ病院の建物の中にあり、裏の駐車場に車を停め、建物に入ろうとすると、目に飛び込んできた貼り紙が目に留まった。「北駐車場裏山にクマが出没しておりますので注意願います」。くまモンはかわいいけれど、野生の熊は怖い。釜石では明け方は 2℃まで下がる日もあり、熊たちも、冬眠直前で「もう少しお腹に入れておきたい」というような思いで、食べ物を探して歩いているのか…今年は人里に出没する熊が多いと、ニュースでも報じていた。11 月 1 日からは、いったん子ども課の朝礼に参加させていただき、その後徒歩 5 分程度の距離にある青葉ビルで、子どものことや子育ての相談を受ける。（徒歩で移動の際など、熊に気をつけて過ごすようにする。）

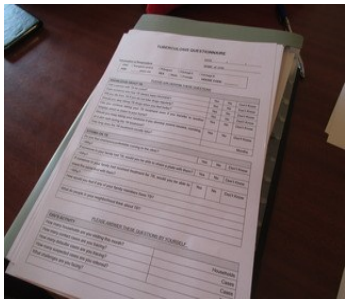
11 月	
11 月 1 日	**マラリア抑止に向けた会議** マラリアは、世界三大感染症の 1 つで、熱帯・亜熱帯地域で猛威を振るっている。日本リザルツで、開発途上国においてマラリア抑止をどのように行うかを検討する会議が開催された。会議には行政をはじめ、医療機器メーカーやマラリア対策に取り組む団体、有識者が集まり白熱した議論が 3 時間にわたり繰り広げられた。具体的には、日本の技術を開発途上国のプロジェクトに活かすことや製薬会社と連携して取り組みを進めるべきだなどの意見が出された。
11 月 1 日	**7,000 人以上の結核患者が治療を受けず周囲に感染の恐れ** ケニアでは 7,000 人以上の結核患者が治療を受けることなく生活を送っているため、死に至ったり周囲に感染させる恐れがある。保健省結核・ハンセン病・肺疾患プログラムが実施した調査によって、結核の報告が正しく行われていないために、治療を受けられていないケースが多く存在することが判明した。調査期間中、73 のサブ・カウンティで 47,000 人の結核患者が想定されていたが、実際に報告があったのは 39,100 人のみで、結核患者の 5 人に 1 人は報告されていないことになる。さらに、報告されていないケースの中には排菌している患者も含まれ、周囲に感染させる危険性が高いとみられている。
11 月 1 日	**栄養改善についての意見交換会** 昨日は、国際母子栄養改善議員連盟の事務局長を務めていらっしゃる衆議院議員あべ俊子先生、ニプロ株式会社、JICA 関係者との栄養改善に関する意見交換会に参加してまいりました。あべ先生は、TPP 特別委員会でお忙しい中、駆けつけてくださった。全世界の 5 歳未満で亡くなる子どものおよそ 4 割は、栄養不良が原因だと言われている。栄養改善のために私たちができること、日本が過去の経験を生かして貢献できること…これから実際の行動に移していかなければなりません。
11 月 1 日	**岩手県釜石市にらぽーる主催のこどもの相談室がオープン** 11 月 1 日、岩手県釜石市に「あおば通り子どもの相談室」がオープンした。電話相談と対面による相談があり、子どもや子育てに関する悩みや心配などの相談に対応する。相談は無料で、子どもの相談のことならどなたでも利用できる。また、子どもの養育に関する相談会や学習会、支援者の研修会、親子交流イベントなども開催を予定している。
11 月 3 日	**スマイル・アフリカ・プロジェクト、ランニングフェスティバル 2016** 日本リザルツがお世話になっているスマイル・アフリカ・プロジェクトさんが主催するランニングフェスティバルに参加してきた。きっかけは、日本リザルツでインターンをしていた凧揚げ大使白石が、ケニアでスナノミ症に苦しむ人に出会ったこと。スナノミ症はスナノミというダニが人の足に付くことで発症する病気。靴を履けば感染が防げるが、ケニアの貧困地域の人たちは靴を買うお金すらなく、はだしで生活しているのが現状だ。この状況を何とかしたいと、スマイル・アフリカ・プロジェクトさんは、日本のいらなくなったシューズを開発途上国に届ける事業をしている。今日のイベントでもたくさんのシューズが集まっていた。

11 月 5 日	**世界津波の日：「持続可能な開発目標（SDGs）」達成に向けて** 11 月 5 日は「世界津波の日」。昨年の第 70 回国連総会で制定された。世界津波の日の制定の由来となったのは、和歌山県広川町の「稲むらの火」という言い伝えから。安政南海地震が起きたとき、地元の豪商が稲わらに火を付けて避難路を示し、住民らを高台に避難させたため津波による被害を防ぐことができたというお話。2011 年の東日本大震災では津波によって、戦後最大の 2 万 3000 人の死者・行方不明者が出た。日本リザルツは、現在も被さい地で取り組みを行っている。
11 月 5 日	**エスンバ視察（スナノミ症多発地域）** エスンバはナイロビからバスとマタツ（マイクロバス）に揺られること 10 時間半、全世帯数 220 程度の小さな村。この方はお子さんと二人暮らし。お子さんはスナノミ症にかかっており、元気がない。お父さんは先週結核で兄弟を亡くし、自分も結核にかかっているのではないかと話されていた。慢性的に体調が悪く一日中椅子に座って過ごしている。より精密な検査を受けようにも、交通費と検査代を支払うことが出来ないため、結核の診断が下されたとしても、完治まで薬を買い続けるお金もなく、今は仕方なく薬局で買った高血圧用の薬だけを飲んでいるが、話されている間も非常に辛そうだった。エスンバには感染症が村に蔓延していることがすぐに分かりる。その理由は、結核は十分な栄養が摂取できず免疫力が落ちているから、コレラは清潔なトイレがないから、スナノミは靴を履いていないから、と全てが貧困に起因している。
11 月 9 日	**エスンバ視察（生活用水と汚水処理）** エスンバは上下水道インフラが未整備であり、彼らは水を得るために、雨水タンクを設置するか、近くの川まで水くみに行く。多くの住民は雨水タンクを買うことができない。エスンバの住民の多くは農民。トイレ問題の解決は直接コレラなどの感染予防になる。一方で糞尿の肥料化は、農業の活性化→栄養改善・収入増にも繋がる。エスンバでのトイレ問題解決へ向け、全力で走っている。
11 月 13 日	**Gavi に関するアドボカシーペーパー** 日本リザルツは Gavi ワクチンアライアンスのキャンペーン事務局をしている。本日から、Gavi ワクチンアライアンスに関するアドボカシーペーパーを紹介をする新連を始める。芸術の秋に相応しい至極の作品の数々。「黄熱病パンデミック」のアドボカシーペーパーなどは、黄熱病は開発途上国で依然として深刻な問題を提起する 1 枚である。感染症の恐ろしさを伝えるとともに、ワクチン接種の必要性を訴える 1 枚となっている。最終的な目標は、世界中の全ての子ども、一人ももらさず、公平に基礎的なワクチン接種が継続的にできる状態にすることである。そのために、適切かつ品質の高いワクチンを手頃で持続可能な価格で供給することを目指している。日本が世界の保健のリーダーシップを執っていくためにも、予防医学の神髄であるワクチン接種の世界的機関、Gavi へのさらなる協力をお願いしたい。
11 月 18 日	**「第五回国際母子栄養改善議員連盟」に出席** 本日、衆議院第一議員会館の国際会議室にて、『第五回国際母子栄養改善議員連盟』が開催された。、国会議員の先生や省庁、国際機関、企業、NGO 等、栄養改善に関心のある方々が 100 名以上（議員関係者約 30 名）参加し、今回も盛り上がった。会場は、世界の栄養改善という議題にふさわしい“国際会議室”でした。国際母子栄養改善議員連盟会長　山東昭子参議院議員からのご挨拶にはじまり、議連副会長の逢沢一郎衆議院議員より、8 月の議連で承認された「国際栄養課題に関する国家戦略（案）」を、柴山昌彦内閣総理大臣補佐官へ提出された。司会

	を務められたのは、本議連の事務局次長今井絵理子参議院議員だ。栄養のチャンピオンとして活躍されている。外務省より国際協力局国際保健政策室長の日下英司氏より TICAD VI と G7 伊勢・志摩サミットのフォローアップ会合のご報告があった。今年、日本は G7 サミットの議長国、TICAD VI の主催国と保健・栄養分野におけるイベントが盛りだくさんだった。続いて、国際協力機構（JICA）上級審議役 榎本雅仁氏より IFNA（Initiative for Food and Nutrition Security in Africa）の進捗についてご説明があった。重点対象国候補の 10 か国（ブルキナファソ、エチオピア、ガーナ、ケニア、マダガスカル、マラウィ、モザンビーク、ナイジェリア、セネガル、スーダン）が決まり、ベースライン調査の実施を予定しているそうだ。また、農林水産省より大臣官房審議官兼食料産業局 丸山雅章氏からは、TICAD VI における農林水産省主催のサイドイベントと官民連携の「栄養改善事業推進プラットフォーム」について、ご報告があった。栄養改善事業推進プラットフォームが発足され、職場の栄養食に関する第 1 弾のプロジェクトが始動している。財務省国際局開発政策課長 三村淳氏からは、SUN（Scaling Up Nutrition）信託基金への 2 千万ドル拠出について進捗のご報告があった。日本は、SUN 信託基金のシングルドナーだ。アフリカ、アジア、中南米などの国や地域で技術支援を行っている。2016 年は、栄養不良対策に関する政策提言やデータ収集等の活動を実施するフェーズ 2 である。栄養改善の動きが加速すると良いと思う。栄養改善に関する企業の事例として、ニプロ株式会社からも、栄養状態を把握できる検査薬についてのご紹介があった。医療設備が充実していない現場でも、すぐに診断できるそうです。NGO からの報告として、日本リザルツとセーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、ワールド・ビジョン・ジャパンが発表した。栄養問題に実際に取り組むためには、資金が必要だ。日本が栄養分野でリーダーシップを発揮し、国際的なプレッジ会合が来年開かれることへの期待を発表した。
11 月 19 日	**カンゲミで CHV と打ち合わせ&住民の戸別訪問** カンゲミ・ヘルスセンターにてコミュニティ・ヘルス・ボランティア(CHV)の方々と打合せを行う。2 人の CHV に同行して、住民の戸別訪問を行った。今日の戸別訪問は偶然にも、典型的な治療中断者調査（DefaulterTracing）のケースとなったが、このようなケースはカンゲミ全体、ケニア全体に多く存在する。投薬を途中でやめることの危険性を始め、結核に関する正しい知識を一人でも多くの方々に普及させるため、日本リザルツはここカンゲミで、アドボカシー活動を推進している。

11 月 20 日	**釜石生活⑰～NHK ローカルニュース効果～** 11 月 17 日の「こども相談室」の開所式の模様が、その日の夕方の NHK ローカルニュースで報じられたが、翌日にはその効果があり、来所が一人と電話が 2 件あった。来所された方は、養護教諭をされていた方で、「保健室でいろいろなことがあり、もっと勉強しないと、子どもを守れない」という気持ちから退職され、今は出られるだけ研修やシンポジウムなどに出席し、子どもの支援者としてのスキルを高めている、という志の高い方だった。1 時間くらい、いろいろなお話を伺えて勉強になりました。「子どもの安全な居場所になってほしい。そういう場所が釜石にもできてうれしい」と話された。
11 月 22 日	**CHV の活動** 今回は結核患者がどのように治療を受けるのか、一連の流れについて紹介する。前回訪れた結核患者の家を CHV と再訪問した。この日、男性は病院に行くことになっていたが、「今日は寒いから行きたくない」と乗り気ではない様子。しかし、先延ばしをするといつになってしまうか分からず、このままだと家族に感染してしまう可能性も高いことから、家族の協力も借りながら何とか説得した。CHV の話によると、患者さんが病院に行きたがらない気持ちの根底には、自身が持つ偏見が内面化し、周囲からの目が気になってしまうといったセルフ・スティグマ(内なる偏見)も少なからず存在する。ここ数週間ずっと家にこもっていたため、男性の足腰はすっかり弱くなっていた。CHV と一緒に両脇を支えながら病院に向かった。CHV から結核クリニックの担当者に患者さんの状況を説明し、必要な情報を共有する。その後医師に引継ぎ、症状を確認。ドクターが患者さんから話を聞きながら、新しい患者診察カードや必要書類に記入していった。このように主な CHV の活動は、カンゲミで生活する膨大な数の住民のお宅を戸別訪問し、結核患者を見つけ出し、治療が完了するまでサポートを行うという、非常に広範囲、長期に渡るものである。
11 月 24 日	**Future 2030 in Japan＝SDGs から見る日本と世界の未来＝** 持続可能な開発目標（SDGs）は、日本リザルツが力を入れるプロジェクトの 1 つである。11 月 24 日、「Future 2030 in Japan＝SDGs から見る日本と世界の未来＝」が開かれ、SDGs 推進に向けて闊達な議論が行われた。今回のイベントは、政府・民間・市民団体などがセクターの壁を越えて一堂に会することで、SDGs 推進のためのビジョンを共有し、連携の促進を図ることが目的である。ゲストも豪華で、公明党 SDGs 推進委員会事務局長、岡本三成衆議院議員がいらしゃっていた。元ゴールドマンサックスの職員というビジネス経験に基づいたお話しをされた。和泉洋人内閣総理大臣補佐官は、代表の白須の話も交え、場を盛り上げていらっしゃった。相星孝一外務省地球規模課題審議官は SDGs の流れを詳しく説明して下さった。好きな TV 番組は「ブラタモリ」とのこと。民進党幹事長代理、福山哲郎参議院議員は、わかりやすい写真を使って、気候変動について説明して下さった。衆議院政治倫理審査会長、逢沢一郎衆議院議員は、日本・アフリカ連合(AU)友好議員連盟会長としてのご経験を紹介して下さった。

11 月 25 日	**栄養アドボカシー会議** 日本リザルツのオフィスにて、国際栄養課題に取り組むセーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、ワールド・ビジョン・ジャパンとアドボカシー定例会議を行った。今回は、アジア人口・開発協会の楠本さんにもお越しいただき、人口問題と栄養やユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）などの関連性等について、有益な情報を共有した。「世界栄養報告 2016（GlobalNutritionReport2016）」の日本語版も着々と進んでいるようだ。先日の国際母子栄養改善議員連盟には 100 名以上の方々が参加されていたように、栄養問題に対してますます関心が高まっている。多様な関係者の連携が強化されるよう、我々も日々活動していきたいと思う。
11 月 25 日	**ストップ結核ジャパン・アクションプランフォローアップ会合** 結核の抑止は日本リザルツが力を入れる事業の 1 つである。ストップ結核パートナーシップ日本（Stop TB Partnership Japan,STBJ）は、世界の結核を制圧するために、世界保健機関（WHO）のストップ結核パートナーシップ（世界 26 か国）の日本版として、2007 年 11 月 19 日に設立された。日本リザルツ代表の白須が STBJ の代表理事を務めるなど、日本リザルツも設立当初から協力している。結核の抑止を促進させるために 2008 年に立ち上がったのがストップ結核ジャパンアクションプラン。外務省、厚生労働省、結核予防会、JICA そして NPO である STBJ の官民共同で策定された革新的なアクションプランで、年間約 180 万人にも及ぶ世界の結核で亡くなる人々の 10%を救済することなどが盛り込まれている。このアクションプランに関して、進捗状況を共有するフォローアップ会合が開かれ、外務省、厚生労働省、結核予防会、JICA そして STBJ が参加し、闊達な議論が繰り広げられた。会議では、第 6 回アフリカ開発会議（TICADVI)や G7 伊勢志摩サミットにおける保健分野の取り組みが共有された。また、インドネシアやアフガニスタンなどで日本が実施している結核プロジェクトについても紹介された。
11 月 26 日	**世界津波サミット開催！** 30 か国の高校生が参加して津波への防さい意識について考える「世界津波サミット」が、11 月 25 日～26 日、高知県で開催された。「世界津波サミット」は、国連が 11 月 5 日を「世界津波の日」と定めたことを受けて、地域の防さいを担う若いリーダーを育てようと初めて開催された。サミットには、東日本大震災の被さい地のほか、インドネシアやチリといった被害を経験した国など世界 30 か国から高校生が参加し、津波防さいについて意見を交わした。また、高校生らは避難訓練にも臨み、地震発生後、高い所に速やかに逃げる大切さなどを学んでいた。実は、この「世界津波の日」の提唱者は日本。自民党の二階俊博幹事長。二階幹事長の地元である和歌山では、安政南海地震の際に、実業家が稲わらに火を付け、住民を高台に避難させて大津波から命を救った「稲むらの火」という逸話が残っているため、防さいへの活動に関心が高い。防さいは、国連が設定した「持続可能な開発目標（SDGs）」においても最重要視されている項目。二階幹事長は、防さい同様、SDGs にも熱心に取り組まれている。
11 月 28 日	**Q&AAA（トリプルエー）+プロジェクト 6 割到達！** 先週から始まった Q&AAA（トリプルエー）+プロジェクトのクラウドファンディング。開始 5 日目で 6 割到達したが、ケニアに靴を届けるにはまだ資金が足りていない。スナノミ症は運動靴を履けば防げる病気である。1 人でも多くのケニアの子どもたちに靴を届けるためにはみなさんの応援が欠かせない。

12 月	
12 月 2 日	**Gavi ワクチンアライアンス韓国との会合** 日本リザルツのオフィスに、Gavi ワクチンアライアンス韓国の JungSookPARK 氏ご一行がいらした。Gavi のアドボカシー活動のあり方、日本・韓国の ODA についての話題で盛り上がった。JungSookPARK 氏(写真中央、向かって右)はお綺麗な方だなと見とれていたところ、実は元キャスター。今後もこうして志を同じくする国内外の仲間の皆さんと、有益な情報交換をしながらワクチンのアドボカシー活動を行っていきたい。
12 月 3 日	**CHV 必須アイテムの配布**  A.C.K ホールにて、カンゲミの 2 つのコミュニティ・ユニット(Kangemi Central と Gichagi A)で活動されているコミュニティ・ヘルス・ボランティア（CHV）の方々とお会いした。目的は、結核に関する世帯調査の協力依頼と、CHV が活動を行うにあたり必要な物資の配布である。本事業の目的の一つは、カンゲミに住む方々がどれくらい結核に関する誤った知識や偏見を持っているかを、統計的に把握することにある。CHV が戸別訪問をする際、通常の健康調査だけでなく、私たちが作成したアンケート用紙を使って、意識調査も実施するようお願いした。質問の内容は、「結核患者は必ず HIV にも感染しているか」という簡単なものから「治療中にひどい吐き気や発疹が出た場合でも治療は続けるべきか」「完治まで一般的にどのくらいの期間を要するか」といった、知らないとなかなか答えられないものも。また、「家族の中に結核患者がいたらどう感じるか」「結核クリニックに通うことを不快に感じるか」といった結核への後ろめたさや偏見に関する質問も用意した。事業終了時にも同じ調査を行い、本事業を通して、住民の方々の意識にどのような変化が生まれるか、比較分析を行う予定である。その後、CHV の皆さんに、以前実施したトレーニングの後にどのような活動を行ったかレポートを提出していただいた。やはり人によって書き方や分量にバラつきがあるため、研修の講師を務めたお二人から、厳しいチェックが入った。一人ひとり、じっくり細やかな指導が施され、再提出となってしまった CHV も。レポートの提出が無事終わった方には、CHV が活動していく上での必須アイテムである記録用のノートとペン、名札、そして 1 か月分の消毒液を渡した。後日、カンゲミのぬかるんだ道でも自由に動き回れるよう長靴の配布も予定している。
12 月 4 日	**釜石生活⑳～「広報かまいし」～** 「青葉通りこどもの相談室」を開設し、その存在を知っていただくために、市内の幼稚園、小学校、中学校に、それぞれの生徒数のチラシをお届けし終えた。どの学校でも、市役所の子ども課の委託事業であることを伝えると、大変快く「早速今日にでも配布しますね」などと言っていただいた。やはり市役所の看板は信用度が高い。今度は市役所の広報誌にも掲載いただけることになり、原稿作成中である。釜石市内では全戸に配布されるが、市民でないと見るチャンスもないので、こちらにアップする。これからどんどん勉強会等を開催しく予定であり、日時、場所等決まり次第アップしていく。遠方からのご参加も大歓迎です。

12 月 5 日	**サンキューセミナーしろくまカフェ編 Vol.1** 本日 12 月 5 日は、南アフリカの人種隔離政策・アパルトヘイトの撤廃運動を主導し、同国初の黒人大統領となったネルソン・マンデラ氏の命日。彼は、Gavi ワクチンアライアンスの初代理事長でもありました。彼の遺志を継いだGaviのチャンピオンは、本ブログで何度も登場しているイボンヌ・チャカチャカさんです。そんな何とも縁の深い日に、日本リザルツでは「サンキューセミナーしろくまカフェ編」を開催しました。平日のお昼時ですが、およそ 70 名の方々にお集まりいただいた。！今回のテーマは、"感染症の脅威と予防の普及に向けて"。スマイル・アフリカ・プロジェクト事務局長　株式会社木楽舎大石美樹様はアフリカへ使用しなくなったシューズを届ける活動「スマイル・アフリカ・プロジェクト」について、ご紹介いあだいた。厚生労働省健康局結核感染症課長浅沼一成様からは特に若い女性の間で増加している梅毒について、厚労省の取組を例にご説明いただいた。妊娠している女性が感染すると、死産あるいは、胎児に重い障害をもたらす恐ろしい性感染症です。性感染症について、「疾病症対策の一番の敵は無関心だ」との言葉が印象的だった。最後に、本セミナーのメイン講師、しろくま先生こと日本リザルツ理事長浅野茂隆先生より、科学の本質や生命倫理についての大変興味深いお話を伺った。「サンキューセミナーしろくまカフェ編」は、本日を第１回目の開催とし、今後も定期的に開催する予定である。
12 月 5 日	**第 14 回ポリオアドボカシー・ミーティング(12/5)** 国際ロータリー日本事務局にて、第 14 回ポリオアドボカシー・ミーティングが開催された。参加者メンバーはJIGH、UNICEF 東京事務所、国際ロータリー日本事務局、日本リザルツ。日本リザルツからは、10 月に開催された世界ポリオデーに関連するイベントについて報告した。次回開催は 3 月の予定。
12 月 5 日	**Q&AAA(トリプルエー）+プロジェクトのクラウドファンディング 9 割達成！** Q&AAA（トリプルエー）+プロジェクトのクラウドファンディング。多くのみなさまのお陰で遂に 9 割を達成した。でも、エスンバにはまだまだスナノミ症で苦しんでいる人がいる。１人でも多くの方にご協力をお願いしたい。

12 月 7 日	**釜石生活 21～民協～** 今週は火曜日から金曜日まで「民生委員児童委員協議会」に参加し、「青葉通りこどもの相談室」についてお話しする活動をした。「民協で相談室の説明をさせていただけることになりました」と、釜石市役所の子ども課からメールをいただいたときは、「民協」がわらず、すぐにインターネット検索をすると、たくさんの情報が得られてかえって驚いた。全国民生委員児童委員連合会 HP によると、下記のような説明がなされている。民生委員は、民生委員法に基づき、厚生労働大臣から委嘱された非常勤の地方公務員です。給与の支給はなく（無報酬）、ボランティアとして活動しています（任期は 3 年、再任可）。また、民生委員は児童福祉法に定める児童委員を兼ねることとされています。民生委員・児童委員は、人格識見高く、広く地域の実情に通じ、社会福祉の増進に熱意のある人など、民生委員法に定める要件を満たす人が委嘱されます。市町村ごとに設置される民生委員推薦会による選考等、公正な手続きを経て推薦、委嘱がなされている。民生委員・児童委員制度は全国統一の制度であり、すべての市町村において、一定の基準に従いその定数（人数）が定められ、全国で約 23 万人が活動している。民生委員・児童委員は、自らも地域住民の一員として、それぞれが担当する区域において、住民の生活上のさまざまな相談に応じ、行政をはじめ適切な支援やサービスへの「つなぎ役」としての役割を果たすとともに、高齢者や障がい者世帯の見守りや安否確認などにも重要な役割を果たしている。釜石市は 8 エリアに分けられ、1 エリアにつき、20～30 名の民生委員児童委員が公民館などに集まる。火水木金の午前・午後に 1 エリアずつのスケジュール組みで 8 エリア全部に参加できる計算になる。地域福祉課の方々と、お互いに 8 回同じ説明をするのを聞くことになる。私は今回のみだが、地域福祉課の方は毎月この活動を笑顔でされているので素晴らしいなぁ～と感心する。各エリアで質問には、ひとり親家庭でいつも気になるけど、訪ねて行ってもドアを開けてくれなくて実情が把握できない、心配だが母娘の家庭を男性である自分が訪ねて行きにくいなどがあった。小学校の公開授業を見に行って、子どもの様子を確認したという委員もおられた。上記の HP から引用した部分に「高齢者や障がい者世帯の見守りや安否確認などにも重要な役割を果たしています」とあるが、「ひとり親家庭」の抱える様々な問題とその家庭環境で育つ子どもの見守りもされている。
12 月 7 日	**女性の健康を考えるシンポジウム(東京大学本郷キャンパス)** 東京大学で開催された「女性の健康を考えるシンポジウム」に参加した。日本の社会全体で、女性の活躍を推進する機運が高まっている中、女性が輝く社会作りには女性が健康であることが欠かせない。本シンポジウムでは、第一線で活躍されている専門家の先生方が、経済成長における女性の健康の重要性、女性の健康に関する課題や健康促進のベストプラクティスについて議論が行われた。ルワンダの虐殺を生き延びた永遠瑠マリールイズさん(NPO 法人「ルワンダの教育を考える会」理事長)のお話が印象的であった。「皆さんとこうして出会えるだけで幸せ」「出会いから全てが始まる」「学んだことで助けられた」「生まれてくるすべての命には意味がある」など、一言一言、とても重みがあり、会場のあちこちからすすり泣きが聞こえた。
12 月 7 日	**「Gavi すごろく」とサイコロキャラメルをお届けするため、議員会館＆役所巡り** 日本リザルツ特製の「Gavi すごろく」を国会議員の皆様、外務省、厚労省、財務省の皆様、そして！官邸に、50 部ほどお届けした。このすごろくは、Gavi ワクチンアライアンスの設立から今日までの軌跡、日本との関わりや日本政府の貢献が一目でわかる、遊んで学べるすごろくになっている。とてもわかりやすい歴史解説アドボカシーペーパーになっていると、評判のため、ぜひ一度挑戦してほしい。

12 月 7 日	**第 30 回ミレニアム・プロミス・ジャパン研究会** ミレニアム・プロミス・ジャパンさん主催の第 30 回ミレニアム・プロミス・ジャパン研究会に参加した。今回は、東京大学大学院総合文化研究科・遠藤貢（えんどうみつぐ）教授を講師に迎えての講義であった。テーマは、「機能する崩壊国家としてのソマリア」。政府、国家とはそもそも何なのか、根本的なところから丁寧に解説してくださり、とても勉強になった。遠藤教授が昨年に出版された「崩壊国家と国際安全保障--ソマリアにみる新たな国家像の誕生（有斐閣）」におけるいくつかの重要なポイントを解説してくださった。質疑応答の時間には、多くの参加者が積極的に発言されていた。現在、ソマリアでは、上院・下院の選挙（Selection）が実施されている。崩壊国家（＝政府を喪失した国家）と定義されるソマリアが、今後どのような道を歩むのか、見守りたい。
12 月 8 日	**日本リザルツ新聞最新号** たくさんの最新情報がてんこ盛りに詰まったリザルツ新聞や Gavi すごろくを半分に折り、Gavi、栄研化学の LAMP 法、UNRWA のクリアファイルに挨拶文を入れて、国会議員の皆さんにお届した。前日はリザルツメンバー総出で準備をした。写真はその時の様子である。
12 月 9 日	**栄養カフェ開催！** 本日は、リザルツのオフィスにて、ケニアンティーを味わいながら、国際栄養課題に関する意見交換会を実施した。「栄養改善に関して、これまで日本としてどんな取組を展開してきたか」、「栄養への資金拠出はどんなスキームを使っているのか」、「2020 年に向けて、どんな国際的な機会が予定されているのか」などについて、様々な議論が繰り広げられた。途上国の栄養不良から、肥満や貧血など、世界の広範囲で課題となっている栄養改善。取組を実施していくうえでも、様々な機関が連携し合いながら進めることが大切だ。
12 月 9 日	**[報告]国際協力調査会・経協インフラ総合戦略調査特別委員会合同会議** 国際協力調査会・経協インフラ総合戦略特別調査会特別委員会の合同会議が自民党本部で開かれた。外務省や内閣官房など省庁を始め、国際機関や民間企業、NGO も出席し、「持続可能な開発目標（SDGs）」達成に向けた意見交換を行った。会議では SDGs を学校教育に取り入れられないか？などのアイデアが出された。日本リザルツは「思いやりのある人になりたい」を SDGs のキャッチフレーズにすることを提案している。
12 月 12 日	**つなみ募金** 毎月恒例のつなみ募金を経済産業省前において、白須代表と５名のリザルツスタッフで行った。今月から事務局長の久保内がつなみ募金デビュー。久保内事務局長はつなみ募金デビュー。リザルツ新聞最新号、Q&AAA（トリプルエー）＋プロジェクトのチラシ、らぽーる事業のチラシなどを通行中の皆さまに受け取っていただいた。Q&AAA（トリプルエー）＋プロジェクトでは、皆さまからきれいに洗ったランニングシューズを集めて、Q ちゃんこと高橋尚子さんの「スマイル・アフリカ・プロジェクト」を通じてケニアへ寄贈される。

12 月 14 日	**栄養改善事業推進プラットフォーム第 2 回運営委員会** 栄養改善事業推進プラットフォーム第２回運営委員会に参加した。今回は、バイオバーシティ・インターナショナル（国際植物遺伝資源研究所）唯一の日本人スタッフの森元泰行さんが、ケニアでの栄養改善プロジェクトについて発表してくださった。ケニアには 850 種の食用植物が存在しており、その内約 400 種は果樹類、210 種は葉物野菜で、葉物野菜の 9 割は市場に流通していない。低栄養と栄養過多、両方の問題を抱えるケニアにとって、地元で穫れる食物を利用することは非常に有効である。バイオバーシティ・インターナショナルでは、地域の環境に適応した食物や食文化を踏まえた栄養改善を推進するために、活動されている。また、会議の後半では、本プラットフォームの 9 月発足以降の進捗として、「職場の栄養食」プロジェクト・インドネシア現地調査の報告があった。今回の視察では、インドネシアの国家開発計画省（BAPPENAS）、保健省、労働省、日系企業や現地の工場などを訪問し、ヒアリングを行った。調査の詳細については、公式ホームページにも公表される予定だ。
12 月 15 日	**Q&AAA+プロジェクト、靴続々と届く！** 日本リザルツが始めた Q&AAA（トリプルエー）＋プロジェクトのクラウドファンディングは、残すところあと 4 日となった。今日は白須代表の弟さんが靴を寄贈に来てくださった。Q&AAA+プロジェクトでは、明日、12 月 16 日に国会議員の先生、事務所の方々から、靴を回収する予定です。集めた靴は、代表の白須とスタッフが 12 月 18 日から 22 日までケニアに行き、直接届けてくる。
12 月 20 日	**らぽ～る情報共有ランチ会を開催** 本日、離婚と親子の相談室「らぽ～る」情報共有ランチ会を開催した。参加者は弁護士、関連団体の方、夫婦円満であるものの情報を仕入れておきたい方、裁判所の方など、幅広くご参加いただいた。内容は、最新の ADR の事例、公正証書について、来年度らぽ～るが行う「子どもファースト離婚」のための講習会についてなど、盛りだくさんだった。どなたでもご参加できるので、次回もぜひご参加いただきたい。
12 月 20 日	**[視察報告]いざ、ケニアへ！** 12 月 18 日、衆議院議員あべ俊子先生と参議院議員秋野公造先生ともにケニア・エスンバとナイロビの医療体制を視察するため、日本リザルツの代表白須と長坂は、大量の荷物を抱えて日本を出発した。目的はスナノミ症患者の視察と、ケニアの感染症対策、ワクチン接種、栄養改善に向けた具体的な施策を練ることである。19 日、キスム国際空港に到着。休む暇もなく、青年海外協力隊職員の方、現地の NGO 代表エドワード、元日本リザルツインターンの白石と意見交換会を行った。協力隊の方もスナノミ症対策について、関心を寄せていた。 続いて、カカメガにある公立病院 Kakamega county general hospital を訪問した。現在ストライキ中のため、診療時間を縮めている。あべ先生は看護師、秋野先生は医師である。ストライキで満足な医療が提供できていない現状に心を痛めておられた。

	私立の Nala community hospital は患者さんで溢れ返っていた。ここでも医師、看護師、患者さんとの意見交換を行った。あべ先生は海外留学経験が豊富で、流暢な英語で次々と質問をされる姿が印象的だった。この日は、出産間近の女性に遭遇。痛みに耐えかねる女性に、秋野先生がラマーズ法を伝授する一面も。プロフェッショナル！最後はみんなで記念撮影をした。ケニア視察は明日も続く。
12 月 21 日	**[速報]ケニア視察珍道中！** 衆議院議員あべ俊子先生、参議院議員秋野公造先生と共に、ケニアの医療体制の現状を把握し、日本が行う医療支援の改善を目指している。目的はスナノミ症を含めた感染症の改善。今日は、遂に旅のメインイベントであるエスンバ視察。看護師のあべ先生と、医師の秋野先生、保健分野のプロフェッショナル。患者さんの治療の様子を見ます。実際に見るとすごいですね…先生方もスナノミ症抑止のために真剣である。特に気になったのがエスンバに住む 18 歳の女の子。傷が化膿したことで、歩けなくなってしまった。また、医療制度の関係で、医療費が上がり、満足な治療を受けられていないのが現状である。診療費を払えない、困っている人を救うためにどうすればいいのか…誰一人取り残さない社会を目指しているはずなのに、何も行き届いていない、見過されている地域が現実にある。きっと第二、第三のエスンバがあるはずだ。
12 月 22 日	**[速報]ナイロビ視察** 本日は、参議院議員秋野公造先生と在ケニア日本大使館の小林一等書記官、日本リザルツ代表白須、長坂、大崎でナイロビ市内の様々な施設を訪問した。まずは保健省にて、在ケニア日本大使館の植澤利次特命全権大使と共に、クレオパ・マイル保健大臣と面会。TICADVI で採択されたナイロビ宣言を守るためにも、日本の技術支援等を通じて協働し、ケニアの感染症問題に立ち向かっていくことの重要性について話し合われた。その後は日本リザルツが実施している結核アドボカシー事業を見学するため、カンゲミ・スラムに移動。左から小林書記官、秋野先生、STOPTBPartnershipKenya のエヴリン、KANCO のピーターと集まったコミュニティ・ヘルス・ボランティア（CHV）の方々と活発な意見交換が行われた。やはり全員で WE Love JAPAN の T シャツを着て集まると圧巻であった。 日本政府を代表して、秋野先生と小林書記官から普段の保健活動で使用するゴム長靴を CHV の方々に渡していただいた。結核クリニックではちょうど診療中の結核患者さんとも話した。クリニックを後にし、数名の CHV にそれぞれが担当している世帯の結核患者のお家を案内していただいた。こちらの女性の場合、咳はありませんでしたが寝汗がひどく、結核発症が判明したそうだ。この方は以前私も訪問した結核患者さんです。自己判断で投薬をやめたせいで結核が再発し、一か月前は寝たきりの状態だったが、CHV の働きかけで治療を再開することが出来、今日は見違えるように元気になっていた。ただし、油断は禁物。秋野先生も「体調が良くなっても絶対に完治までは薬を飲み続けるように」と何度もお話しされていた。その後は

	JICA ケニア事務所に移動し、佐野所長にお会いした。昨日のエスンバ訪問に関する情報共有を行い、スナノミ症をなくしていくために日本に出来ることは何か、今後の展望について話し合った。昼食をはさんで、午後からは長崎大学による NUITM-KEMRI(Nagasaki University Institute of Tropical Medicine-Kenya Medical Research Institute Project)プロジェクトの視察。長崎大学はケニア中央医学研究所（KEMRI）の敷地の一角に事務所を構え、寄生虫感染症、マラリア、コレラなどの下痢症、蚊媒介性ウィルス性出血熱などの研究を行っている。主人公の医師が働く研究所として、映画「風に立つライオン」の舞台にもなった。熱帯医学研究所ケニアプロジェクト拠点長の一瀬教授にケニアで行っている活動についてご説明いただいた後は、施設内の様々な研究室を案内していただいた。見学の途中で、スナノミの死骸を顕微鏡で見させてもらうことができた。たくさんの卵がはっきりと確認できた。最後に職員の方々と一緒に記念撮影をした。今日はケニア保健省、在ケニア日本大使館、JICA、感染症研究機関と各分野のまさに第一線で活躍されている方々からお話を聞くことができ、中身の濃い一日となった。
12 月 22 日	**第 130 回 GII/IDI に関する外務省/NGO 懇談会に出席** 外務省にて開催された第 130 回 GII/IDI に関する外務省/NGO 懇談会に参加した。議題は、JICA の IFNA の進捗、国際女性会議 WAW!（WAW!2016）や UHC2030 といった国際会議の報告、また持続可能な開発目標（SDGs）実施指針・具体的施策についての報告等、盛りだくさんだった。リザルツからは 11 月 18 日に開催された「第五回国際母子栄養改善議員連盟」の報告をさせていただいた。WAW!については、外務省女性参画推進室の伊藤さんが報告してくださった。WAW!は、安倍総理のイニシアティブで 2014 年に始まった女性の活躍促進のための取り組みについて議論する国際会議。3 回目を迎えた今年は、「WAW!ForAction」をテーマに、26 カ国・11 国際機関から 94 名が参加された。特に今年は、G7 伊勢志摩サミットや第六回アフリカ開発会議等、日本が中心となって開かれた会議において、国際保健分野に関する議題が上がったが、WAW!のハイレベル・ラウンドテーブルにおいても、初めて「女性の健康」をテーマとするセッションが開かれた。SDGs の実施指針・具体的施策については、外務省地球規模課題総括課の山口さんがお話してくださった。ちょうど、本日、安倍総理を本部長とする「持続可能な開発目標（SDGs）推進本部会合（第 2 回）」が開かれ、実施指針及び具体的施策の案が説明された。本実施指針の策定においては、パブリックコメントの公募があったが、およそ 3 週間で 190 以上ものコメントが寄せられ、予想以上の数に驚いたとおっしゃっていた。SDGs には、「誰一人取り残さない」とのキーメッセージが盛り込まれている。具体的施策の実施にあたっても、その姿勢を忘れずに取り組んでいってほしい。
12 月 22 日	**[ケニア視察]Q&AAA+プロジジェクトのシューズ贈呈式！** 12 月 18 日から 22 日、日本リザルツの代表白須と長坂は衆議院議員あべ俊子先生、参議院議員秋野公造先生とともに、ケニアへの視察に行ってきた。20 日は、Q&AAA（トリプルエー）+プロジェクトの中で、国会議員の先生方から集めた運動靴を、エスンバの子どもたちに寄贈した。あべ先生、秋野先生が、子どもたちにシューズを履かせた。スナノミ抑止キャンペーンを実施している元インターンの白石や現地ＮＧＯの代表エドワードによると、折角、治療を行っても、靴がないことで、スナノミ症を再発したり、患部が不衛生になり、別の感染症を引き起こしたりケースもあるそうだ。 Q ちゃんこと高橋尚子選手がこう言っている。「シューズは命を守る防具なんです！」と。今回のシューズ寄贈を通じて、靴の大切さを改めて実感した。

12 月 23 日	**カンゲミで今年最後のミーティング** 本日も、カンゲミ・ヘルスセンターにてコミュニティ・ヘルス・ボランティア(CHV)の方々とミーティングを行った。まずは一人ひとりの CHV に 12 月分の活動レポートを提出していただいた。提出時にはサブ・カウンティの結核担当者からチェックが入るが、今回は大幅に改善され、前回よりも非常にスムーズに進んだ。先月 CHV の方々にお願いした、結核の意識調査のアンケート用紙もこんなに集まりました。 カンゲミ住民の方々が結核に対する正確な知識や偏見をどれくらい持っているかを把握するための非常に貴重なデータになります。これからしっかりと分析を行う。白須代表が日本から持ってきたお菓子を CHV の方々に配り、皆さん大喜びですぐに無くなった。その後は、昨日お邪魔した結核患者さんの方々へ改めてお礼に伺った。最後にカンゲミ・ヘルスセンターに再び戻り、サブ・カウンティの方や CHV を取りまとめているコミュニティ・アシスタントの方々と来年のスケジュールについて話し合った。皆さんはこれから休暇に入るため、今日が今年最後の打ち合わせとなりった。約 5ヵ月間このチームで進めてきたが、当初と比べると徐々に信頼関係が出来てきたように思う。
12 月 26 日	**釜石生活 22～親共育プログラム～** 12 月 25 日、親共育プログラムを実施した。東京では何度もやってきたことだが、背景も参加者も認知度も違うことは分かっていたので、内容もよく考えたつもりだった。しかしながら、参加者ひとりひとりのニーズの把握が事前にできていなかったので、参加者によってはこちらが提供した情報が参加者の求めるポイントとずれてしまった部分があったようだ。アンケートの回答に「難しかった」「分かりづらかった」というのを見つけて、大きなショックを受けた。東京ではなかったことだった。ボリュームも多すぎたかもしれない。 反省すべき点は反省し、次回は配慮していきたいと思う。救いだったのは、ほぼ全員が「家族の関係性の向上に役立ちそう」に〇を付けていたこと。それを励みにしつつ、続けていくこともまた大事なことだ。

12 月 26 日	**[ケニア視察]地元新聞に掲載！** 12 月 18 日から、日本リザルツの代表白須と長坂は衆議院議員あべ俊子先生、参議院議員秋野公造先生とともにケニアへの視察に行ってきた。その視察の様子が、地元新聞紙「TheStandard」に掲載された。先生方がケニアの公衆衛生改善を目的に視察に来られたことを伝えた上で、スナノミ症を含めた感染症対策の重要性について指摘されたことが、記事には書かれている。あべ先生、秋野先生ともに英語が流暢。現地の記者の方のインタビューにも、英語で対応されてらっしゃった。こうした記事がきっかけで、スナノミ症を含む感染症対策への関心が高まることを期待する。 VIHIGA Japan seeks to boost Kenya's health sector By JACKLINE INYANJI Japan is seeking to partner with Kenya to boost the health sector in the country. Yoshiko Abe, the wife of the Japanese prime minister and also a member of the House of Representatives, said her team had visited Kenya to investigate which ailments were most common and how Japan could assist the country's healthcare system. "We are investigating which way is good to assist the health department which is facing health challenges in Kenya... After our findings, we will ask the Japanese government to see how it can assist areas that are badly off," she noted. She was speaking in Isimba village of Vihiga sub-county after visiting Kakamega County Referral and Nala hospitals. AREAS OF FOCUS Ms Abe noted that her team's areas of focus included tuberculosis, malaria, HIV and Aids, and jiggers. "In Isimba village in Vihiga, children cannot access water or go to school comfortably because their legs are amputated because of jiggers. We want to show them love by treating them and giving them shoes so as to overcome the disease," she said. She said Japan was supporting the project that was started by Edward Khatili in 2005 in order to help the poor, those suffering from jiggers, orphans and those who could not afford to pay for their education. Kozo Akino, a member of the House of Councillors in Japan, said they would treat people infected with jiggers in Isimba village while they continued collecting views about various ailments in Western region.